

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（149）

中小河川改修事業（万之瀬川）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（V）

しば はら  
芝原遺跡 1

縄文時代遺構編

（南さつま市金峰町）

2010年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター



上空から見た芝原遺跡



## 序 文

この報告書は、万之瀬川の河川改修事業に伴って、平成11年度から平成16年度にかけて実施した南さつま市金峰町に所在する芝原遺跡の発掘調査の記録（縄文時代遺構編）です。

芝原遺跡では、縄文時代中・後期の遺構・遺物をはじめ、複数の時代にわたる生活跡が発見されました。中でも、これまで県内でも報告例の少ない縄文時代中期の堅穴状遺構が検出されたこと、また、この堅穴状遺構から漁労具の一種である鋸歯尖頭器が出土したことは注目されます。

また、本改修事業に伴う一連の発掘調査における持鉢松遺跡や上水流遺跡の報告書が既に発行され、多くの重要な情報を私たちにもたしらしてくれました。さらに、当遺跡の周辺には、縄文時代から古代・中世の遺跡が数多く所在しており、この地域は考古学的にも注目を集めている地域でもあります。

本報告書が、県民の皆様をはじめとする多くの方々に活用され、埋蔵文化財に対する関心とご理解をいただくとともに、文化財の普及・啓発の一助となれば幸いです。

なお、縄文時代遺物（土器）編、縄文時代遺物（石器）編、弥生・古墳時代編、古代から中世編については、今後計画的に報告書を刊行する予定です。

最後に、調査にあたりご協力いただいた南薩地域振興局建設部（旧伊集院土木事務所）、南さつま市教育委員会、関係各機関及び発掘調査に従事された地域の方々に厚くお礼申し上げます。

平成22年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター  
所 長 山 下 吉 美

## 報 告 書 抄 録

ふりがな	しばはら いせき							
書 名	芝原遺跡 1							
副 書 名	中小河川改修事業（万之瀬川）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻 次	V							
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	149							
編 著 者 名	溝口学・上床真							
編 集 機 関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所 在 地	〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号 TEL 0995-48-5811							
発 行 年 月 日	西暦2010年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	面積 (㎡)	調査起因
		市町村	遺跡番号					
しばはら 芝原遺跡	あなみ 南さつまし きんぼうちやう 金峰町 みやざき 宮崎 あがしははら 宇芝原	462209	35-81	31° 25' 40"	130° 19' 37"	1999.10.15 ~ 2000.3.22 2000.4.24 ~ 2001.1.25 2001.5.7 ~ 2002.3.19 2002.5.7 ~ 2003.3.20 2003.5.6 ~ 2004.3.22 2004.5.14 ~ 2004.7.21	49,600	中小河川改修 (万之瀬川)
所収遺跡名	種 別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
芝原遺跡	集落跡	縄文時代 中期中葉		竪穴状遺構 2 基 土坑 1 基		春日式土器・石鎌・ 鋸歯尖頭器・鋸歯縁 石器・石匙・スクレ イパー・擦切石器・ 石皿・磨石		竪穴状遺構から、 鋸歯尖頭器が出 土した。
		縄文時代 中期後葉 ～後期		竪穴状遺構 3 基 埋設土器 5 基 土坑 292 基 集石 57 基 ビット 383 基 焼土 5 基 石皿集積 1 基 落ち込み状遺構 16 か所		阿高式土器・南福寺 式土器・出水式土器・ 岩崎式系土器・指宿 式土器・市来式系土 器・土製品・石鎌・ 鋸歯尖頭器・石匙・ スクレイパー・楔形 石器・石鎌・磨製石 斧・打製石斧・礫器・ 擦切石器		
遺跡の概要	<p>芝原遺跡では、縄文時代中期から近世にかけての遺構・遺物が発見されている。今回の報告は、縄文時代の遺構編である。</p> <p>縄文時代中期では、春日式土器をともなう竪穴状遺構が2基と土坑1基が検出されている。縄文時代中期の竪穴状遺構は検出例が少なく注目される。また、竪穴状遺構からは、漁労具であると考えられている鋸歯尖頭器（組合せ鋸の先端部）が3点出土している。縄文時代後期の遺跡から出土する例はあるが、縄文時代中期の遺構から出土したことは注目される。</p> <p>縄文時代中期後葉から後期では、竪穴状遺構3基をはじめ、集石や土坑、ビットなどが多数検出され、一定期間、人々が生活していた様子がうかがえる。</p>							



芝原遺跡の位置図 (1 / 50,000)

## 例 言

- 1 本書は、中小河川改修事業（万之瀬川）に伴う芝原遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡は、鹿児島県南さつま市金峰町（旧日置郡金峰町）宮崎に所在する。
- 3 発掘調査及び報告書作成（整理作業）は、県土木部河川課から鹿児島県教育委員会が依頼を受け、鹿児島県立埋蔵文化財センターが担当した。
- 4 発掘調査は、平成11年10月15日～平成12年3月22日、平成12年4月24日～平成13年1月25日、平成13年5月7日～平成14年3月19日、平成14年5月7日～平成15年3月20日、平成15年5月6日～平成16年3月22日、平成16年5月14日～平成16年7月21日にかけて実施し、整理作業・報告書作成は平成17年度・平成18年度・平成19年度・平成20年度・平成21年度に実施した。
- 5 遺物番号は、各時代の遺構種類ごとの通し番号とし、本文・挿図・表・図版の番号は一致する。
- 6 挿図の縮尺は、各図面に示した。
- 7 本書で用いたレベル数値は、県土木部が提示した工事計画図面に基づく海拔絶対高である。
- 8 発掘調査における図面の作成、写真の撮影は、各年度の調査担当者が行った。空中写真撮影は、有限会社ふじた、有限会社スカイサーベイ九州に委託した。
- 9 遺構実測図のトレースは職員が担当し、溝口学・黒川忠広が監修した。
- 10 土器の実測は、整理作業員の協力を得て、浄書は溝口・黒川が行った。
- 11 石器の実測・トレースの一部は、整理作業員の協力を得て、溝口・黒川が行い、一部は株式会社埋蔵文化財サポートシステム、株式会社九州文化財研究所、株式会社アイシン精機、株式会社大成エンジニアリング、株式会社パスコに委託し、監修は、溝口・東郷克利・廣榮次・黒川・上床真が行った。
- 12 自然科学分析は、株式会社バリノ・サーヴェイ、株式会社パレオ・ラボに委託した。また、国立歴史民俗博物館・年代測定研究グループ、総合研究大学院大学文化科学研究科渋谷綾子氏に玉稿を賜った。
- 13 遺物の写真撮影は、吉岡康弘が行った。
- 14 本書の執筆並びに編集は溝口が担当し、執筆の分担は次のとおりである。

第1章～第4章	溝口 学
第5章	各文頭に記載
第6章 第1節～第3節	溝口 学
第4節	上床 真
- 15 遺物は、鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し、展示・活用する予定である。なお、芝原遺跡の遺物注記の略号は「SHB」である。

# 本文目次

巻頭図版  
序文  
報告書抄録  
例言  
目次

第1章 調査に至る経緯	1
第1節 調査に至るまでの経緯	1
第2節 調査の組織	1
第3節 調査の経緯	3
第2章 遺跡の位置と環境	9
第1節 地理的環境	9

第2節 歴史的環境	9
第3章 調査の概要	15
第1節 発掘調査の方法	15
第2節 層位	15
第3節 整理作業の概要	16
第4節 遺物の分類について	16
第4章 縄文時代の遺構の調査	26
第1節 縄文時代中期中葉の遺構	26
第2節 縄文時代中期後葉から後期の遺構	36
第5章 科学分析	248
第6章 調査のまとめ	258

# 挿図目次

第1図 遺跡周辺の旧地形	10
第2図 周辺遺跡位置図	13
第3図 芝原遺跡の基本土層図	15
第4図 芝原遺跡の調査範囲とグリッド図	19
第5図 年度別調査範囲グリッド図	20
第6図 芝原遺跡・波畑遺跡グリッド図	20
第7図 土層断面図(1)	21
第8図 土層断面図(2)	22
第9図 土層断面図(3)	23
第10図 土層断面図(4)	24
第11図 土層断面図(5)	25
第12図 竪穴状遺構1号内遺物出土状況図	26
第13図 竪穴状遺構1号内出土遺物実測図(1)	27
第14図 竪穴状遺構1号内出土遺物実測図(2)	28
第15図 縄文時代中期中葉遺構配置図(1)	29
第16図 縄文時代中期中葉遺構配置図(2)	30
第17図 竪穴状遺構2号内遺物出土状況図	31
第18図 竪穴状遺構2号実測図	32
第19図 竪穴状遺構2号内出土遺物実測図(1)	33
第20図 竪穴状遺構2号内出土遺物実測図(2)	34
第21図 土坑1号実測図及び土坑1号内 出土遺物実測図	35
第22図 縄文時代中期～後期遺構配置図(1)	37
第23図 縄文時代中期～後期遺構配置図(2)	38
第24図 縄文時代中期～後期遺構配置図(3)	39
第25図 縄文時代中期～後期遺構配置図(4)	40
第26図 縄文時代中期～後期遺構配置図(5)	41
第27図 縄文時代中期～後期遺構配置図(6)	42
第28図 縄文時代中期～後期遺構配置図(7)	43
第29図 縄文時代中期～後期遺構配置図(8)	44
第30図 縄文時代中期～後期遺構配置図(9)	45
第31図 縄文時代中期～後期遺構配置図(10)	46
第32図 縄文時代中期～後期遺構配置図(11)	47
第33図 縄文時代中期～後期遺構配置図(12)	48
第34図 縄文時代中期～後期遺構配置図(13)	49
第35図 縄文時代中期～後期遺構配置図(14)	50
第36図 縄文時代中期～後期遺構配置図(15)	51
第37図 縄文時代中期～後期遺構配置図(16)	52
第38図 縄文時代中期～後期遺構配置図(17)	53
第39図 縄文時代中期～後期遺構配置図(18)	54
第40図 縄文時代中期～後期遺構配置図(19)	55
第41図 縄文時代中期～後期遺構配置図(20)	56
第42図 縄文時代中期～後期遺構配置図(21)	57
第43図 縄文時代中期～後期遺構配置図(22)	58
第44図 縄文時代中期～後期遺構配置図(23)	59
第45図 縄文時代中期～後期遺構配置図(24)	60

第46図 縄文時代中期～後期遺構配置図(25)	61
第47図 縄文時代中期～後期遺構配置図(26)	62
第48図 縄文時代中期～後期遺構配置図(27)	63
第49図 竪穴状遺構3号内遺物出土状況図及び 竪穴状遺構3号実測図	64
第50図 竪穴状遺構3号内出土遺物実測図(1)	64
第51図 竪穴状遺構4号実測図	65
第52図 竪穴状遺構5号実測図	66
第53図 竪穴状遺構5号内出土遺物実測図(1)	66
第54図 竪穴状遺構5号内出土遺物実測図(2)	67
第55図 竪穴状遺構5号内出土遺物実測図(3)	68
第56図 集石実測図(1)	69
第57図 集石実測図(2)	70
第58図 集石実測図(3)	71
第59図 集石実測図(4)	72
第60図 集石実測図(5)	73
第61図 集石実測図(6)	74
第62図 集石実測図(7)	75
第63図 集石実測図(8)	76
第64図 集石実測図(9)	77
第65図 集石実測図(10)	78
第66図 集石実測図(11)	79
第67図 集石内出土遺物実測図(1)	81
第68図 集石内出土遺物実測図(2)	82
第69図 集石内出土遺物実測図(3)	83
第70図 集石内出土遺物実測図(4)	84
第71図 集石内出土遺物実測図(5)	85
第72図 集石内出土遺物実測図(6)	86
第73図 集石内出土遺物実測図(7)	87
第74図 集石内出土遺物実測図(8)	88
第75図 集石内出土遺物実測図(9)	89
第76図 集石内出土遺物実測図(10)	90
第77図 集石内出土遺物実測図(11)	91
第78図 土坑実測図(1)	93
第79図 土坑実測図(2)	94
第80図 土坑実測図(3)	95
第81図 土坑実測図(4)	96
第82図 土坑実測図(5)	97
第83図 土坑実測図(6)	98
第84図 土坑実測図(7)	99
第85図 土坑実測図(8)	100
第86図 土坑実測図(9)	101
第87図 土坑実測図(10)	102
第88図 土坑実測図(11)	103
第89図 土坑実測図(12)	104
第90図 土坑実測図(13)	105
第91図 土坑内出土遺物実測図(1)	106



第 92 区	土坑内出土遺物実測図 (2)	107	第 143 区	落ち込み状遺構 5 号内出土遺物実測図 (3)	164
第 93 区	土坑内出土遺物実測図 (3)	108	第 144 区	落ち込み状遺構 5 号内出土遺物実測図 (4)	165
第 94 区	土坑内出土遺物実測図 (4)	109	第 145 区	落ち込み状遺構 5 号内出土遺物実測図 (5)	166
第 95 区	土坑内出土遺物実測図 (5)	111	第 146 区	落ち込み状遺構 5 号内出土遺物実測図 (6)	167
第 96 区	土坑内出土遺物実測図 (6)	112	第 147 区	落ち込み状遺構 5 号内出土遺物実測図 (7)	168
第 97 区	土坑内出土遺物実測図 (7)	113	第 148 区	落ち込み状遺構 5 号内出土遺物実測図 (8)	169
第 98 区	土坑内出土遺物実測図 (8)	114	第 149 区	落ち込み状遺構 5 号内出土遺物実測図 (9)	170
第 99 区	土坑内出土遺物実測図 (9)	115	第 150 区	落ち込み状遺構 5 号内出土遺物実測図 (10)	171
第 100 区	土坑内出土遺物実測図 (10)	116	第 151 区	落ち込み状遺構 5 号内出土遺物実測図 (11)	172
第 101 区	土坑内出土遺物実測図 (11)	117	第 152 区	落ち込み状遺構 5 号内出土遺物実測図 (12)	173
第 102 区	土坑内出土遺物実測図 (12)	119	第 153 区	落ち込み状遺構 5 号内出土遺物実測図 (13)	174
第 103 区	土坑内出土遺物実測図 (13)	120	第 154 区	落ち込み状遺構 5 号内出土遺物実測図 (14)	176
第 104 区	土坑内出土遺物実測図 (14)	121	第 155 区	落ち込み状遺構 5 号内出土遺物実測図 (15)	177
第 105 区	土坑内出土遺物実測図 (15)	123	第 156 区	落ち込み状遺構 5 号内出土遺物実測図 (16)	178
第 106 区	土坑内出土遺物実測図 (16)	124	第 157 区	落ち込み状遺構 5 号内出土遺物実測図 (17)	179
第 107 区	土坑内出土遺物実測図 (17)	126	第 158 区	落ち込み状遺構 5 号内出土遺物実測図 (18)	180
第 108 区	土坑内出土遺物実測図 (18)	127	第 159 区	落ち込み状遺構 5 号内出土遺物実測図 (19)	181
第 109 区	土坑内出土遺物実測図 (19)	128	第 160 区	落ち込み状遺構 5 号内出土遺物実測図 (20)	182
第 110 区	土坑内出土遺物実測図 (20)	129	第 161 区	落ち込み状遺構 5 号内出土遺物実測図 (21)	183
第 111 区	土坑内出土遺物実測図 (21)	130	第 162 区	落ち込み状遺構 5 号内出土遺物実測図 (22)	184
第 112 区	土坑内出土遺物実測図 (22)	131	第 163 区	落ち込み状遺構 5 号内出土遺物実測図 (23)	185
第 113 区	土坑内出土遺物実測図 (23)	132	第 164 区	落ち込み状遺構 5 号内出土遺物実測図 (24)	187
第 114 区	土坑内出土遺物実測図 (24)	133	第 165 区	落ち込み状遺構 5 号内出土遺物実測図 (25)	188
第 115 区	土坑内出土遺物実測図 (25)	134	第 166 区	落ち込み状遺構 5 号内出土遺物実測図 (26)	189
第 116 区	土坑内出土遺物実測図 (26)	135	第 167 区	落ち込み状遺構 5 号内出土遺物実測図 (27)	190
第 117 区	土坑内出土遺物実測図 (27)	137	第 168 区	落ち込み状遺構 6 号内出土遺物実測図 (1)	191
第 118 区	土坑内出土遺物実測図 (28)	138	第 169 区	落ち込み状遺構 6 号内出土遺物実測図 (2)	192
第 119 区	土坑内出土遺物実測図 (29)	139	第 170 区	落ち込み状遺構 6 号内出土遺物実測図 (3)	193
第 120 区	土坑内出土遺物実測図 (30)	140	第 171 区	落ち込み状遺構 7 号内出土遺物実測図…	194
第 121 区	ピット内出土遺物実測図 (1)	141	第 172 区	落ち込み状遺構 8 号内出土遺物実測図 (1)	195
第 122 区	ピット内出土遺物実測図 (2)	142	第 173 区	落ち込み状遺構 8 号内出土遺物実測図 (2)	196
第 123 区	焼土実測図及び焼土内出土遺物実測図…	143	第 174 区	落ち込み状遺構 9 号内出土遺物実測図 (1)	
第 124 区	埋設土器出土状況実測図 (1)	144			
第 125 区	埋設土器出土状況実測図 (2)	145			
第 126 区	埋設土器 1 号実測図…	146			
第 127 区	埋設土器 2 号実測図…	147			
第 128 区	埋設土器 3 号・4 号実測図…	148			
第 129 区	埋設土器 4 号・5 号実測図…	149			
第 130 区	石皿集積実測図及び石皿実測図…	150			
第 131 区	落ち込み状遺構 1 号内出土遺物実測図…	151			
第 132 区	落ち込み状遺構 4 号内出土遺物実測図 (1)	152			
第 133 区	落ち込み状遺構 4 号内出土遺物実測図 (2)	153			
第 134 区	落ち込み状遺構 4 号内出土遺物実測図 (3)	154			
第 135 区	落ち込み状遺構 4 号内出土遺物実測図 (4)	155			
第 136 区	落ち込み状遺構 4 号内出土遺物実測図 (5)	157			
第 137 区	落ち込み状遺構 4 号内出土遺物実測図 (6)	158			
第 138 区	落ち込み状遺構 4 号内出土遺物実測図 (7)	159			
第 139 区	落ち込み状遺構 4 号内出土遺物実測図 (8)	160			
第 140 区	落ち込み状遺構 4 号内出土遺物実測図 (9)	161			
第 141 区	落ち込み状遺構 5 号内出土遺物実測図 (1)	162			
第 142 区	落ち込み状遺構 5 号内出土遺物実測図 (2)	163			

第175図	落ち込み状道構9号内出土遺物実測図(2)	197	第202図	落ち込み状道構14号内出土遺物実測図(12)	225
第176図	落ち込み状道構9号内出土遺物実測図(3)	198	第203図	落ち込み状道構14号内出土遺物実測図(13)	226
第177図	落ち込み状道構9号内出土遺物実測図(4)	199	第204図	落ち込み状道構15号内出土遺物実測図(1)	227
第178図	落ち込み状道構9号内出土遺物実測図(5)	200	第205図	落ち込み状道構15号内出土遺物実測図(2)	228
第179図	落ち込み状道構9号内出土遺物実測図(6)	201	第206図	落ち込み状道構16号内出土遺物実測図(1)	229
第180図	落ち込み状道構10号・11号内出土遺物実測図	202	第207図	落ち込み状道構16号内出土遺物実測図(2)	230
第181図	落ち込み状道構12号内出土遺物実測図(1)	203	第208図	落ち込み状道構16号内出土遺物実測図(3)	231
第182図	落ち込み状道構12号内出土遺物実測図(2)	204	第209図	落ち込み状道構16号内出土遺物実測図(4)	232
第183図	落ち込み状道構12号内出土遺物実測図(3)	206	第210図	落ち込み状道構16号内出土遺物実測図(5)	233
第184図	落ち込み状道構12号内出土遺物実測図(4)	207	第211図	落ち込み状道構16号内出土遺物実測図(6)	234
第185図	落ち込み状道構12号内出土遺物実測図(5)	208	第212図	落ち込み状道構16号内出土遺物実測図(7)	235
第186図	落ち込み状道構12号内出土遺物実測図(6)	209	第213図	落ち込み状道構16号内出土遺物実測図(8)	236
第187図	落ち込み状道構12号内出土遺物実測図(7)	210	第214図	落ち込み状道構16号内出土遺物実測図(9)	237
第188図	落ち込み状道構12号内出土遺物実測図(8)	211	第215図	落ち込み状道構16号内出土遺物実測図(10)	238
第189図	落ち込み状道構12号内出土遺物実測図(9)	212	第216図	落ち込み状道構16号内出土遺物実測図(11)	239
第190図	落ち込み状道構13号内出土遺物実測図	213	第217図	落ち込み状道構16号内出土遺物実測図(12)	240
第191図	落ち込み状道構14号内出土遺物実測図(1)	214	第218図	落ち込み状道構16号内出土遺物実測図(13)	241
第192図	落ち込み状道構14号内出土遺物実測図(2)	215	第219図	落ち込み状道構16号内出土遺物実測図(14)	242
第193図	落ち込み状道構14号内出土遺物実測図(3)	216	第220図	落ち込み状道構16号内出土遺物実測図(15)	243
第194図	落ち込み状道構14号内出土遺物実測図(4)	217	第221図	落ち込み状道構16号内出土遺物実測図(16)	244
第195図	落ち込み状道構14号内出土遺物実測図(5)	218	第222図	落ち込み状道構16号内出土遺物実測図(17)	245
第196図	落ち込み状道構14号内出土遺物実測図(6)	219	第223図	落ち込み状道構16号内出土遺物実測図(18)	246
第197図	落ち込み状道構14号内出土遺物実測図(7)	220	第224図	暦年校正結果	247
第198図	落ち込み状道構14号内出土遺物実測図(8)	221	第225図	残存デンプンの形態分類の基準	253
第199図	落ち込み状道構14号内出土遺物実測図(9)	222	第226図	土器の出土割合	256
第200図	落ち込み状道構14号内出土遺物実測図(10)	223	第227図	銅歯尖頭器出土遺跡の位置図	259
第201図	落ち込み状道構14号内出土遺物実測図(11)	224	第228図	石鎌及び銅歯尖頭器実測図	260
			第229図	南部九州における縄文時代中期前半期の 竪穴住居状道構	261
					264

## 表 目 次

表1	周辺遺跡一覧	14	表7	分析試料とその特徴	257
表2	石材分類表	17	表8	検出デンプンの分類結果	257
表3	石器分類表	18	表9	銅歯尖頭器出土遺跡及び計測値	262
表4	試料一覧	250	表10	南部九州における縄文時代中期の 竪穴住居状道構	263
表5	放射性炭素年代測定結果	250	表11	土坑計測表(1)	265
表6	暦年校正結果	250			

表12	土坑計測表(2)	266	表22	土器観察表(6)	275
表13	土坑計測表(3)	267	表23	土器観察表(7)	276
表14	ピット計測表(1)	267	表24	土器観察表(8)	277
表15	ピット計測表(2)	268	表25	土器観察表(9)	278
表16	ピット計測表(3)	269	表26	土器観察表(10)	279
表17	土器観察表(1)	270	表27	土器観察表(11)	280
表18	土器観察表(2)	271	表28	土器観察表(12)	281
表19	土器観察表(3)	272	表29	石器観察表(1)	282
表20	土器観察表(4)	273	表30	石器観察表(2)	283
表21	土器観察表(5)	274	表31	石器観察表(3)	284

## 写真・図版目次

写真1	芝原遺跡から見た東シナ海方向	8	図版24	縄文時代中期後葉から後期遺構内出土遺物(3)	308
写真2	上空から見た芝原遺跡周辺	10	図版25	縄文時代中期後葉から後期遺構内出土遺物(4)	309
写真3	芝原遺跡から見た加世田市街地	12	図版26	縄文時代中期後葉から後期遺構内出土遺物(5)	310
写真4	土坑1号内出土土器	35	図版27	縄文時代中期後葉から後期遺構内出土遺物(6)	311
写真5	胴下部内鑄茶状付着物	252	図版28	落ち込み状遺構1号・4号内出土遺物	312
写真6	付着物前処理後の状態	252	図版29	落ち込み状遺構4号内出土遺物(1)	313
写真7	調査資料と試料の採取箇所	254	図版30	落ち込み状遺構4号内出土遺物(2)	314
写真8	KAMB197の残存デンプン	255	図版31	落ち込み状遺構5号内出土遺物(1)	315
写真9	KAMB198の残存デンプン	255	図版32	落ち込み状遺構5号内出土遺物(2)	316
図版1	縄文時代中期中葉から後期遺構	285	図版33	落ち込み状遺構5号内出土遺物(3)	317
図版2	縄文時代中期後葉から後期遺構(1)	286	図版34	落ち込み状遺構5号内出土遺物(4)	318
図版3	縄文時代中期後葉から後期遺構(2)	287	図版35	落ち込み状遺構6号内出土遺物	319
図版4	縄文時代中期後葉から後期遺構(3)	288	図版36	落ち込み状遺構7号・8号内出土遺物	320
図版5	縄文時代中期後葉から後期遺構(4)	289	図版37	落ち込み状遺構9号内出土遺物(1)	321
図版6	縄文時代中期後葉から後期遺構(5)	290	図版38	落ち込み状遺構9号内出土遺物(2)	322
図版7	縄文時代中期後葉から後期遺構(6) 及び土層断面	291	図版39	落ち込み状遺構10号・11号・13号内出土遺物	323
図版8	竪穴状遺構1号内出土遺物	292	図版40	落ち込み状遺構12号内出土遺物(1)	324
図版9	竪穴状遺構2号内出土遺物	293	図版41	落ち込み状遺構12号内出土遺物(2)及び 14号内出土遺物	325
図版10	竪穴状遺構3号・5号内出土遺物	294	図版42	落ち込み状遺構12号内出土遺物(3)	326
図版11	集石内出土遺物(1)	295	図版43	土坑21号・落ち込み状遺構6号・8号・11号・ 13号内出土遺物	327
図版12	集石内出土遺物(2)	296	図版44	落ち込み状遺構14号内出土遺物(1)	328
図版13	集石内出土遺物(3)	297	図版45	落ち込み状遺構14号内出土遺物(2)	329
図版14	集石内出土遺物(4)	298	図版46	落ち込み状遺構15号内出土遺物	330
図版15	土坑内出土遺物(1)	299	図版47	落ち込み状遺構16号内出土遺物(1)	331
図版16	土坑内出土遺物(2)	300	図版48	落ち込み状遺構16号内出土遺物(2)	332
図版17	土坑内出土遺物(3)	301	図版49	落ち込み状遺構16号内出土遺物(3)	333
図版18	土坑内出土遺物(4)	302	図版50	落ち込み状遺構16号内出土遺物(4)	334
図版19	ピット内出土遺物	303			
図版20	土坑・ピット内出土遺物	304			
図版21	縄文時代中期から後期遺構内出土遺物	305			
図版22	縄文時代中期後葉から後期遺構内出土遺物(1)	306			
図版23	縄文時代中期後葉から後期遺構内出土遺物(2)	307			

## 第1章 調査に至る経緯

### 第1節 調査に至るまでの経緯

鹿児島県教育委員会は、文化財の保護と活用を図るため、事業区域内における文化財の有無及びその取り扱いについて各開発関係機関との間で協議し、諸開発との調整を図っている。

この事前協議制に基づき、鹿児島県土木部河川課（以下「県土木部」）は、中小河川改修事業（万之瀬川）の日置郡金峰町内（現南さつま市）における事業計画実施に先立って、対象地内における埋蔵文化財の有無について、鹿児島県教育委員会文化課（現文化財課、以下「県文化財課」）に照会した。これを受けて県文化財課、金峰町教育委員会が平成5年度に分布調査を実施したところ、事業区域内に万之瀬川川底遺跡、松ヶ鼻遺跡、持鉢松遺跡、渡畑遺跡、芝原遺跡、上水流通跡の6遺跡の所在が判明した。この結果を受けて、県土木部・県文化財課・鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下「県立埋蔵センター」）の3者で協議した結果、対象地域内の遺跡の範囲と性格を把握するために当該地域において確認調査を実施することとし、芝原遺跡の調査は県立埋蔵センターが担当した。

確認調査は、平成10年度に実施し、その結果、予定地において49,600㎡の範囲に遺跡が残存していることが確認された。これを受けて、再度3者で協議した結果、平成11年度から本調査を実施することとなった。本調査では、平成11年度及び平成12年度に築堤部分、平成13年度に新堤防と旧堤防の間、平成14年度に新堤防と旧堤防の間及び万之瀬橋橋脚部分、平成15年度に橋梁部及び樋門から新堤防の間、平成16年度に前年度の調査未了部分を調査した。

整理作業は、平成17年度から着手し、平成21年度まで実施した。なお、平成22年度以降も継続して作業を実施する計画である。

### 第2節 調査の組織

#### 1 発掘調査

##### (1) 平成11年度

事業主体 鹿児島県土木部河川課  
 調査主体 鹿児島県教育委員会  
 企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課  
 調査統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター  
 所 長 吉永 和人  
 調査企画 次長兼総務課長 黒木 友幸  
 調査課長 戸崎 勝洋  
 調査課長補佐兼 第一調査係長 新東 晃一  
 主任文化財主事 中村 耕治

調査担当 文化財主事 安藤 浩  
 文化財主事 西郷 吉郎  
 文化財研究員 栗林 文夫  
 事務担当 総務係長 有村 貢  
 主 事 溜池 佳子

##### (2) 平成12年度

事業主体 鹿児島県土木部河川課  
 調査主体 鹿児島県教育委員会  
 企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課  
 調査統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター  
 所 長 井上 明文  
 調査企画 次長兼総務課長 黒木 友幸  
 主任文化財主事 兼調査課長 新東 晃一  
 調査課長補佐 立神 次郎  
 主任文化財主事兼 第一調査係長 青崎 和憲  
 主任文化財主事 中村 耕治  
 調査担当 文化財研究員 栗林 文夫  
 文化財研究員 福永 修一  
 文化財調査員 橋口 亘  
 事務担当 総務係長 有村 貢  
 調査指導 鹿児島大学歯学部 助 手 竹中 正巳  
 鹿児島大学埋蔵文化財調査室 助 手 中村 直子

##### (3) 平成13年度

事業主体 鹿児島県土木部河川課  
 調査主体 鹿児島県教育委員会  
 企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課  
 調査統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター  
 所 長 井上 明文  
 調査企画 次長兼総務課長 黒木 友幸  
 主任文化財主事 兼調査課長 新東 晃一  
 調査課長補佐 立神 次郎  
 主任文化財主事兼 第一調査係長 青崎 和憲  
 主任文化財主事 中村 耕治  
 調査担当 文化財研究員 栗林 文夫  
 文化財研究員 日高 正人  
 文化財調査員 橋口 亘  
 事務担当 総務係長 前田 昭伸  
 主 査 今村孝一郎

調査指導 鎌倉考古学研究所  
所 員 馬淵 和雄  
鹿児島県立短期大学生活科学科  
助 教 授 揚村 固  
鹿児島大学教育学部  
助 教 授 日隈 正守  
鹿児島大学歯学部  
助 手 竹中 正巳

(4) 平成14年度

事業主体 鹿児島県土木部河川課  
調査主体 鹿児島県教育委員会  
企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課  
調査統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター  
所 長 井上 明文  
調査企画 次長兼総務課長 田中 文雄  
調査課長 新東 晃一  
調査課長補佐 立神 次郎  
主任文化財主事兼  
第一調査係長 池畑 耕一  
主任文化財主事 中村 耕治  
調査担当 文化財主事 中村 和美  
文化財主事 日高 正人  
文化財研究員 最上 優子  
文化財調査員 橋口 亘  
文化財調査員 松田 朝由  
事務担当 総務係長 前田 昭信  
主 査 脇田 清幸  
調査指導 株式会社九州  
テクノリサーチ 大澤 正巳  
鹿児島大学歯学部  
助 手 竹中 正巳

(5) 平成15年度

事業主体 鹿児島県土木部河川課  
調査主体 鹿児島県教育委員会  
企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課  
調査統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター  
所 長 木原 俊孝  
調査企画 次長兼総務課長 田中 文雄  
調査課長 新東 晃一  
調査課長補佐 立神 次郎  
主任文化財主事兼  
第一調査係長 池畑 耕一  
主任文化財主事 中村 耕治  
調査担当 文化財主事 湯之 前尚  
文化財主事 日高 正人  
文化財主事 富山 孝一

事務担当 総務係長 平野 浩二  
調査指導 広島大学文学部  
教 授 加瀬 正利  
西南学院大学  
教 授 高倉 洋彰

(6) 平成16年度

事業主体 鹿児島県土木部河川課  
調査主体 鹿児島県教育委員会  
企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課  
調査統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター  
所 長 木原 俊孝  
調査企画 次長兼総務課長 賞雅 彰  
調査課長 新東 晃一  
調査課長補佐 立神 次郎  
主任文化財主事兼  
第二調査係長 彌栄 久志  
主任文化財主事 長野 眞一  
調査担当 文化財主事 抜木 茂樹  
文化財主事 富山 孝一  
文化財主事 黒川 忠広  
文化財研究員 上床 真  
事務担当 総務係長 平野 浩二

2 報告書作成

(1) 平成17年度

事業主体 鹿児島県土木部河川課  
作成主体 鹿児島県教育委員会  
企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課  
作成統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター  
所 長 上今 常雄  
作成企画 次長兼総務課長 有川 昭人  
次長兼調査第一課長 新東 晃一  
主任文化財主事兼  
調査第一課第二調査係長 長野 眞一  
作成担当 文化財主事 東郷 克利  
文化財主事 富山 孝一  
文化財主事 廣 栄次  
事務担当 主幹兼総務係長 平野 浩二

(2) 平成18年度

事業主体 鹿児島県土木部河川課  
作成主体 鹿児島県教育委員会  
企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課  
作成統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター  
所 長 上今 常雄  
(7月まで)  
宮原 景信

(8月から)

作成企画 次長兼総務課長 有川 昭人  
 次 長 新東 晃一  
 主任文化財主事兼  
 調査第一課長 池畑 耕一  
 主任文化財主事兼  
 調査第一課第二調査係長 中村 耕治  
 作成担当 主任文化財主事 繁昌 正幸  
 文化財主事 東郷 克利  
 文化財主事 抜水 茂樹  
 文化財主事 富山 孝一  
 文化財主事 廣 栄次  
 文化財主事 黒川 忠広  
 文化財研究員 上床 真  
 事務担当 総務係長 寄井田正秀

調査第一課第二調査係長 井ノ上秀文  
 作成担当 文化財主事 溝口 学  
 文化財主事 佐藤 義明  
 文化財主事 木之下悦郎  
 文化財主事 黒川 忠広  
 文化財研究員 上床 真  
 事務担当 総務係長 紙屋 伸一

(3) 平成19年度

事業主体 鹿児島県土木部河川課  
 作成主体 鹿児島県教育委員会  
 企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課  
 作成統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター  
 所 長 宮原 景信  
 作成企画 次長兼総務課長 平山 章  
 次 長 新東 晃一  
 主任文化財主事兼  
 調査第一課長 池畑 耕一  
 主任文化財主事兼  
 調査第一課第二調査係長 中村 耕治  
 作成担当 文化財主事 溝口 学  
 文化財主事 東郷 克利  
 文化財主事 森 雄二  
 文化財主事 抜水 茂樹  
 文化財主事 富山 孝一  
 文化財主事 黒川 忠広  
 文化財研究員 上床 真  
 事務担当 総務係長 寄井田正秀

(5) 平成21年度

事業主体 鹿児島県土木部河川課  
 作成主体 鹿児島県教育委員会  
 企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課  
 作成統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター  
 所 長 山下 吉美  
 作成企画 次長兼総務課長 齊藤 守重  
 次 長 青崎 和憲  
 主任文化財主事兼  
 調査第一課長 中村 耕治  
 主任文化財主事兼  
 調査第一課第二調査係長 宮田 栄二  
 作成担当 文化財主事 溝口 学  
 文化財主事 小林 晋也  
 文化財主事 日高 勝博  
 文化財主事 上床 真  
 事務担当 総務係長 紙屋 伸一  
 主 査 高崎 智博  
 調査指導 元福岡市文化財部長 山崎 純男

報告書作成指導委員会

平成21年11月6日 次長ほか6名

報告書作成検討委員会

平成21年11月13日 所長ほか10名

(4) 平成20年度

事業主体 鹿児島県土木部河川課  
 作成主体 鹿児島県教育委員会  
 企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課  
 作成統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター  
 所 長 宮原 景信  
 作成企画 次長兼総務課長 平山 章  
 次 長 池畑 耕一  
 主任文化財主事兼  
 調査第一課長 青崎 和憲  
 主任文化財主事兼

第3節 調査の経緯

調査の経過については、調査日誌をもとに主な出来事を月単位で記していきたい。

平成11年度

(平成11年10月15日～平成12年3月22日実働83日)

(10月)

器材搬入。A～E-7～11区Ⅲ層掘り下げ。中世の溝検出(B～C-8～10)中村耕治主任来跡(20日)。

(11月)

A・B-3～10区、C～E-4～6区Ⅲ層掘り下げ。土抗、溝状遺構、堅穴建物検出。C-4区より白磁碗出土。D-4区焼土内より青磁椀花皿の完形品出土。宮下貴浩氏(金峰町教育委員会)、永山修一氏(ラ・サール学園)来跡(1日)。東正和氏(伊集院

町教育委員会) 来跡(5日)。

(12月)

C・D-1～3区Ⅲ層掘り下げ。A'～C-16～22区Ⅲ層上面検出。A'・A-20区より掘立柱建物跡検出。A-18区より土坑墓検出。B・C-18区より鍛冶遺構検出。A'・A-21・22区Ⅲ層掘り下げ。前迫氏(伊集院土木事務所)来跡(3日)。上田耕氏・若松重弘氏(知覧町教育委員会)来跡(15日)。

(1月)

A～C-11～16区Ⅲ層上面検出。A～C-11～13区、B・C-14・15区、A～C-16～18区Ⅲ層掘り下げ。B・C-13～15区より竪跡検出。空中写真撮影(27日)。寺師孝剛氏(県文化財課)来跡(5日)。吉永和人所長視察・青崎和憲係長・宮田栄二氏・前迫亮一氏・森田郁朗氏・三垣恵一氏(県立埋文センター)来跡(11日)。戸崎勝洋氏(県文化財課)来跡(13日)。倉元良文氏(県文化財課)来跡(24, 26, 28日)。児玉健一郎氏(県文化財課)来跡(25日)。

(2月)

A～C-17・18区、A'～C-19～22区Ⅲ層掘り下げ。B・C-11・12区、A～C-13～17区Ⅳ層掘り下げ。D-15区より竪跡検出。B・C-13・14区よりⅤ層竪跡検出。東側調査区埋め戻し(7日)。竹中正巳氏(鹿大歯学部助手)による土坑内人骨の鑑定(15日)。倉元氏(県文化財課)来跡(3日)。倉元氏(県文化財課)、徳田有希乃氏(南種子町教育委員会)来跡(4日)。中村主任(県立埋文センター)来跡(10日)。藤崎光洋氏・横手浩二郎氏(県立埋文センター)来跡(22日)。

(3月)

A～C-14～16区、A-17・18区Ⅲ層掘り下げ。A～C-17～19区Ⅳ層掘り下げ。縄文後期、晩期土器多数出土。横手氏(県立埋文センター)来跡(3日)。竹中氏(鹿大歯学部助手)現地指導(7日)。上村俊雄教授(鹿児島大学)、山崎省一氏(県立埋文センター)来跡(9日)。今釜氏(加治木総務事務所)来跡(10日)。永山氏(ラ・サール学園)、中村主任(県立埋文センター)来跡(15日)。調査終了(22日)。

平成12年度

(平成12年4月24日～平成13年1月25日) 実働107日

(4月)

器材搬入・オリエンテーション実施(24日)。表土の剥ぎ取り、Ⅲ層上面検出。

(5月)

A～C-24～29区Ⅲ層上面検出。溝状遺構、ピット、竪状遺構検出。A・B-20～24区Ⅲ層上面検出。

近世土坑墓2基検出(古銭有り)。A'～C-11～22区Ⅳ層掘り下げ。牛ノ濱係長・菅平田勉氏(県立埋文センター)、倉元氏(県文化財課)来跡(1日)。馬籠亮道氏(県立埋文センター)来跡(11日)。作業員23名合流(15日)。井上所长視察・立神次郎課長補佐・牛ノ濱係長・中村主任(県立埋文センター)来跡(17日)。池畑耕一氏(県文化財課)来跡(18日)。大浦町教育委員会文化財審議委員5名、倉元氏(県文化財課)来跡(23日)。青崎係長・中村主任(県立埋文センター)視察(24日)。山本文雄課長(県文化財課)、中村主任(県立埋文センター)来跡(25日)。佐伯氏(伊集院土木事務所)他3名来跡(25日)。

(6月)

A'～C-19～22区Ⅳ層掘り下げ。A・B-22～26区Ⅲ層上面からピット、土坑、溝跡、掘立柱建物跡検出。A'～C-21～29区上空撮。A'～B-27～29区Ⅲ層掘り下げ。A・B-11～17区Ⅳ層掘り下げ。A'～B-15・16区Ⅳ層上面から遺構検出。中村主任(県立埋文センター)来跡(7日)。横手氏・西吾意子氏(県立埋文センター)来跡(8日)。西郷吉郎氏・山崎氏(県立埋文センター)、永山氏(ラ・サール学園)来跡(14日)。中村主任(県立埋文センター)来跡(21日)。倉元氏・児玉氏(県文化財課)来跡(22日)。

(7月)

A'～C-20～29区Ⅲ層掘り下げ及びⅣ層上面遺構検出。A'～29区竪穴建物検出。A'～C-11～21区Ⅳ層掘り下げ。B-19区竪穴建物検出。倉元氏(県文化財課)、中村主任・中村和美氏(県立埋文センター)来跡(3日)。県土木部河川課数名来跡(4日)。園田氏(南日本新聞社)来跡(5日)。上田氏(知覧町教育委員会)来跡(13日)。阿多小教諭2名来跡(18日)。金峰町社会科部会教諭8名来跡(26日)。熊本大学社会教育主事講習者来跡(27日)。

(8月)

B-21～24区、C-22～25区Ⅳ層遺構掘り下げ。C-24～25区にて土坑墓3基(人骨3体)検出。B-17～19区Ⅳ層掘り下げ。A～C-20～23区Ⅳ層掘り下げ。A'～B-26～29区Ⅳ層遺構掘り下げ。A・B-20～24区Ⅳ層掘り下げ。伊集院土木事務所職員数名来跡(1日)。中村主任(県立埋文センター)来跡(8日)。園田氏(南日本新聞社)、大保秀樹氏・溜池佳子氏・西郷氏・山崎氏(県立埋文センター)来跡(9日)。大久保浩二氏・溜池氏・横手氏(県立埋文センター)、西田茂氏(北海道埋文センター)来跡(10日)。立神課長補佐・中村主任(県立埋文センター)来跡(11日)。立神勇志氏(県立埋文センター)・前田奈緒氏(別府大学3年)来跡(16日)。

青崎係長（県立埋文センター）来跡（22日）。佐伯氏（伊集院土木事務所）来跡（23日）。永山氏（ラ・サール学園）、中村主任（県立埋文センター）来跡（25日）。

（9月）

A～C-22～29区Ⅵ層掘り下げ。A-25区にて集石検出。A-26区にて指宿式土器出土。A'・A-17～19区Ⅱ層掘り下げ。遺構検出。Ⅵ層上面検出。掘り下げ。A～C-21～23区Ⅷ層掘り下げ。中村主任（県立埋文センター）来跡（7,11日）。穴澤義功氏（たたら研究会）鉄関係道指導（21,22日）。長野眞一主任（県立埋文センター）来跡（26日）。倉元氏（県文化財課）来跡（27日）。

（10月）

A・B-26～28区Ⅵ層掘り下げ。A'～B-23～30区Ⅷ層掘り下げ。A～C-21～23区Ⅷ層掘り下げ。中村主任（県立埋文センター）来跡（4,6,25日）。宗岡氏・横手氏（県立埋文センター）来跡（5日）。児玉氏（県文化財課）来跡（10日）。

（11月）

A'～B-30・31区表土剥ぎ、Ⅲ層掘り下げ。ピット、井戸跡、土坑、溝跡、掘立建物跡検出。宮田氏・栗山葉子氏（県立埋文センター）来跡（15日）。重久淳一氏（準人町教育委員会）来跡（24日）。

（12月）

A'～B-30・31区Ⅲ層検出のピット、土坑、堅穴建物の掘り下げ。Ⅳ層検出。Ⅳ・Ⅴ層剥ぎ取り。柳原敏昭氏（東北大学助教授）来跡（12日）。本田道輝氏（鹿児島大学助教授）現地指導（19日）。佐伯氏・脇岡氏（伊集院土木事務所）来跡（19日）。藤田明良氏（天理大学教授）、牛ノ濱氏（県立埋文センター）来跡（22日）。

（1月）

A'～B-30・31区Ⅵ・Ⅶ層掘り下げ。遺物取上。青崎係長（県立埋文センター）来跡（24日）。調査終了（25日）。

平成13年度

（平成13年5月7日～平成14年3月19日）実働174日

（5月）

器材搬入・オリエンテーション実施（7日）。E・F-9・10区表土の剥ぎ取り。E～H-2～5区Ⅱ・Ⅲ層掘り下げ。畠跡検出。E～G-2～5区Ⅳ層上面検出。ピット、木棺墓、大溝検出。E～G-7～12区掘り下げ。大溝内人骨出土。土坑墓出土（F・G-8区）。E～G-5～12区Ⅱ層、攪乱層掘り下げ。D～F-11～14区攪乱層、溝の掘り下げ。畠跡検出。中村主任（県立埋文センター）来跡（8日）。倉元氏・児玉氏（県文化財課）来跡（10日）。青崎係長（県

立埋文センター）、倉元氏（県文化財課）来跡（11日）。水濱功治氏・石丸良輔氏（県立埋文センター・所内安全パトロール）来跡（21日）。

（6月）

D～G-12区の大溝内から青磁碗・皿の完形品出土。E-13区の土坑墓から古銭、人骨出土。D～G-6～12区Ⅱ層上面検出遺構掘り下げ。ピット、芋穴、土坑、掘立建物跡、大溝検出。E-7区の土坑墓から人骨出土。E・F-7・8区Ⅳ層掘り下げ。D・E-13区大溝検出。E・F-16・17区Ⅱ層畠跡検出。井上所長・青崎係長（県立埋文センター）視察（5日）。新東見一係長（県文化財課）、青崎係長・中村主任（県立埋文センター）視察（13日）。佐伯氏（伊集院土木事務所）来跡（19日）。

（7月）

E・F-9・10区、D～F-11・12区、D・E-13区、D～F-14区Ⅵ層掘り下げ。D～F-15～23区Ⅱ層掘り下げ。畠跡、土坑、カマド跡検出。倉元氏（県文化財課）、森田氏（県立埋文センター）来跡（6日）。中原一成氏・今村孝一郎氏（県立埋文センター・所内安全パトロール）来跡（25日）。鮫島弘宣氏（川内市教育委員会）長期研修開始（25日～8/10日）。

（8月）

D～G-15～22区Ⅱ層掘り下げ。E・F-8区に炭化物、鉄滓の入った遺構検出。E・F-17・18区に土器・石器の集積検出。D・E-14区Ⅵ層掘り下げ。池畑雅史氏（農政センター作業員）、市来真澄氏（鹿児島大学3年）来跡（2日）。永山氏（ラ・サール学園）来跡（6日）。黒川忠広氏・森田氏（県立埋文センター）来跡（7日）。

（9月）

D～F-18～28のⅡ層掘り下げ。E・F-15～17区Ⅱ層掘り下げ。畠跡多数検出。D-18区より多口飯出土。F-20区より埴土。池田榮史氏（琉球大学教授）来跡（3日）。大坪道雄作業員3名、下田平敏雄氏（伊集院土木事務所）来跡（4日）。青崎係長（県立埋文センター）来跡（19日）。

（10月）

D～F-25～31区Ⅱ層掘り下げ。D・E-20～26区Ⅲ層検出。C～F-14～17区Ⅵ層掘り下げ。D-24区より焼失建物跡検出。岡田氏（南日本新聞社）来跡（3,12日）。本田氏（鹿児島大学助教授）、中村主任来跡（4日）。井上所長視察・牛ノ濱係長・中村主任（県立埋文センター）来跡（10日）。

（11月）

C～E-23～31区Ⅲ層掘り下げ。D～F-19～23区Ⅳ層検出遺構の掘り下げ。森脇広氏（鹿児島大学教授）、大根町町文化財保護審議委員3名来跡（8



日。佐伯氏・下田平氏（伊集院土木事務所）来跡（13日）。日隈正守氏（鹿児島大学助教授）現地指導（19日）。中原氏・有馬孝一氏（県立理文センター）来跡（20日）。

〔12月〕

B・C-25～29区Ⅳ層掘り下げ。B・C-30・31区Ⅲ層掘り下げ。C・D-18～21区表土剥ぎ、Ⅱ層掘り下げ。B・C-30・31区にて中世土瓦墓検出。E-27区にて建物跡に伴う4面底部検出。稲村博文氏（串良町教育委員会）来跡（19日）。竹中氏（鹿児島大学歯学部助手）現地指導（25日）。

〔1月〕

B～E-26～31区Ⅲ層掘り下げ。2×3間の掘立柱建物跡検出。C・D-20～25区Ⅱ層掘り下げ。C～E-24・25区Ⅳ層上面検出。B・C-17区Ⅳ層上面検出し、竈跡、古道、ピット検出。空撮（29日）。藤田氏（ふじた航空写真）来跡（8,29日）。五味克夫氏（鹿児島大学名誉教授）来跡（16日）。

〔2月〕

B～E-24～31区Ⅳ層掘り下げ。竈跡、ピット検出。遺構の写真撮影。佐多町教頭会来跡（1日）。田中和昭氏（佐多町社会教育課）、佐多町文化財保護審議委員5名来跡（5日）。佐伯氏（伊集院土木事務所）来跡（7日）。

〔3月〕

C～E-24～28区Ⅳ層掘り下げ。集石、竈跡等の遺構実測。中原氏・石丸氏（県立理文センター・所内安全パトロール）来跡（6日）。森脇氏（鹿児島大学教授）他学生3名来跡（11日）。調査終了（19日）。

平成14年度

〔平成14年5月7日～平成15年3月20日〕実働157日

〔5月〕

器材搬入・オリエンテーション実施（7日）。C～E-18～25区Ⅵ層掘り下げ。集石出土。D～F-14・15区のⅥ層上面検出。下田平氏（伊集院土木事務所）来跡（7日）。川路氏・下田平氏（伊集院土木事務所）来跡（9日）。田中文雄次長・東和彦氏・吉岡康弘氏（県立理文センター・所内安全パトロール）、坂元恒太氏（知覧町教育委員会）来跡（28日）。

〔6月〕

E-22～26区、D-24・25区、C-25区Ⅵ層掘り下げ。B・C-15・16区Ⅲ層掘り下げ。C・D-25区より指宿式土器多数出土。D-25区よりサメの歯出土。田堤防下の試掘実施（14日）。下田平氏（伊集院土木事務所）来跡（3,13,24日）。井上所長・池畑係長（県立理文センター）視察（12日）。江口氏（南

日本新聞社）来跡（24日）。田代眞介氏（田代町教育委員会）長期研修開始（25日）。

〔7月〕

D・E-19～24区Ⅳ層掘り下げ。C-18～23区、D-19～22区のⅤ層掘り下げ。C-15～17区Ⅱ、Ⅲ層掘り下げ。D-19区より春日式土器が部分的に集中して出土。C-16区より「間元通宝」出土。橋脚部表土剥ぎ（11日～23日）。川辺地区高校社会科教員6名来跡（3日）。上東克彦氏（加世田市教育委員会）来跡（18日）。下田平氏（伊集院土木事務所）来跡（24日）。前田昭信総務係長・川口雅之氏（県立理文センター・所内安全パトロール）来跡（17日）。

〔8月〕

橋脚部掘り下げ。C・D-20,24・25区Ⅴ層掘り下げ。D～G-30～32区近世瓦跡検出。D-32・33区より製鉄遺構検出。D-34区より成川式土器、須恵器、柴付出土。C-36・37区より古墳土器出土。本田氏（鹿児島大学助教授）来跡（8日）。竹中氏（鹿児島大学歯学部助手）現地指導（12日）。長期研修生2名受け入れ（12日）。桜ヶ丘西小学校発掘隊来跡（23日）。

〔9月〕

C・D-36・37区Ⅲ層掘り下げ。C～F-30～32区Ⅲ層掘り下げ。D～E-32・33区Ⅲ層掘り下げ。E-31区より竈跡検出。E-32区より竈穴住居跡検出。池畑係長視察（10日）。石丸氏・脇田清幸氏（県立理文センター・所内安全パトロール）来跡（19日）。

〔10月〕

D～F-30区、C・D-32～34区、C・D-36・37区Ⅲ層掘り下げ。E・F-30～32区、C・D-33・34区、C・D-36・37区Ⅳ層掘り下げ。E-31区の土坑墓より人骨検出。C-33区の方形竈穴建物跡より銅製鏃検出。D-37区より黒髪式土器出土。下田平氏（伊集院土木事務所）来跡（9日）。児玉氏（県文化財課）来跡（10日）。

〔11月〕

C・D-32,36・37区Ⅳ層掘り下げ。C～D-33・34区Ⅴ層掘り下げ。F～H-23～29区表土剥ぎ取り。C～D-33・34区より市来式土器出土。遺構実測、写真撮影多数。大澤正己氏（株）九州テクノロジー）現地指導（14,15日）。坂元氏・上田氏（知覧町教育委員会）来跡（14日）。長屋小学校5,6年生発掘体験（19日）。池珠美氏・松尾勉氏（県立理文センター・所内安全パトロール）来跡（21日）。竹中氏（鹿児島大学歯学部助手）現地指導（26日）。

〔12月〕

E～G-26～29区Ⅲ層掘り下げ。瓦跡検出。C～F-32区Ⅴ層掘り下げ。E・F-30・31、C・D-

33・34, 36～38区Ⅴ層掘り下げ。新東課長・池畑係長・中村主任（県立埋文センター）視察（4日）。新東課長・前田係長（県立埋文センター）視察（16日）。

（1月）

F・G-25～27区Ⅰb層掘り下げ。溝状遺構検出。E～G-18～24区Ⅱ層掘り下げ。遺構検出。B・C-32・33, D-31・32, E・F-30～33区Ⅴb層掘り下げ。C・D-35・36区Ⅹ層掘り下げ。鐘崎式土器出土。

（2月）

E・F-32区Ⅴb層掘り下げ。市来式土器多数出土。D・F-30・31区内より指宿式土器, 春日式土器多数出土。E・F-30～32, B～D-32・33区Ⅳb層掘り下げ。集石, ビット, 土坑検出。D～F-20～24区Ⅹ層掘り下げ。F～G-17～21区Ⅳ層掘り下げ。永山氏（ラ・サール学園）, 山元英嗣氏（県文化財課参与）来跡（13日）。航空写真撮影（21日）。

（3月）

E-30・31区Ⅳ層掘り下げ。指宿式土器多数出土。E・F-24・25区Ⅱ層掘り下げ。E-24区で竈, 焼土集中検出。D～F-19～24区Ⅹ層掘り下げ。高橋護氏（ノートルダム清心女子大学教授）, 小林博昭氏（岡山理科大学教授）, 池畑雅史氏（鹿児島大学大学院）来跡（5日）。下田平氏（伊集院土木事務所）来跡（17日）。調査終了（20日）。

平成15年度

（平成15年5月6日～平成16年3月22日）実働153日

（5月）

器材搬入・オリエンテーション実施（6日）。F・G-15～20区Ⅳ層掘り下げ。F～H-13・14区Ⅲ層掘り下げ。E・F-23～29区Ⅳ層掘り下げ。成川式土器出土, 土坑検出。F-28・29区に集石検出。E・F-26～29区Ⅴ層掘り下げ。E-30区にて集石検出。E・F-19～23区の縄文時代後期層掘り下げにて, 生木, ドングリ等の木の実多数検出。山下章氏（国分市教育委員会）, 尾崎洋光氏（長島町教育委員会）長期研修開始（13日）。宮下氏・北村氏（金峰町教育委員会）来跡（14日）。森脇氏（鹿児島大学教授）現地指導（15日）。木原俊孝所長・池畑係長（県立埋文センター）視察（20日）。下田平氏（伊集院土木事務所）来跡（23日）。

（6月）

F・G-14～18区Ⅱ層掘り下げ。G-16・17区にて焼土, 炭化物検出。E・F-19～23, 26～29区, D・E-29・30区Ⅴ層掘り。E・F-26～29区より集石9基, 土坑, 配石遺構1基検出。A・B-36・37区Ⅱ層掘り下げ。下田平氏（伊集院土木事務所）

（3, 17, 19日）。池畑係長（県立埋文センター）視察（17日）。新東課長（県立埋文センター）視察（18日）。

（7月）

E・F-24～26区, D～F-26～30区, D-35, 37区Ⅴ層掘り下げ。E・F-27区より磨消縄文数点出土。D・E-30区に竪穴住居跡, E-29区に竪穴住居跡検出。A～C-35～37区Ⅱ層掘り下げ。D-36区Ⅳ層掘り下げ。山口修照議会議員視察（17日）。

（8月）

作業員一部上水道跡へ（7日）。E-27～30区Ⅵ層掘り下げ。A～D-32～37区Ⅱ, Ⅲ層掘り下げ。D-34～36区Ⅲ層掘り下げ。製鉄炉跡検出。D-37区Ⅳ層掘り下げ。成川式土器集中出土。大澤氏（株）九州テクノリサーチ）現地指導（5日）。下田平氏（伊集院土木事務所）来跡（5, 28日）。航空写真撮影, 藤田氏（埋文サポート）来跡（6日）。桜ヶ丘小学校5年生2名遺跡見学, 発掘体験（7日）。栗林文夫氏（黎明館）来跡（12日）。金峰町教育委員会1名, 金峰中学校2年生2名遺跡見学（18日）。西郷吉郎氏（坂元小教諭）来跡（19日）。

（9月）

A～C-32～35区Ⅲb層掘り下げ。B-33・34区に溝状遺構, 須恵器, 土師溜り検出。B-34・35区に溝状遺構検出。A～C-36・37区Ⅲb層掘り下げ。C・D-37区Ⅳ層掘り下げ。D-37区より成川式土器溜り検出。吉永和人文化財課長・井ノ上氏（県文化財課）視察（8日）。インターンシップ2名受け入れ。（10日）。池畑係長（県立埋文センター）来跡（12, 17日）。新東課長・野邊盛雅氏（県立埋文センター・所内安全パトロール）来跡（16日）。

（10月）

A～C-31～37区Ⅲb層掘り下げ。ビット, 土坑検出。A・B-36・37区より銅鏝出土。C-35区より市来式土器, 磨製石斧出土。健康診断（3日）。池畑係長（県立埋文センター）視察（22日）。

（11月）

B・C-31～35区Ⅲb層掘り下げ。B-33・34区の前遺時代竪穴住居跡周辺から青銅製の小形微製鋳出土。B-31区より入缶式土器出土。B・C-31～35区Ⅳ層掘り下げ。ビット, 土坑検出。B-31区より市来式土器出土。F-34区の河川堆積層より「寛永通宝」出土。D～F-35～37区Ⅳ層掘り下げ。E-35区より焼土遺構検出。平野浩二総務係長・松尾氏（県立埋文センター・所内安全パトロール）来跡（20日）。

（12月）

C～E-36～38区Ⅳ層掘り下げ。B～C-31～

33区、A～C-34・35区Ⅵ層掘り下げ。ピット検出。A・B-35区より市来式土器多数出土。福永裕暁氏（加世田市教育委員会）来跡（5日）。下田平氏（伊集院土木事務所）来跡（15,17日）。

（1月）

B・C-31～35区Ⅵa・Ⅵb層の掘り下げ。ピット検出。遺構掘り下げ、実測、写真撮影等を行う。Ⅵ層遺物多量に出土のため2mグリッドにて一括取り上げ。健康診断（14日）。池畑係長（県立理文センター）現地指導（21日）。

（2月）

B・C-31～35区Ⅵb,Ⅶ層掘り下げ。阿高式土器、春日式土器出土。B・C-35区より鋸歯尖頭器出土。D-35区の溝状遺構より炭付、滑石製品、龍泉窯系青磁検出。橋本氏（伊集院土木事務所河川港湾課長）来跡（12日）。下田平氏（伊集院土木事務所）来跡（20日）。

（3月）

B～D-31～35区Ⅷ～Ⅹ層掘り下げ。ピット等の検出。B-34区より集石2基検出。A～C-36・37区Ⅵ層掘り下げ。高倉洋彰氏（西南学院大学教授）現地指導、池畑係長（県立理文センター）来跡、下田平氏（伊集院土木事務所）来跡（1日）。木原所長・池畑係長（県立理文センター）来跡・終了挨拶（17日）。下田平氏（伊集院土木事務所）来跡（18日）。調査終了（22日）。

平成16年度

（平成16年5月14日～平成16年7月21日）実働37日

（5月）

器材搬入・オリエンテーション実施（14日）。A～C-36・37区Ⅵ～Ⅷ層の掘り下げ。B-36区より完形土器3点出土。赤色顔料付着の南福寺式土器（鉢形）出土。軽石製加工品出土。警東重明文化財課長・神田忠男同課長補佐・青崎係長（県文化財課）視察（14日）。

（6月）

A～C-36・37区Ⅵ～Ⅷ層の掘り下げ。B-36区より足形土製品出土。木原所長、新東課長、彌栄久志係長（県立理文センター）来跡（7日）。栗林氏（黎明館）来跡（9日）。森脇氏（鹿児島大学教授）来跡（16日）。林孝輔氏（南日本新聞社）来跡、木原所長・新東課長（県立理文センター）来跡（23日）。

（7月）

A～C-36・37区Ⅵ～Ⅷ層の掘り下げ。B・C-36・37区より集石2基検出。北側土層断面清掃、写真撮影（5日）。板倉雄大氏（九州大学大学院生）来跡（15日）。森脇氏（鹿児島大学教授）来跡（16日）。調査終了（21日）。



写真1 芝原遺跡から見た東シナ海方向

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

芝原遺跡は、万之瀬川中流の右岸、標高約4mの自然堤防上に立地する遺跡で、南さつま市金峰町宮崎字芝原に位置する。本遺跡の所在する金峰町は、薩摩半島西海岸のほぼ中央部に位置する。南さつま市金峰町の地形は大きく山地・シラス台地・沖積平野・砂丘に分けられる。山地は町の東半分を占め、標高200mを超える山系が南北に横断する形で連なっており、金峰山や中岳などがある。シラス台地は、錦江湾奥部の始良カルデラ噴出起源のシラスが堆積したものである。沖積平野は、万之瀬川の下流域に広がっており、当遺跡も含まれる。この万之瀬川は、鹿児島市錦山に源を発し、南さつま市加世田万世に至る延長36km、流域面積37km<sup>2</sup>の二級河川である。途中、南九州市川辺町で麓川・永里川が、遺跡に隣接する場所で大谷川・加世田川が、南さつま市金峰町で堀川が合流して蛇行しながら加世田万世で日本三大砂丘の1つである吹上砂丘のある東シナ海に注いでいる。沖積平野は、これらの河川が長年にわたって運んできた土砂から形成されている。なお、この万之瀬川の河口は享和三年(1803)の洪水により移動して現在の位置となっているが、以前は現在の万世中を抜け相星川河口にあったことが分かっている。また、第1図と写真2を比べながら見ると、村原において河川改修が行われ低地において蛇行する部分を直線をつないでいることが分かる。

### 第2節 歴史的環境

南さつま市では、旧石器時代から歴史時代に至るまでの遺跡が数多く発見されている。これらの中には、学史上極めて重要な遺跡も含まれており、当地域が考古学研究の良好なフィールドであることを改めて示唆している。ここでは、旧石器時代から近世に至るまでを概観していきたい。

旧石器時代では、金峰町小中原遺跡・加世田祝原遺跡からナイフ形石器が、金峰町山野原遺跡・加世田平田遺跡から細石器が発見されている。特に平田遺跡では礫群も発見されている。

縄文時代草創期の遺跡としては、上水流遺跡の対岸に椿ノ原遺跡がある。ここでは、連穴土坑・集石等の遺構が発見され、隆帯土器・磨製石斧などの遺物が出土している。ここから出土した丸ノミ状の磨製石斧は椿ノ原型とさへ称されるほど特徴的である。平成9年には国指定遺跡となっている。また、加世田内山田にある志風頭遺跡では、連穴土坑から完形の隆帯土器が出土している。放射性年代測定の結果、11,860±50年BPと得られている。

早期の遺跡としては、草創期でも紹介した椿ノ原遺跡

が著名である。昭和52年(1977)の発掘調査で出土した土器の中で6類として分類された資料は、この報告書刊行の後に前平式土器と古田式土器の型式設定をめぐる一連の論争へと発展していく。金峰町小中原遺跡では、前平式土器の円筒形・角筒形土器がまとまって出土している。特に、角筒形に関しては、上半分は角筒形・下半分は円筒形であり、角筒形の発生を考える上で重要な資料となっている。

前期の遺跡としては、金峰町阿多貝塚、上焼田遺跡、上水流遺跡がある。阿多貝塚から出土した資料の一部は、「阿多V類」と称される。前期研究に欠かすことのできない遺跡である。上焼田遺跡では、珠状耳飾が出土している。周辺からは、縄文土器が出土しているが、報告書では、縄文土器ではなく曾畑式土器ないし春日式土器に伴うものとしてまとめている。上水流遺跡からは曾畑式土器が単独に出土しており、石器組成も含めて良好な資料となっている。

中期の遺跡としては、上水流遺跡で春日式土器が出土している。石堂遺跡や上焼田遺跡では並木式土器・阿高式土器が出土している。

後期の遺跡としては、芝原遺跡の他に上水流遺跡がある。この遺跡からは後期前半の指宿式土器や松山式土器が出土している。指宿式土器の底部圧痕からは、従来大隅半島に分布すると考えられていた「スタレ状圧痕」が確認されている。また、当遺跡と隣接する波畑遺跡からは当遺跡出土の足形土製品と接合する資料が確認されている。

晩期の遺跡としては、上加世田式土器の標識遺跡である上加世田遺跡があるが、大型土坑等の遺構が検出され、土器や石器の他に、土偶や軽石製岩臼・石棒などの祭祠をうかがわせる資料や勾玉・管玉・小玉などの垂飾品など様々な遺物が出土している。なお、この上加世田式土器は、近年の広域編年研究により縄文時代後期に位置づけられる説もある。また、下原遺跡では、縄文時代晩期終末～弥生時代早期の刻目突帯土器に伴って朝鮮半島系無文土器・初痕土器・石包丁などが出土している。

弥生時代から古墳時代にかけては、数多くの遺跡で遺物の散布が見られる。発掘調査された遺跡も県内では比較的多い。高橋貝塚は、弥生時代前期を主体とする貝塚で、万之瀬川の支流堀川の右岸、標高11mの洪積世砂丘上にある。昭和37-38年(1962-63)に河口貞徳氏によって発掘調査が実施された。調査の結果、縄文時代晩期の夜白式土器と高橋1式土器が共存したことや、南海産の貝を素材とした貝輪や南海産貝が出土したことなど、学史的に重要な遺跡である。平成18年(2006)3月には、鹿児島国際大学により隣接する高橋遺跡が発掘調査さ



第1図 遺跡周辺の旧地形

明治35年測量



写真2 上空から見た芝原遺跡周辺

国土画像情報 国土交通省より

れ、弥生時代のものと考えられる遺構が確認されている。下小路遺跡は、弥生時代中期の須玖式土器を用いた甕棺が検出された埋葬遺跡で、棺内の骨にはゴホウラ製の貝輪が着装されていた。松木園遺跡では弥生時代中後期の環濠の可能性のある大溝が松木園式土器を伴って発見されている。中津野遺跡からは、床面が3段構造になる竪穴住居跡が発見され、最下段である3段目からは完形品が40個出土しているという。また、ここは中津野式土器の標識遺跡でもある。この中津野式土器に関しては、弥生時代終末とする考えの他に、一部は古墳時代に入るものがあるとして、明確には位置付けがなされていない。現状としては、弥生時代終末から古墳時代初期の土器として認識されている。

古墳時代の遺跡としては加世田小湊にある奥山古墳(六堂会古墳)が特筆される。この遺跡は、昭和6年(1931)に発見され、石棺の内部には赤色顔料が塗られていた。この内部には、ガラス玉や長さ180cmの鉄剣、刀子が副葬されていた。平成17年(2005)3月には、鹿児島大学が再調査を行っている。その結果、周溝の一部と考えられる遺構が発見され、同年8月からの調査で4世紀代の古墳である可能性が高いことが示された。白糸原遺跡では、竪穴住居跡19基が検出されている。遺構内遺物から、辻堂原式土器から雑貫式土器にかけての集落であるとされる。上水流遺跡からは竪穴住居跡11基が検出されている。遺構内から、初期須恵器の出土がみられた。また、中津野遺跡に隣接する南下遺跡では、木製品をはじめ古墳時代の良好な資料が得られている。

古代にも多くの注目される遺構が発見されている。特にこの地域の遺跡では、古代の集落が発見される場合が多く、広域的なあり方について検討する場合について重要な資料となるであろうことは間違いないと考えられる。中岳山麓古窯跡群は別名「荒平窯」とも呼ばれるもので、9世紀から10世紀にかけて使用されたとみられる須恵器窯である。発掘調査が行われておらず表面採集による調査しか行われていないが、荒尾窯(熊本県荒尾市)の製品との類似性が高いため、人的・物的な交流があったと考えられている。だが、その全体像は明らかではなく、詳細な調査を行う必要がある。小中原遺跡からは多くの掘立柱建物跡と「阿多」という字がヘラ書きされた土器などが発見されている。これらのことから阿多郡衛の可能性が考えられている。山野原遺跡でも多くの掘立柱建物と土師器・須恵器などが発見されている。祭祠に関わるとみられる遺構や、土師器焼成遺構の可能性が考えられるものなども発見されており、豪族に関わる施設であった可能性が考えられている。

加治屋遺跡では、土師甕を用いた埋設遺構と竪穴住居跡とされる遺構が確認されている。芝原遺跡、持林松遺跡、上水流遺跡でも墨書土器をはじめ多数の古代遺物が

発見されている。

中世には、金峰町が属する阿多郡は阿多氏・鮫島氏などによって、加世田が属する加世田別府は別府氏・塩田氏などによって統括された。城館跡・山城跡もいくつか所在している。この中の上ノ城跡・別府城跡・牟礼ヶ城跡・貝殻崎城跡などは発掘調査が行われている。なお、発掘調査は行われていないが、加世田益山の寺岡氏宅には、二重の堀があったと伝えられ、現在もその痕跡が残っている(上東2004)。中世のものであるか明らかでないが、館であった可能性も考えられる。白糸原遺跡では、中世末から近世にかけての土坑墓が2基検出されている。この中には、南島産の夜光貝が入っているものも検出されている。加えて、竪穴建物跡や双魚文青磁なども出土している。

また、万之瀬川流域の遺跡群も近年特に注目されており、持林松遺跡では東北地方の蝦夷に由来のある遺物をはじめ、この地域では珍しい遺物が出土している。この遺跡の性格については交易地と消費地との意見がある。上水流遺跡では茶臼が出土し、喫茶が行われていたことが何われる。当時茶は庶民に喫茶の風習はなく、特別な場所であったことが分かる。その他、当時の交易を解明する重要な資料が出土している。

近世においては上水流遺跡において大溝遺構より大量の遺物が出土しているが、大溝の性格は不明である。

当該時期は調査事例が少なく、明らかでない部分が多い。例挙すると、地頭飯屋(旧加世田市は麓、旧金峰町は阿多と田布施の2か所)・庄屋役所・浦役所・別当役所・会所・宿所・御藏・常平倉・津口御番所・遠見御番所・射場・御牧などがあった。

また、野町と呼ばれる商人の居住区も存在した。加世田地域では、川畑に現在所在する聖徳寺付近に、金峰地域では阿多郷野町と田布施郷池辺野町の2つの野町(商人の居住区)があった。

交通に目を向けたら、現在万之瀬橋の架けられている場所(金峰町側は渡川遺跡・芝原遺跡である)は、村原渡口と呼ばれる渡し場であり、昭和56年(1981)以前は船で渡っていた。また、大正3年(1914)から昭和59年(1984)まで日置市伊集院町から南さつま市小中田、南九州市知覧、枕崎市を結ぶ南薩鉄道が芝原遺跡近くを通過していた。この南薩鉄道は、昭和58年(1983)の加世田豪雨により線路が被害を受け、昭和59年(1984)に廃止となった。

これらの他にも近世の遺跡があるが、以上のものも含め、個々については詳細は調査事例(特に発掘調査)は少なく様相は明らかでない。ただし、当遺跡の調査で発見された近世の遺構・遺物はこれらに関連する可能性があるので注意する必要がある。

なお、当遺跡には調査直前まで木材を扱う会社があっ

た。これも近年のことではあるが、地域の歴史として貴重な事実である。今後もまた日々新しい歴史が刻まれていくであろう。

参考文献

田畑 智子 2002 「鹿児島県万之瀬川流域の地形発達」  
『大分地理』15, 9-14大分大学教育 福祉  
科学部地理学教室

上東 克彦 2004 「鹿児島県薩摩半島に伝世された華  
南三彩-クンディと果实形水注-」『貿易  
陶磁研究』24号日本貿易陶磁学会

加世田市教育委員会  
1985 「上加世田遺跡1」『加世田市埋蔵文化財発  
掘調査報告書』(3)  
1987 「上加世田遺跡2」『加世田市埋蔵文化財発  
掘調査報告書』(4)  
1995 「干河原遺跡」『加世田市埋蔵文化財発掘調  
査報告書』(12)  
1999 「志風頭遺跡・奥名野遺跡」『加世田市埋蔵  
文化財発掘調査報告書』(16)

金峰町教育委員会  
1978 「阿多貝塚」『金峰町埋蔵文化財発掘調査』  
(1)  
1998 「上水流通跡-第1次調査-」『金峰町埋蔵  
文化財発掘調査報告書』(9)  
1998 「持鉢松遺跡 第1次調査」『金峰町埋蔵文  
化財発掘調査報告書』(10)  
2000 「小園遺跡」『金峰町埋蔵文化財発掘調査報  
告書』(11)

鹿児島県教育委員会  
1991 「小中原遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調  
査報告書 (57)

鹿児島県立埋蔵文化財センター  
2007 「上水流通跡1」鹿児島県埋蔵文化財発掘  
調査報告書 (113)  
2008 「持鉢松遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調  
査報告書 (120)  
2008 「上水流通跡2」鹿児島県埋蔵文化財発掘  
調査報告書 (121)  
2009 「上水流通跡3」鹿児島県埋蔵文化財発掘  
調査報告書 (136)

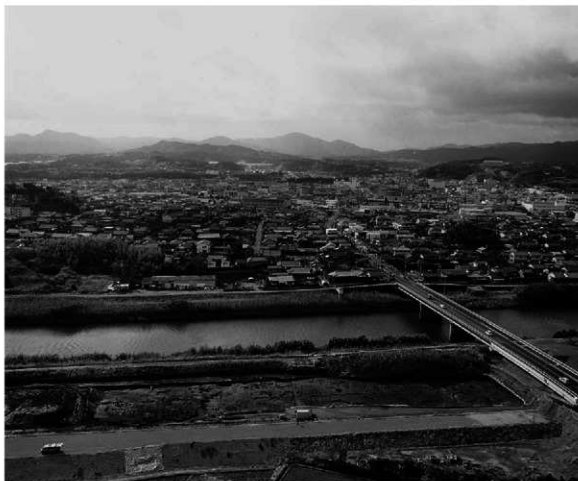


写真3 芝原遺跡から見た加世田市街地



第2図 周辺遺跡位置図 (1 / 25,000)



表1 周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	所在地	時代							備考
			旧石器	縄文	弥生	古墳	古代	中世	近世	
1	上ノ山後遺跡	南さつま市金峰町高橋上ノ山後			●	●	●	●		
2	上ノ山遺跡	南さつま市金峰町上ノ山			●					
3	草原町遺跡	南さつま市金峰町宮崎				●				
4	高橋貝塚	南さつま市金峰町高橋			●					
5	下小路遺跡	南さつま市金峰町高橋下小路			●					
6	牟田城跡	南さつま市金峰町高橋字真門砂入						●		
7	篠田遺跡	南さつま市金峰町尾下					●			
8	松木園遺跡	南さつま市金峰町尾下松木園			●					
9	山野原遺跡	南さつま市金峰町尾下字山野原	●	●	●	●	●	●		
10	鳥追園遺跡	南さつま市金峰町尾下鳥追園	●	●	●	●				
11	尾下遺跡	南さつま市金峰町尾下			●					
12	中津野下原遺跡	南さつま市金峰町中津野下原			●					
13	平畑遺跡	南さつま市金峰町中津野	●	●	●			●		
14	中津野遺跡	南さつま市金峰町中津野 1119			●					
15	中津野城跡	南さつま市金峰町新山			●			●		
16	立野原遺跡	南さつま市金峰町新山			●					
17	小中原遺跡	南さつま市金峰町新山小中原	●	●	●	●	●	●		
18	野村原遺跡	南さつま市金峰町中津野			●					
19	阿多貝塚	南さつま市金峰町宮崎上焼田		●	●	●	●	●		
20	上焼田遺跡	南さつま市金峰町宮崎上焼田	●	●	●	●	●	●		
21	上花立遺跡	南さつま市金峰町			●					
22	万之瀬川床遺跡	南さつま市加世田益山万之瀬川川床			●	●				
23	上川原遺跡	南さつま市金峰町宮崎上川原			●	●				
24	古城跡	南さつま市金峰町宮崎西						●		
25	白糸原遺跡	南さつま市金峰町宮崎		●	●	●				
26	上宮寺跡	南さつま市金峰町松田南						●		
27	松田南遺跡	南さつま市金峰町花瀬		●	●	●				
28	持林松遺跡	南さつま市金峰町松田南		●	●	●	●	●		
29	渡畑遺跡	南さつま市金峰町宮崎字渡畑		●	●	●	●	●		
30	芝原遺跡	南さつま市金峰町宮崎字芝原		●	●	●	●	●		本報告書
31	市南遺跡	南さつま市金峰町宮崎		●				●		
32	阿多城跡	南さつま市金峰町阿多						●		
33	鶴之城跡	南さつま市金峰町花瀬鶴之城						●		
34	大迫田遺跡	南さつま市金峰町花瀬						●		
35	花瀬今城原遺跡	南さつま市金峰町花瀬今城原	●	●	●					
36	上水流 D 遺跡	南さつま市金峰町花瀬						●		
37	上水流遺跡	南さつま市金峰町花瀬上水流・森山	●	●	●	●	●	●		
38	上水流 C 遺跡	南さつま市金峰町花瀬			●	●		●		
39	花瀬遺跡	南さつま市金峰町花瀬今城原				●		●		
40	針原遺跡	南さつま市金峰町花瀬		●			●			
41	加治屋遺跡	南さつま市加世田川畑岩山		●	●	●	●			
42	二頭遺跡	南さつま市加世田川畑 3377 他		●	●	●	●			
43	椿ノ原遺跡	南さつま市加世田村原椿ノ原	●	●	●	●	●	●		
44	永田遺跡	南さつま市加世田川畑永田			●	●	●			
45	上加世田遺跡	南さつま市加世田川畑上加世田 2715 他	●	●	●	●	●	●		
46	杉本寺跡	南さつま市加世田川畑杉本寺			●					
47	別府城跡	南さつま市加世田武田城ノ山			●	●	●	●	●	
48	佐方原・内田原遺跡	南さつま市加世田唐仁原佐方原他				●				
49	下東堀遺跡	南さつま市加世田宮原下東堀 176 他	●	●	●	●	●	●		
50	田武平遺跡	南さつま市加世田益山田武平			●	●	●	●		
51	油免・本寺遺跡	南さつま市加世田宮原油免他		●	●	●	●	●		
52	西荒田遺跡	南さつま市加世田益山西荒田			●	●	●	●		
53	宮ノ脇・口畑遺跡	南さつま市加世田宮原宮ノ脇他			●	●	●	●		
54	陣跡	南さつま市加世田益山陣						●		
55	内ノ田遺跡	南さつま市加世田益山内ノ田	●		●	●	●	●	●	
56	中小路遺跡	南さつま市加世田益山中小路・屋敷			●	●	●	●	●	
57	浜堀遺跡	南さつま市加世田宮原浜堀			●	●	●	●		
58	鶴ノ塚陣跡	南さつま市加世田益山宇都						●		
59	上山野遺跡	南さつま市加世田益山上山野			●	●	●	●		
60	川ノ畑遺跡	南さつま市加世田益山川ノ畑			●	●	●	●		

## 第3章 調査の概要

### 第1節 発掘調査の方法

平成10年度に行われた確認調査をうけて、平成11年度から平成16年度に本調査を行った。

調査区は、対象区域に10mグリッドを設定して実施した。第4図に示すように、南北方向にA'、A、B・・・としてIまでをつけ、東西方向に1.2.3・・・として38までをつけ、A-37区などと呼称することとした。また、第4図・第5図に示すように、万之瀬川の新築堤防部分の調査を平成11年度・12年度に行い、新堤防と旧堤防の間を平成13年度、新堤防と旧堤防の間及び万之瀬橋橋脚部分を平成14年度、橋梁部及び橋門から新堤防の間を平成15年度、平成15年度調査未了部分を平成16年度に調査を行った。

発掘調査は、重機でI層（表土・耕作土）を除去した後、遺物包含層であるI b層からX層までを人力で掘り下げた。また、場所によりI b層以下に無遺物層が認められる場合も重機で除去した。また、最終的には重機で下層確認のためのトレンチを設定して掘り下げた。

これらの調査の結果、I b層からX層に至るまで、縄文時代中期から近世にかけて大量の遺構、遺物が発見されている。なお、層位は調査場所によって異なっており、対応については各章中で述べている。

遺物は膨大に出土したため弥生時代以降の遺物については基本的に層とグリッド毎に一括して取り上げた。縄文時代の遺物については、平板実測により現位置を記録するとともに、レベルを測定して遺物台帳に記載して取り上げた。ただ、遺物量が膨大であり、小グリッド毎に一括して取り上げたものもある。遺構は検出状況を写真で撮影し、位置を記録してから個別に実測を行った。必要に応じて実測途中と実測後の状況も写真撮影した。図化作業に関しては業者委託も実施している。

### 第2節 層位（第3図、第7図～第11図）

芝原遺跡は万之瀬川の中流の川岸近くの自然堤防上に立地する遺跡である。本遺跡で見られる地層は、河川堆積物及びそれらの上に堆積する腐植土である。砂質の土壌については、「砂質土」と「砂」に分類した。河川による氾濫堆積層などを含んでいるので、遺跡内において必ずしも安定している状況ではなかった。加えて各年度ごとに遺跡を分断して調査を進めた結果、例えば平成12年度B-19区Ⅷ層は春日式土器が集中して出土しているが、平成13・14年度のⅨ層としたものから市来式土器が出土するなど、各年度の整合がとれていない。このため平成12年度の春日式土器出土集中地域のみ独立させ、それ以外に関しては一括して取り扱わざるをえなかった。

下記第3図の基本土層以外に、旧堤防部分では縄文時

代後期土器を伴う泥炭層がみられた。また、その他の調査区でも河川氾濫時の堆積層とみられる砂層が所々みられた。本遺跡では明確な火山灰層はみられなかった。本遺跡上流の上水流遺跡では、縄文時代晩期包含層であるⅢ b層中に間間岳起源の「灰ゴラ」がブロック状に含まれていたと報告されているが、芝原遺跡では部分的に見られたにせよ、明確なブロック状の堆積は見られなかった。

I層	灰褐色土、現表土	
I b層	灰褐色砂質土	中世後期～近世包含層
II a層	茶褐色砂質土、炭化物・赤褐色の焼土を含む。	中世中期包含層
II b層	白色砂層、万之瀬川の洪水層	
III a層	黒色砂質土	中世前期包含層
III b層	明黒褐色砂質土	古墳時代～古代包含層
IV層	黄褐色砂質土	弥生時代包含層
V層	暗黄褐色砂質土	
VI a層	黄褐色砂質土	縄文時代後期～晩期包含層
VI b層	暗茶褐色砂質土、炭化物多く含む。	縄文時代後期包含層
Ⅶ層	白色砂層	部分堆積
Ⅷ層	茶褐色砂質土	縄文時代中期～後期包含層
Ⅸ a層	白色砂層	
Ⅸ b層	にぶい黄褐色砂層	
X層	にぶい黄褐色砂質土	縄文時代中期～後期包含層
X I層	黄褐色砂質土	

第3図 芝原遺跡の基本土層図（平成15年調査時）

第7図土層断面図（1）の①は、平成16年度調査区A-36・37区北側の土層である。河川による氾濫堆積層で部分的に堆積しているⅧ層を除きほぼ平行に堆積している。第7図土層断面図（1）の②は、平成15年度調査区で、①の東側の続きにあたるA-32～35区北側の土層である。①と同じようにほぼ平行に堆積している。①②の地域では、V層の堆積が見られない。第8図土層断面図（2）③は平成12年度調査区A'・A-23～29区北側の土層である。全体的にはほぼ平行な堆積であるが、①②で見られなかったV層が堆積している。第9図土層断面図（3）④は、平成11年度調査区A'・A-11～20区北側の土層である。A-12・13やA-16・17に中世から近

世の溝があるためか、下位の堆積が不規則になっている。また、A-12区についてもV層以下の堆積が不規則である。これは、当遺跡の西側低地部分に以前は万之瀬川が蛇行して流れていたことによる影響ではないかと考えられる。第10図土層断面図(4)⑤は、平成11年度調査区B・C-2～9区北側の土層である。全体的にはほぼ平行的な堆積である。第10図土層断面図(4)⑥は、平成12年度調査区A'・A-31区西側の土層である。全体的にはほぼ平行的な堆積である。第11図土層断面図(5)⑦は平成12年度調査区A・B-21・22区西側の土層である。河川による氾濫堆積層で部分的な堆積であるⅧ層が層状にしっかりと堆積している。第11図土層断面図(5)⑧は平成13年度調査区D～F-14・15区西側の土層である。Ⅷ層以下の層については、堆積が不規則である。また、各層が万之瀬川方向に緩やかに下っていることがうかがえる。第11図土層断面図(5)⑨は、平成14年度調査区E・F-30区西側の土層である。万之瀬川側に近づくにつれて層が増えるとともに、下っている様子がうかがえる。特に、V層以下の下り方が大きく、傾斜が急になっている。

### 第3節 整理作業の概要

芝原遺跡の発掘調査報告書作成に伴う整理作業については、平成11年度から平成16年度にかけての発掘調査中に、遺物の洗浄・注記作業を並行して行い、本格的な整理作業を平成17年度より実施した。作業は、県立埋蔵文化財センターで、他の万之瀬川流域の遺跡群と同時進行の形で行った。刊行については、複数年に分けて刊行することとした。本年度の「縄文時代遺構編」をはじめに、「縄文時代遺物(土器)編」「縄文時代遺物(石器)編」「弥生・古墳時代編」「古代から中世編」と年度ごとに刊行する計画である。

### 第4節 遺物の分類について

#### 1 土器

縄文時代の土器は、縄文時代中期から晩期まで幅広い時代のものが出土している。報告書作成では、これらを複数年計画で刊行することとしたため、本来は全体を通して類別作業を行うべきだが分断される形となっている。そこで、便宜上類別の上に「群」を設定した。

1群は、縄文時代中期の春日式土器。2群は、縄文時代中期から後期該当の土器で、太めの凹線文や沈線により文様が施されているものを主体とするもの。3群は、縄文時代中期後半から後期該当の土器で、2本の並行沈線により靴形文や音符文などの文様が施されているもの。4群は、器面に縄文が施されているもの。5群は、口縁部が断面三角形やく字状を呈しているもの。6群は、1群から5群に分類できないもの。7群は、器面が無文

のもの。8群は、分類できない副部片や底部。9群は、土製品とした。これらはさらに、深鉢形、鉢形、台付き皿形などの形式に分かれている。

各群内の土器の特徴に関しては、各々の章で紹介していきたい。

#### 2 石器

当遺跡では、縄文時代中期包含層に比定されるX層から縄文時代後期・晩期該当のⅥa層の包含層において、土器同様石器が多数出土している。本報告書刊行時点で全てを抽出できていないが、概ね下記の通りである。主な器種は、石鏃、鋸歯尖頭器、鋸歯縁石器(石鏃)、石器、スクレイパー、二次加工剥片、剥片、楔形石器、石錐、石槌、擦切石器、磨製石斧、打製石斧、磨石、敲石類、石皿類、砥石、軽石製品などで、器種的にも多岐にわたっている。

石器について分析していくにあたり、石材及び器種において可能なものについて分類を試み、その表を以下に示した。石器に関する分析等は、以下の表を参照し述べていくこととする。

#### 石材分類表

石材に関しては、石材産地を推定させる黒曜石及び安山岩、石材中に圧倒的な量を示し質感や風化の程度等個体差が顕著な頁岩については、石材の細分化を試み、以下のように分類した。他に、頁岩や砂岩等にホルンフェルス化した石材も散見されたが、変成が顕著であるものについてのみホルンフェルスに含めた。頁岩については結晶化が顕著な石材は、頁岩中に含めている。

#### 石器分類表

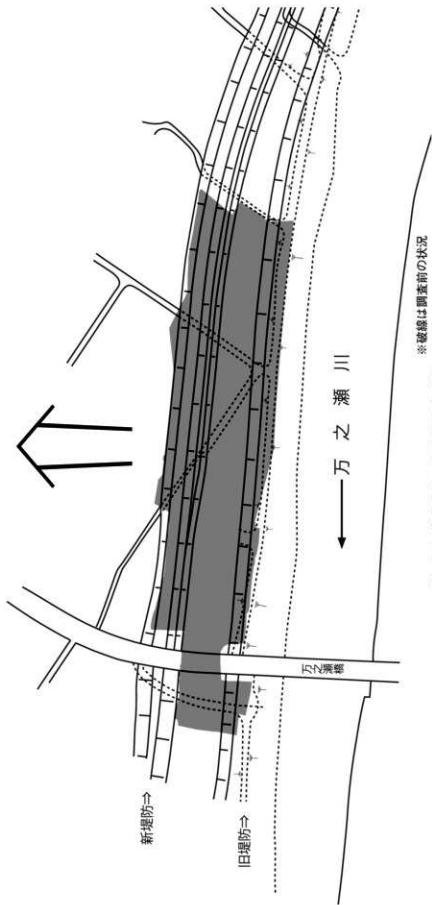
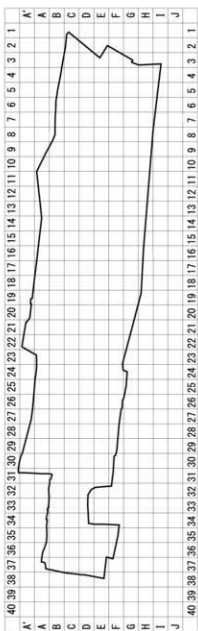
石器は、同一器種内で属性による相違が明瞭で、一定量以上出土するものについて、グループ化し、以下のように分類した。使用による折損や、欠損により他の器種への転用が見られる場合は、最終用途をその石器の器種と捉えて分類した。

表2 石材分類表

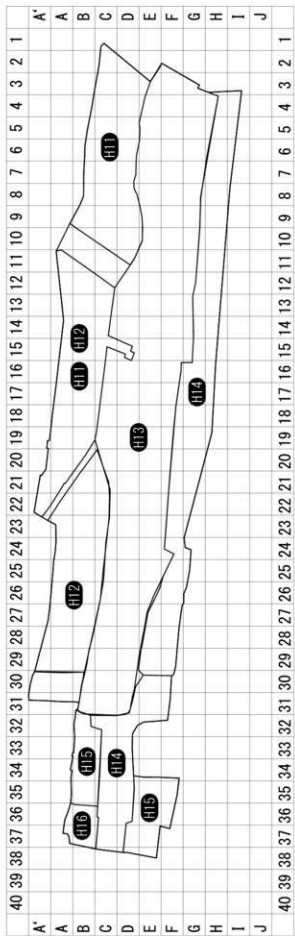
岩石分類	概 要
黒曜石 (ob)	I 不純物を多く含み、漆黒で光を通さないものを包括した。薩摩川内市樋脇町上牛鼻、いちき串木野市川上平木場、いちき串木野市宇都等の原産地資料に類似する。
	II 光を通し、不純物を大量に含むものを総括した。鹿児島市の三船、伊佐市大口平出水の日東・小川内の五女木、錦江町の長谷等の原産地資料に類似するが、細分を行うことはできなかった。
	III 灰色～黒色を基調とし、不純物をほとんど含まない良質のものを包括した。えびの市の桑ノ木津留、伊佐市大口上青木の原産地資料や自然面が磨りガラス状を呈する霧島系の資料に類似するが細分を行うことはできなかった。
	IV 黒色で不純物を全く含まない良質のものを包括した。佐賀県伊万里市鹿腰産の資料に類似するが、一部長崎県佐世保市針尾島周辺で産出する黒色系のものも含まれる。
	V 青灰色で不純物の少ないものを包括した。針尾中町や長崎県佐世保市東浜、淀原等西北九州の原産地資料に類似するが、原産地不明の一群も含まれる。
	VI 不純物をあまり含まない灰色のものを包括した。佐賀県椎葉川周辺のものを原産地資料とするが、原産地不明の一群も含まれる。
	VII 原産地不明なものを包括した。
安山岩	数mmの長方形をした黒(角閃石や輝石)や白(斜長石)の鉱物の結晶(斑晶)が点在するものを包括した。淡灰色～黒色で著しく多孔質～細粒緻密やガラス質、摩擦は大～小まで様々なものがある。黒色を呈し、硬質なサスカイトが有名。
	I a 黒色を呈し、砂質感が強い。斜長石がほとんど含まれない。西九州産であると考えられる。
	I b I aが風化したもの。
	II a 西九州産か。斜長石がほとんど含まれず、硅質の光沢がある。
	III a 上牛鼻産と考えられる。斜長石が密に含まれる。黒色もしくは青灰色を呈し、光沢感が強い。風化していない、もしくは弱い風化が見られる。
III b III aに類似するが、風化が強い。	
IV 上記以外の一般的な安山岩。花崗岩との区別においては、帯磁率を基準とし $20 \times 10^{-1}$ SI以上を本類に含めた。	
凝灰岩	火山灰や火山砂などが堆積し、凝固したもの。親指大の礫を含む凝灰角礫岩を含む。
花崗岩	御影石とも呼称。石英・カリ長石・雲母・角閃石・輝石などを主成分鉱物として含む。安山岩との区別は、帯磁率において $2 \times 10^{-1}$ SI程度の石材を本類に含めた。
蛇紋岩等	蛇紋岩はぬめつとした肌触りを有し、光沢がある。石材不明資料中、蛇紋岩に類似した資料を含めた。
頁岩	泥や粘土の固結した岩石で、平行な平面で割れる傾向がある。黒色のものが多いが、褐色系の色のものもある。非常に細粒で、肉眼では粒子の識別出来ないものが多い。粒度均質。さびが付着するもの特徴である。
	I 風化が顕著で、白色もしくは乳白色を呈する。
	II 風化が見られる。層状剥離や白筋が見られるものが多い。
	III IIに類似するが、風化がない、もしくは弱い。
	IV 風化が全くない。光沢があり、漆黒色を呈する。
	V 風化が全くない。光沢があり、黒色や黄橙色、白色、乳白色、青灰色などを呈す。硅質の頁岩。
	VI 粘板岩に類似。薄茶色を呈し、剥離が強い。シルト質の頁岩。
	VII さびが付着。黒色を呈し、剥離が強い。
VIII 硬質頁岩の一種で、長石が粒状に多量に含まれる。金峰山が産地と考えられる。	
砂岩	砂粒・石英粒が集合して固まった堆積岩の一種。触ると砂粒感が強いものを本類に含めた。
粘板岩	極微小な砂粒(泥粒)が集合して固まった堆積岩の一種。頁岩に似て層状を成すが、薄茶色～茶黄色を呈し、指で触ると粉が指頭に残るものを本類に含めた。
ホルンフェルス	硬質化が著しく、鉱物が相累なって帯状もしくは斑状を成すもの。ただし、硬質化(もしくは、硅質化)した頁岩は本類に含めず、頁岩に分類した。
瑪瑙系	瑪瑙・玉髄・石英・タンバク石・鉄石英・水晶・石英班岩・珪岩などを総称して、本類に含めた。
チャート	珪酸を含み光沢感をする。灰白色を呈する。

表3 石器分類表

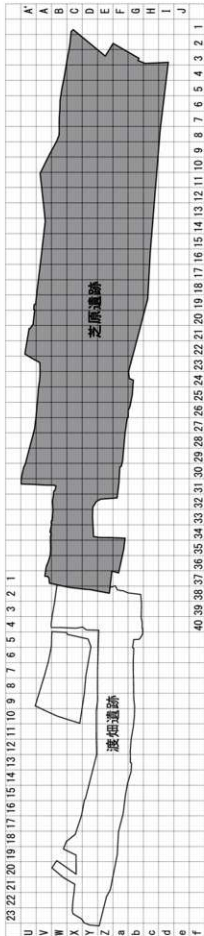
器種分類		概 要
測片石器	石 鏃	測片を素材として両側縁部に両面から押圧測磨を施してある小型から中型の三角形の石器群を石鏃とした。
		I 全体の形状が正三角形を呈するもの。
		II 全体の形状が二等辺三角形を呈するもの。
		III 全体の形状が二等辺三角形で、縦が幅の2倍以上の長さを呈するもの。
		IV 先端が尖り側縁が緩やかに曲線を描くもの。
		挟りの状況により a: 平坦, b: 浅い, c: 深い
	V I~IVに該当しない特徴を呈するもの。	
	VI 未製品や欠損品。	
	鋭歯尖頭器	測片を素材として両側縁部に両面から押圧測磨を施し両側縁部を鋭歯状に作出してある大型の三角形の石器群を鋭歯尖頭器とした。本石器と石鏃を組み合わせたものとして使用したと想定される。
	鋭歯縁石器(石鏃)	測片を素材として一側縁部に挟りを入れ鋭歯状に作出し、もう一側縁部は微細測磨により刃部のように作出してある石器群を石鏃とした。本石器と鋭歯尖頭器を組み合わせたものとして使用したと想定される。
石 鏃	測片を素材として刃部及びつまみ部を作出し、つまみ部に着紐して携帯する石器群を石鏃とした。	
スクレイパー	測片の縁辺部などに二次調整を行い、刃部整形を施してあるものをスクレイパーとした。	
二次加工測片	測片の縁辺部などに二次調整を行い、刃部整形が認められないものを二次加工測片とし、刃部整形が認められるもので一定の大きさを有する資料は礫器類に含めた。なお、後・晩期相当層出土中、横長測片を素材とする刃部整形測片を横刃形石器として分類した。	
横刃形石器	原石から石器製品作出のための測片を採録した残存石材を本類に分類した。なお、測磨面に顕著な使用痕等確認できる資料については、礫器に含めた。	
石 核	I 自然面を有するもの。	
	II 自然面を有しないもの。	
	a 周辺から中心に向かって割ぐもの。	
	b 分割により平坦な打面を形成した後、同一打面から割いだもの。	
c 測磨方向に法則性が見いだせないもの。		
測片石器	石 鏃	大きなつまみ部を有し小振りな尖頭部を作出成形し鏃部とする石器群を石鏃とした。
	楔形石器	ピレス・エスキューも併称される。表面観は方形で、上縁部及び下縁部は直線的で平行に位置する。刃部断面観が凸レンズ状に鋭角をなし、基部には最打面を有する。本石器を木の実や骨にあて、敲石等で敲いて割るために使用したと想定される。
	接切石器	礫石と同様、砂岩質の礫素材を使用する。刃縁部の片面もしくは両側面に削痕を有する。磨製石斧等の素材を抽出するために、礫素材を振り切り、分割するための道具と考えられる。
	挟入石器	測片を素材として側縁部に挟入部を作出してある石器群を挟入石器とした。挟入部が一側縁部のみみられるものと両側縁部にみられるものがある。
礫 器 類	磨製石斧	I 器厚が厚く、重量感がある。刃部は蛤の形態を有し、器形は長方形を呈する。
		II Iより小型で、器厚が薄手。長方形を呈する。定格式石斧が多い。
	打製石斧	I 細長で刃部が片刃である。整形石器と呼称されるタイプである。
		II 明瞭な挟りを持たず、短冊形(長方形)の器形を呈する。器厚は比較的厚い。短冊形石斧と呼称。
		III 明瞭な挟りを持たず、短冊形(長方形)の器形を呈する。I類に類似するが、器厚が極薄く、より鑢に近い形状とする。扁平石斧と呼称。
	IV 分類不可資料及び未製品。	
	礫器類	I 素材測片の両側縁部を中心的に刃部調整が施され、柳葉状の器形を呈する。
		II 素材測片の下縁部を中心的に刃部調整が施され、横長長楕円(長方形)状の器形を呈する。
		III 素材測片の一辺に刃部調整が施され、器形は三角形を呈する。刃部整形は直線的である。
		IV 長方形の素材測片の接しない二側縁部に刃部調整が施される。
V 上面観が円形を呈しており、周縁部に調整を施し、基部及び刃部を作出する。ラウンドスクレイパーとも呼称される。		
VI 上記以外の礫器類である。		
磨 石	I a 比較的小礫を素材とする。全面的もしくは部分的に磨面のみを有し、最打痕は不明瞭である。	
	I b 全面的もしくは部分的に磨面を有し、平坦面や側縁に明瞭な最打痕が見られる。	
敲 石	II a 大きな礫を素材とする。全面的もしくは部分的に磨面のみを有し、最打痕は不明瞭である。	
	II b 全面的もしくは部分的に磨面を有し、平坦面や側縁に明瞭な最打痕が見られる。	
磨敲石	III 上記I及びII類以外の資料である。上面観が長楕円形状もしくは不定形状を呈し、用途が敲石と考えられる資料群である。	
石皿・白石	石皿は大礫を利用し、磨面・凹面を有する。磨石とセット関係にあり、木の実を磨り潰したりするためと考えられる。	
砥 石	白石も大礫を利用し、最打痕を有する。敲石とセット関係にあり、石器製作時に石材を据え付けるためと考えられる。	
軽石製品	砂岩質の礫素材を利用し、主として長軸方向に削痕が縦走り、深い凹面を有することが多い。	
軽石製品	軽石を素材とする。穿孔や凹み等加工痕が残される。	



※破線は調査前の状況  
 第4図 芝原遺跡の調査範囲とグリッド図

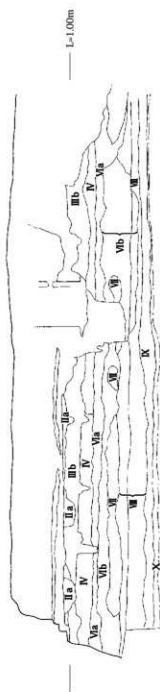


第5図 年度別調査範囲グリッド図

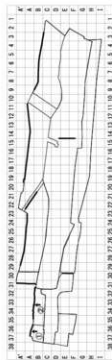
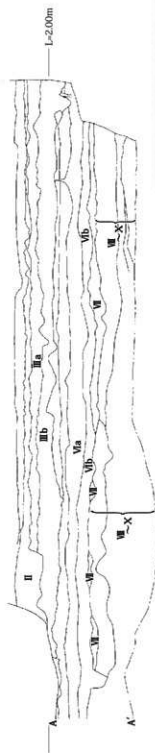
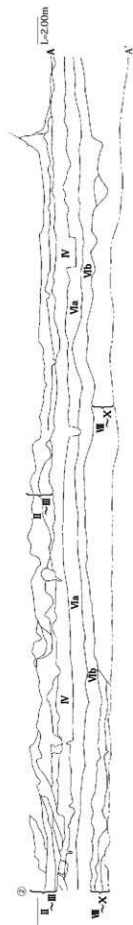


第6図 芝原遺跡・渡畑遺跡グリッド図

①

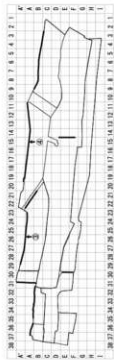
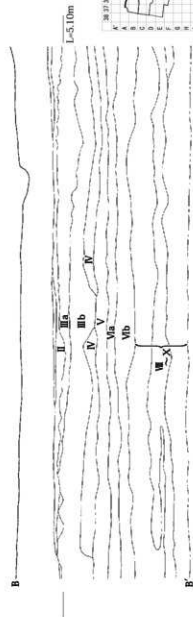
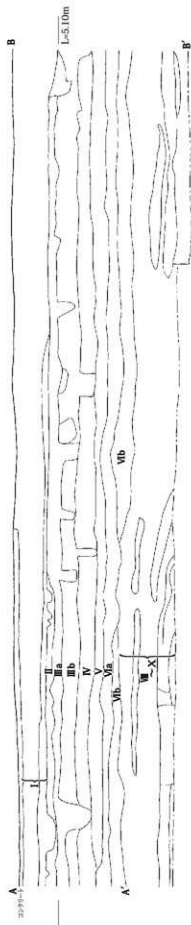
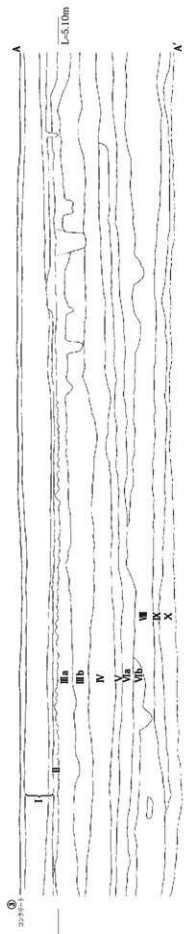


②

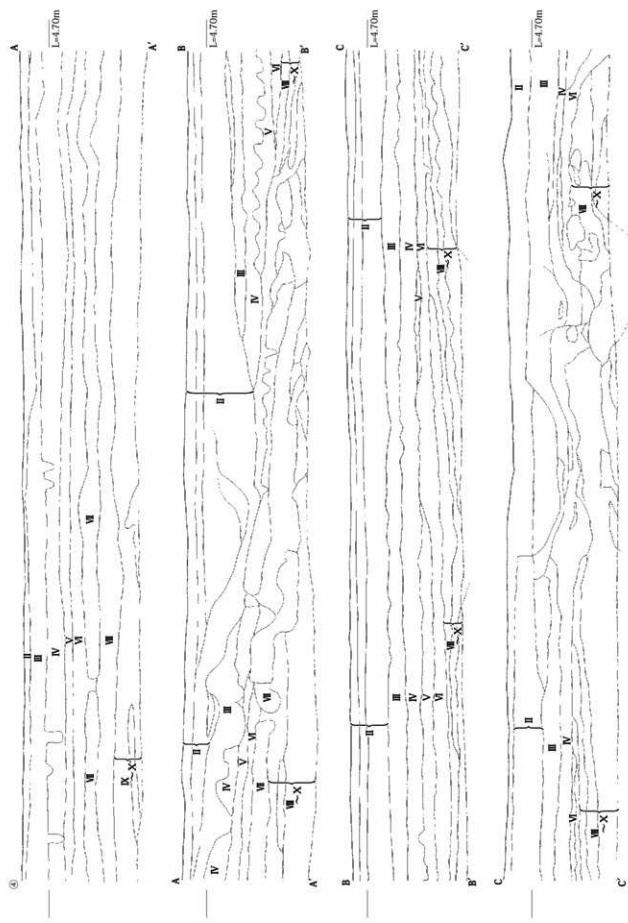


第7图 土层断面图 (1)

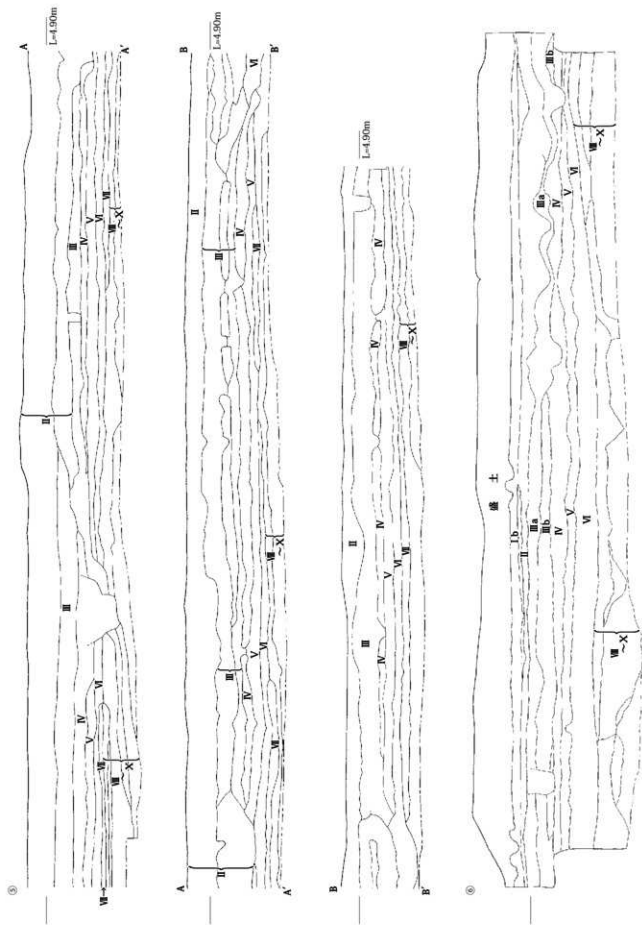




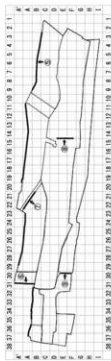
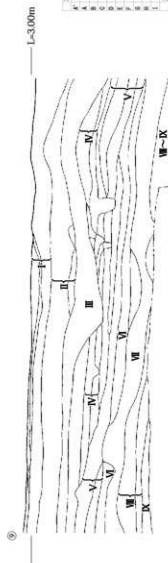
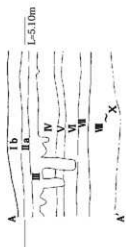
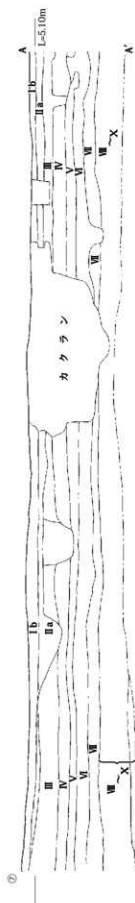
第8图 土层断面图 (2)



第9图 土層断面图 (3)



第10图 土层断面图 (4)



第11図 土層断面図 (5)

## 第4章 縄文時代の遺構の調査

### 第1節 縄文時代中期中葉の遺構

各年度ごとに遺跡を分断して調査を進めた結果、各年度の層位の整合がとれていない。平成12年度の春日式土器出土集中地域のみ独立させ、それ以外に関しては一括して取り扱わざるをえなかったため、縄文時代中期中葉の調査は、平成12年度調査のB-18・19区Ⅱ層が該当する。

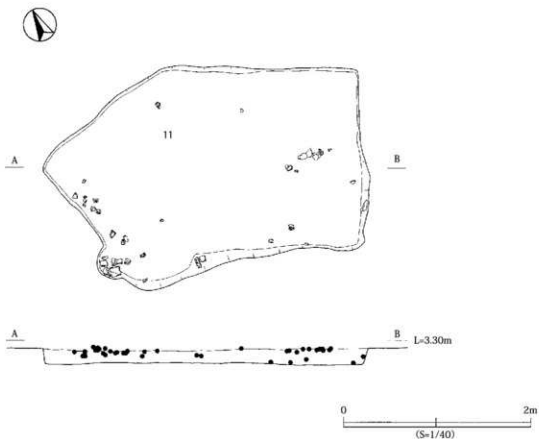
遺構は、竪穴状遺構が2基、土坑が1基検出された。その配置は、第15図・第16図に示したとおりである。竪穴状遺構1号と竪穴状遺構2号に挟まれるように土坑1号が位置している。

竪穴状遺構は、B-18区・B-19区でそれぞれ1基ずつ検出された。これらの2基は、これまで報告されている該期の竪穴住居跡とその平面の形状が異なっている。該期の竪穴住居跡が5軒検出された志布志市松山町の前

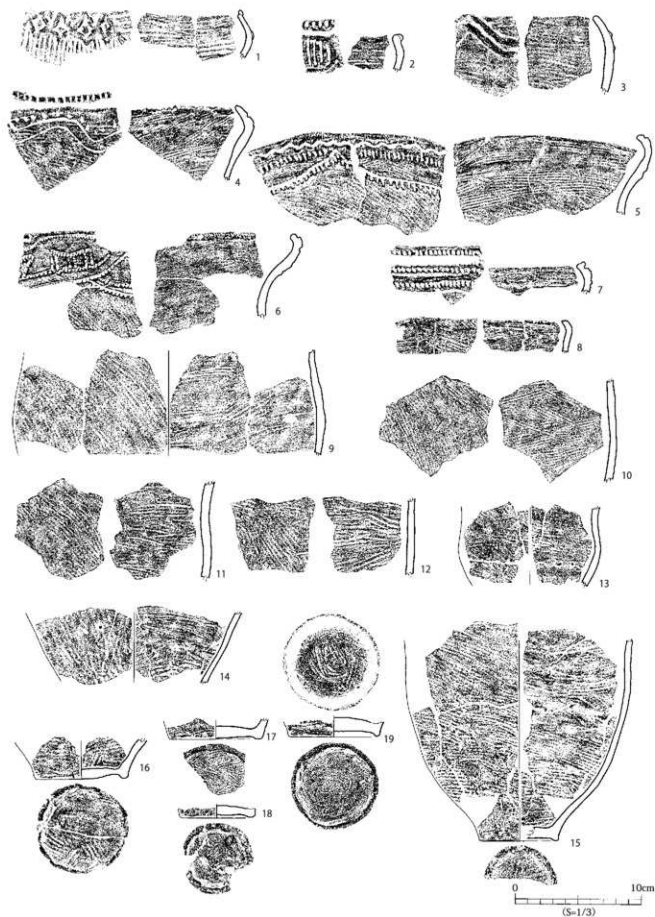
谷道跡では、平面形が円形と隅丸方形である。当道跡の竪穴状遺構1号・竪穴状遺構2号の平面形とはその形状が異なっている。また、竪穴状遺構1号・竪穴状遺構2号からは柱穴が検出されなかったことや灰跡が検出されなかったことなどから、ここでは竪穴状遺構として報告することとした。

土坑は、B-19区で1基検出された。埋土や出土遺物から竪穴状遺構1号・竪穴状遺構2号と同期の土坑と判断した。

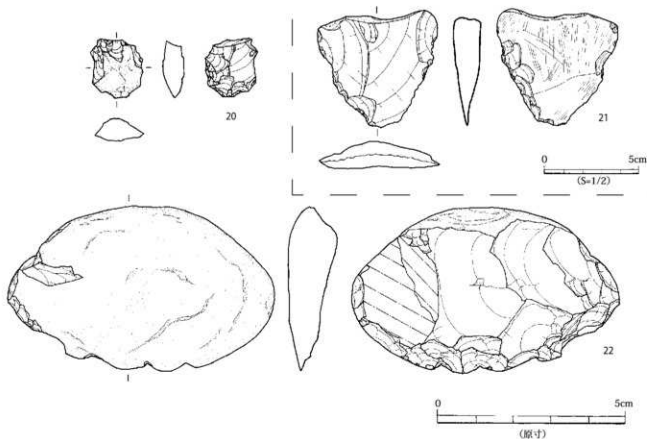
これらの遺構からは、貝殻による器面調整が施された器壁の薄い口縁部が内湾する土器や、石鏃・鋸歯尖頭器・石皿などの石器が出土している。注目されることとして、竪穴状遺構2号から組合せ銛の先端部であると考えられる鋸歯尖頭器が3点出土している。



第12図 竪穴状遺構1号内遺物出土状況図



第13图 竖穴状遗构1号内出土遗物实测图(1)



第14図 竪穴状遺構1号内出土遺物実測図(2)

## 1 竪穴状遺構

### (1) 竪穴状遺構1号(第12図～第15図)

竪穴状遺構1号は、B-19区で検出された。プランは、2.4m×2mの不定形であり、床面はフラットである。

調査は、中央に埋土観察用のベルトを設定し、中央部分から床面を確認していった。なお、検出面から床面までの深さは、15cm程である。柱穴は確認できなかった。床面積は、約5.47㎡である。埋土は、暗茶褐色砂質土の単層である。この埋土から、土器や石器が出土した。遺物は床面近くから出土するものもあったが、大部分は埋土上位より出土した。竪穴状遺構1号から出土した遺物は土器205点、石器7点であった。土器は接合作業を経てこのうち19点、石器は3点を図化した。

#### ア 出土土器(第13図)

1から8は、内湾する口縁部であり、内外面ともに器面調整は貝殻条痕である。1は、口縁端部に粘土紐が菱形に貼り付けられている。粘土紐が貼り付けられていない部分は、棒状の工具による沈線が横位に施されている。粘土紐が貼り付けられた下位には棒状の工具による沈線が縦位に施されている。2は、口唇部に刻みが施され、口縁部の粘土紐を貼り付けた内側には縦位の沈線が

施されている。3は、口縁部に粘土紐が山形に2条貼り付けられている。4は、口唇部に刻みが施され、口縁部には2条の沈線が波状に施されている。沈線の上位に細い棒状の工具による刺突文が施されている。5は、口縁部上位に細い波状の沈線が施され、その下位にヘラ状の工具による刺突文が施されている。さらにその下に沈線文を施し、沈線上に刺突文が施されている。6・7は、沈線文に刺突文が施されている。8は、無文である。9から14は、胴部である。内外面ともに器面調整は貝殻条痕である。15は、胴部から底部である。内外面ともに、器面調整は貝殻条痕である。16から19は、底部であり、底部裏面の接着面はほぼ平坦である。16は、底部裏面の接着面が高台のように作り出されているが、上げ底にはなっていない。15、17から19は、上げ底である。1から19の器壁は薄いつくりであり、内外面の器面調整は貝殻条痕である。1群の土器であると思われる。

#### イ 出土石器(第14図)

20は、石核である。小礫を素材としたものである。21は、二次加工剥片である。左側縁部及び表面左側縁部に調整痕を有する。22は、スクレイパーである。下縁部に刃部があり、使用痕が観察される。

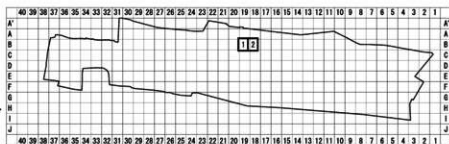


(A-19)

(B-19)

土 : 土坑

竖穴 : 竖穴状遺構



(B-19)

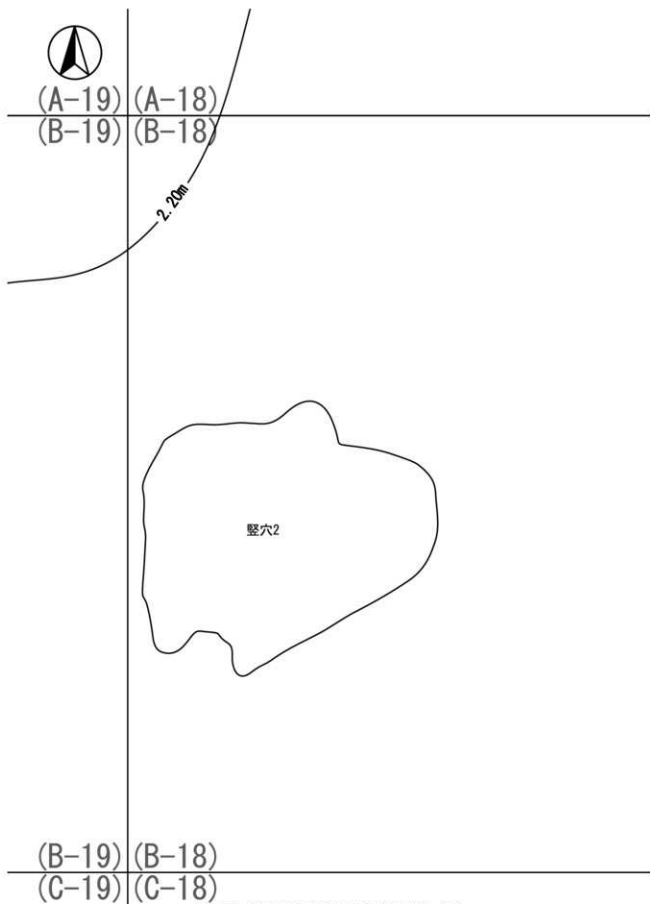
(C-19)



2.20m

第15図 縄文時代中期中葉遺構配置図(1)





第16図 縄文時代中期中葉遺構配置図(2)

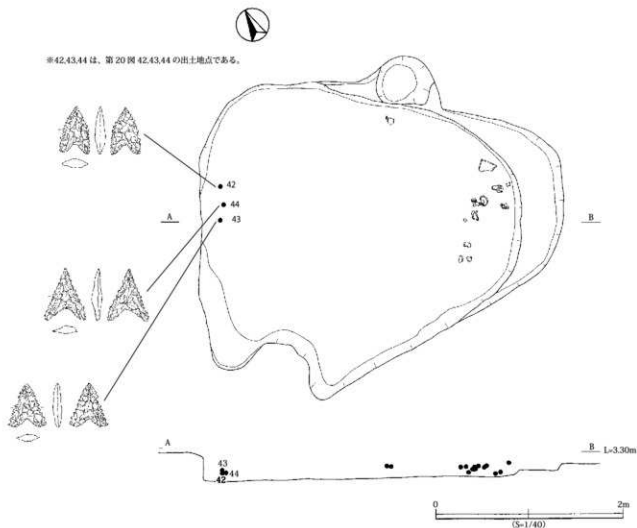
## (2) 竪穴状遺構 2号 (第16図～第20図)

竪穴住居状遺構 2号は、B-18区で検出された。プランは、3.8m×3.2mの不定形であり、南東側に幅0.4mのベット状となった高まりがある。

調査は、中央に埋土観察用のペルトを設定し、中央部分から床面を確認していった。床面は北西側が深くなっている。深さは、ベット状となった高まりの部分が検出面から6cmであり、北西側の深いところは検出面から26cmである。東側壁際に径50cmほどの凹みを検出したが、柱穴とは判断できなかった。床面積は、約7.47㎡である。埋土は、第18図に示したように2層確認された。埋土からは土器や石器が出土した。遺物は床面近くから出土するものもあったが、大部分は埋土上位より出土した。組合せ銛の先端部であると思われる鋸歯尖頭器42・43・44は、竪穴状遺構 2号西壁に近い埋土の中層ほどから出土した。竪穴状遺構 2号から出土した遺物は土器98点、石器13点であった。土器は接合作業を経てのうち17点、石器は9点を図化した。

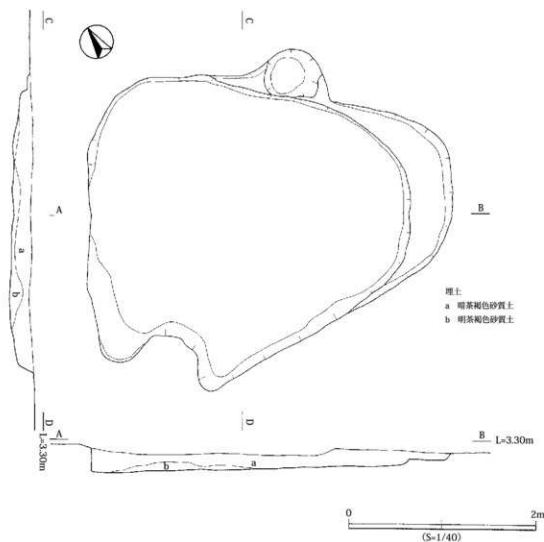
## ア 出土土器 (第19図)

23から28は、内湾する口縁部であり、口縁部に粘土紐が貼り付けられているものである。23から25は、その内側に縦位や横位の沈線文や刺突文が施されている。23は、口縁端部に粘土紐が貼り付けられ、その上部を棒状の工具による押圧により口縁部が波状を呈している。口縁端部に貼り付けられた粘土紐にはヘラ状の工具による刻み目が施されている。29は、口縁部が欠けているが、内湾する口縁部をもつものであると思われる。23から28と同じように、口縁部に粘土紐が貼り付けられている。30は、口縁部に棒状の工具による沈線が施され、この沈線上に細い棒状の工具による刺突文が連続して施されている。31は、口縁端部に貝殻腹縁による刺突文が連続して施されている。32から35は、胴部である。内外面ともに器面調整は貝殻条痕である。36から39は、底部である。すべて上げ底であり、接着面はほぼ平坦である。36は、37・38と比較すると接着面が広いつくりとなっている。23から39の器壁は薄いつくりであり、内外面の器面調整は貝



※42,43,44は、第20図42,43,44の出土地点である。

第17図 竪穴状遺構 2号内遺物出土状況



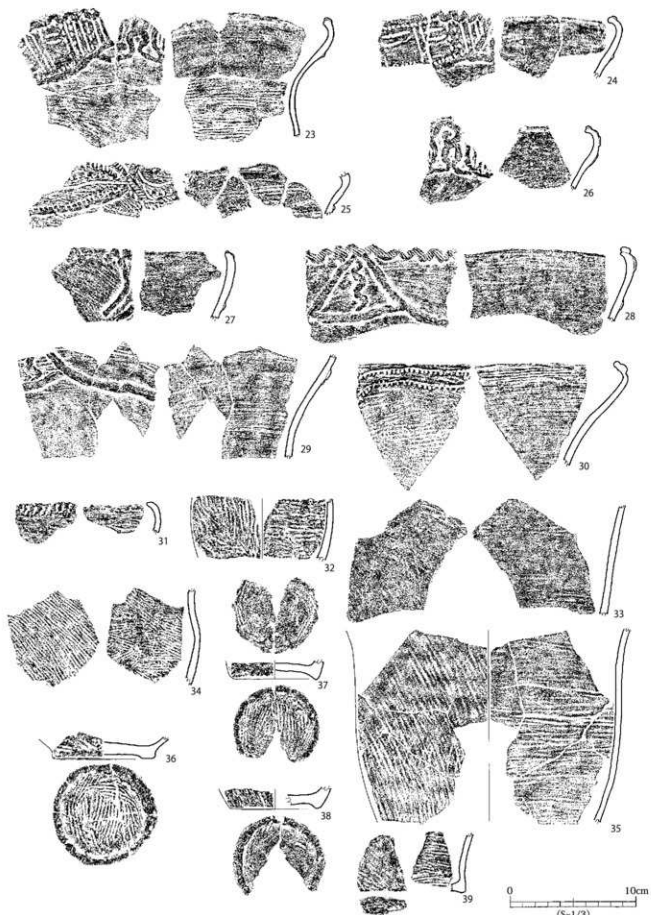
第18図 竪穴状遺構2号実測図

鼓条痕である。1群の土器であると思われる。

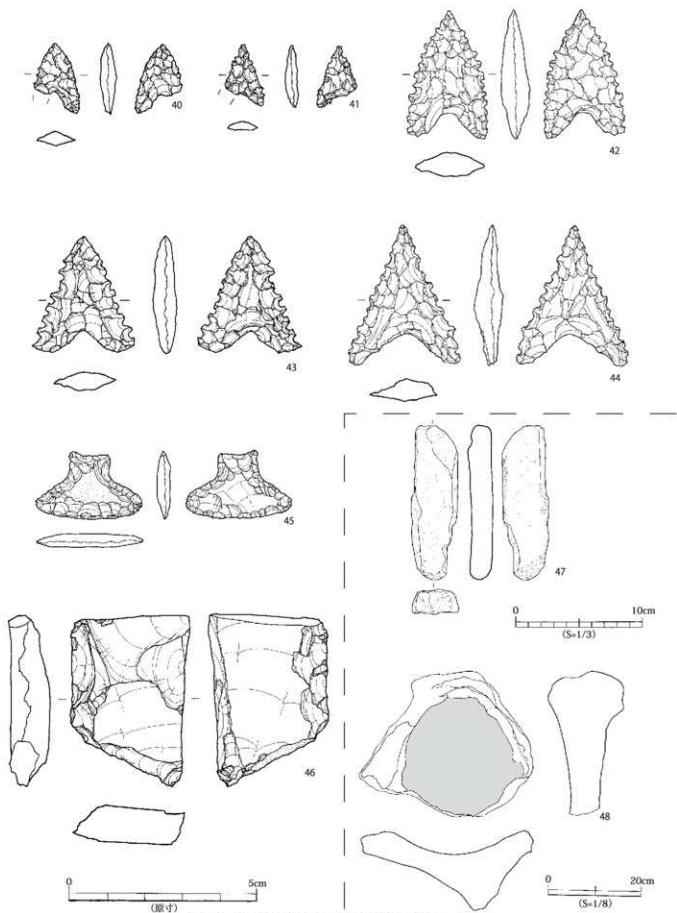
#### イ 出土石器 (第20図)

40・41は、石鎌である。ともに基部が欠けている。40は、側縁部が緩やかに曲線を描き、基部が逆U字状に挟られている。41は、平面形が二等辺三角形を呈し、基部が逆V字状に挟られている。42から44は、鋸歯縁をもつ大型の石鎌とも考えられるが、その大きさから組合せ銛の先端部として使用される鋸歯尖頭器であると思われる。42は、平面形が二等辺三角形を呈しているが側縁部がやや膨らむものである。両側縁部が表裏両面からの剥離により鋸歯状に丁寧に作り出されている。基部は、逆V字状に挟られている。43は、平面形が二等辺三角形を呈し、両側縁部が表裏両面からの剥離により鋸歯状に作り出されている。基部は、逆V字状に挟られている。44は、平面形が二等辺三角形を呈し、両側縁部が表裏両面か

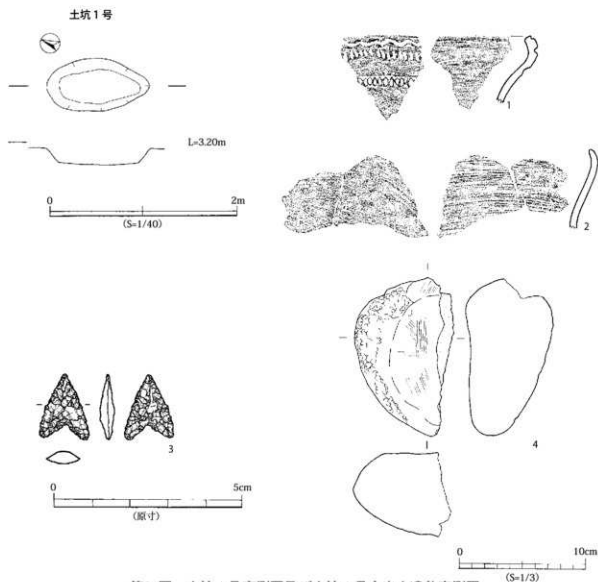
らの剥離により鋸歯状に丁寧に作り出されている。基部は、逆V字状に挟られている。42から44は側縁部の鋸歯状の作り出しが単式である。基部については、すべて挟られている。45は、石匙である。表裏両面に調整が施された横型のものである。刃部とつまみ部がほぼ左右対称である。46は、二次加工剥片である。左側縁部及び表面右側縁部に調整が施されている。47は、磨敲石である。下面に敲打痕が明瞭に観察できる。また、表裏面に擦痕が残る。48は、石皿である。作業面は磨面を有し大きく凹んでいる。



第19图 豎穴状遺構2号内出土遺物実測图(1)



第20图 竖穴状遺構2号内出土遺物実測図(2)



第21図 土坑1号実測図及び土坑1号内出土遺物実測図

(3) 土坑1号 (第15図, 第21図)

土坑1号は、B-19区で検出された。プランは、1.1m×0.6mの楕円形である。深さは、検出面から20cmである。埋土や出土遺物の状況が堅穴状遺構4号・5号と同じであり、同時期のものであると判断した。埋土からは、土器2点、石器2点が出土した。

ア 出土土器 (第21図)

1・2は、口縁部が内湾するもので、内外面ともに器面調整は貝殻条痕である。1は、口縁端部に波状の沈線が施され、その下位に刻み・刺突が施されている。2は、無文である。ともに器壁が薄いつくりであり、1群の土器であると思われる。

イ 出土石器 (第21図)

3は、石鏃である。平面形が二等辺三角形を呈し、基部が逆V字状に抉られている。4は、石皿片である。表面に凹んだ作業面を有している。



写真4 土坑1号内出土土器

## 第2節 縄文時代中期後葉から後期の遺構

縄文時代中期後葉から後期の調査は、第3図のVI a層・VI b層・VII層・X層が該当する。該当する層ごとに遺物を取り上げ及び遺構検出を行った。基本的には人力で掘り下げていった。

遺構は、堅穴状遺構3基、集石57基、土坑292基、ピット383基、埴土5基、埋設土器5基、石皿集積1基、落ち込み状遺構16か所が検出された。その配置は、第22図から第48図に示したとおりである。C-23区～C-31区、D-21区～D-26区では土坑・ピットなどの遺構がほとんど検出されていないが、これはそれらの区ほとんどが攪乱によるものであったためである。

堅穴状遺構は、D-34区、C-33区、D・E-29・30区でそれぞれ1基ずつ検出された。これら3基は平面の形状がこれまで報告されている該期の堅穴住居跡とは異なっている。該期の堅穴住居跡が5軒検出された日置市伊集院町の上ノ平遺跡では、平面形が略円形と隅丸方形である。また、17軒の堅穴住居跡が検出された鹿兒島市の山ノ中遺跡では、平面形が円形である。当遺跡の堅穴状遺構3号・4号・5号の平面形とはその形状が異なることなどから、ここでは堅穴状遺構として報告することとした。

集石は、57基が確認された。集石を構成する石の数は10数個のものから500個を超えるもの、それぞれの集石の総重量は、3kg台から87kg台のものが確認されている。また、掘り込みのあるものや掘り込みのないものが確認されている。

土坑は、292基が確認された。平面の形状が円形・楕円形・不定形とある。大きさ・深さも様々なものが確認されている。

埋設土器は、5基確認された。土器を埋設するものとして、堅穴住居内に埋設する埋壺や深鉢形土器が逆さまの状態出土する倒置深鉢などがあるが、ここでは埋設土器として報告することとした。

これらの遺構からは、土器、石器、土製品、石製品が出土している。土器は、器形・文様などの属性が判明するものを抽出し、実測・掲載した。石器は、剥片石器と礫石器とに分け、各器種ごとに実測・掲載した。

### 1 堅穴状遺構

#### (1) 堅穴状遺構3号(第26図、第49図・第50図)

堅穴状遺構3号は、D-34区で検出された。プランは1.9m×1.9mの不定形であり、床面の東西方向はフラットであるが、南北方向は中央部が凹んでいる。また、西側の壁面はすぐに立ち上がるが、東側の壁面は緩やかに立ち上がる。

調査は、中央に埋土観察用のベルトを設定し、中央部から床面を確認していった。検出面から床面までの深

さは、5cmから22cm程である。柱穴は確認できなかった。床面積は、1.57㎡である。埋土から土器が出土した。土器は床面近くから出土するものもあったが、大部分は埋土上位より出土した。堅穴状遺構3号から出土した土器は87点で、接合作業を経てこのうち9点を図化した。

#### A 出土土器(第50図)

1は、半裁竹管状の道具による沈線が施されている。2は、口縁部に斜線の沈線が施されている。3は、口縁部の断面が三角形を呈しており、口唇部に貝殻刺突文が施されている。4は、無文の土器である。5から8は、胴部片である。9は、底部である。底部から胴部へくびれがなくややひらきながら立ち上がるタイプのものである。1・2は2群、3は5群であると思われる。

#### (2) 堅穴状遺構4号(第25図、第51図)

堅穴状遺構4号は、C-33区で検出された。プランは3.5m×3mの不定形であり、床面はフラットである。壁面の立ち上がり方は緩やかであるが、東側の壁面の立ち上がり方は特に緩やかである。

調査は、中央に埋土観察用のベルトを設定し、中央部から床面を確認していった。検出面から床面までの深さは、50cm程である。柱穴は確認できなかった。床面積は、2.6㎡である。埋土からは土器等の遺物は出土しなかった。

#### (3) 堅穴状遺構5号(第32図、第52図～第55図)

堅穴状遺構5号は、D・E-29・30区で検出された。プランは3.1m×2.8mの隅丸方形であり、床面は中央部が掘り込まれ深くなっている。

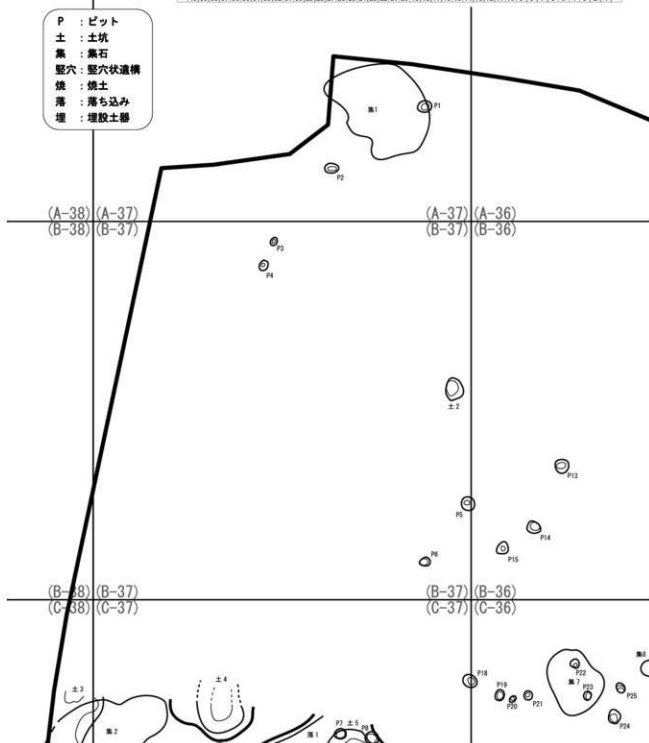
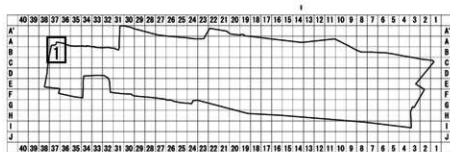
調査は、中央に埋土観察用のベルトを設定し、中央部から床面を確認していった。検出面から床面までの深さは、40cm程である。柱穴は中央掘り込み部の東西側に1基ずつ検出した。床面積は、5.73㎡である。堅穴状遺構5号は平面形が隅丸方形を呈し柱穴も検出されているが、調査時に水没するなどしたため、掘り込みや埋土をはっきり確認することができなかったため、堅穴状遺構1号・2号と同じように、堅穴状遺構として報告した。堅穴状遺構5号から出土した土器は157点で、接合作業を経てこのうち35点を図化した。また、軽石製品が1点出土している。

#### A 出土土器(第53図～第55図)

10から22は、口縁部に文様が集中したり口縁部下位を削ったりするものである。10は、口縁部に縦位や横位の凹線が施されている。口唇部は指頭による凹点が施され、この凹点には爪痕が観察できる。11は、口縁部下位を削ることにより口縁部を肥厚させている。口縁部に指頭による凹点や指頭による凹線が施されている。口唇部には、凹点が施され、ねじり紐状の突起が付く。12は、口縁部に指頭による凹点や指頭による横位の凹線による文様が施されている。口縁部は、棒状の工具による刺突

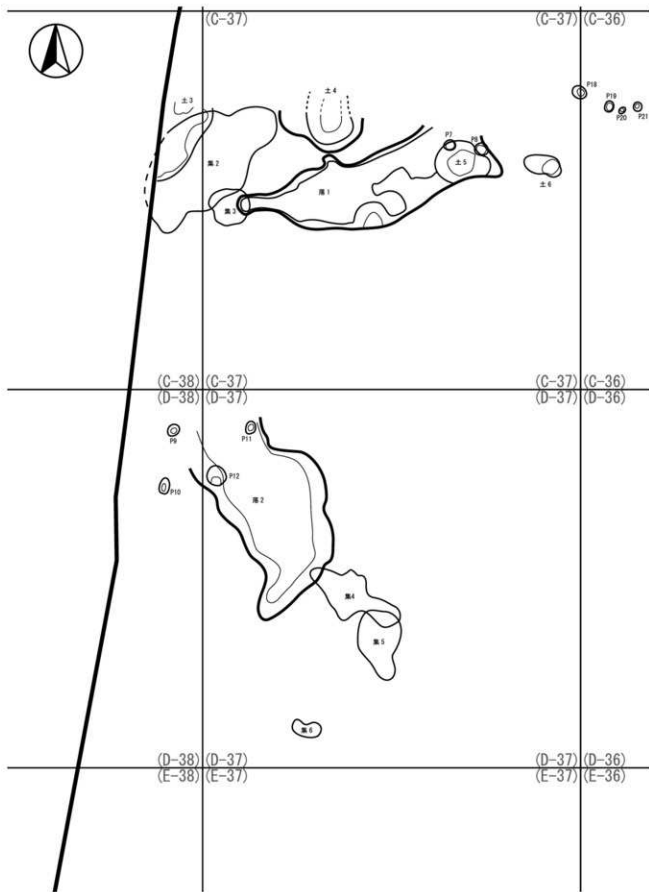


- P : ビット  
 土 : 土坑  
 集 : 集石  
 竪穴 : 竪穴状遺構  
 焼 : 焼土  
 落 : 落ち込み  
 埋 : 埋設土器

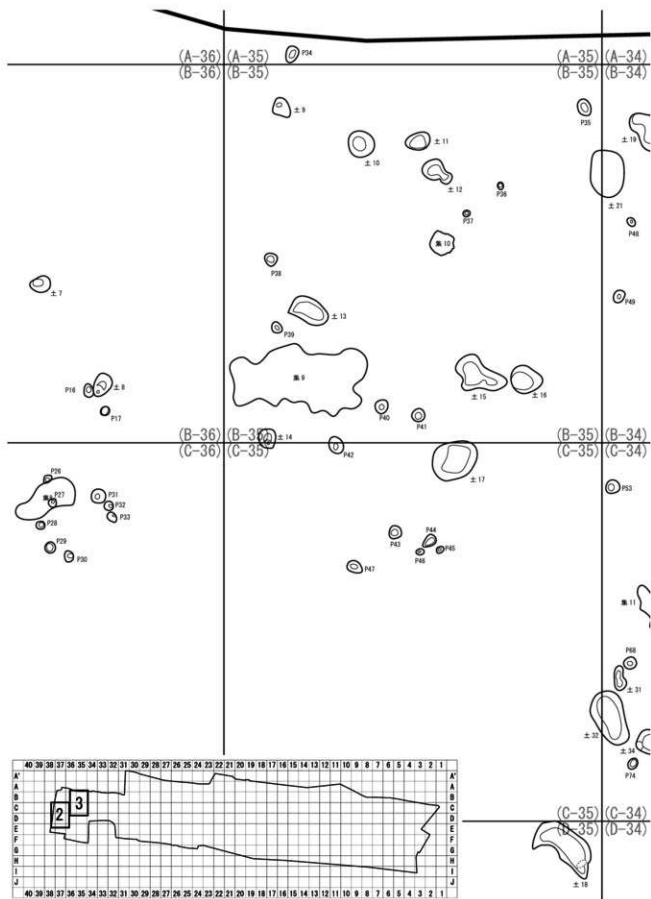


第22図 縄文時代中期～後期遺構配置図 (1)

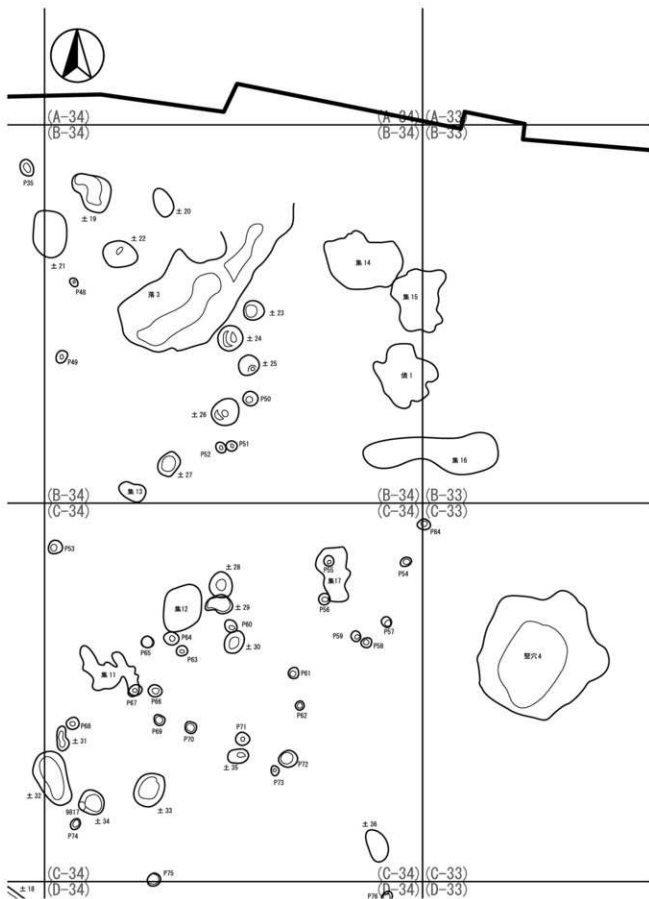




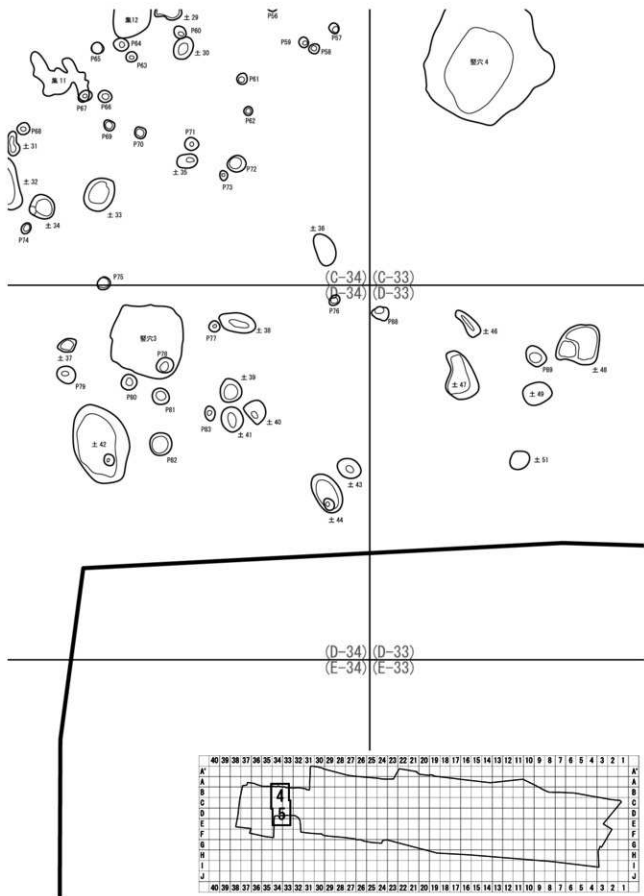
第23図 縄文時代中期～後期遺構配置図(2)



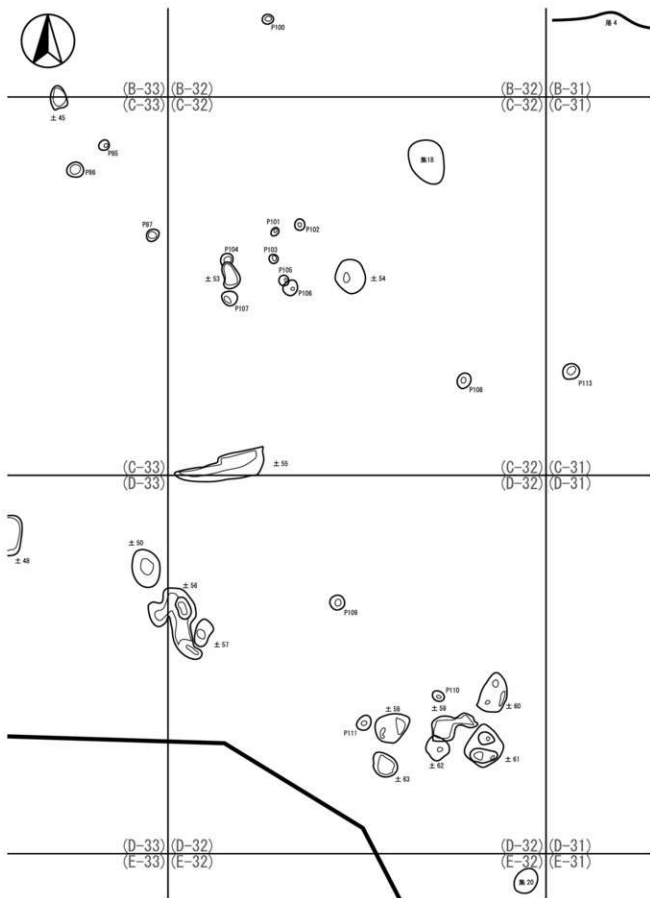
第24図 縄文時代中期～後期遺構配置図 (3)



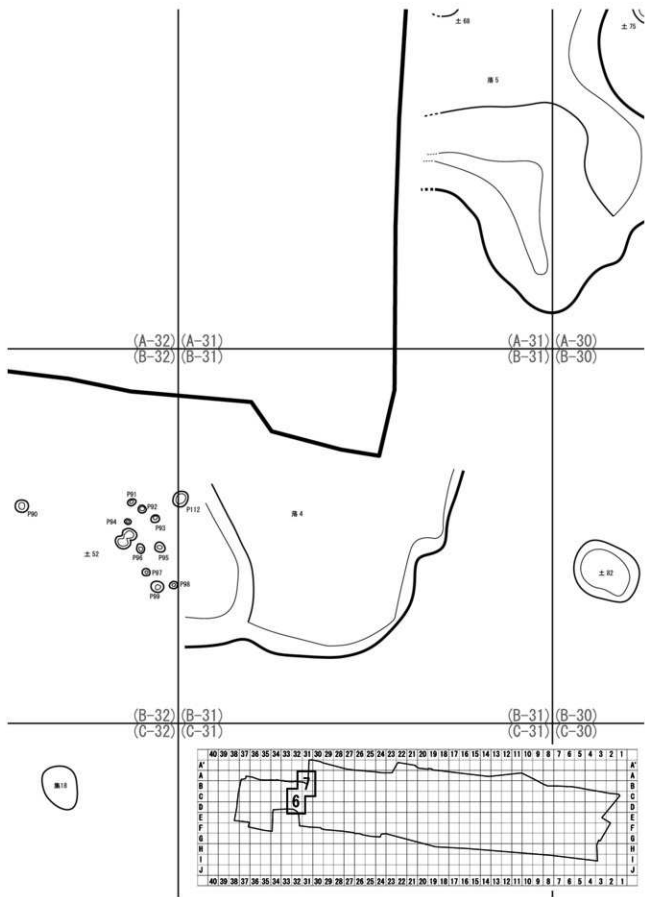
第25図 縄文時代中期～後期遺構配置図 (4)



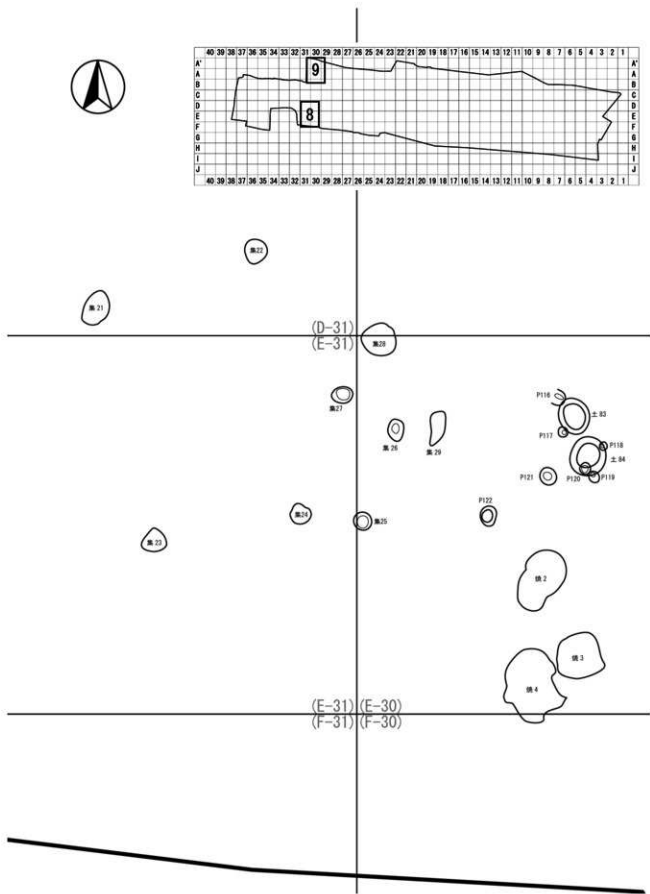
第26図 縄文時代中期～後期遺構配置図 (5)



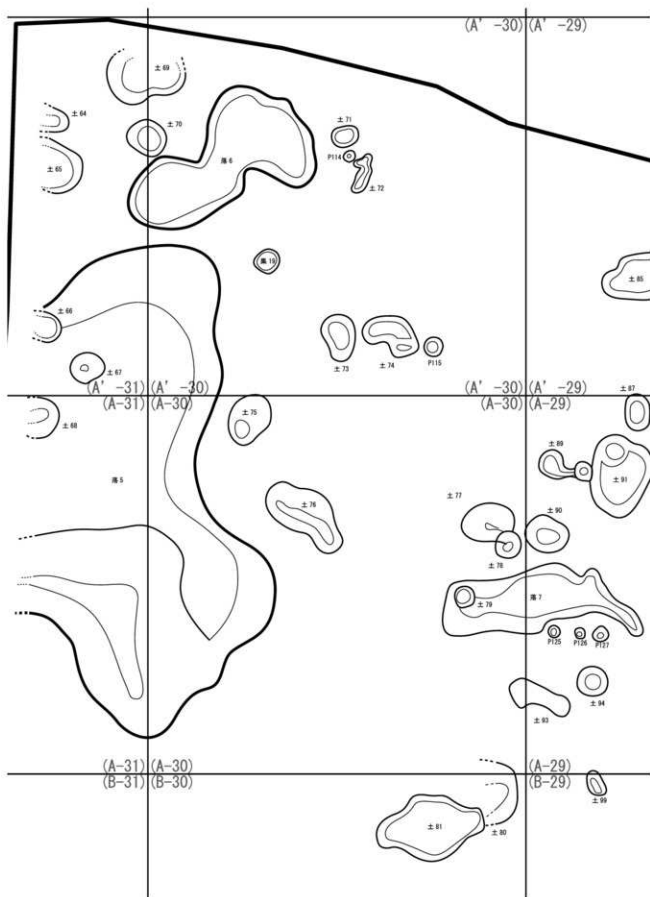
第27図 縄文時代中期～後期遺構配置図(6)



第28図 縄文時代中期～後期遺構配置図(7)

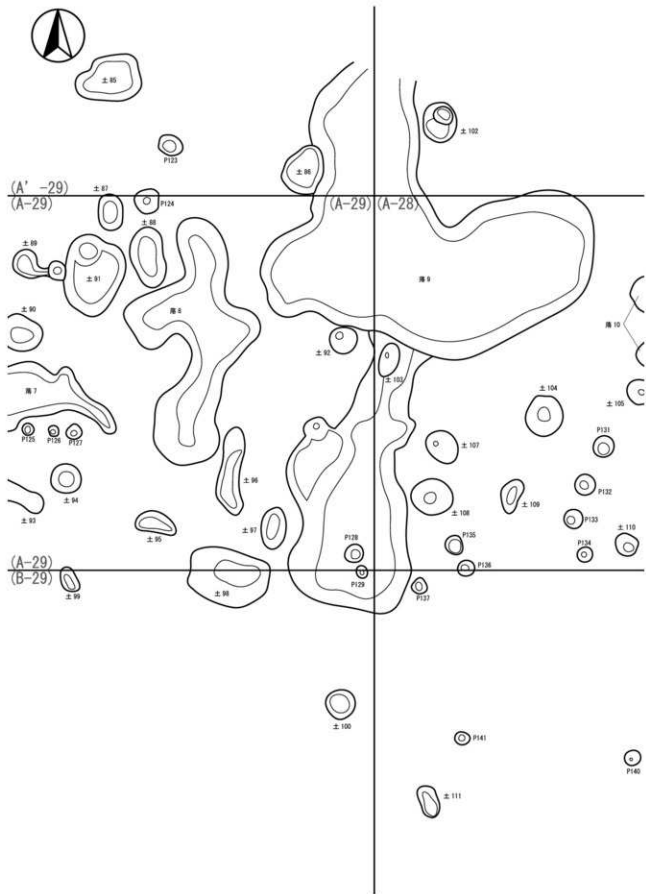


第29図 縄文時代中期～後期遺構配置図(8)

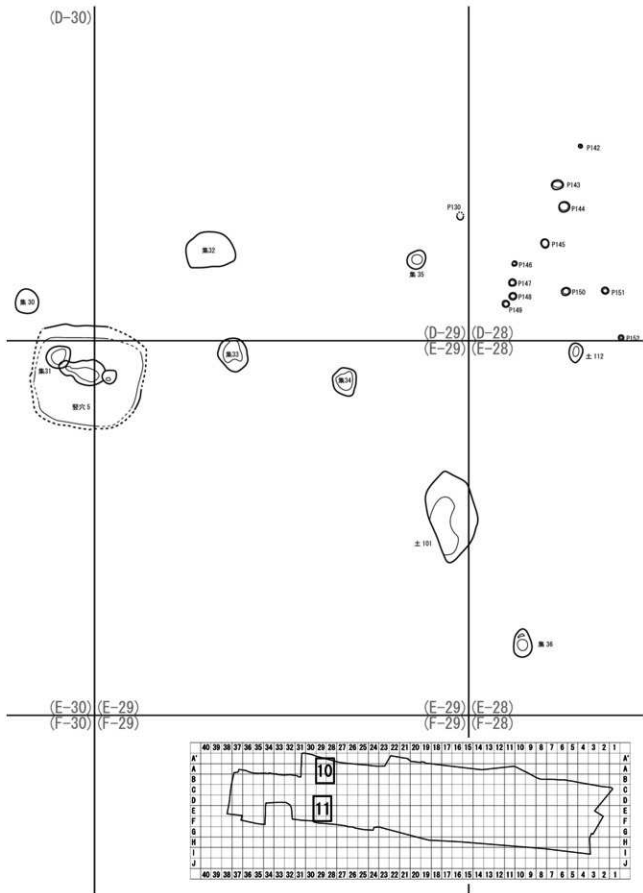


第30図 縄文時代中期～後期遺構配置図 (9)

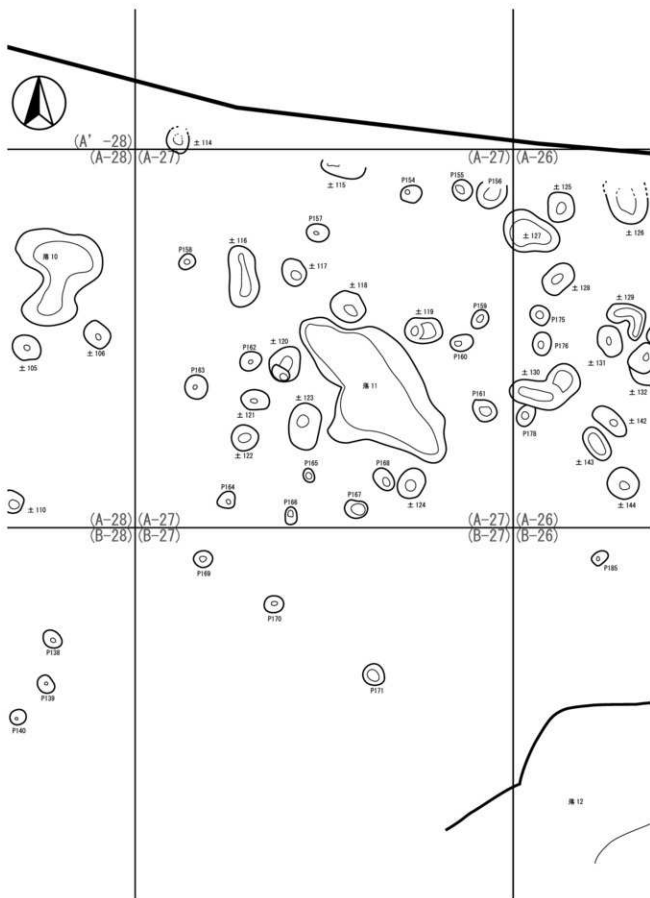




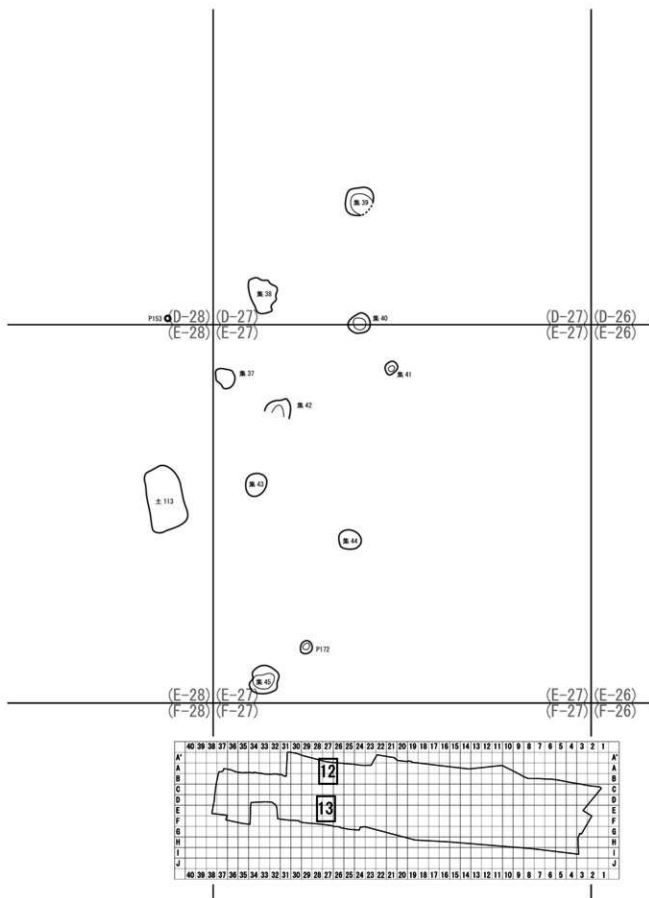
第31図 縄文時代中期～後期遺構配置図 (10)



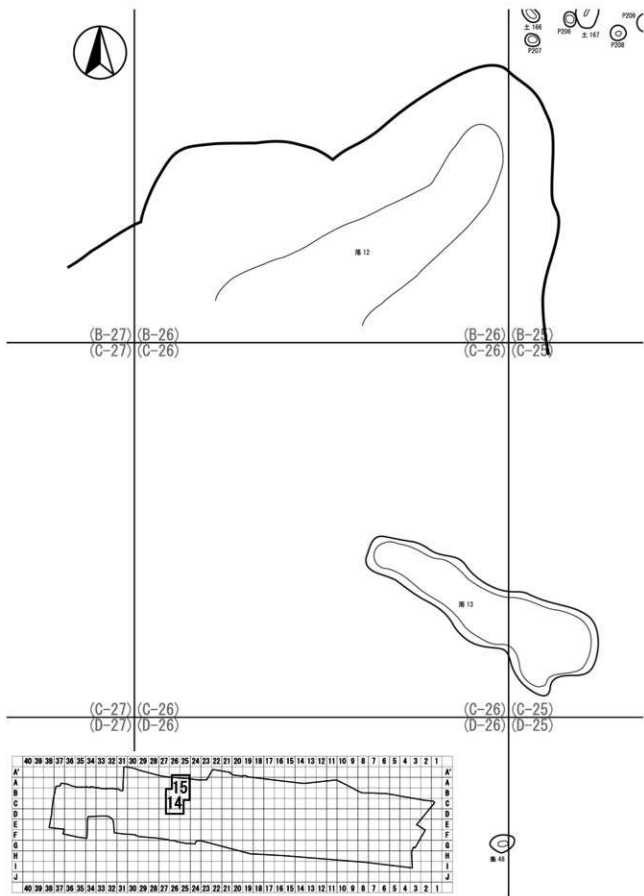
第32図 縄文時代中期～後期遺構配置図 (11)



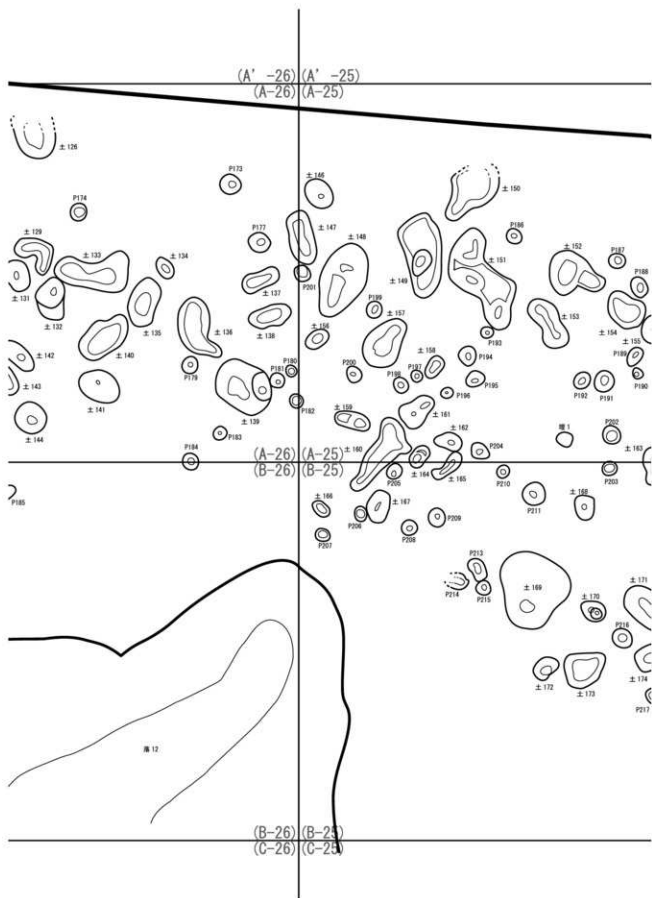
第33図 縄文時代中期～後期遺構配置図 (12)



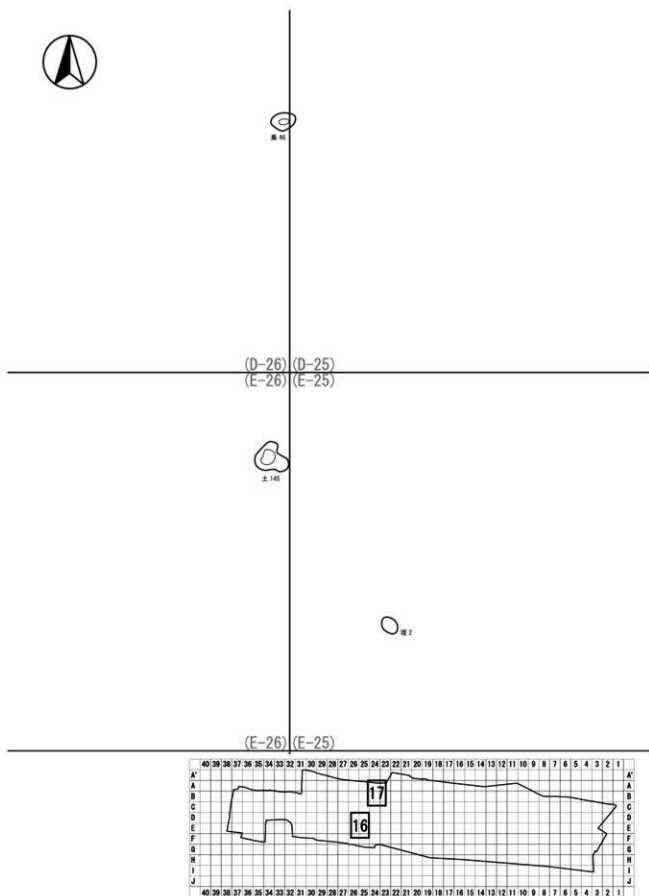
第34図 縄文時代中期～後期遺構配置図 (13)



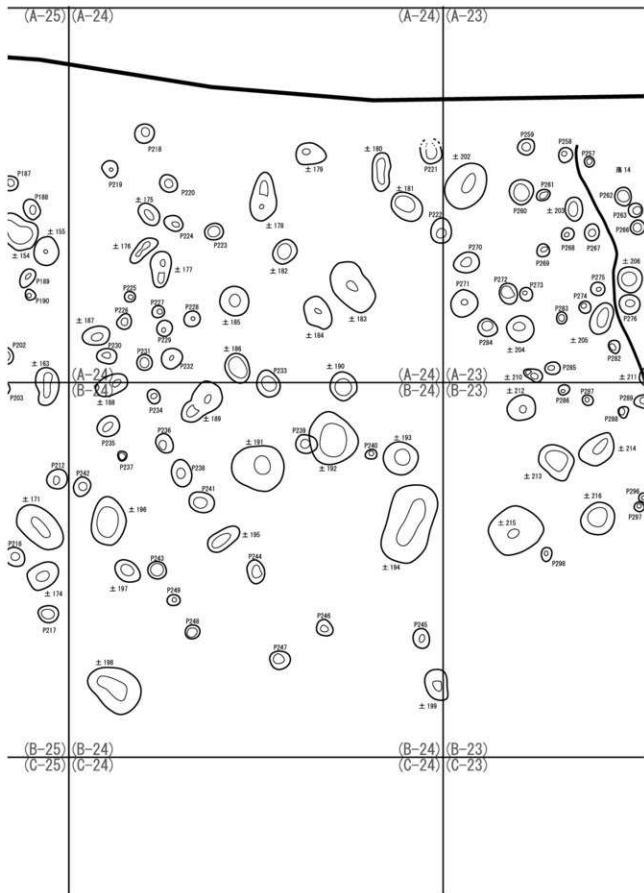
第35図 縄文時代中期～後期遺構配置図 (14)



第36図 縄文時代中期～後期遺構配置図 (15)

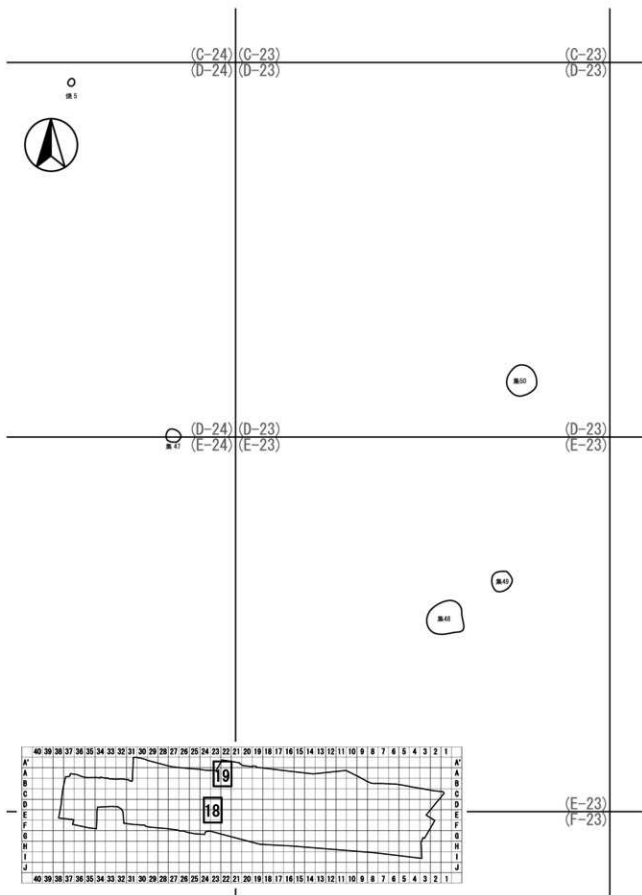


第37図 縄文時代中期～後期遺構配置図 (16)

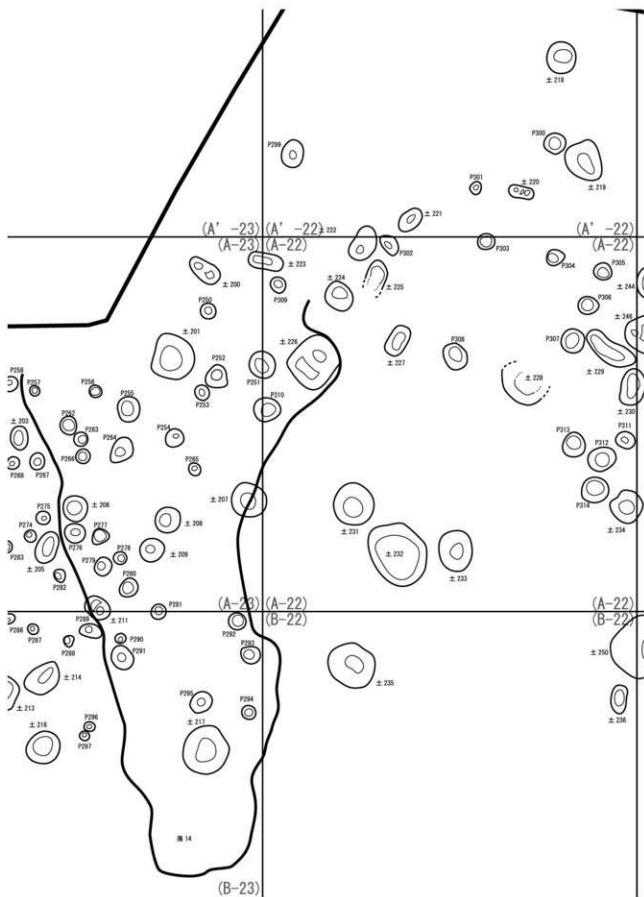


第38図 縄文時代中期～後期遺構配置図 (17)

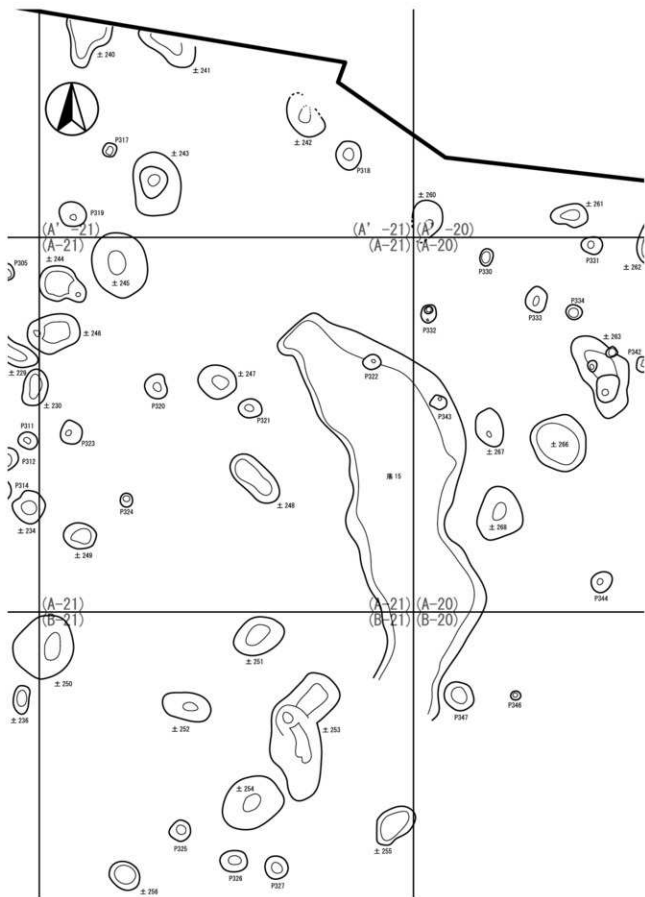




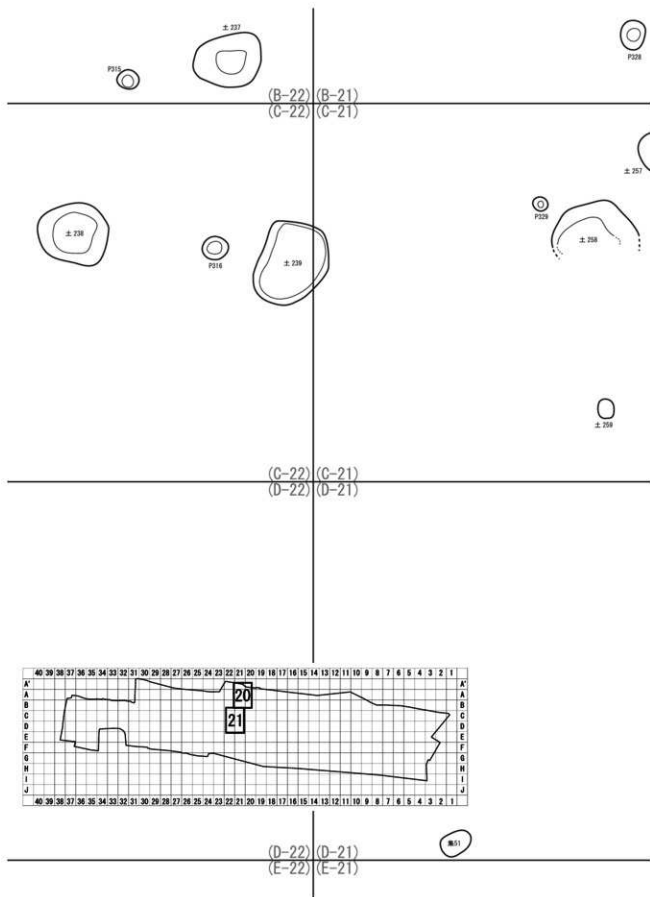
第39図 縄文時代中期～後期遺構配置図 (18)



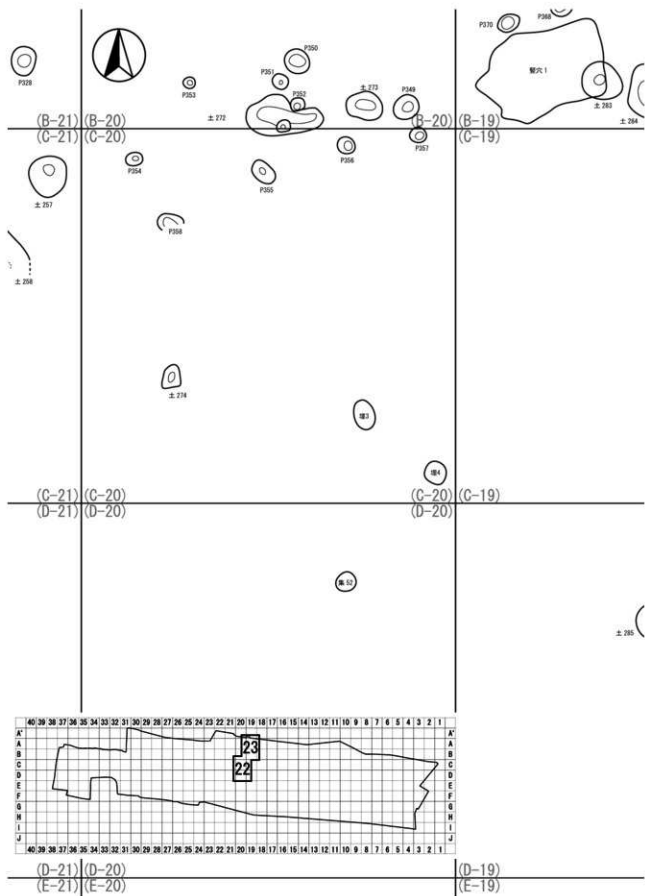
第40図 縄文時代中期～後期遺構配置図 (19)



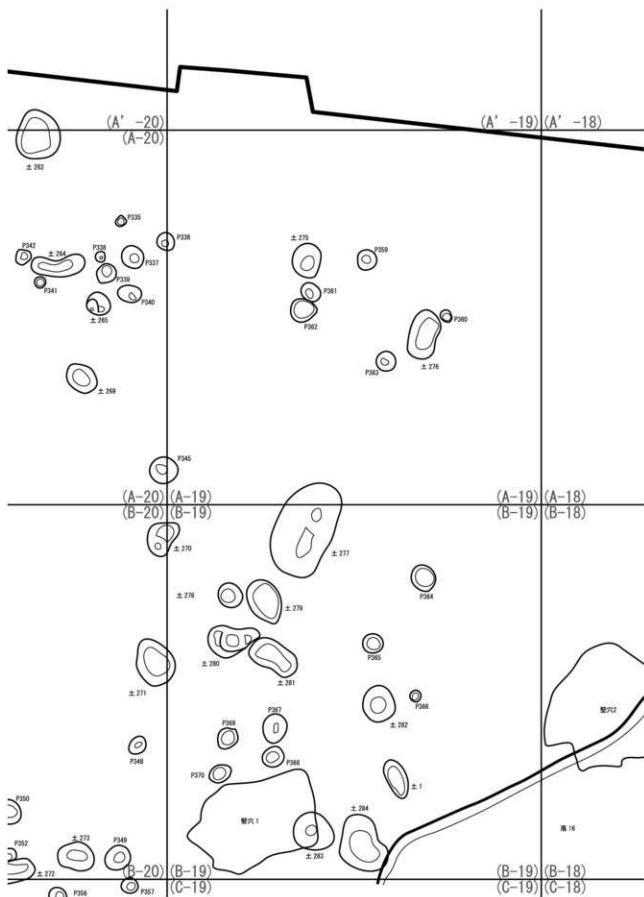
第41図 縄文時代中期～後期遺構配置図 (20)



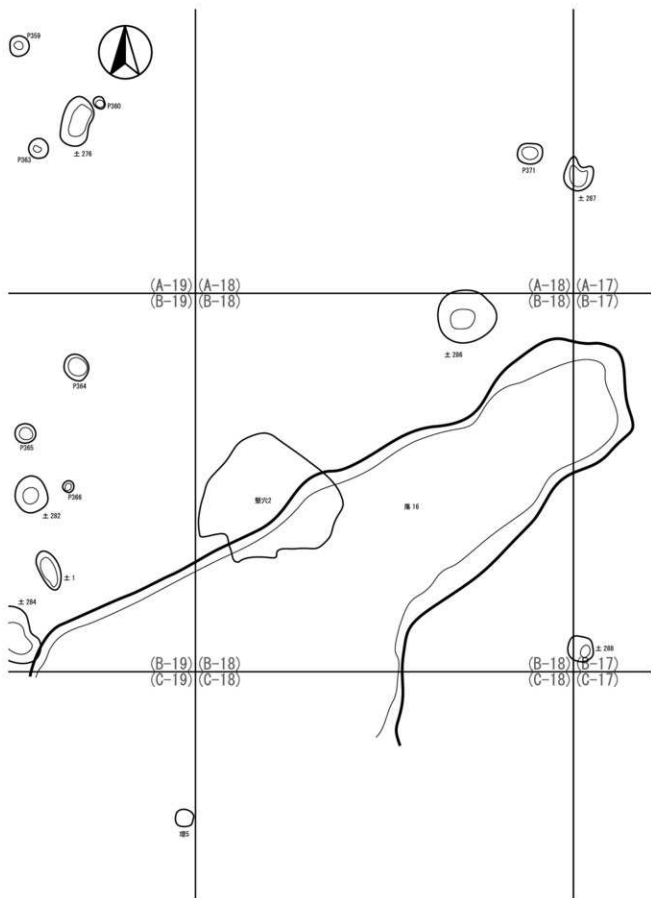
第42図 縄文時代中期～後期遺構配置図 (21)



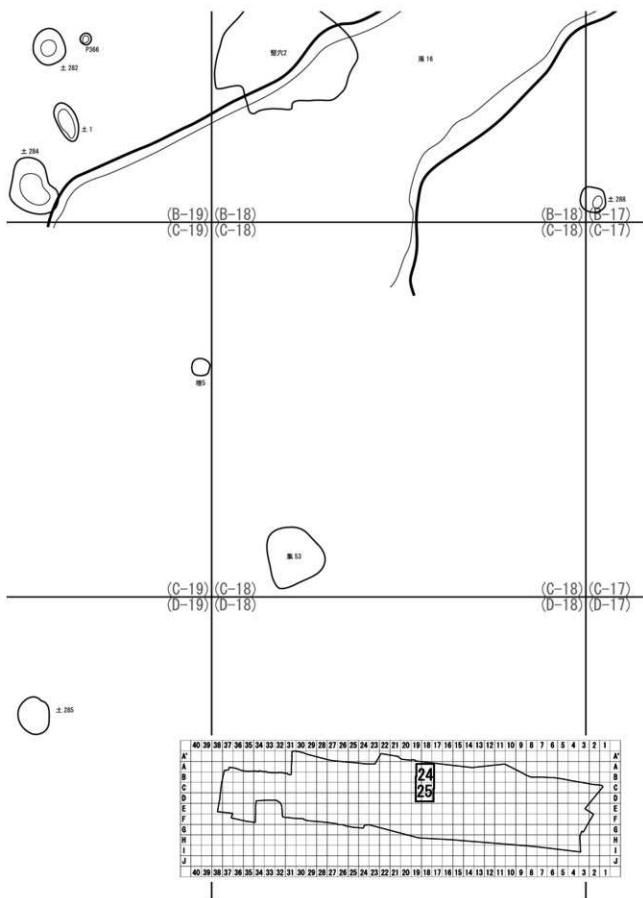
第43図 縄文時代中期～後期遺構配置図 (22)



第44図 縄文時代中期～後期遺構配置図 (23)

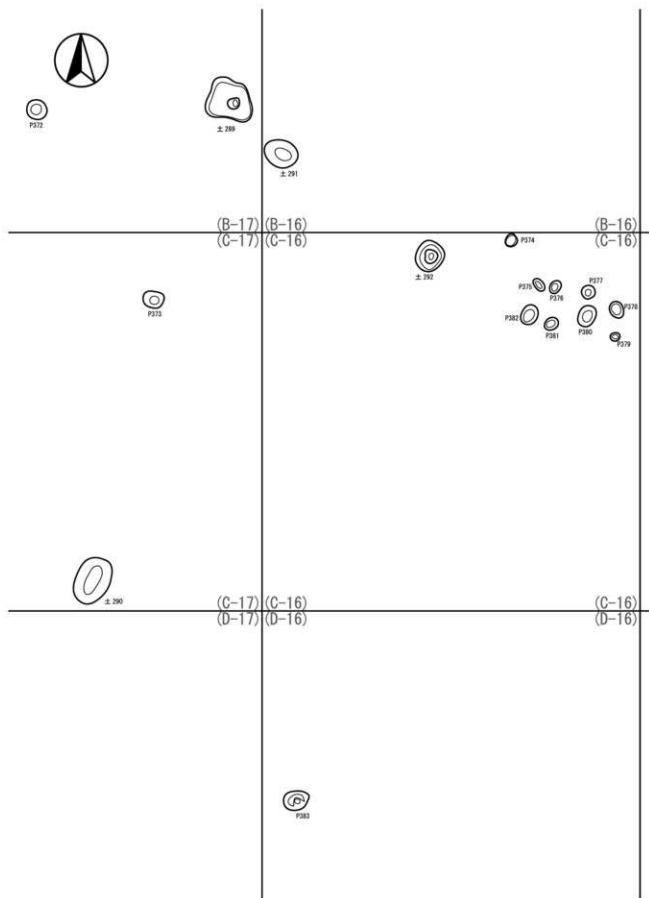


第45図 縄文時代中期～後期遺構配置図 (24)

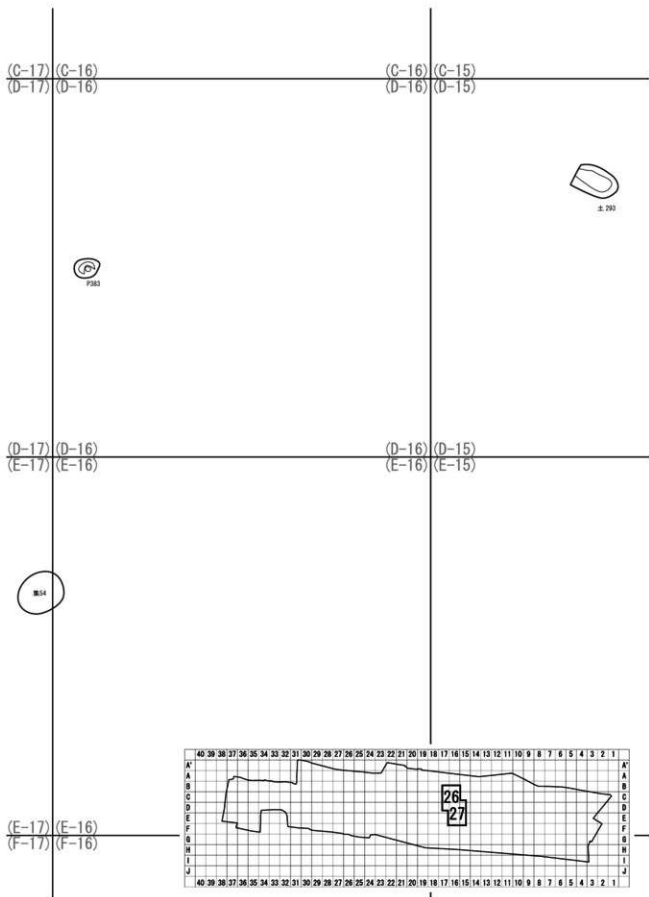


第46図 縄文時代中期～後期遺構配置図 (25)

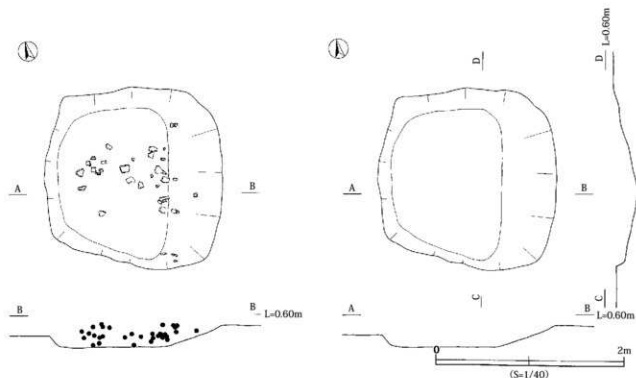




第47図 縄文時代中期～後期遺構配置図 (26)

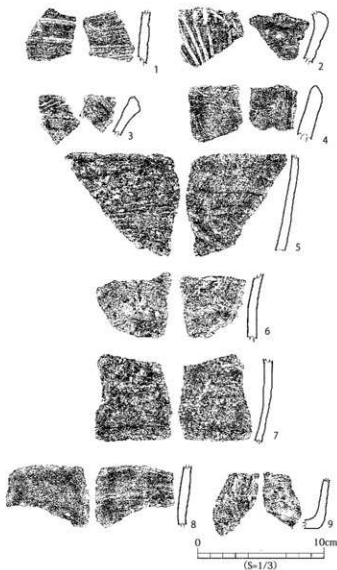


第48図 縄文時代中期～後期遺構配置図 (27)

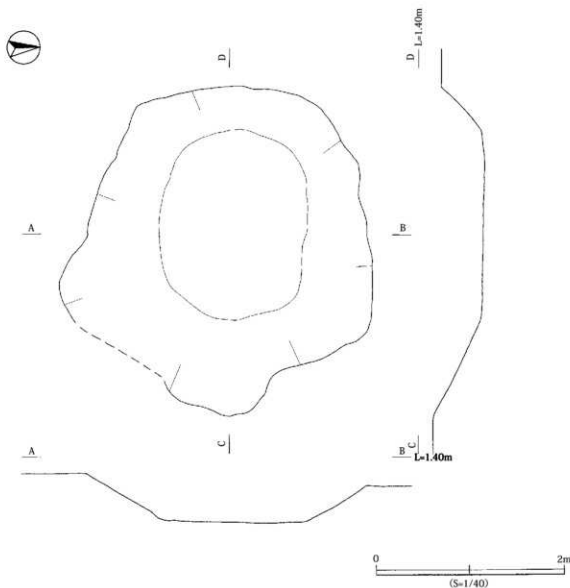


第49図 竪穴状遺構3号内遺物出土状況図及び竪穴状遺構3号実測図

により波状を呈している。13は、口縁端部を肥厚させるとともに、口縁部下位を削ることにより口縁部を強調している。口縁部には、ヘラ状の工具による沈線により文様が施されている。14は、口縁部にヘラ状の工具による沈線が斜位に施されている。口縁部は、指頭による押圧により波状を呈している。15は、ヘラ状の工具による沈線により逆く字状の文様が施されている。口唇部は、指頭による押圧により波状を呈している。16は、口縁部下位を横方向に削ることにより、口縁部を肥厚させている。口縁部には、斜位の沈線文が施されている。口縁部は指頭による押圧により波状を呈している。17は、口縁部下位を横方向に削ることにより、口縁部を肥厚させている。口縁部には、ヘラ状の工具による縦位の沈線文が施されている。口唇部には、細い竹管状の工具による斜位の刺突文が2条施されている。18は、口縁部にヘラ状の工具による沈線文が斜位に施されている。口唇部は平らに仕上げられている。19は、口縁部を肥厚させている。口唇部は、幅広く平らに仕上げられている。20は、口縁部に半裁竹管状の工具による縦位の短沈線文が施されている。口唇部には、刺突による凹点が施されている。21は、口縁部に指などで作る幅の広い凹線文と幅の狭い凹線文により低い突帯を作出することにより口縁部を強調している。口縁部には左右に窓をもつ高い突起が付く。突起の左右の窓は、突起の中央部分を穿孔することによりつながっている。突起の頂部には、棒状の工具による刺突文が施されている。22は、渦巻き状に粘土を貼り付け、そこに指による凹線文を施した飾りにより口縁部を



第50図 竪穴状遺構3号内出土遺物実測図

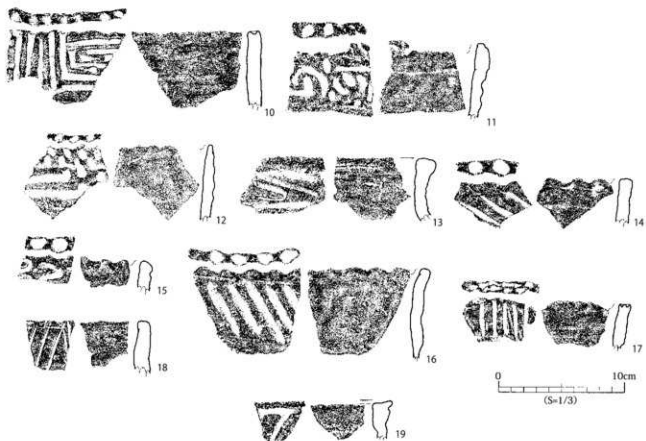
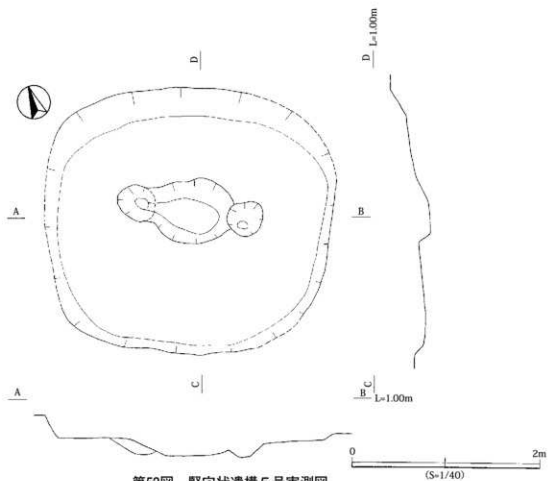


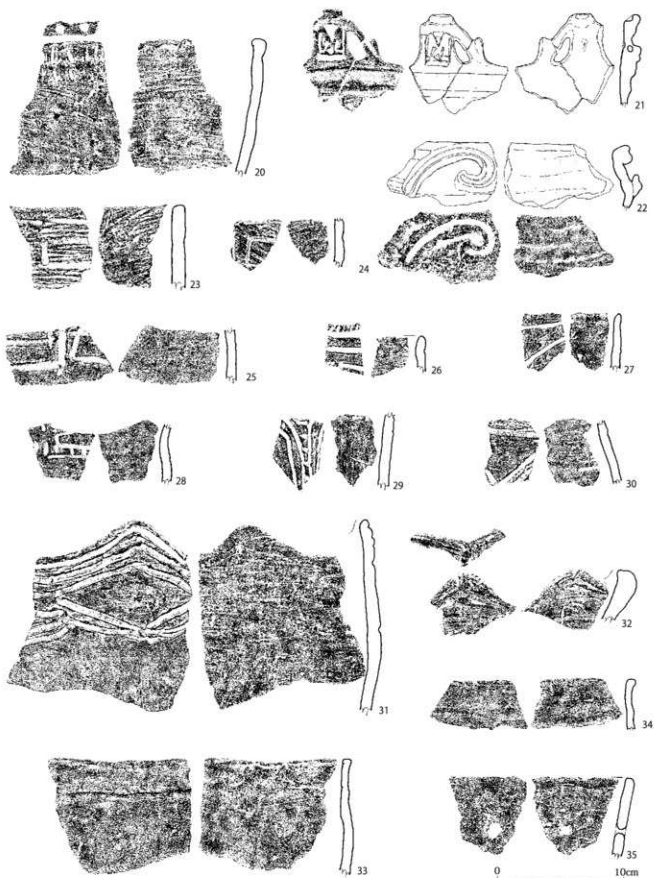
第51図 竪穴状遺構4号実測図

強調している。23から26は、口縁部に横位の沈線文が施され、靴形状の文様が施されている。27は、口縁部に横位や斜位の沈線文が施されている。28から30は、沈線間に刺突文や刻み目が施されている。31は、口縁部上位に3条の凹線文を横位に施し、その下位に横位の凹線文が施されている。大きな波頂部をもつ。32から35は、無文の土器である。33・34は口縁部下位が削られている。35は、補修孔が穿たれている。36から44は、胴部や底部である。底部には、木の葉の葉脈や網代編みなど土器製作時の敷物の痕が残っている。38から40は、底部から胴部へひらきながら立ち上がるタイプの底部である。41から43は、底部端部がやや膨らむタイプの底部である。43は、底部から胴部にかけて大きくくびれるタイプの底部である。44は、底部内面に指痕が観察できる。10から22は2群、23から31は3群であると思われる。

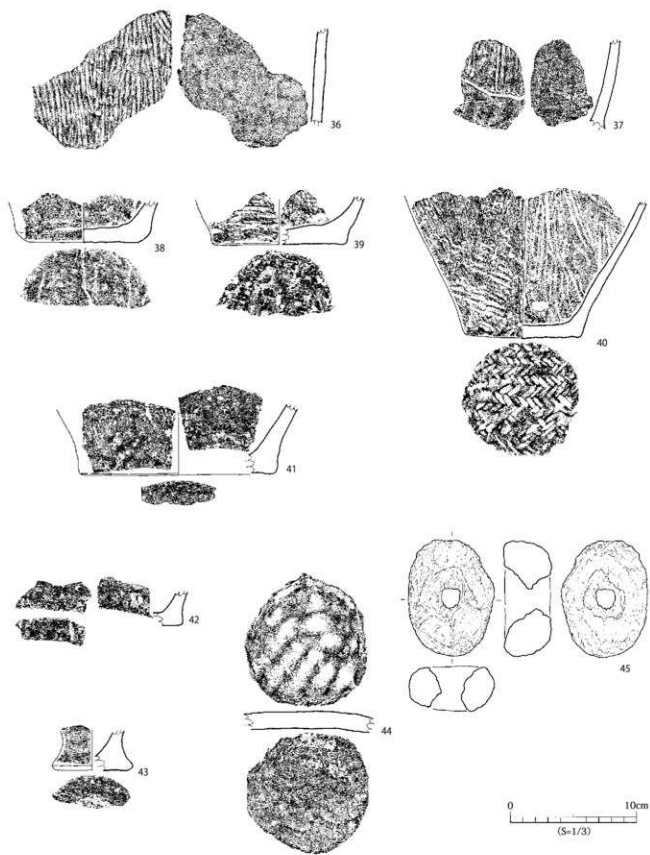
#### イ 出土石器 (第55図)

45は、軽石製品である。大きさは、長さ約5cm・幅約3cm・厚さ約2cmである。表裏両面から穿孔が施されたリング状のものである。穿孔部分の直径は12mm程である。





第54图 竖穴状遗構5号内出土遺物実測図(2)

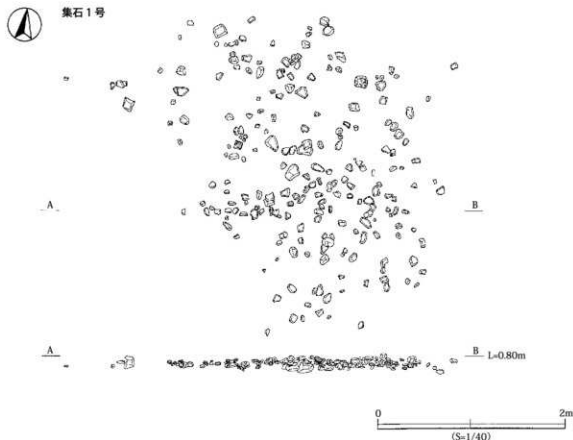


第55图 竖穴状遺構5号内出土遺物実測図(3)

## 2 集石 (第56図～第77図)

縄文時代中期後葉から後期該当の集石は、57基が確認され、調査区北側から番号を付けていった。礫の集まり具合と掘り込みの有無で3つのタイプがある。集石1号は、A-37区で検出された。総数87個の礫で構成されており、掘り込みは確認されなかった。集石2号は、C-38区で検出された。総数555個の礫で構成され、総重量は63.38kgであった。明確な掘り込みは確認されなかった。集石3号は、C-37区で検出された。総数135個の礫で構成され、総重量は15.43kgであった。明確な掘り込みは確認されなかった。集石4号は、D-37区で検出された。総数14個の礫で構成され、総重量は3.31kgであった。明確な掘り込みは確認されなかった。集石5号は、D-37区で検出された。総数121個の礫で構成され、総重量は46.52kgであった。明確な掘り込みは確認されなかった。集石7号は、C-36区で検出された。総数360個の礫で構成され、総重量は87.35kgであった。明確な掘り込みは確認されなかった。集石8号は、C-36区で検出された。総数48個の礫で構成され、総重量は14.53kgであった。明確な掘り込みは確認されなかった。集石9号は、B-35区で検出された。総数222個の礫で構成されており、明確な掘り込みは確認されなかった。集石11号は、C-34区で検出された。総数85個の礫で構成さ

れ、総重量は18.59kgであった。明確な掘り込みは確認されなかった。集石12号は、C-34区で検出された。総数46個の礫で構成され、総重量は6.71kgであった。明確な掘り込みは確認されなかった。集石13号は、B-34区で検出された。総数17個の礫で構成され、総重量は7.12kgであった。明確な掘り込みは確認されなかった。集石14号は、B-34区で検出された。総数322個の礫で構成され、総重量は33.10kgであった。明確な掘り込みは確認されなかった。集石15号は、B-33区で検出された。総数171個の礫で構成され、総重量は17.16kgであった。明確な掘り込みは確認されなかった。集石16号は、B-33区で検出された。総数84個の礫で構成され、総重量は10.52kgであった。明確な掘り込みは確認されなかった。集石17号は、C-34区で検出された。総数50個の礫で構成され、総重量は34.24kgであった。集石18号は、C-32区で検出された。総数85個の礫で構成され、総重量は34.90kgであった。0.8m×0.7mの土坑が伴う。集石19号は、A'-30区で検出された。総数53個の礫で構成される。0.8m×0.75mの土坑が伴う。集石20号は、E-32区で検出された。総数70個の礫で構成され、総重量は52.37kgであった。0.8m×0.8mの土坑が伴う。集石21号は、D-31区で検出された。総数69個の礫で構成され、総重量は68.75kgであった。1.3m×0.9mの土坑が伴う。

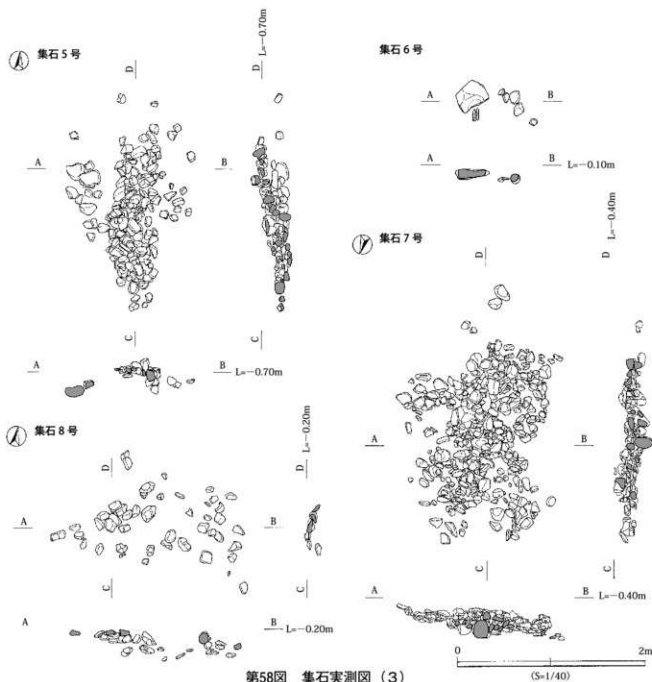


第56図 集石実測図 (1)





第57图 集石実測図(2)

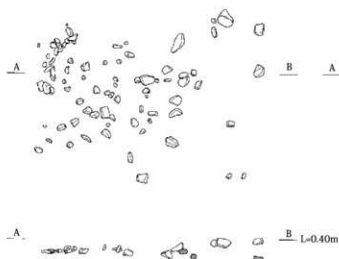


第58図 集石実測図 (3)

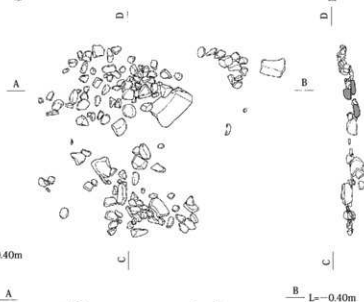
集石22号は、D-31区で検出された。総数54個の礫で構成され、総重量は24.29kgであった。0.8m×0.7mの土坑が伴う。集石23号は、E-31区で検出された。総数29個の礫で構成され、総重量は23.75kgであった。明確な掘り込みは確認されなかった。集石24号は、E-31区で検出された。総数21個の礫で構成され、総重量は12.53kgであった。0.6m×0.6mの土坑が伴う。集石25号は、E-30区で検出された。総数58個の礫で構成され、総重量は10.86kgであった。0.7m×0.6mの土坑が伴う。集石26号は、E-30区で検出された。総数65個の礫で構成され、総重量は7.16kgであった。0.8m×0.6mの土坑

が伴う。集石27号は、E-31区で検出された。総数21個の礫で構成され、総重量は5.78kgであった。明確な掘り込みは確認されなかった。集石28号は、E-30区で検出された。総数42個の礫で構成され、総重量は33.91kgであった。1.2m×1.1mの土坑が伴う。集石29号は、E-30区で検出された。総数32個の礫で構成され、総重量は7.44kgであった。明確な掘り込みは確認されなかった。集石30号は、D-30区で検出された。総数30個の礫で構成され、総重量は28.57kgであった。明確な掘り込みは確認されなかった。集石31号は、E-30区で検出された。総数67個の礫で構成され、総重量は21.10kgであった。

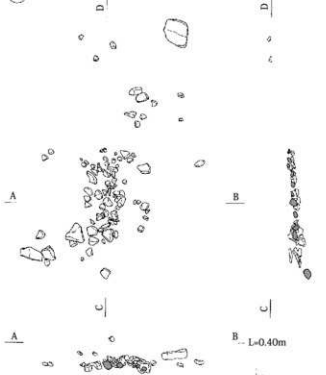
集石 9号 1段目



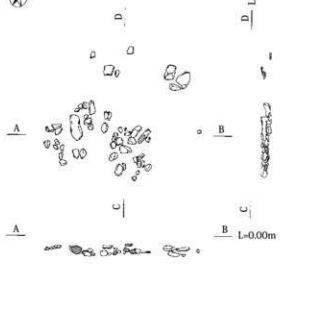
集石 9号 2段目



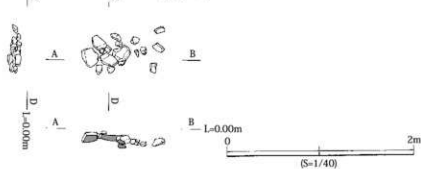
集石 11号



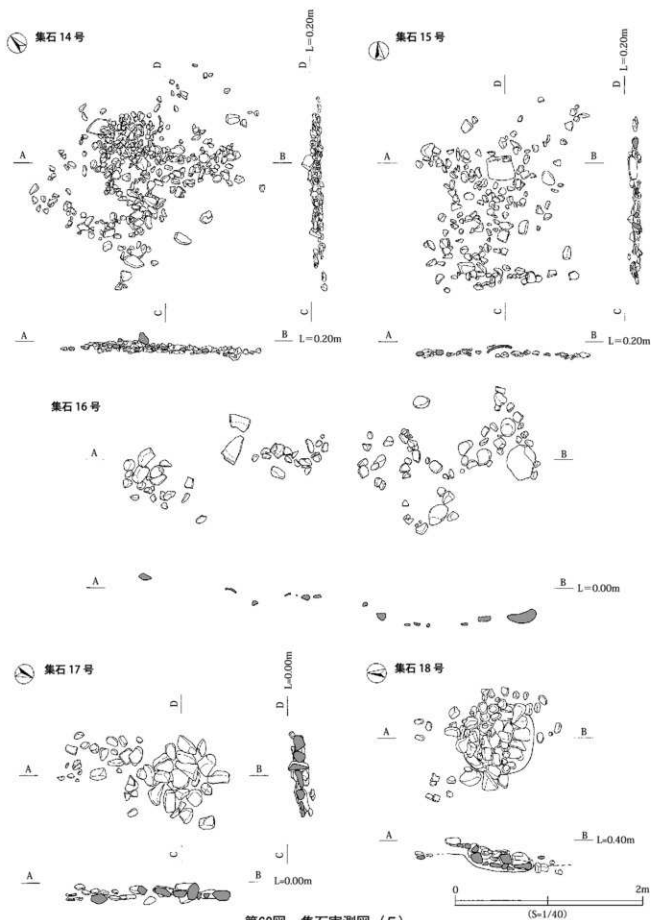
集石 12号



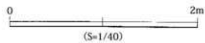
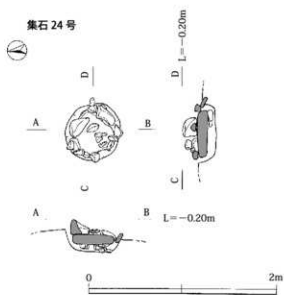
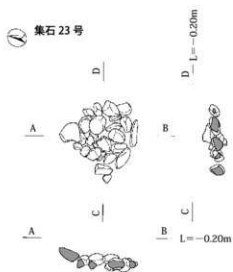
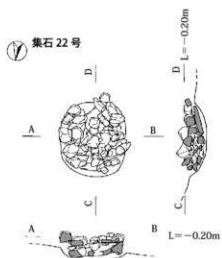
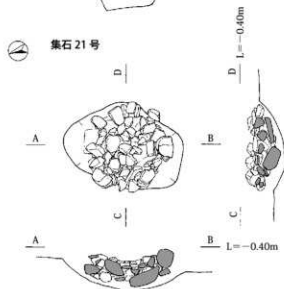
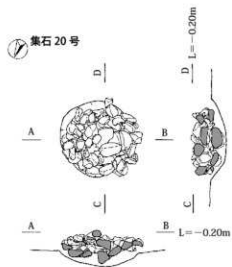
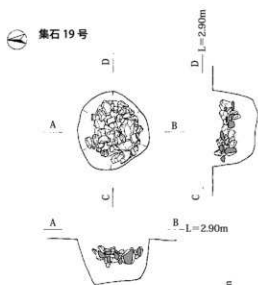
集石 13号



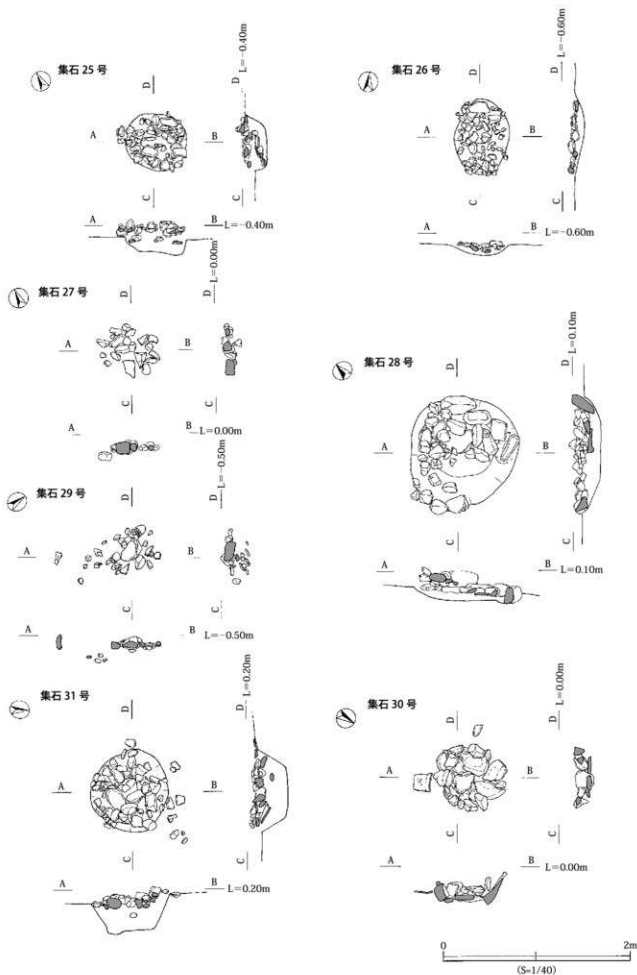
第59図 集石実測図 (4)



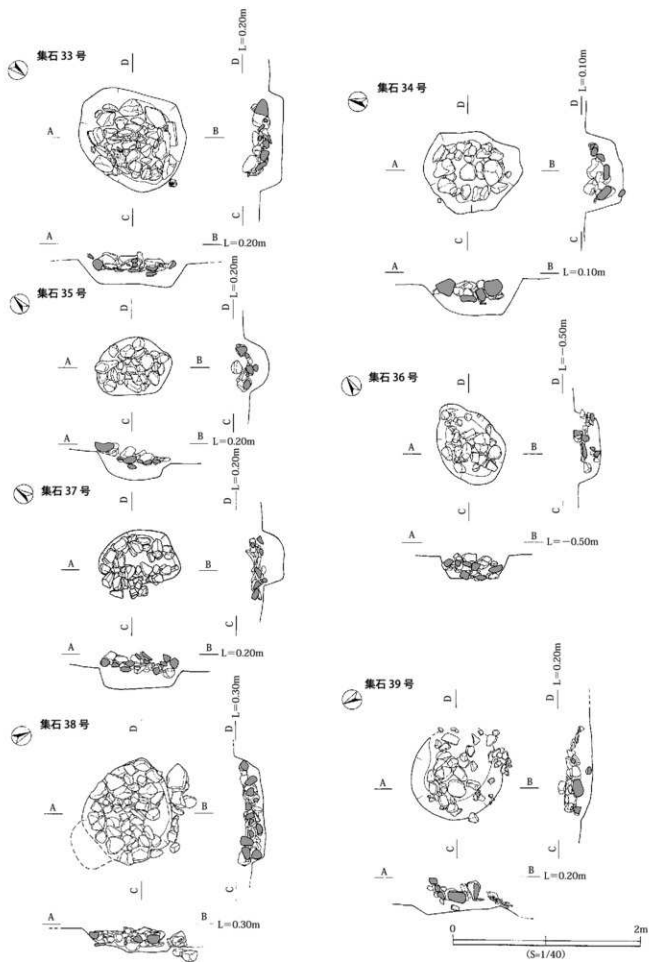
第60图 集石実測図 (5)



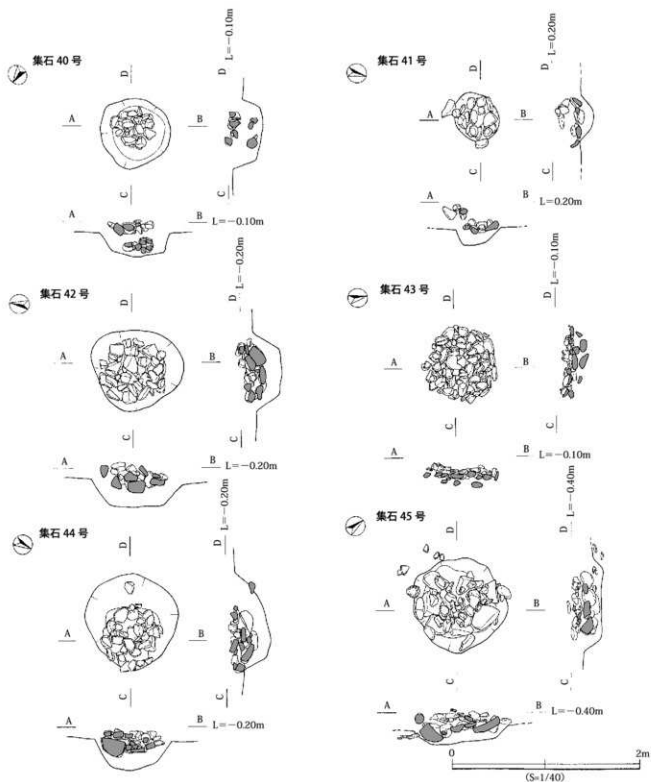
第61图 集石実測図 (6)



第62图 集石实测图 (7)



第63图 集石实测图 (8)

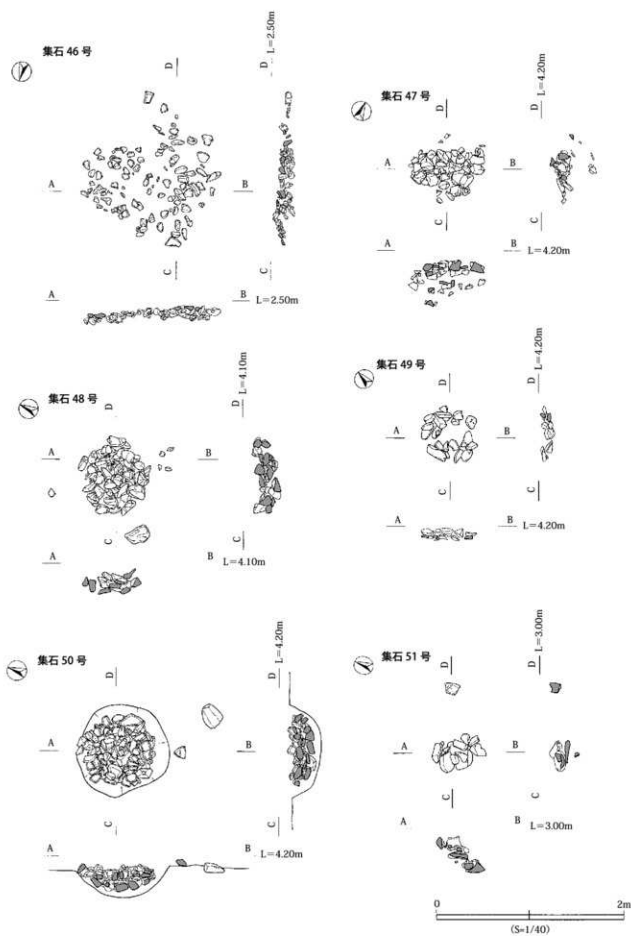


第64図 集石実測図 (9)

0.9m×0.8mの土坑が伴う。集石32号は、D-29区で検出された。集石33号は、E-29区で検出された。総数52個の礫で構成され、総重量は29.59kgであった。1.2m×1mの土坑が伴う。集石34号は、E-29区で検出された。総数32個の礫で構成され、総重量は24.47kgであった。1m×0.9mの土坑が伴う。集石35号は、D-29区で検出された。総数30個の礫で構成され、総重量は24.80kgであった。0.8m×0.6mの土坑が伴う。集石36号は、E-

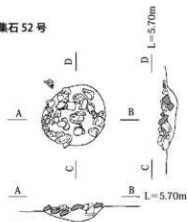
-28区で検出された。総数35個の礫で構成され、総重量は10.44kgであった。1m×0.6mの土坑が伴う。集石37号は、E-27区で検出された。総数50個の礫で構成され、総重量は25.25kgであった。0.8m×0.6mの土坑が伴う。集石38号は、D-27区で検出された。総数61個の礫で構成され、総重量は42.90kgであった。1.1m×1mの土坑が伴う。集石39号は、D-27区で検出された。総数57個の礫で構成され、総重量は16.24kgであった。0.8m×



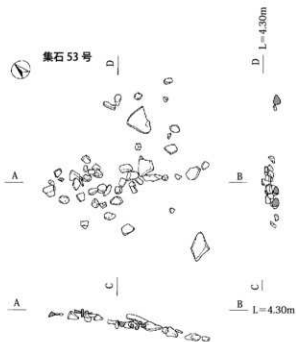


第65图 集石类测图 (10)

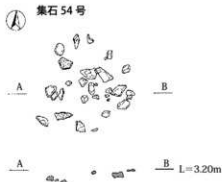
集石 52号



集石 53号



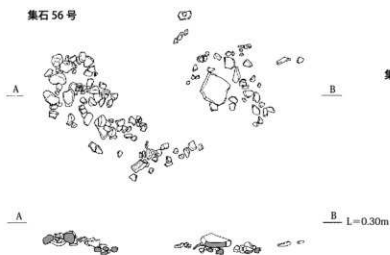
集石 54号



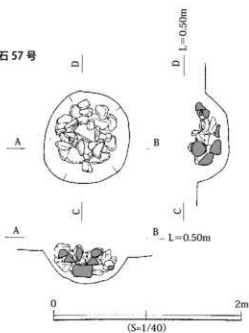
集石 55号



集石 56号



集石 57号



第66图 集石実測図 (11)

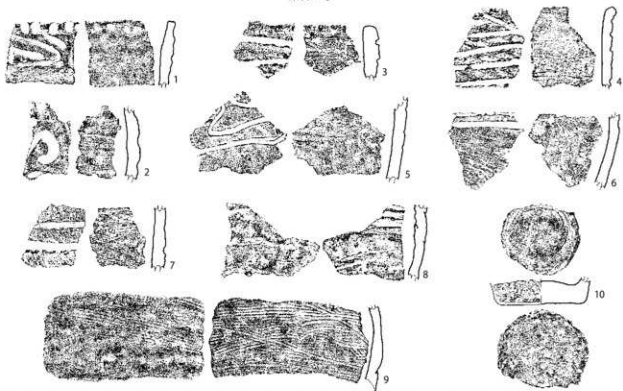
0.6mの土坑が伴う。集石40号は、E-27区で検出された。総数25個の礫で構成され、総重量は10.91kgであった。0.7m×0.7mの土坑が伴う。集石41号は、E-27区で検出された。総数20個の礫で構成され、総重量は8.08kgであった。0.6m×0.4mの土坑が伴う。集石42号は、E-27区で検出された。総数38個の礫で構成され、総重量は30.13kgであった。1m×0.9mの土坑が伴う。集石43号は、E-27区で検出された。総数75個の礫で構成され、総重量は28.60kgであった。明確な掘り込みは確認されなかった。集石44号は、E-27区で検出された。総数41個の礫で構成され、総重量は26.77kgであった。1m×1mの土坑が伴う。集石45号は、E-27区で検出された。総数60個の礫で構成され、総重量は40.30kgであった。1m×1mの土坑が伴う。集石46号は、D-25区で検出された。総数90個の礫で構成される。明確な掘り込みは確認されなかった。集石47号は、D-E-24区で検出された。総数50個の礫で構成され、総重量は20.07kgであった。明確な掘り込みは確認されなかった。集石48号は、E-23区で検出された。総数51個の礫で構成される。明確な掘り込みは確認されなかった。集石49号は、E-23区で検出された。総数19個の礫で構成される。明確な掘り込みは確認されなかった。集石50号は、E-23区で検出された。総数70個の礫で構成され、総重量は49.78kgであった。1m×1mの土坑が伴う。集石51号は、D-21区で検出された。総数13個の礫で構成され、総重量は10.20kgであった。明確な掘り込みは確認されなかった。集石52号は、D-20区で検出された。総数47個の礫で構成され、総重量は6.87kgであった。0.7m×0.6mの土坑が伴う。集石53号は、C-18区で検出された。総数49個の礫で構成され、総重量は12.60kgであった。明確な掘り込みは確認されなかった。集石54号は、E-17区で検出された。総数27個の礫で構成される。明確な掘り込みは確認されなかった。集石55号は、総数18個の礫で構成される。明確な掘り込みは確認されなかった。集石56号は、D-32区で検出された。総数30個の礫で構成され、総重量は34.38kgであった。1m×0.9mの土坑が伴う。集石57号は、B-34区で検出された。総数124個の礫で構成され、総重量は14.12kgであった。明確な掘り込みは確認されなかった。

#### (1) 出土土器 (第67図～第72図)

1から10は、集石1号から出土した土器である。1は、口縁部下位を削ることにより口縁部をやや肥厚させている。口縁端部に指頭による凹点を1条置らせ、その下に凹線文を施している。胎土に少量の滑石が混入されている。2は、指頭による凹線文が施されている。胎土に少量の滑石が混入されている。3は、口縁部に棒状の工具による沈線文が横位に施されている。4は、口縁部に横位や斜位の沈線文が施されている。5は、ヘラ状の工

具による沈線文が施されている。6は、丸い棒状の工具による凹線文が施されている。7・8は、棒状の工具による凹線文が横位に施されている。9は、内外面ともに器面調整は貝殻条痕である。10は、底部である。底部から胴部にややひらきながら立ち上がるタイプのものであると思われる。1から5は2群、7・8は3群であると思われる。11から14は、集石2号から出土した土器である。11は、棒状の工具による沈線文と指頭による凹点が施されている。口唇部には、指による凹点が施されている。12から14は、胴部片である。11は、2群であると思われる。15・16は、集石8号から出土した土器である。15は、ヘラ状の工具による沈線文が施されている。口唇部には、指頭による凹点が施されている。この凹点には、爪痕が観察できる。16は、棒状の工具による沈線文と斜位の刺突文が施されている。15・16は、2群の土器であると思われる。17・18は、集石11号から出土した土器である。17は、内外面ともにミガキが施されている。外面には、ヘラ状の工具による沈線文間に縄文が施されている。18は、口縁部下位を削ることにより口縁部を強調している。口縁部には、ヘラ状の工具による縦位の短沈線文が施されている。17は4群、18は2群であると思われる。19から30は、集石14号から出土した土器である。19は、口縁部下位を削ることにより口縁部をやや肥厚させている。口縁部には指頭による凹点とヘラ状の工具による凹線文が施されている。口唇部には、指頭による凹点が施され、口縁部は波状を呈している。胎土に少量の滑石が混入されている。20は、口縁部を厚くし口縁部下位に低い突起を貼り付けることにより、口縁部を強調している。口縁部には、丸い棒状の工具による凹線文が施されている。21は、口唇部に竹管状の工具で刺突文が施されている。口縁端部の内外面に輪轡みした痕が観察される。24は、口縁端部を厚くし、口唇部にヘラ状の工具による沈線文が施されている。口縁部には、荒く浅い沈線文が施されている。25は、低く厚い突起をもち、指頭による凹点を施している。口縁部には、ヘラ状の工具による沈線文が施されている。26は、口縁部の突起部分である。指頭による凹点とヘラ状の工具による刻み目が施されている。27は、無文の土器である。口唇部には、指の爪による刺突文が施されている。28・29は、無文の土器である。口唇部には刺突文が施されている。19から27は、2群の土器であると思われる。31から36は、集石15号から出土した土器である。31は、口縁部下位を削ることにより口縁部を肥厚させている。口縁部には、縦位や横位の凹線文、凹点が施されている。口唇部には指頭による凹点が施され、口縁部は波状を呈している。ねじり紐状の突起が付く。32・34は、口縁部下位を削ることにより口縁部をやや肥厚させている。32は、口縁部にヘラ状の工具による沈線文が施されている。33は、口縁部に山形の凹線

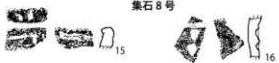
集石 1号



集石 2号



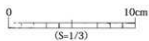
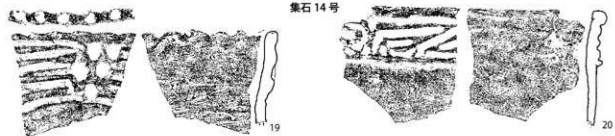
集石 8号



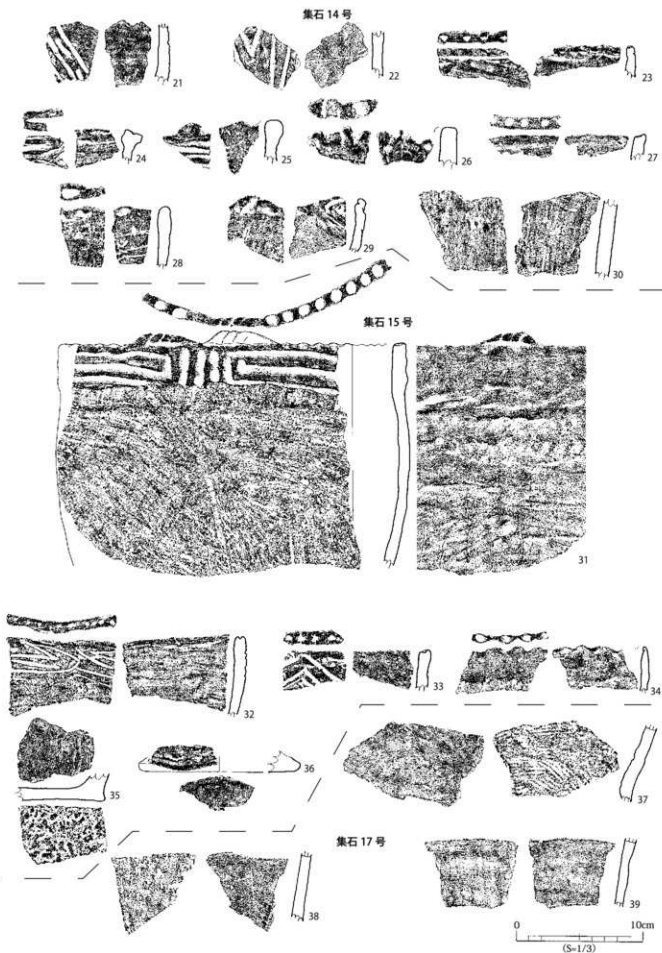
集石 11号



集石 14号

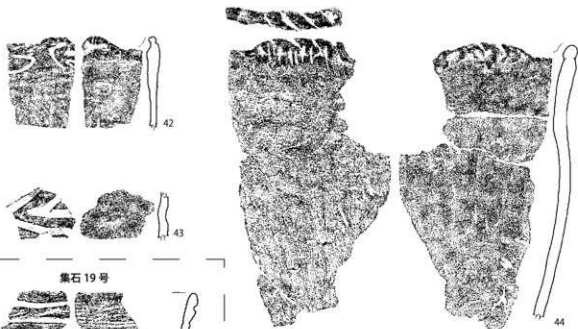
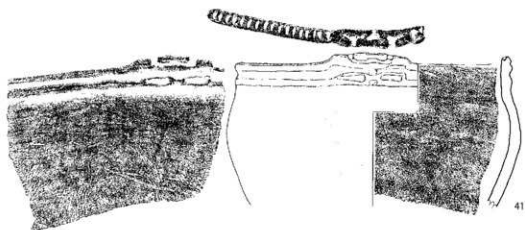
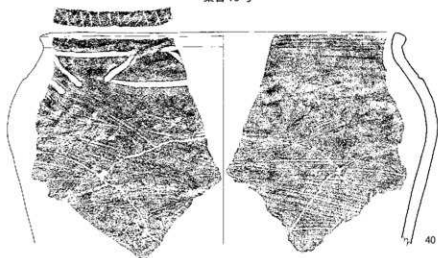


第67图 集石内出土遺物実測図(1)



第68图 集石内出土遺物実測図(2)

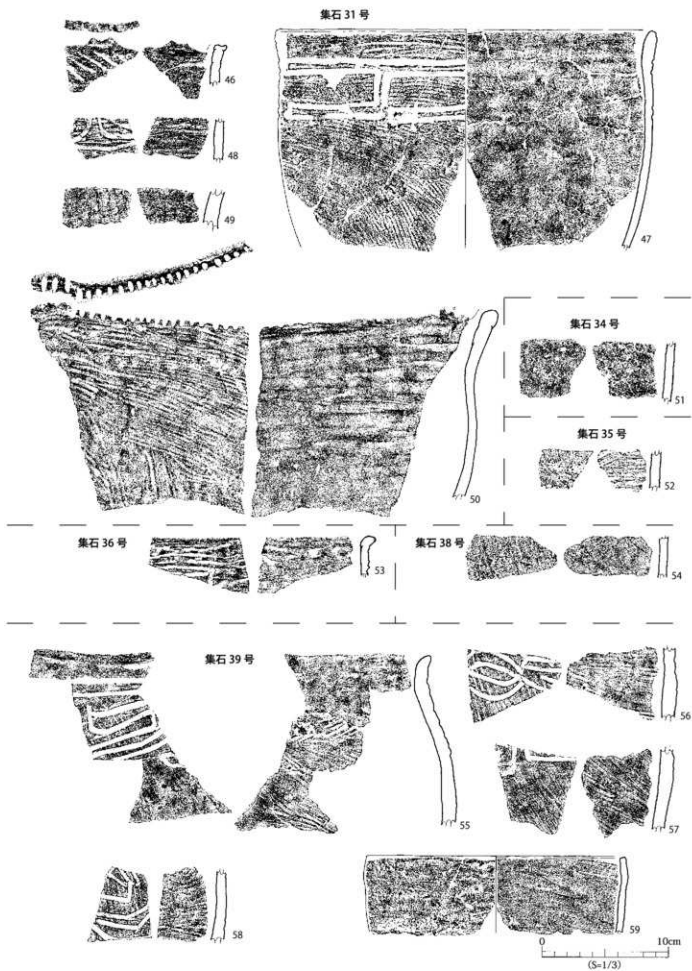
集石 16号



集石 19号

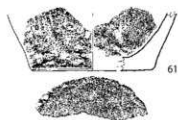


第69図 集石内出土遺物実測図 (3)



第70图 集石内出土物实测图(4)

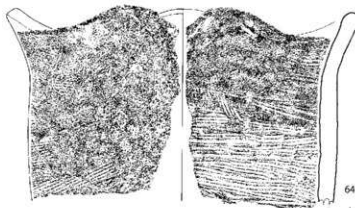
集石 39号



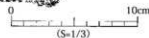
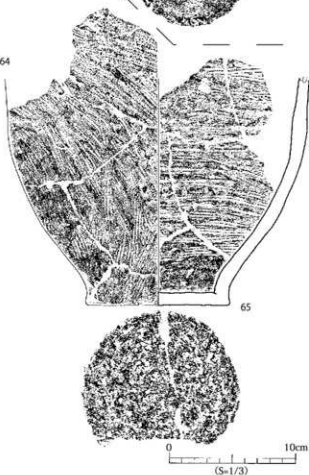
集石 45号



集石 54号



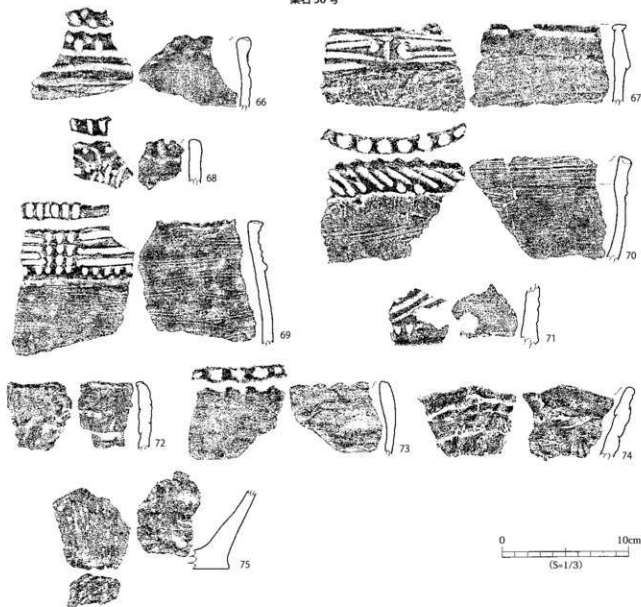
文が施され、口唇部に刺突文が施されている。34は、無文の土器である。口唇部は指頭による凹点が施され、口縁部は波状を呈している。35は、底部端部がやや膨らむタイプである。36は、底部端部が大きく膨らむタイプである。31から33は、2群土器であると思われる。37から39は、集石17号から出土した土器である。39は、口縁部下位を削ることにより口縁部を肥厚させており、2群土器であると思われる。40から44は、集石16号から出土した土器である。40は、棒状の工具により沈線文が横位や斜位に施されている。口唇部には、ヘラ状の工具による刻み目が施されている。41・42・44は、口縁部下位を削ることにより口縁部を肥厚させている。41は、口縁部に指頭による凹線文が施されている。口唇部には、ヘラ状の工具による刺突文が施され、台形状の低い突起が付く。この突起には、刺突と削りにより外面側に2か所、内面側に1か所の凹点が施されている。外面側の凹点を結ぶように沈線文が施されている。42は、口縁部にヘラ状の工具による沈線文が施されている。43は、ヘラ状の工具による凹線文がく字状に施されている。胎土に少量の滑石が混入されている。44は、口縁部にねじり紐状の突起が付く。この突起の部分に貝殻による縦位の刺突文が施されている。すべて2群であると思われる。45は、集石



第71図 集石内出土遺物実測図(5)



集石 56号

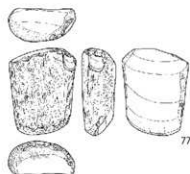
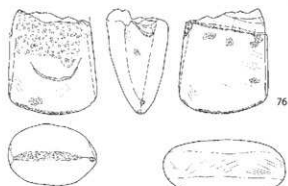


第72図 集石内出土遺物実測図(6)

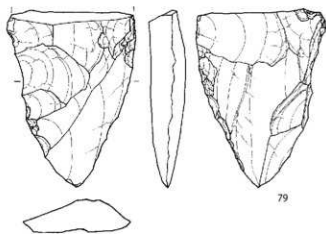
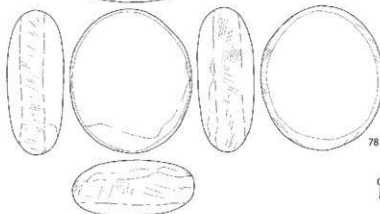
19号から出土した土器である。口縁部に、ヘラ状の工具により横位の沈線文が施されている。3群であると思われる。46から50は、集石31から出土した土器である。46は、口縁部下位を削ることにより口縁部を肥厚させている。口唇部には、斜位の沈線文が施されている。口唇部にはリボン状の突起が付く。47は、口縁部から胴部上位にかけ、丸い棒状の工具による2本1組の並行な沈線文により靴形文が施されている。48は、内外面の器面調整は貝殻条痕で、外面に沈線文が施されている。50は、口縁部が外反するタイプであり、口縁端部を斜位に棒状の工具で押圧することにより、口縁部が波状を呈している。

波頂部は肥厚し、頂部を貝殻により押圧している。46は2群土器、47は3群土器であると思われる。51は、集石34号出土の土器である。52は、集石35号出土の土器である。器面調整は内外面ともに貝殻条痕である。53は、集石36号から出土した土器である。ヘラ状の工具による沈線文が施されている。54は、集石38号から出土した土器である。55から61は、集石39号から出土した土器である。55は、横位の沈線文が施され、その下位に2本1組の平行な沈線文が施されている。56は、ヘラ状の工具による沈線文が施されている。57・58は、ヘラ状の工具による沈線文により直線の文様が施されている。59は、無文

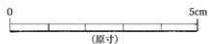
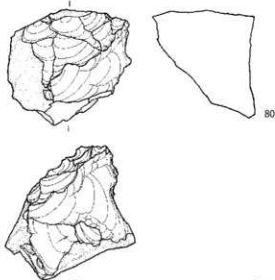
集石3号



集石9号



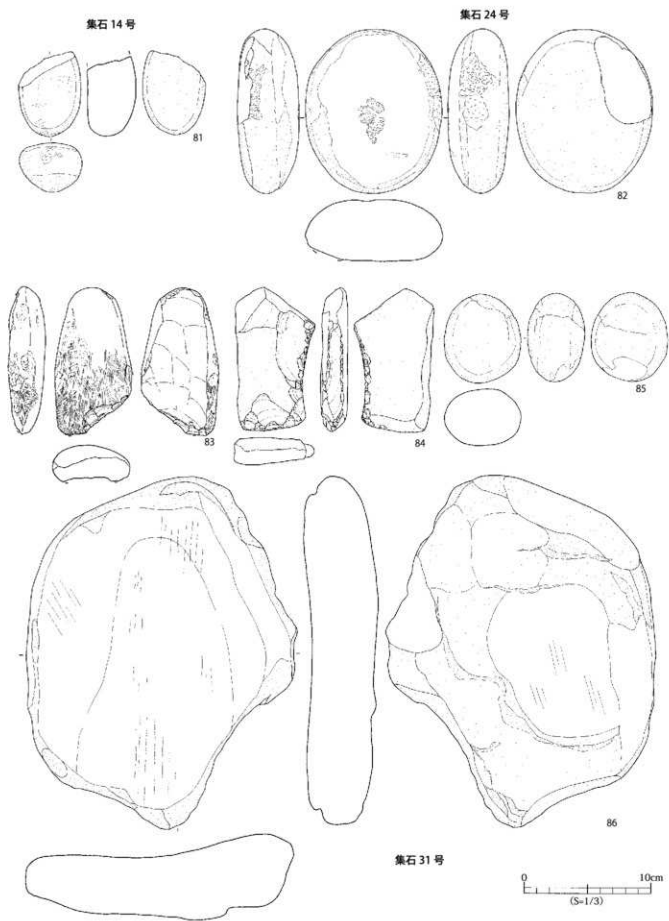
集石14号



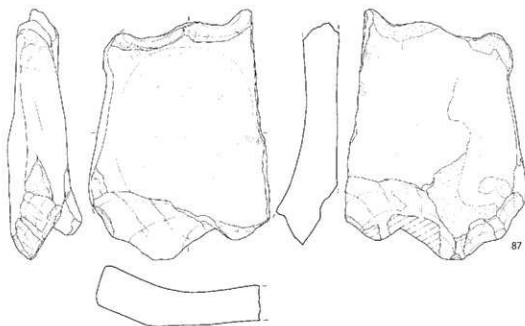
第73図 集石内出土遺物実測図(7)

の土器である。60は、器面調整が内外面ともに貝殻条痕である。61は、指押さえによる指頭痕が底部外面に観察される。底部から胴部にひらきながら立ち上がるタイプの底部である。55から58は3群であると思われる。62・63は、集石45号から出土した土器である。62は、ヘラ状の工具による沈線文が縦位や横位に施されている。63は、底部端部が彫むタイプである。底部表面は、ナデによ

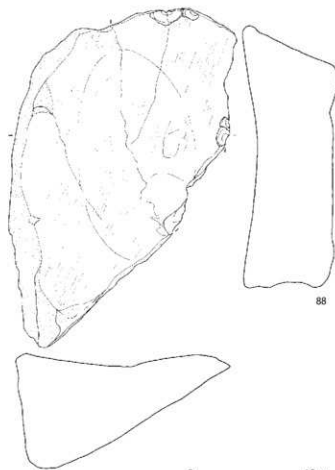
り仕上げられている。62は3群であると思われる。64・65は、集石54号出土の土器である。64は、無文の波状口縁の土器である。65は、胴部から底部である。底部端部がやや彫むタイプである。66から75は、集石56号から出土した土器である。66は、指頭による凹点や横位の凹線文が施されている。口縁部は、指頭による凹点により波状を呈している。胎土に少量の滑石が混入されている。



第74图 集石内出土遺物実測図(8)



87



88

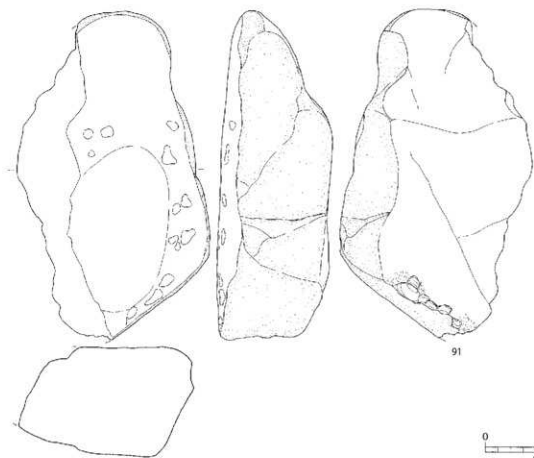
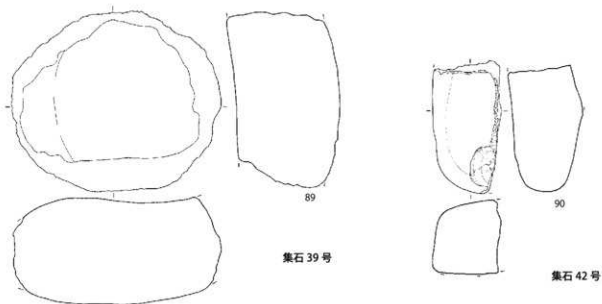


第75図 集石内出土遺物実測図(9)

67は、口縁部下位を削ることにより口縁部を肥厚させている。口縁部には、棒状の工具による沈線文が施されている。68は、口縁部に、棒状の工具による斜位の刺突文と沈線文が施されている。口縁部は、棒状の工具による刺突文と押圧により波状を呈している。69は、口縁部下位を削ることにより口縁部を肥厚させている。口縁部には、凹点と凹線文が施されている。口唇部は、棒状の工具による押圧が一部施されている。70は、口縁部下位を削ることにより口縁部を肥厚させている。口縁部には、斜位の凹線文と凹点が施されている。口縁部は、指頭による凹点により波状を呈している。内面に段を有する。71は、口縁部に竹管状の工具による凹点と凹線文が施されている。72から74は、無文の土器である。73は、口縁部が指頭による凹点により波状を呈している。74は、つくりが粗雑であり、輪積みの痕が外面に残されている。75は、底部端部がやや膨らむタイプのものである。底部裏面に葉脈が観察される。66から71は、2群であると思われる。

## (2) 出土石器 (第73図～第77図)

76・77は、集石3号から出土した石器である。76は、磨製石斧片である。刃部片であるが、刃部に敲打痕が残り、成形というよりは転用の可能性が考えられる。77は、磨製石斧を転用した敲石である。上・下面に強い敲打痕が観察される。78は、9号集石から出土した磨石である。下面に弱い敲打痕が観察される。また、表裏ともに磨りによる弱い擦痕が観察される。79から81は、集石14号から出土した石器である。79は、二次加工剥片である。表面左側には大振りの剥離が、裏面左側には微細な剥離が施され、尖頭状を呈するが、詳細ははっきりとしない。

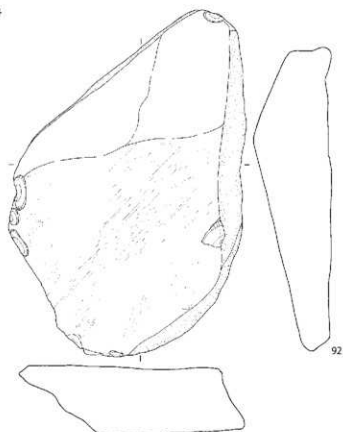


第76図 集石内出土遺物実測図 (10)

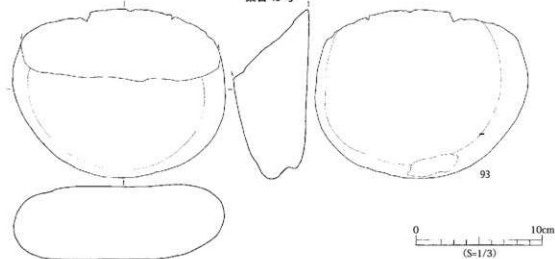
80は、石核である。亜角礫を素材とする。自然面から連続した剥離が施され、下面右側からの剥離を切っていることから、打面転移が行われていたと考えられる。81は、

磨石である。上部は欠損している。表面には擦痕が、下面には敲打痕が観察される。82は、集石24号から出土した磨石である。表面に擦痕が、両側面に敲打痕が観察さ

集石 44号



集石 45号



第77図 集石内出土遺物実測図 (11)

れる。83から88は、集石31号から出土した石器である。83は、蛇紋岩製の磨製石斧である。刃部を大きく欠損するが、この剥離面に細かな再加工が施されている。左側から基部にかけてトロツとした摩耗感がある。84は、磨製石斧である。表面右側、表面右側に剥離が施されている。85は、磨石である。86は、石皿である。作業面は使用により凹んでいる。87・88は、砥石である。87は、表

裏面ともに使用による擦痕が観察される。88は、表面に使用による擦痕が観察され、大きく凹んでいる。89は、集石39号から出土した石皿である。作業面は使用により磨面が顕著である。90・91は、集石42号から出土した砥石である。91は、磨面が顕著である。92は、集石44号から出土した砥石である。表面に使用による擦痕が顕著である。93は、集石45号から出土した台石である。

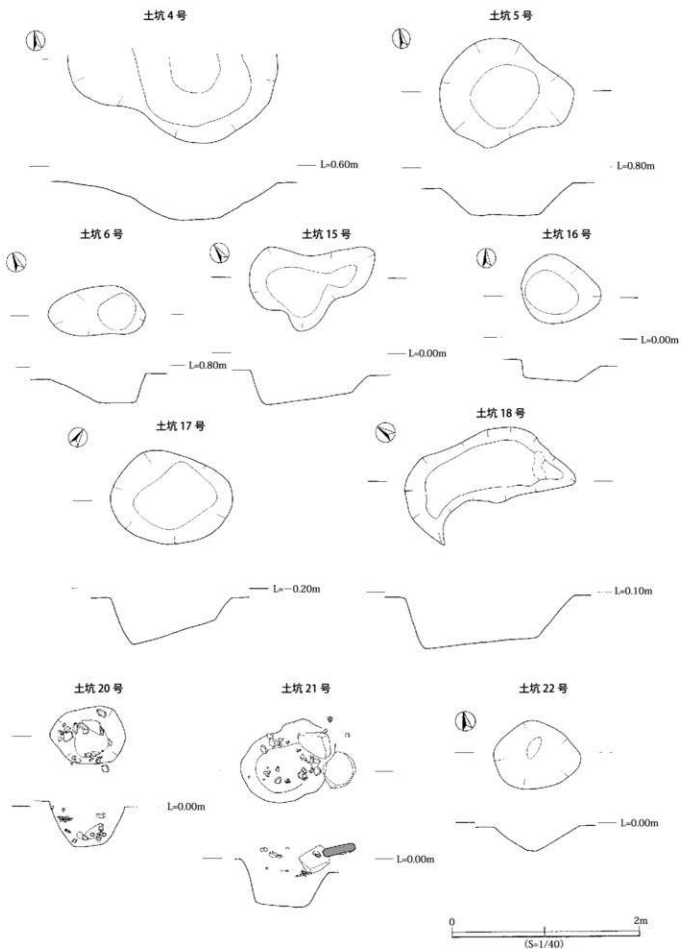
### 3 土坑 (第78図～第120図)

縄文時代中期後葉から後期該当の土坑は、C・D-23区～C・D-31区、D-21・22区付近を除くほとんどの調査区から292基が確認され、調査区北側から番号を付けていった。検出層や埋土の状況から該期に位置付けを行った。平面の形状から円形・楕円形・不定形と3つのタイプがある。ここでは、遺物の出土した土坑を中心に掲載した。

#### (1) 出土土器 (第91図～第116図)

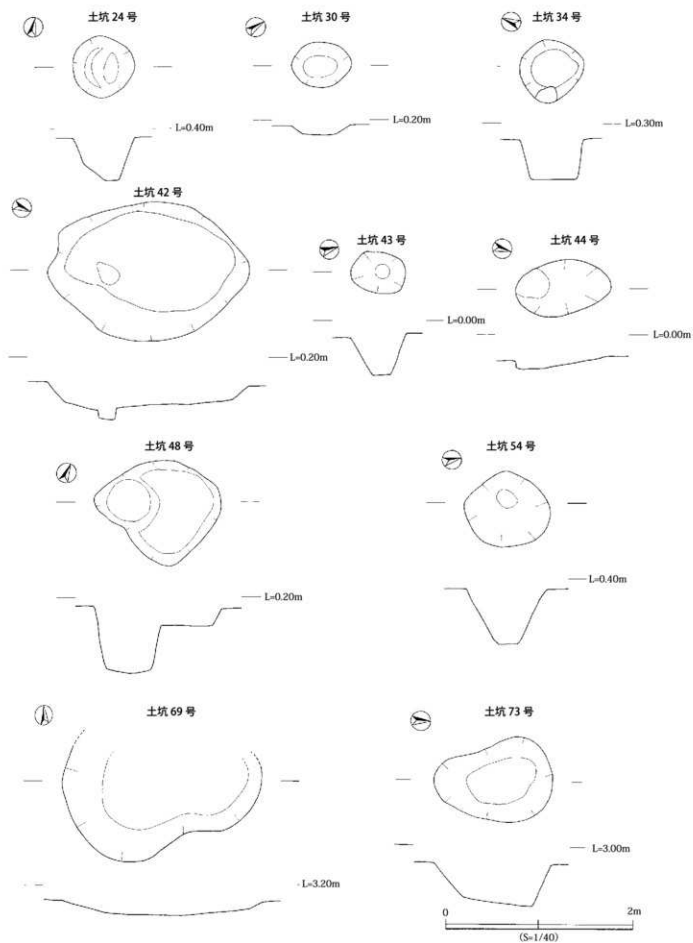
1から7は、土坑4号から出土した土器である。1は、口縁部に指頭による凹点、棒状の工具による斜位の凹線文が施されている。口縁部は波状を呈し、略台形状の突起が貼り付けられている。胎土には少量の滑石が混入されている。2は、口縁部下位を削ることで口縁部をやや肥厚させている。口縁部には、ヘラ状の工具による沈線文が施されている。3は、口縁部に棒状の工具による沈線文が施されている。4は、指頭による凹線文が施されている。胎土に滑石が混入されている。5は、棒状の工具による凹線文が施されている。胎土に滑石が混入されている。7も、棒状の工具による沈線文が2条横位に施され、その下位に沈線文が施されている。1から5は2群、6・7は3群であると思われる。8から15は、土坑5号から出土した土器である。8は、指頭による凹線文が施されている。口縁部は波状を呈している。9は、指頭による凹線文とヘラ状の工具による凹線文が施されている。9は、ヘラ状の工具による沈線文と指頭による凹点が施されている。10は、口縁部にヘラ状の工具による沈線文が施され、太い波形の突起が付く。11は、ヘラ状の工具による沈線文が施されている。口唇部には浅い沈線文が施されている。12は、口縁部にヘラ状の工具による凹線文と棒状の工具による刺突文が施されている。口縁部には波形をした突起が付く。13は、無文の土器である。15は、くびれがなくひらきながら胴部へ立ち上がるタイプの底部である。底部外面下位に指頭痕が観察される。8から12は、2群であると思われる。16は、土坑6号から出土した土器である。ヘラ状の工具による沈線文が施されている。17は、土坑15号から出土した土器である。口縁部下位を削ることで口縁部を肥厚させている。口縁部には、C字状の凹線文が施されている。2群であると思われる。18は、土坑16号から出土した土器である。底部端部をやや膨らませるタイプの底部である。19は、土坑17号から出土した土器である。器面調整は内外ともに貝殻条痕である。20・21は、土坑18号から出土した土器である。20は、内外面ともにミガキにより仕上げられており、棒状の工具による沈線文間に縄文が施されている。21は、口縁部がV字状を呈し、口縁端部に刺突文が施されている。20は4群、21は5群であると思われる。22は、土坑20号から出土した土器である。横位

の沈線文が施され、その下位に2本1組の平行な沈線文により文様が施されている。3群であると思われる。23・24は、土坑21号から出土した土器である。23は、縦位や横位の凹線文が施されている。胎土に多量の滑石が混入されている。24は、口縁部下位の内外面を削ることで口縁部をやや肥厚させている無文の土器である。2群であると思われる。25は、土坑22号から出土した土器である。口縁部下位を削ることで口縁部を肥厚させている。口縁部には、指頭による凹点とヘラ状の工具による縦位の短凹線文が施されている。口縁部は波状を呈している。2群であると思われる。26は、土坑24号から出土した土器である。27は、土坑30号から出土した土器である。底部端部がやや膨らむタイプのものである。28は、土坑34号から出土した土器である。ヘラ状の工具による凹線文と指頭による凹線文が施されている。2群であると思われる。29は、土坑36号から出土した土器である。30から32は、土坑42号から出土した土器である。30は、口縁部がV字状を呈しており、突帯の部分にはヘラ状の工具による刻目が施されている。31は、口縁部が断面三角形を呈している。30・31は5群であると思われる。33・34は、土坑43号から出土した土器である。33は、横位の沈線文の下位に波状の文様が施されている。34は、2本1組の沈線文により靴形文が描かれている。ともに3群であると思われる。35は、土坑44号から出土した土器である。36は、土坑54号から出土した土器である。口縁部下位を削ったり口縁部下部を突帯のようにしたりすることにより口縁部を強調している。無文の土器である。37は、土坑56号から出土した土器である。無文の土器であるが、波頂部内面にヘラ状の工具による沈線文によりV字状の文様が施されている。38から41は、土坑69号から出土した土器である。38は、口縁部にヘラ状の工具により縦位にS字状の文様が施されている。口唇部は棒状の工具による斜位の刺突文が施されている。39は、無文の土器である。外面の器面調整は貝殻条痕で、その後ナデている。38は2群であると思われる。40は、口縁部下位を削ることで口縁部をやや肥厚させている。無文の鉢形の土器であると思われる。41は、底部端部が膨らむタイプである。42から49は、土坑73号から出土した土器である。42は、棒状の工具による凹線文により回転三角形の文様が施され、口唇部には棒状の工具による刺突文が施されている。43は、口縁部下位を削ることで口縁部を肥厚させている。口縁部にヘラ状の工具による沈線文により逆S字状の文様が施されている。44は、ヘラ状の工具による沈線文が斜位に施されている。口縁部は波状を呈している。45は、口縁部に2本1組による沈線文が施されている。46は、棒状の工具による沈線文が施されている。口唇部には高い突起が付き、この突起の口唇部から内面には棒状の工具による沈線文が斜

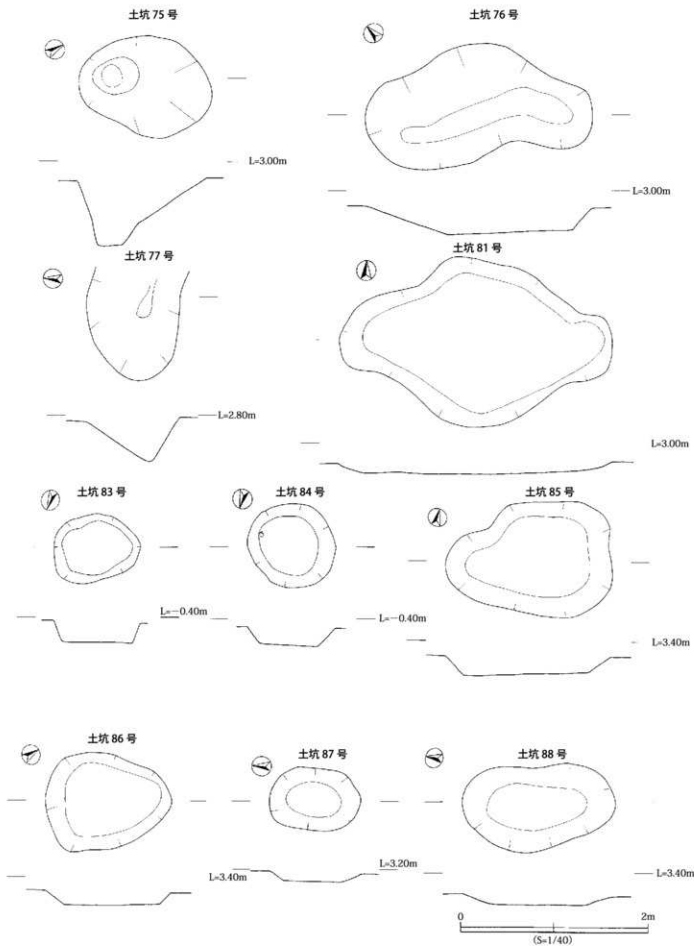


第78图 土坑实测图(1)

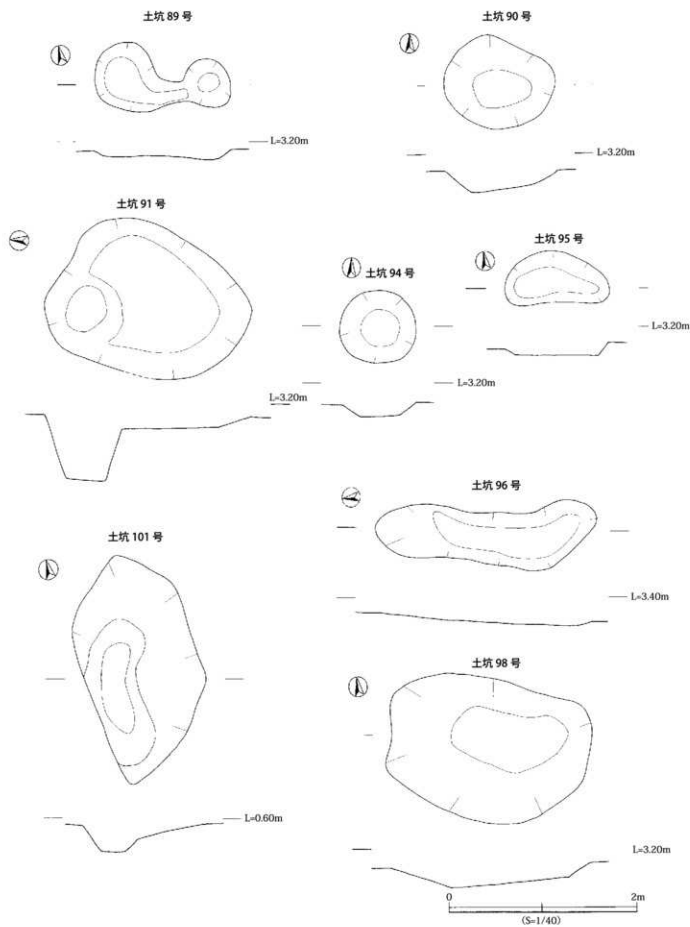




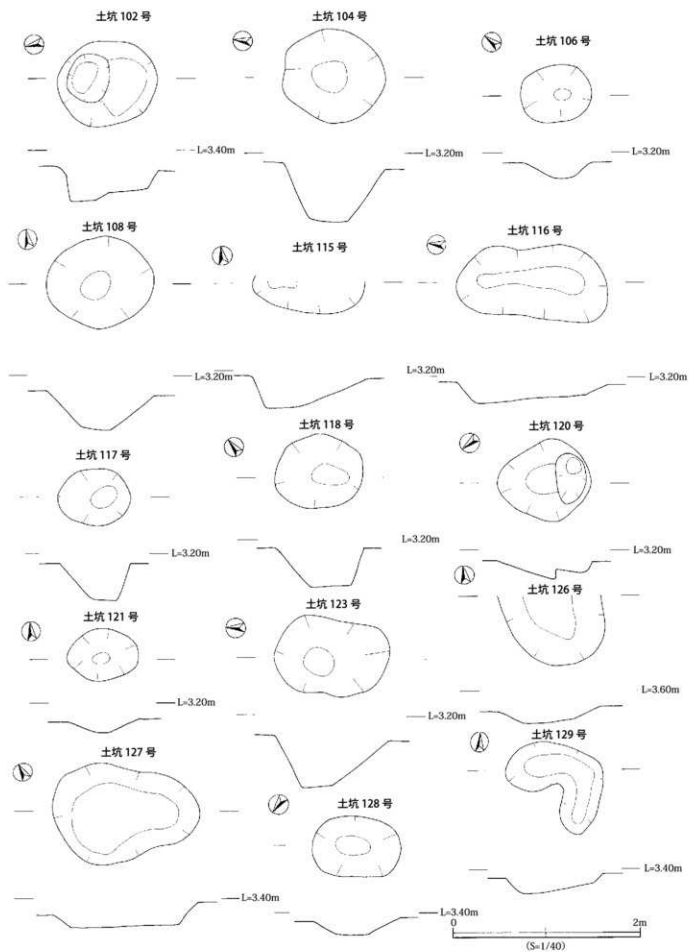
第79图 土坑实测图(2)



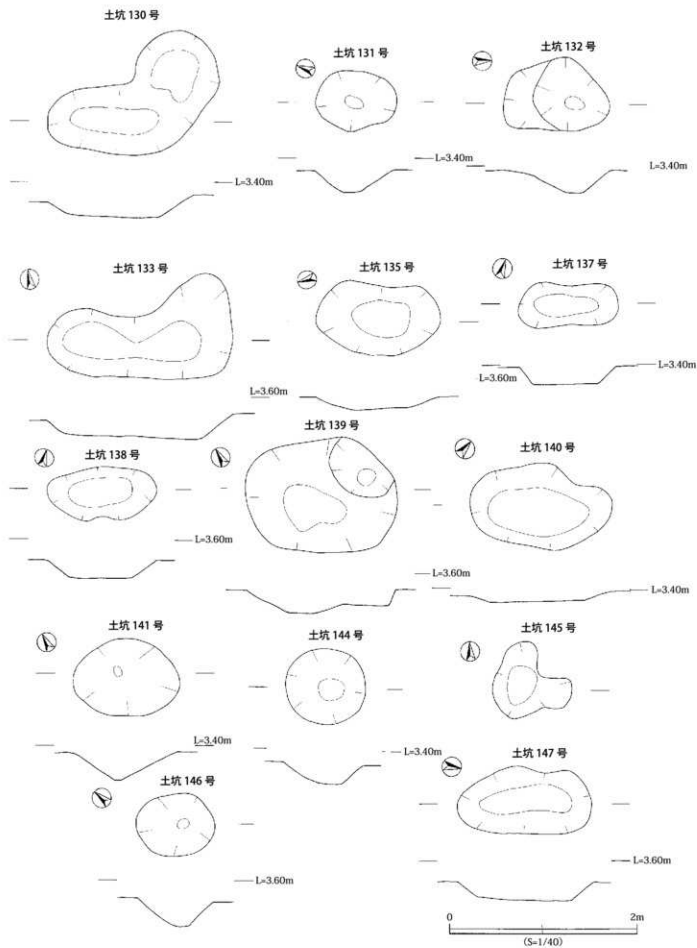
第80图 土坑实测图(3)



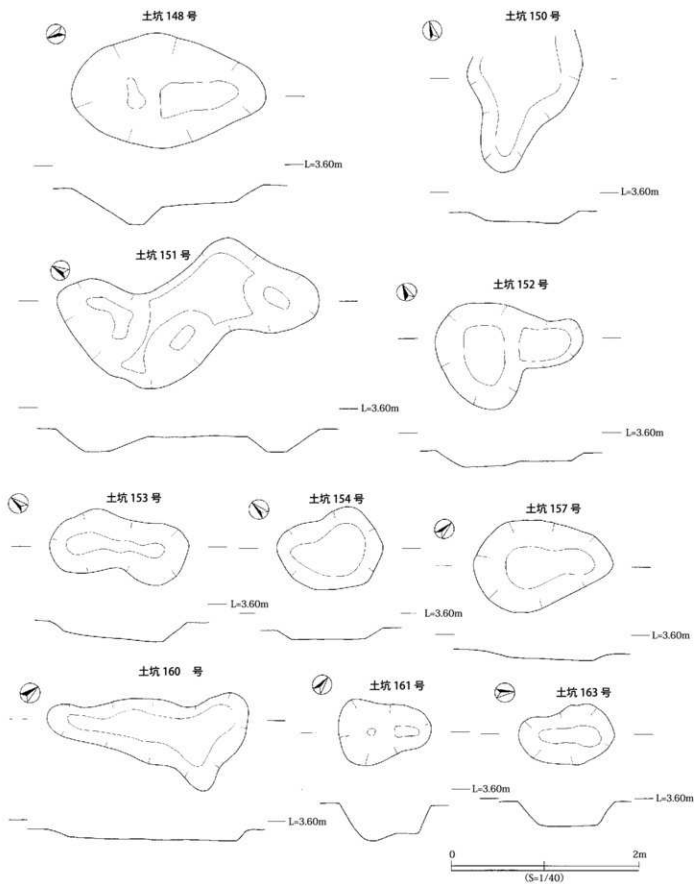
第81图 土坑实测图(4)



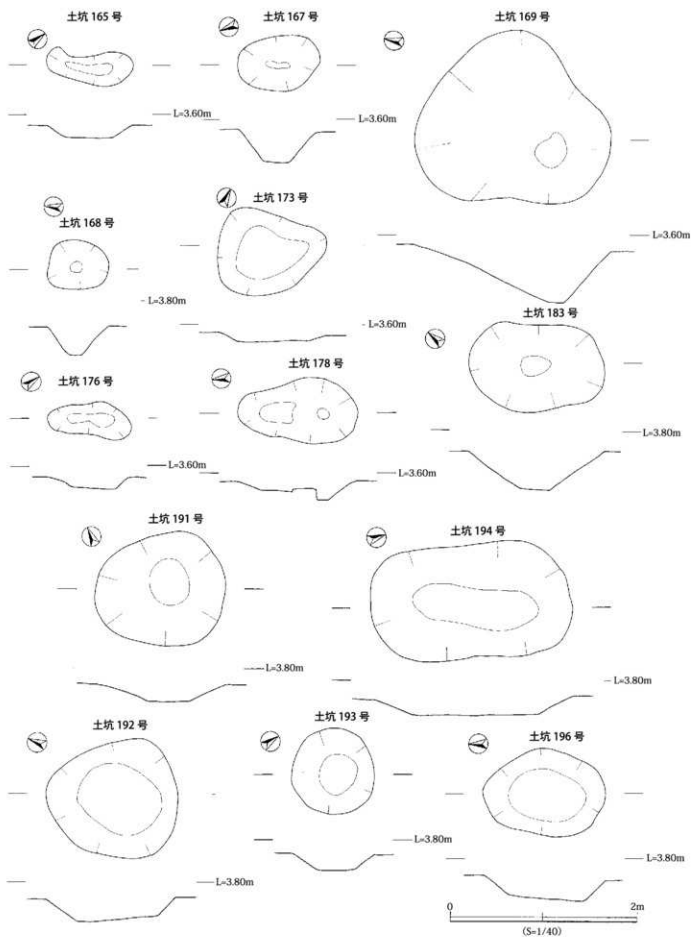
第82图 土坑实测图(5)



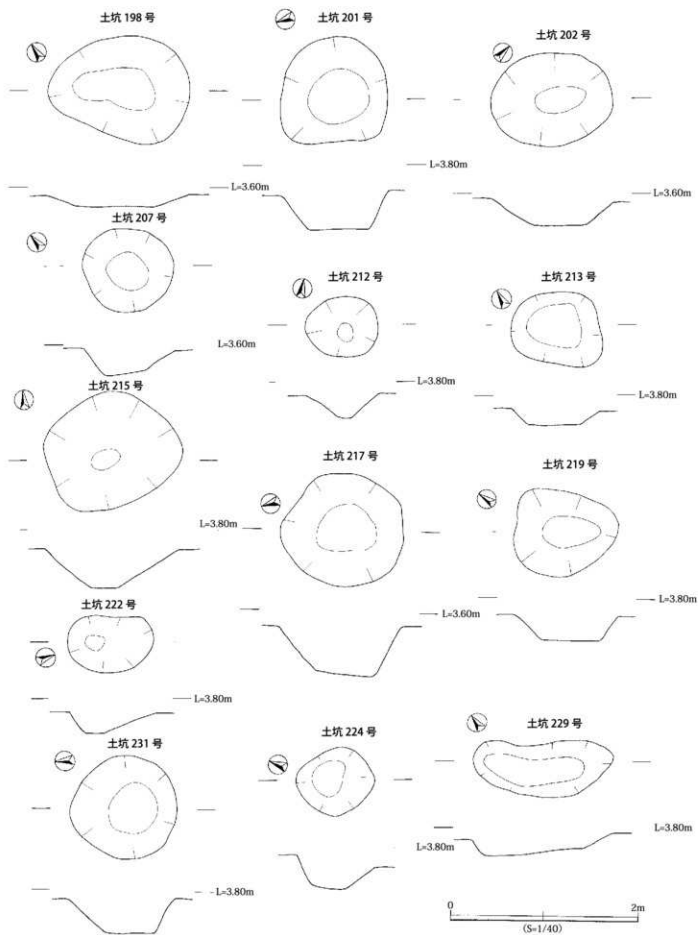
第83图 土坑实测图 (6)



第84图 土坑实测图(7)

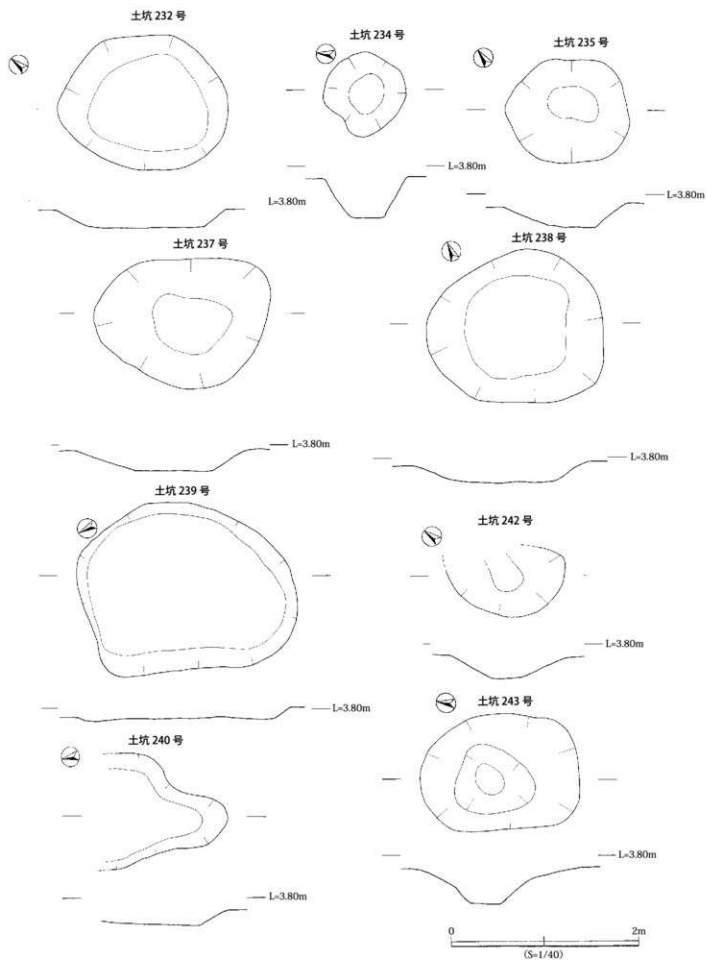


第85图 土坑实测图(8)

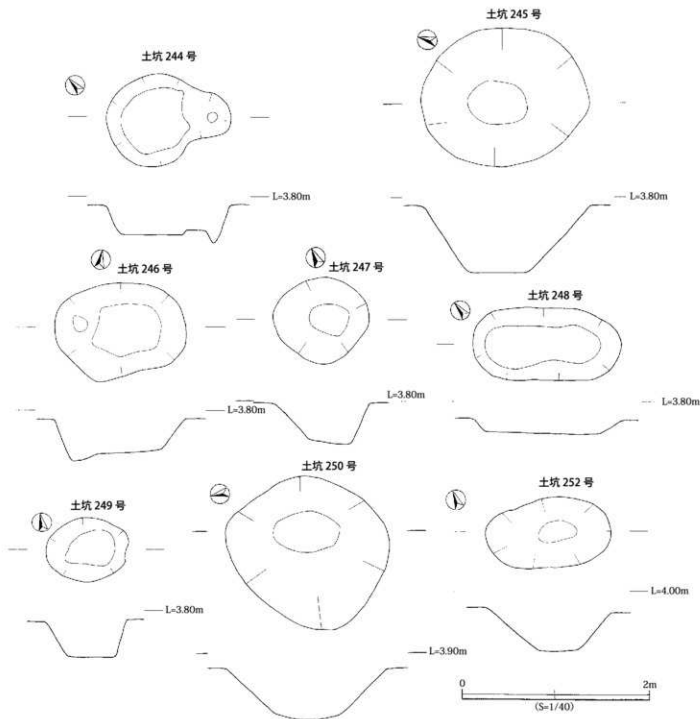


第86图 土坑实测图(9)





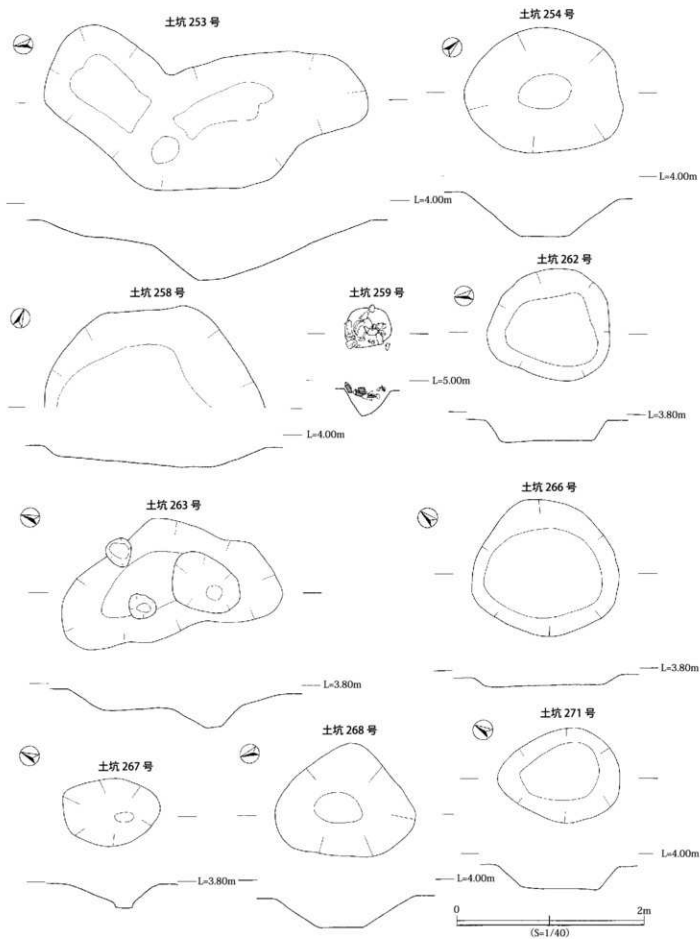
第87图 土坑实测图 (10)



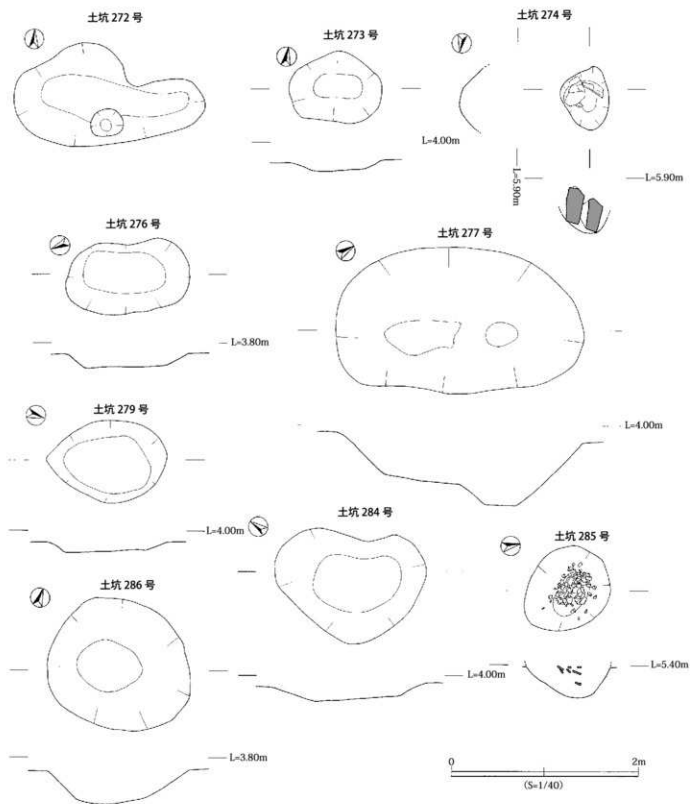
第88図 土坑実測図 (11)

位に施されている。47から49は、無文の土器である。48は、口縁端部がやや内湾している。49は、口縁部が波状を呈している。42から44は2群、45・46は3群であると思われる。50から53は、土坑75号から出土した土器である。50は、棒状の工具による横位の沈線文が施されている。口縁部は、棒状の工具による斜位の刺突文が施されている。51は、棒状の工具により横位の沈線文が施さ

れている。52は、棒状の工具による沈線文が施されている。53は、無文の土器である。口縁部下位を削る。50は2群、51・52は3群であると思われる。54から72は、土坑76号から出土した土器である。55は、口縁部に棒状の工具により横位や斜位の沈線文が施されている。口唇部には刺突文が施されている。口縁部内面に指頭痕を観察できる。56は、ヘラ状の工具による沈線文が斜位や横



第89图 土坑实测图 (12)

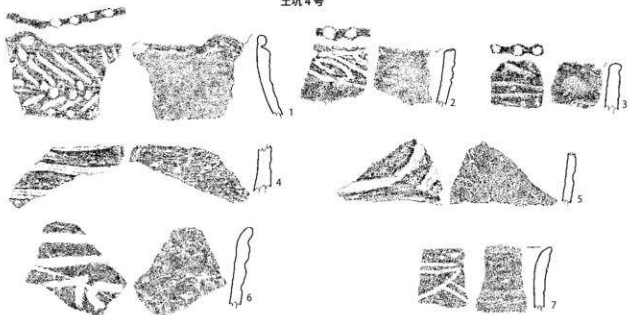


第90図 土坑実測図 (13)

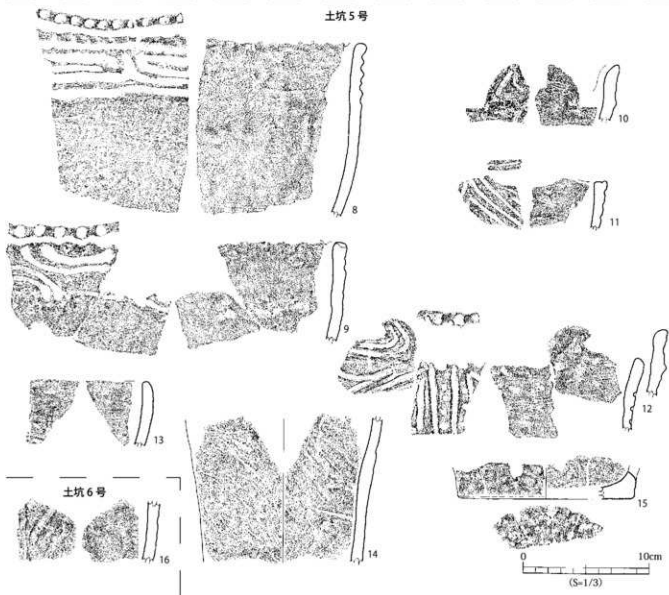
位に施されている。57は、棒状の工具による凹点が施されている。口縁部は波状を呈している。58は、口縁部に棒状の工具による横位の沈線文が施されている。口縁端部には、ヘラ状の工具による刺突文が施されている。59は、口縁部に棒状の工具による短沈線文が縦位に施され

ている。口唇部には棒状の工具による沈線文が縦位に施されている。60は、口縁部下位を削ることにより口縁部を肥厚させている。61は、口縁部にヘラ状の工具による沈線文が斜位や横位に施されている。62は、口縁部下位を削ることにより口縁部を肥厚させている。口縁部には、

土坑4号



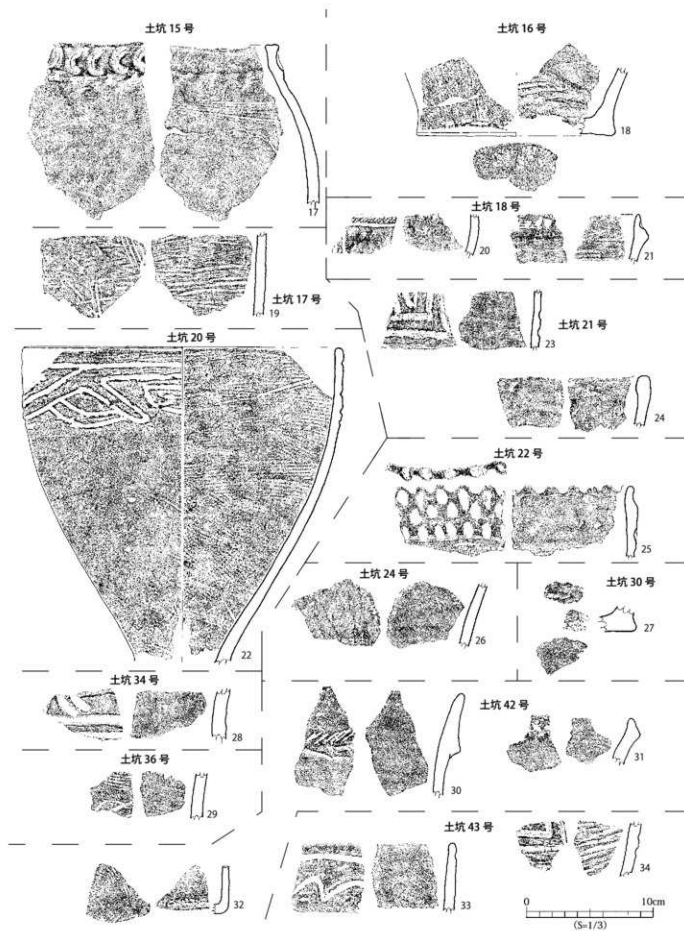
土坑5号



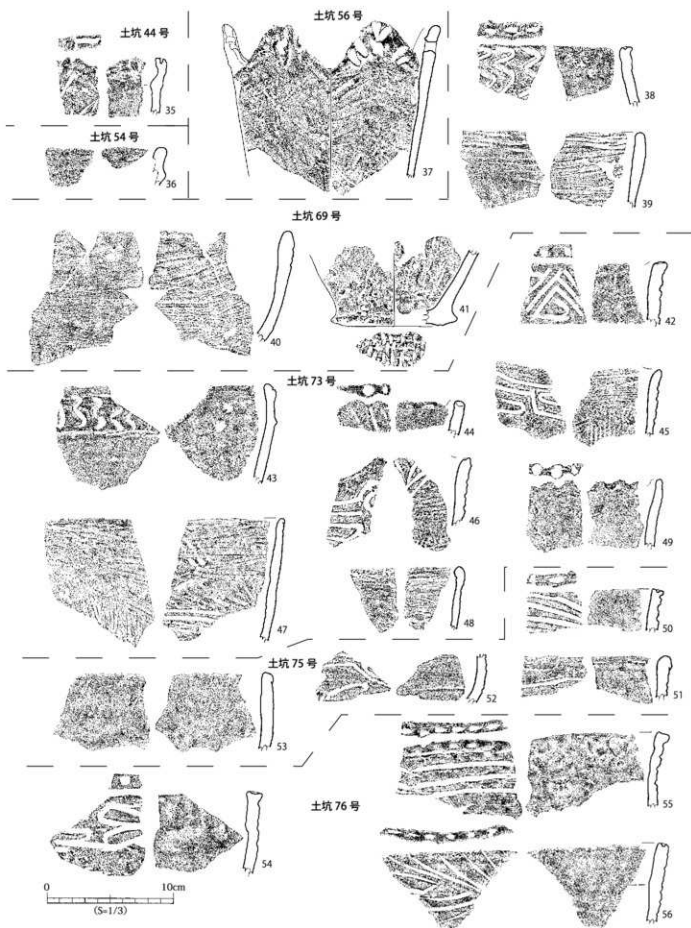
土坑6号



第91图 土坑内出土遺物実測图(1)

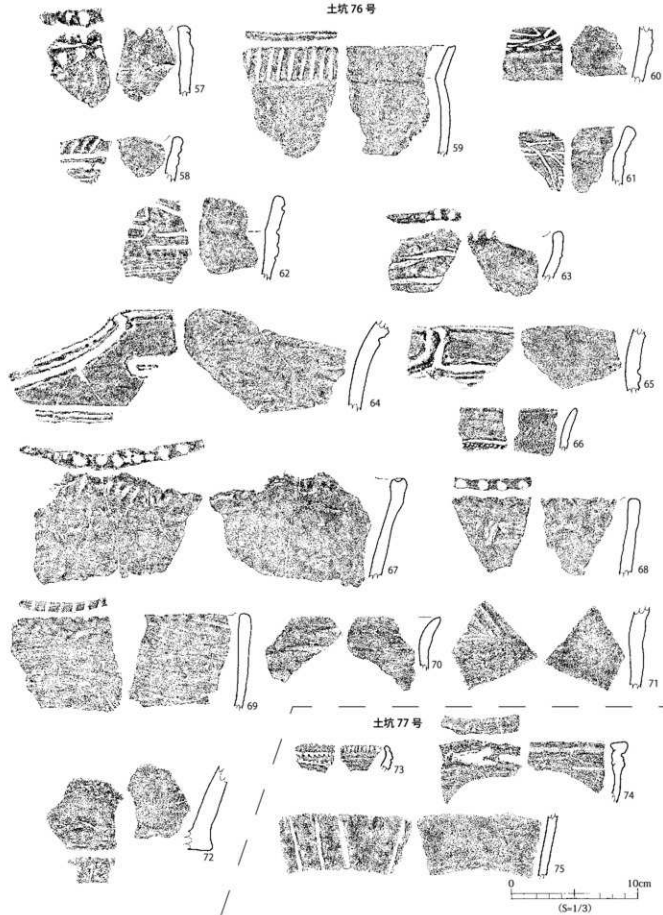


第92图 土坑内出土遗物实测图(2)



第93图 土坑内出土遗物实测图(3)

土坑 76 号

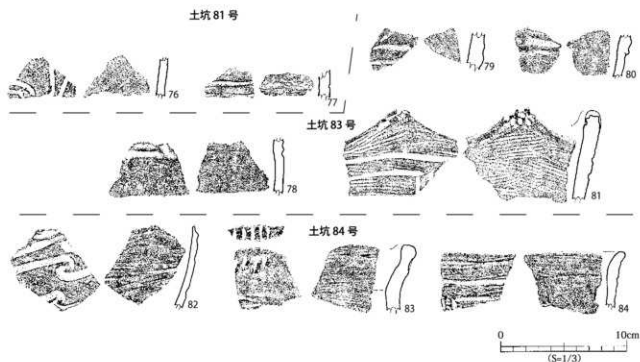


第94图 土坑内出土文物实测图(4)



ヘラ状の工具による沈線文が施されている。63は、口縁部に棒状の工具による沈線文が横位に施されている。64・65は、棒状の工具による深い沈線文が施されている。66は、沈線間に貝殻腹縁による刺突文が施されている。67は、台形状の厚い突起が付く。この突起の外表面には斜位の短沈線文が施されている。口唇部は、指頭による凹点が施されている。68は、無文の土器である。口縁部は波状を呈している。69は、無文の土器である。口縁部下位を削るにより口縁部を肥厚させている。口縁部は、貝殻の短い押し引きによる浅い刻み目により波状を呈している。70は、口縁部が外反する無文の土器である。72は、底部端部がやや膨らむタイプである。54から65は、2群であると思われる。73から75は、土坑77号から出土した土器である。73は、口縁部が内湾している。口縁部下位を削るにより口縁部を肥厚させている。口縁部には、貝殻による刺突文が横位に2条施されている。口縁部内面にヘラ状の工具による刻み目が施されている。74は、口縁部下位を削るにより口縁部を肥厚させている。口縁部には、ヘラ状の工具により横長のく字状の文様が施されている。口唇部は幅広く仕上げられている。75は、棒状の工具による沈線文がやや斜位に施されている。すべて2群であると思われる。76・77は、土坑81号から出土した土器である。78から81は、土坑83号から出土した土器である。78は、棒状の工具による浅い沈線文が横位や斜位に施されている。79は、ヘラ状の工具による沈線文が施されている。80は、指頭による沈線文が施されている。81は、口縁部に棒状の工具による沈線文が縦位や横位に施されている。78から80は2群、81は3群であると思われる。82から84は、土坑84号から出土した土器である。82は、ヘラ状の工具による沈線により入組文が施されている。83は、口縁部下位を削るにより口縁部を強調している。口縁部には、ヘラ状の工具による刺突文が施されている。84は、棒状の工具による縦位や横位の沈線文が施されている。82・83は2群、84は3群であると思われる。85から92は、土坑85号から出土した土器である。85は、口縁部に指頭による凹点や凹線文が施されている。86は、棒状の工具による2本1組の深い凹線により靴形文が施されている。87から91は、棒状の工具やヘラ状の工具による沈線文が横位に施されている。92は、口縁部下位を削るにより口縁部を肥厚させている無文の土器である。85は2群、86から91は3群であると思われる。93から98は、土坑86号から出土した土器である。ヘラ状の工具による沈線文が施されている。93は、指頭による凹点と凹線文が施されている。口縁部は波状を呈している。口縁部下位を削るにより口縁部を強調している。94は、口縁部に貝殻腹縁を削るにより口縁部下部を上部より薄くし、口縁部直下に棒状の工具による沈線文を施すことにより口縁部を

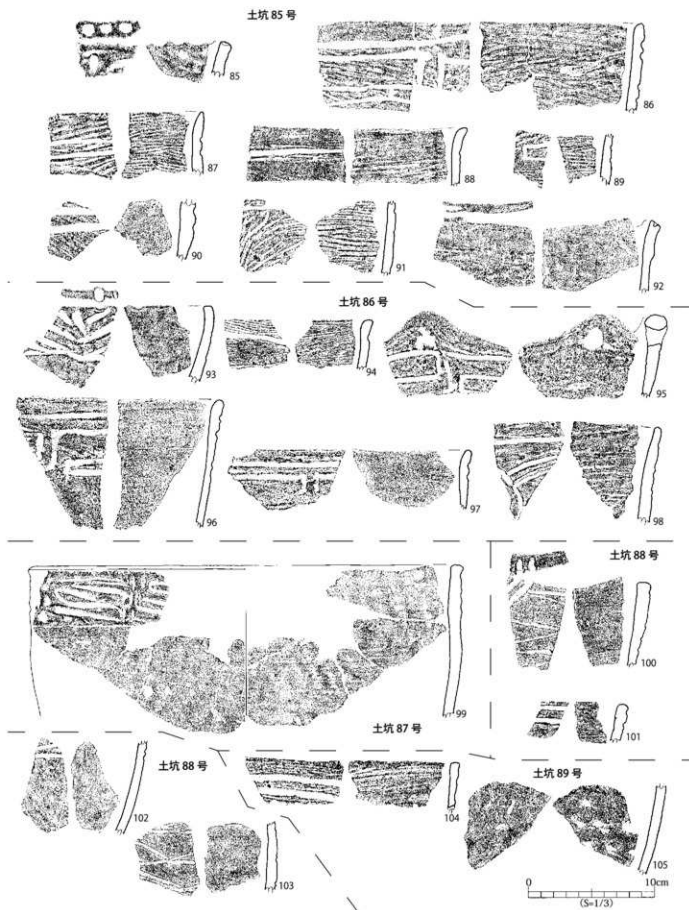
強調している。95から98は、棒状の工具による2本1組の沈線文が施されている。95は、口縁部に窓の付いた厚い山形の突起が付く。93・94は2群、95から98は3群であると思われる。99は、土坑87号から出土した土器である。口縁部下位を削るにより口縁部をやや肥厚させている。口縁部には、指頭による凹点とヘラ状の工具による凹線文が施されている。2群であると思われる。100から103は、土坑88号から出土した土器である。102は、口縁部下位を削るにより口縁部を肥厚させている。口縁部にヘラ状の工具で浅い沈線文が横位や斜位に施されている。103は、口縁部に横位の沈線文が施されている。100は2群、101から103は3群であると思われる。104・105は、土坑89号から出土した土器である。104は、ヘラ状の工具による凹線文が横位に施されている。口縁部はやや肥厚している。104は2群であると思われる。106は、土坑90号から出土した土器である。106は、口縁部下位を削るにより口縁部を肥厚させている。口縁部には、棒状の工具による浅い沈線文が横位に施されている。口唇部には、指頭による凹点が内側外側と交互に施されている。107から118は、土坑91号から出土した土器である。107は、口縁部下位を削るにより口縁部を強調している。口縁部には、棒状の工具による沈線文がく字状に描かれている。108は、口縁部にヘラ状の工具による沈線文を斜位や横位に施している。口縁部は波状を呈している。この凹点には爪痕が観察できる。109・110は、口縁部下位を削るにより口縁部を肥厚させている。109は、口縁部にヘラ状の工具による凹線文が施されている。110は、口縁部にヘラ状の工具による沈線文が縦位や横位に施されている。口縁部には、山形の突起が付く。111は、棒状の工具による沈線文が斜位や横位に施されている。112は、口縁部にヘラ状の工具による斜位の沈線により菱形文が施されている。口唇部には、沈線文が施されている。113・114は、棒状の工具による沈線文が横位に施されている。115は、竹管状の工具による浅い沈線文が施され、その沈線上に竹管状の工具による刺突文が施されている。117は、口縁部が大きく外反する無文の土器である。口縁部には指頭による凹点が施され、爪痕が観察される。118は、底部端部が膨らむタイプの底部である。107から112は2群、113から115は3群であると思われる。119は、土坑93号から出土した土器である。口縁部には、棒状の工具による沈線文が施されている。口縁部に窓のある山形の突起が付き、突起の上部から内面に棒状の工具による沈線文が施されている。120は、土坑94号から出土した無文の土器である。口唇部は、平らに仕上げられている。121は、土坑95号から出土した土器である。ヘラ状の工具による浅い沈線文と指頭による凹点が施されている。2群であると思われる。122は、土坑96号から出土した無文の土器である。



第95図 土坑内出土遺物実測図(5)

123から132は、土坑98号から出土した土器である。123は、棒状の工具による2本1組の沈線文が横位に施され、その下位にも沈線文が施されている。124は、口縁部に2本1組の沈線文が施されている。125は、棒状の工具による凹線文が横位や縦位に施されている。126は、ヘラ状の工具による沈線間に竹管状の工具による刺突文が施されている。127は、ヘラ状の工具による沈線間に貝殻腹縁による刺突文が施されている。128は、指頭による凹線文が施されている鉢形の土器である。胎土に滑石が混入されている。129・130は、無文の土器である。131は、内外面ともに丁寧なミガキが施されている。132は、円盤形の土製品である。123から127は3群、128は2群であると思われる。133は、土坑101号から出土した土器で、底部から胴部へくびれがなくひらきながら立ち上がるタイプの底部である。134から136は、土坑102号から出土した土器である。134は、口縁部に2本1組の沈線により靴形文が施されている。135は、横位の沈線文が施されている。136は、無文の土器である。134・135は、3群であると思われる。137は、土坑104号から出土した土器である。口縁部に棒状の工具による沈線により逆く字状の文様が施されている。138から140は、土坑106号から出土した土器である。138から140は、横位や斜位の沈線文が施されている。3群であると思われる。142から

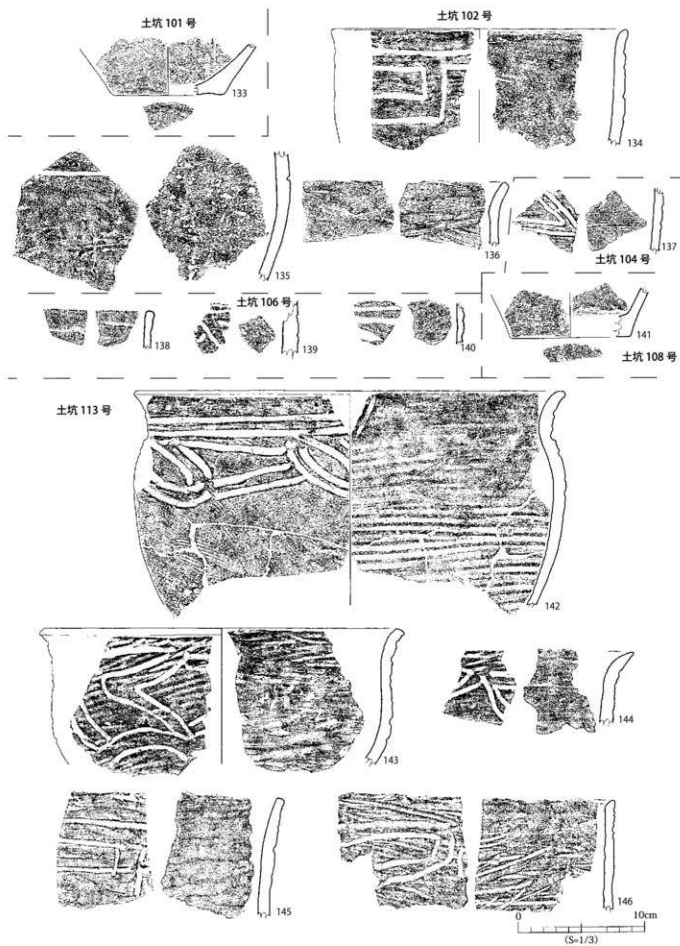
162は、土坑113号から出土した土器である。142から154は、口縁部にヘラ状の工具や竹管状の工具による2本1組の沈線により靴形文などの文様が施されている。155は、口縁部に棒状の工具による沈線文が縦位や横位に施されている。156・157は、器面調整が貝殻条痕である無文の土器である。159・160は、底部端部がやや膨らむタイプの底部である。161・162は、円盤形の土製品である。142から154は3群であると思われる。163から167は、土坑115号から出土した土器である。163は、棒状の工具による2本1組の浅い沈線文が施されている。器壁が薄いつくりである。164は、棒状の工具による沈線文が横位に施されている。165は、内外面ともにミガキが施され、口縁端部を厚く仕上げている。口唇部の外側には縄文が施され、内側には棒状の工具による沈線文が施されている。167は、底部端部が膨らむタイプの底部である。やや上げ底である。163・164は3群、165は4群であると思われる。168・169は、土坑116号から出土した土器である。170から176は、土坑117号から出土した土器である。170は、口縁部に刺突文が施されている。171は、口縁部下位を削ることにより口縁部をやや肥厚させている。棒状の工具による沈線により文様が施されている。172は、ヘラ状の工具による浅い沈線文が横位に施されている。173は、口縁部に棒状の工具による沈線文が施されてい



第96图 土坑内出土遗物实测图(6)

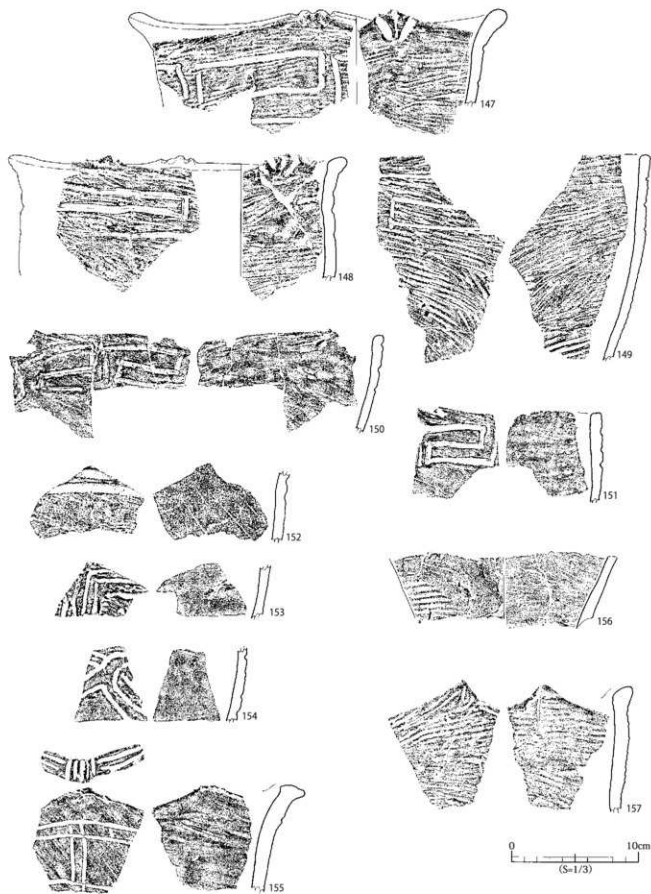


第97图 土坑内出土遗物实测图(7)



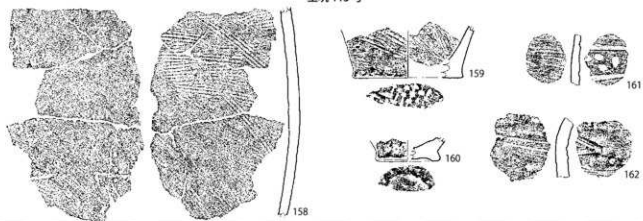
第98图 土坑内出土文物实测图(8)

土坑 113 号



第99图 土坑内出土文物实测图(9)

土坑 113 号



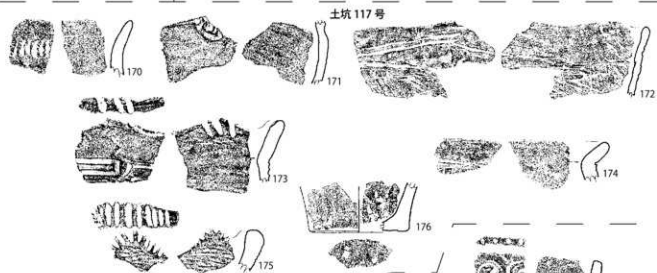
土坑 115 号



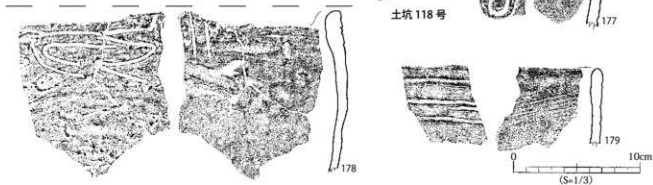
土坑 116 号



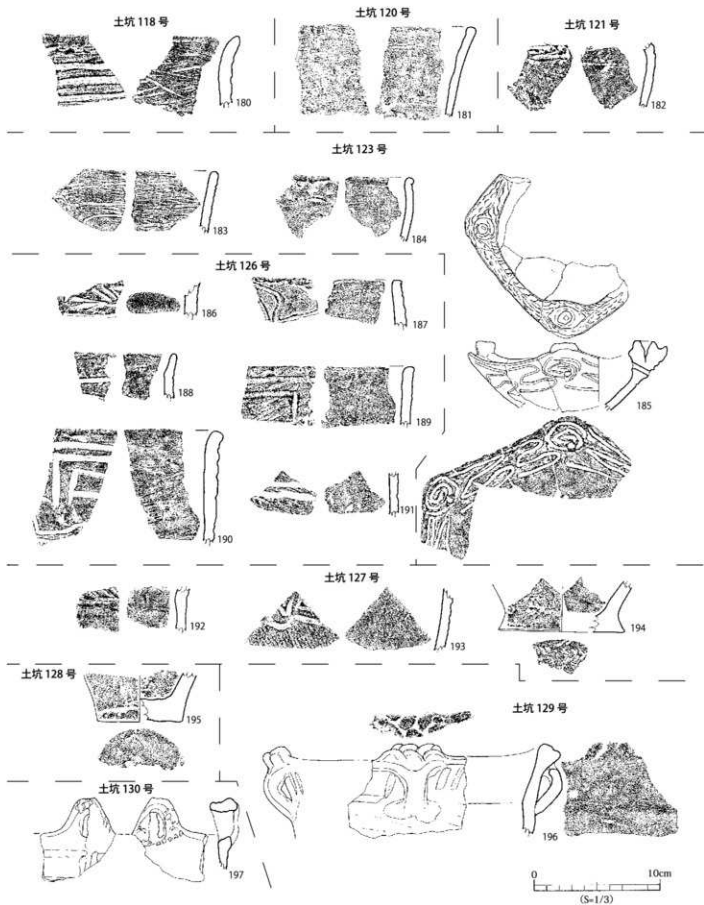
土坑 117 号



土坑 118 号



第100图 土坑内出土遗物实测图 (10)



第101图 土坑内出土遗物实测图 (11)



る。174は、ヘラ状の工具による沈線間に刺突文が施されている。175は、無文の土器である。山形の突起部を厚くし、頂部には刻み目が施されている。170・171は2群、172から174は3群であると思われる。177から180は、土坑118号から出土した土器である。177は、棒状の工具による沈線文が施されている。口唇部には細い棒状の工具による刺突文が施されている。178は、棒状の工具による沈線によりS字状などの文様が施されている。179は、棒状の工具による沈線文が横位に施されている。180は、ヘラ状の工具による沈線文が横位に施されている。177は2群、178から180は3群であると思われる。181は、土坑120号から出土した無文の土器である。182は、土坑121号から出土した土器である。棒状の工具による沈線間に刺突文が施されている。3群であると思われる。183から185は、123号土坑から出土した土器である。183は、口縁部に棒状の工具による沈線文が施されている。184は、無文の土器である。185は、口縁部に棒状の工具による沈線により渦巻きなどの文様が施されている。口唇部には貝殻腹縁による刺突文が施されている。台付き皿形土器である。186から191は、土坑126号から出土した土器である。186は、ヘラ状の工具による沈線が綾杉文状に施されている。187は、棒状の工具による沈線文が施されている。188から191は、棒状の工具による沈線文やヘラ状の工具による沈線文が横位に施されている。186・187は2群、188から191は3群であると思われる。192から194は土坑127号から出土した土器である。192は、口縁部下位を削るにより口縁部を肥厚させている。斜位の凹線文が施されている。193は、ヘラ状の工具による沈線文が施されている。194は、底部端部が彫らむタイプの底部である。192は2群、193は3群であると思われる。195は、土坑128号から出土した底部である。196は、土坑129号から出土した土器である。口縁部下位を削るにより口縁部を強調している。口縁部には、ヘラ状の工具による凹線文がやや斜位に施されている。X字状の把手が付く。把手の付く上部にはねじり紐状の突起が付く。2群であると思われる。197は、土坑130号から出土した土器である。口縁部に棒状の工具による沈線文が縦位や横位に施されている。口唇部には窓の付いた把手のような縦楕円形の突起が付く。この突起には、貝殻刺突文が施されている。3群であると思われる。198から200は、土坑131号から出土した土器である。198は、口縁部に縦位の短沈線文が施されている。口唇部は平らに仕上げられている。199は、口縁部に凹線文が横位に施されている。200は、口縁部が外反した無文の土器である。201から203は、土坑132号から出土した土器である。201は、棒状の工具による沈線文が施され、その沈線間をヘラ状の工具でナデている。202は、半葎竹管状の工具による沈線文が施されている。204から210は、

土坑133号から出土した土器である。204・207は、口縁部にヘラ状の工具による横位の沈線文が施されている。205は、棒状の工具による沈線文が逆く字状に施されている。口縁部内面に、棒状の工具による沈線文が施されている。206は、ヘラ状の工具による沈線文が施されている。208は、底部である。210は、円盤形の土製品である。204から207は、3群であると思われる。211から215は、土坑135号から出土した土器である。211は、棒状の工具による縦位の凹線文が施されている。212は、棒状の工具による沈線文がく字状に施されている。214・215は、無文の土器である。211から213は、2群であると思われる。216から219は、土坑137号から出土した土器である。216は、口縁部に棒状の工具による沈線文が横位に施されている。217は、沈線間に刺突文が施されている。218は、鉢形の土器であると思われる。216・217は、3群であると思われる。220から222は、土坑138号から出土した土器である。220は、口縁部に棒状の工具による沈線文が横位に施されている。221は、口縁部に棒状の工具による2本1組の横位や斜位の沈線文が施されている。222は、ヘラ状の工具による沈線文が施されている。すべて3群であると思われる。223から226は、土坑139号から出土した土器である。223は、棒状の工具による凹線文が施されている。凹線の端部には刺突文が施されているものもある。224・225は、ヘラ状の工具による沈線文が施されている。226は、沈線間に貝殻腹縁による刺突文が施されている。223は2群、224から226は3群であると思われる。227から235は、土坑140号から出土した土器である。227は、口縁部に指頭による凹線が施されている。口縁部は波状を呈している。229は、口縁部に横位の沈線文が施されている。230は、口縁部に棒状の工具による凹線文が施されている。にぶい山形の厚い突起が付く。頂部には6本の短凹線文が施されている。内面には棒状の工具による凹線で入組文が施されている。231は、棒状の工具による沈線文が施されている。口縁部内面にも、棒状の工具による沈線文が施されている。233から235は、沈線間に貝殻腹縁による刺突文が施されている。227は2群、228から235は3群であると思われる。236から239は、土坑141号から出土した土器である。236は、口縁端部に棒状の工具による刺突文が施され、その下位に横位の沈線文が施されている。237は、棒状の工具による沈線により入組文などが施されている。238は、棒状の工具による沈線文が施されている。239は、円盤形の土製品である。236は2群、237・238は3群であると思われる。240から242は、土坑144号から出土した土器である。240は、ヘラ状の工具による沈線文が横位に施されている。241・242は、口縁部がやや内湾した無文の土器である。240は3群であると思われる。243から246は、土坑146号から出土した土器である。243

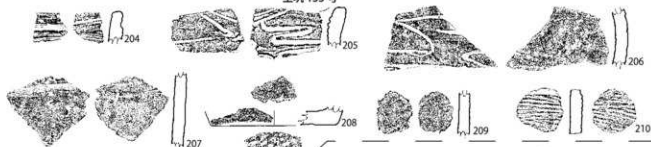
土坑 131 号



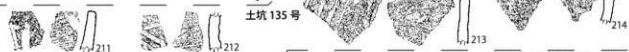
土坑 132 号



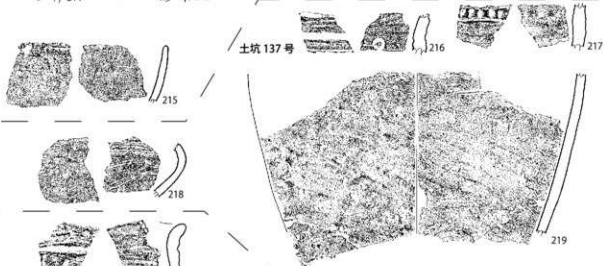
土坑 133 号



土坑 135 号



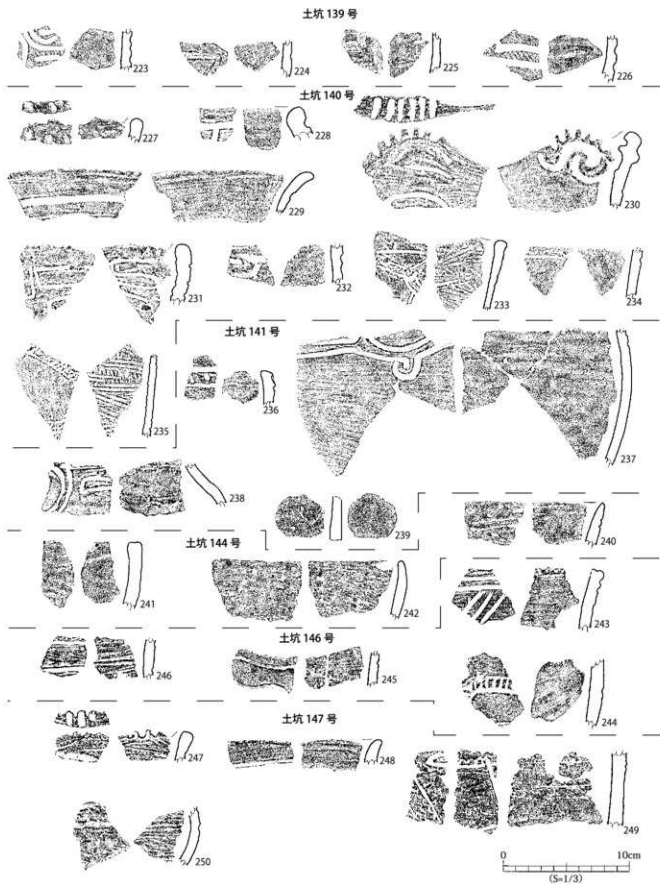
土坑 137 号



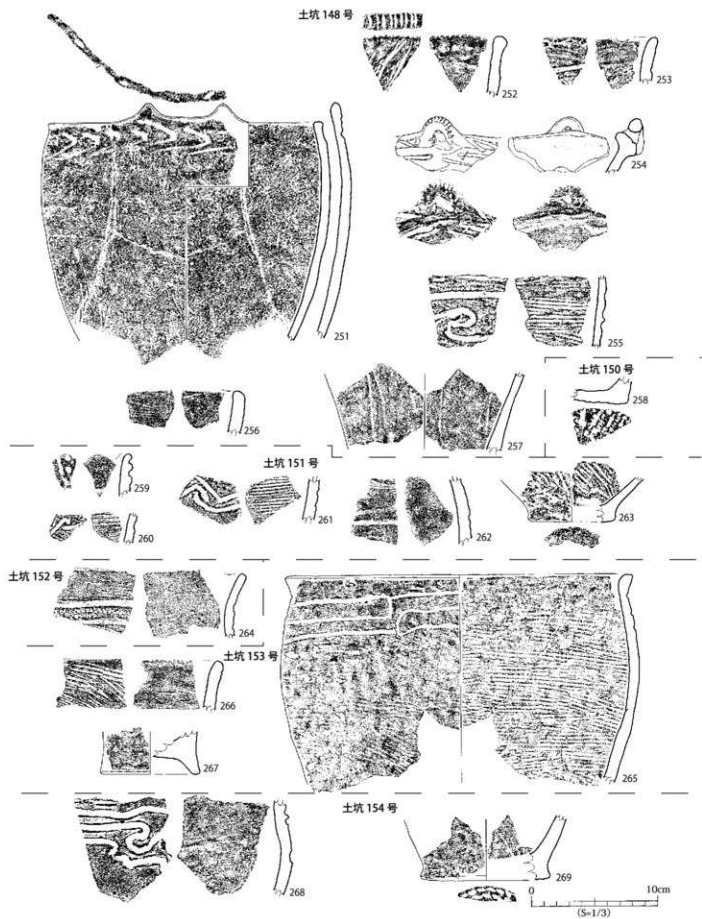
土坑 138 号



第102图 土坑内出土遗物实测图 (12)



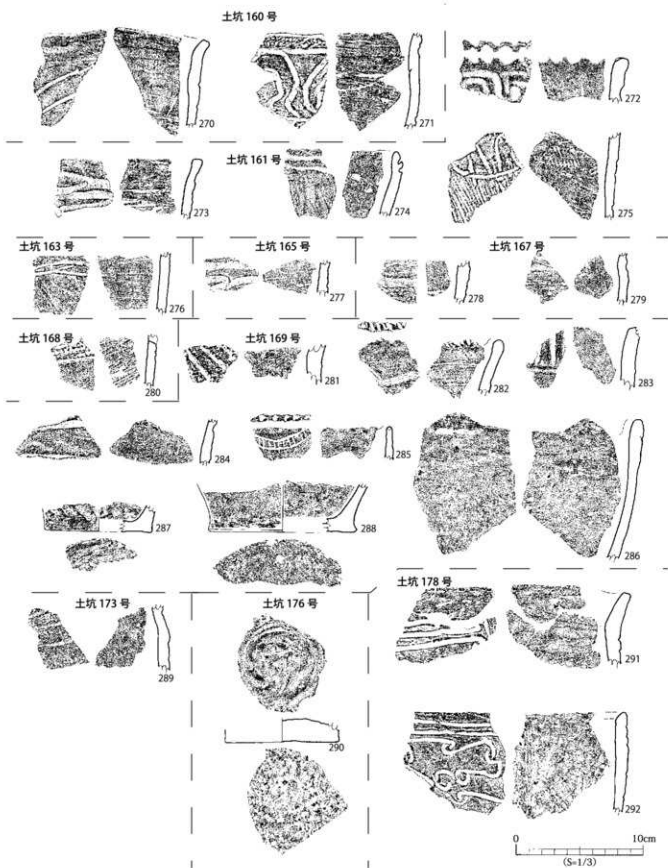
第103图 土坑内出土物实测图 (13)



第104图 土坑内出土遗物实测图 (14)

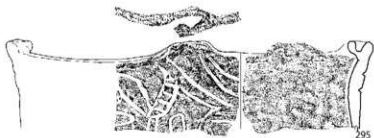
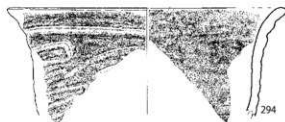
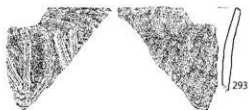
は、口縁部に横位や斜位の凹線文が施されている。244は、沈線間にヘラ状の工具による刺突文が施されている。245・246は、横位に沈線文が施されている。243は2群、244から246は3群であると思われる。247から250は、土坑147号から出土した土器である。247は、口縁部に棒状の工具による凹線文が施されている。口縁部は、波状を呈している。248は、棒状の工具により横位の沈線文が施されている。249・250は、沈線間に貝殻腹縁による刺突文が施されている。247は2群、248から250は3群であると思われる。251から257は、土坑148号から出土した土器である。251は、口縁部に棒状の工具による凹線によりく字状の文様が施されている。口唇部には低い突起が付き、ヘラ状の工具による刺突文が施されている。252は、口縁部に斜位の沈線文が施されている。口唇部には、ヘラ状の工具による刻み目が施されている。253は、ヘラ状の工具により横位の沈線文が施されている。254は、口縁部に棒状の工具による凹線文が施されている。口唇部には棒状の工具による沈線文が施されている。255は、凹線間に貝殻腹縁による刺突文が施され、器壁が薄いつくりである。256は、無文の土器である。251・252は2群、253から255は3群であると思われる。258は、土坑150号から出土した土器である。底部外面を指ナデした痕が残る。259から263は、土坑151号から出土した土器である。259は、口縁部に竹管状の工具による凹点と棒状の工具による縦位の短沈線文が施されている。260・261は、ヘラ状の工具や棒状の工具による沈線により入組文が施されている。262は、ヘラ状の工具による浅い沈線文が横位に施されている。259は2群、260から262は3群であると思われる。264は、土坑152号から出土した土器である。沈線間に貝殻腹縁による刺突文が施されている。265から267は、土坑153号から出土した土器である。265は、口縁部に棒状の工具による沈線文が施されている。266は、外面の器面調整が貝殻条痕である無文の土器である。267は、脚状の底部である。265は3群であると思われる。268・269は、土坑154号から出土した土器である。268は、ヘラ状の工具による沈線文が施されている。269は、底部端部がやや膨らむタイプの底部である。270・271は、土坑160号から出土した土器である。270は、ヘラ状の工具による浅い沈線文が施されている。271は、棒状の工具による沈線文が施され、沈線間に貝殻腹縁による刺突文が施されている。ともに3群であると思われる。272から275は、土坑161号から出土した土器である。272は、口縁部に指頭による凹点と凹線文が施されている。口縁部は波状を呈している。胎土に少量の滑石が混入されている。273は、指頭による凹線文が横位に施されている。274は、口縁部にヘラ状の工具による沈線文が横位に2条施されている。275は、ヘラ状の工具による沈線文が施されている。276は、

土坑163号から出土した土器である。ヘラ状の工具による沈線文が施されている。277は、土坑165号から出土した土器である。指頭による凹線文が施されている。278・279は、土坑167号から出土した土器である。280は、土坑168号から出土した土器である。沈線間に貝殻腹縁による刺突文が施されている。3群であると思われる。281から288は、土坑169号から出土した土器である。281は、斜位に凹線文が施されている。胎土に滑石が混入されている。282は、ヘラ状の工具による沈線文が施されている。口唇部は、ヘラ状の工具により刻み目が施されている。283は、口縁部下位を削ることにより口縁部を強調している。縦位の沈線文が施されている。284は、棒状の工具による沈線文が施されている。285は、棒状の工具による沈線間にヘラ状の工具による刻み目が施されている。口唇部には、棒状の工具による刺突文が施されている。286は、山形の突起が付く無文の土器である。287・288は、底部端部がやや膨らむタイプの底部である。281から283は2群、284・285は3群であると思われる。289は、土坑173号から出土した土器である。沈線間に縄文が施されている。4群であると思われる。290は、土坑176号から出土した土器である。内側の中央部分を厚くした底部である。291・292は、土坑178号から出土した土器である。291は、口縁部に棒状の工具による沈線文が施されている。292は、2条の横位の沈線文の下位に入組文が施されている。ともに3群であると思われる。293から295は、土坑183号から出土した土器である。293は、ヘラ状の工具による凹線文が施されている。294は、ヘラ状の工具による凹線文が横位に施され、その下位に波状の凹線文が施されている。295は、口縁部にヘラ状の工具により沈線文が施されている。沈線間には、ヘラ状の工具による刺突文が施されている。口唇部には、巻き貝の一種であるヘナタリによると思われる回転文(擬似縄文)が施されている。口唇部には台形状の厚い突起が付く。293から295は3群であると思われる。296は、土坑191号から出土した土器である。棒状の工具による浅い沈線文が横位に施されている。297・298は、土坑192号から出土した土器である。297は、口縁部に粘土紐を貼り付け突起を作り出している。298は、無文の土器である。299は、土坑193号から出土した土器である。口縁部に横位の沈線文が施されている。3群であると思われる。300から304は、土坑194号から出土した土器である。300は、口縁部に横位の沈線文が施されている。301は、棒状の工具による沈線文が施されている。302は、口縁部が反らす無文の土器である。304は、底部端部が膨らむタイプである。300・301は、3群であると思われる。305・306は、土坑196号から出土した土器である。305は、口縁部に棒状の工具による沈線文が横位や斜位に施されている。口縁部には低い山形の突起が付く。突起内面に



第105图 土坑内出土物实测图 (15)

土坑 183 号



土坑 191 号



土坑 192 号



土坑 193 号



土坑 194 号



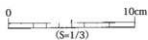
土坑 196 号



土坑 198 号



土坑 201 号

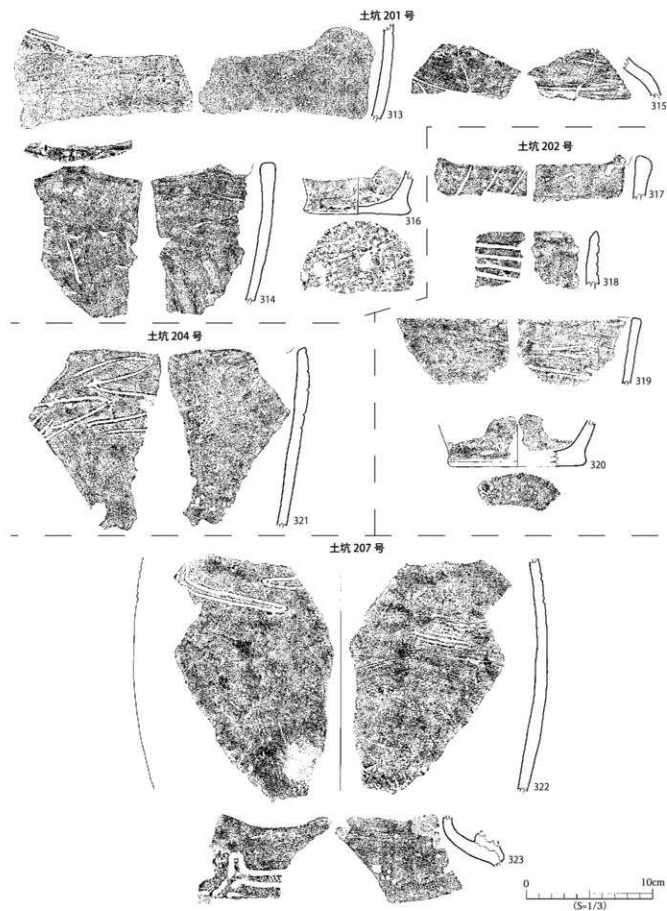


第106图 土坑内出土遗物实测图 (16)

は棒状の工具による沈線によりV字状の文様が施されている。306は、横位の沈線文が施されている。307から310は、土坑198号から出土した土器である。307は、棒状の工具による沈線文が施されている。309は、外面にミガキが施され、沈線間に縄文が施されている。310は、底部端部がやや膨らむタイプである。309は4群であると思われる。311から316は、土坑201号から出土した土器である。311は、ヘラ状の工具による沈線文が施されている。312は、口縁部に棒状の工具による沈線文が横位に施されている。口縁部内面には、棒状の工具による沈線文が施されている。313は、ヘラ状の工具による沈線文が施されている。314は、無文の土器である。口唇部には略台形状の突起が付く。315は、鉢形の土器の可能性がある。316は、底部端部が膨らむタイプであり、底が薄い。311から313は、3群であると思われる。317から320は、土坑202号から出土した土器である。317は、ヘラ状の工具による沈線文が斜位に施され、低い山形の突起が付く。318は、口縁部に棒状の工具による横位の沈線文が4条施されている。319は、無文の土器である。320は、底部端部がやや膨らむタイプである。317は2群、318は3群であると思われる。321は、土坑204号から出土した土器である。口縁部に棒状の工具による沈線により横S字状の文様が施されている。3群であると思われる。322・323は、土坑207号から出土した土器である。322は、棒状の工具による2本1組の平行な沈線文が施されている。323は、沈線間に縄文が施されている。322は3群、323は4群であると思われる。324から326は、土坑212号から出土した土器である。324は、棒状の工具による沈線文が横位に施されている。325は、無文の土器である。326は、底部から胴部にくびれがなくややひらきながら立ち上がるタイプの底部である。327から331は、土坑213号から出土した土器である。327は、棒状の工具による2本1組の沈線によりステップ状の文様が施されている。328は、棒状の工具による2本1組の沈線文が施されている。329は、ヘラ状の工具による沈線により山形の文様が施されている。330は、無文の土器である。231は、底部端部が膨らむタイプである。327から329は3群であると思われる。332から336は、土坑215号から出土した土器である。332は、棒状の工具による2本1組の沈線文が施されている。333は、棒状の工具による沈線文が施されている。口縁部には、突起が付く。335は、口縁部に棒状の工具による沈線文が施されている。336は、底部端部が膨らむタイプである。332から335は3群であると思われる。337から346は、土坑217号から出土した土器である。337は、口縁部に指頭による凹点とヘラ状の工具による浅い沈線文が施されている。凹点には、爪痕が観察される。338は、口縁部に沈線文と刺突文が施されている。339は、口縁部下位を削るこ

とにより口縁部を強調している。口縁部には棒状の工具による横位の沈線文が施されている。340は、棒状の工具による2本1組の沈線文が施されている。341・342は、ヘラ状の工具による沈線文が施されている。343は、沈線間に縄文が施されている。344は、口縁部に厚い山形の突起が付く、この突起の頂部には凹点が施されている。345・346は、底部である。337から339は2群、340から342は3群、343は4群であると思われる。347から350は、土坑219号から出土した土器である。347は、ヘラ状の工具による沈線文が横位に施されている。348は、半截竹管状の工具により文様が施されている。349は、底部端部がやや膨らむタイプである。347・348は3群であると思われる。351は、土坑222号から出土した土器である。口縁部には、棒状の工具による沈線文が縦位と横位に施されている。2群であると思われる。352・353は土坑224号から出土した土器である。352は、口縁部下位を削ることにより口縁部を強調している。口縁部には、縦位と横位の沈線文が施されている。353は、口縁部がく字状を呈している。口唇部には、1条の沈線文が施されている。352は、2群であると思われる。354は、土坑229号から出土した土器である。ヘラ状の工具による沈線で格子文が施されている。355は、土坑231号から出土した土器である。沈線間には貝殻腹縁による刺突文が施されている。3群であると思われる。356・357は、土坑232号から出土した土器である。356は、棒状の工具による深い沈線文が施されている。3群であると思われる。358から360は、土坑234号から出土した土器である。358は、無文の土器である。359・360は、底部である。361から363は、土坑235号から出土した土器である。361は、ヘラ状の工具による凹線文が横位に施され、その下位に波状の文様が施されている。362は、ヘラ状の工具による沈線文が横位に施されている。ともに3群であると思われる。364から370は、土坑237号から出土した土器である。364は、棒状の工具による2本1組の沈線文が施されている。365・366は、内外面ともにミガキが施されている。365は、口唇部に縄文が施され、口唇部中央に沈線文が施されている。366は、沈線間に縄文が施されている。鉢形の土器であると思われる。367・368は、無文の土器である。269は、底部端部が膨らむタイプである。370は、台付き皿形土器の脚であると思われる。底部外面には、棒状の工具による沈線文が深く施されている。脚の部分にはヘラ状の工具による沈線により回転四角文が施されている。364は3群、365・366は4群であると思われる。371から375は、土坑238号から出土した土器である。371は、棒状の工具による沈線文が施されている。372は、棒状の工具による沈線によりステップ状の文様が施されている。373は、無文の土器である。補修のための穿孔がある。口唇部には平らに仕上げ、沈線が施され



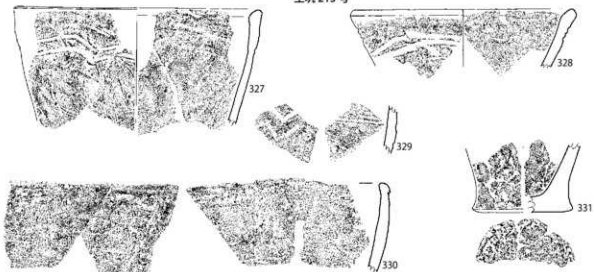


第107图 土坑内出土遗物实测图 (17)

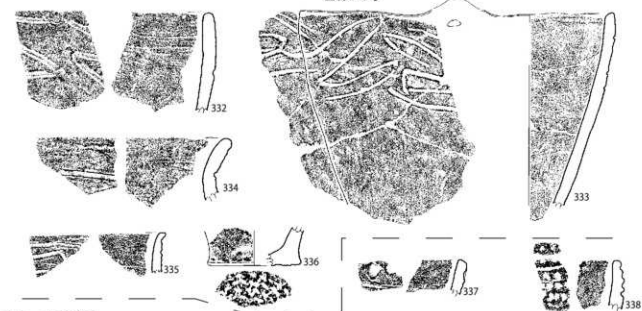
土坑 212 号



土坑 213 号



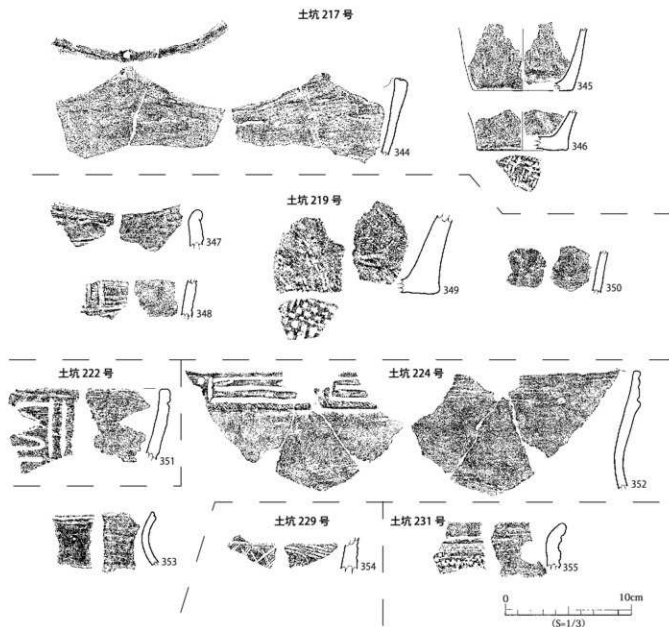
土坑 215 号



土坑 217 号



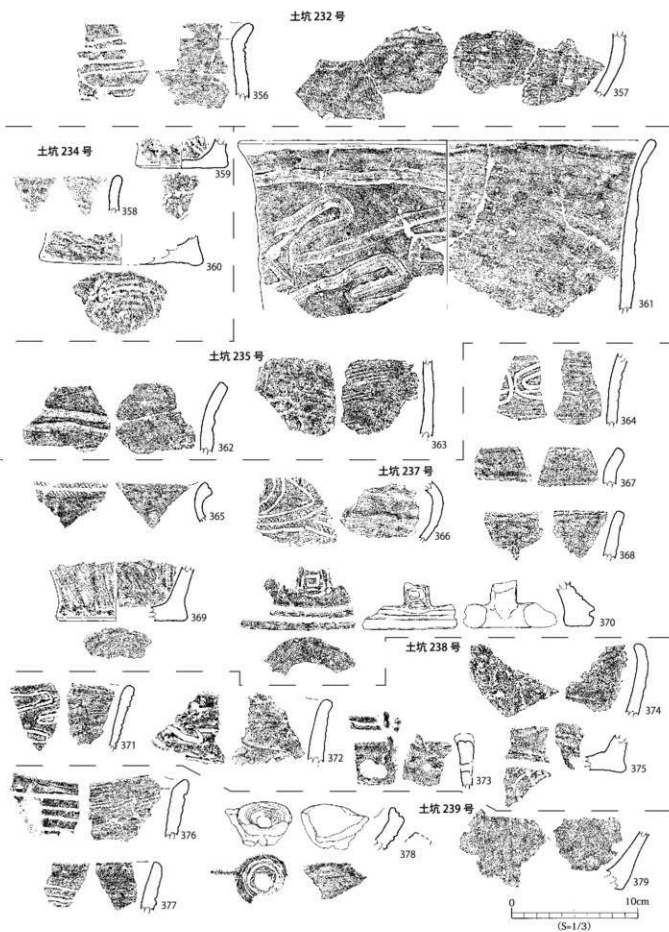
第108图 土坑内出土遗物实测图 (18)



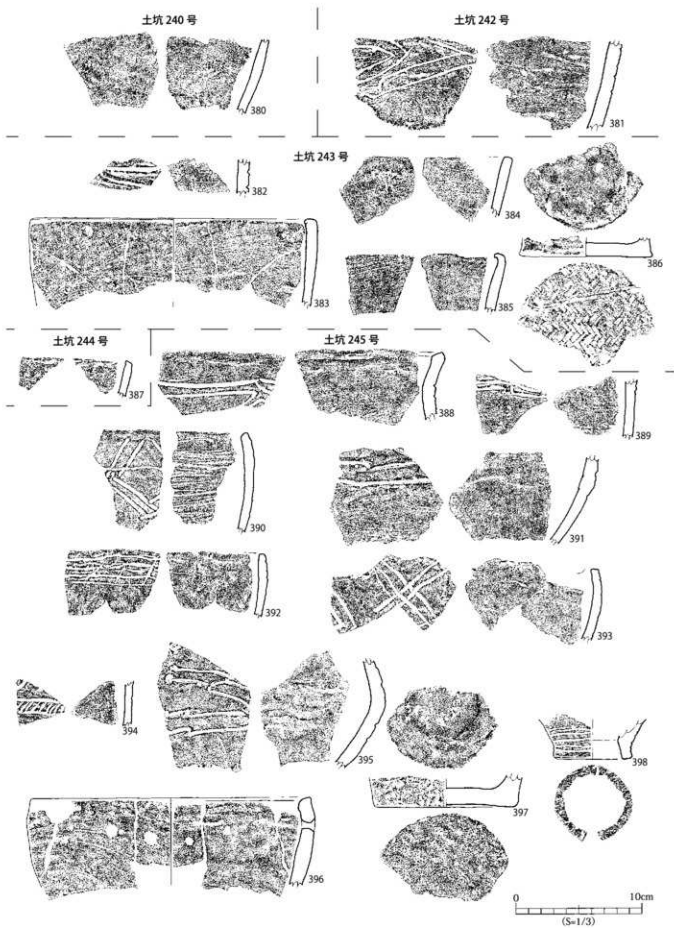
第109図 土坑内出土遺物実測図 (19)

ている。内面から外面に粘土紐状の突帯が付く。374は、口縁部が内湾する無文の土器である。375は、底部端部がやや膨らむタイプである。371・372は3群であると思われる。376から379は、土坑239号から出土した土器である。376は、口縁部には棒状の工具による沈線文が横位に施されている。377は、口縁部に棒状の工具による沈線文が横位に施されている。378は、把手が付く飾りの部分である。上面は円形を呈し、ヘラ状の工具による沈線により円形の文様が施されている。沈線間には、貝殻腹縁による刺突文が施されている。376から378は3群であると思われる。380は、土坑240号から出土した土器である。内外面ともにナデにより仕上げられている。

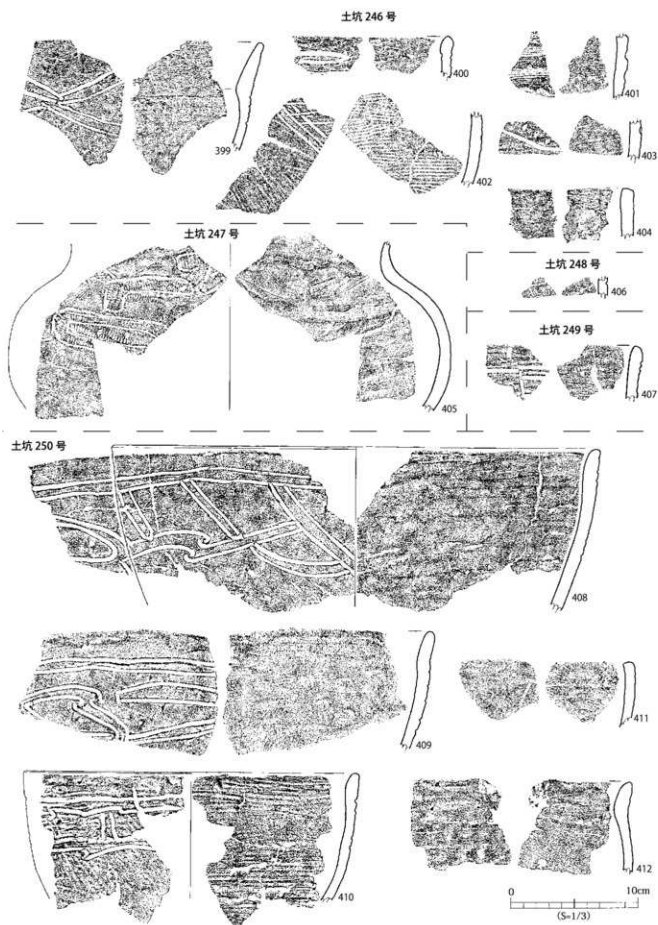
381は、土坑242号から出土した土器である。ヘラ状の工具による沈線文が施されている。382から386は、土坑243号から出土した土器である。382は、棒状の工具による沈線文が施されている。383から385は、無文の土器である。386は、底部外面に成形時の指頭痕を観察できる。387は、土坑244号から出土した無文の土器である。388から398は、土坑245号から出土した土器である。388から393は、横位や斜位の沈線文が施されている。388・389・391は、棒状の工具による2本1組の平行な沈線により文様が施されている。390は、棒状の工具による沈線により菱形の文様が施されている。392は、横位の沈線文が4条施され、この沈線文を切るように斜位の短



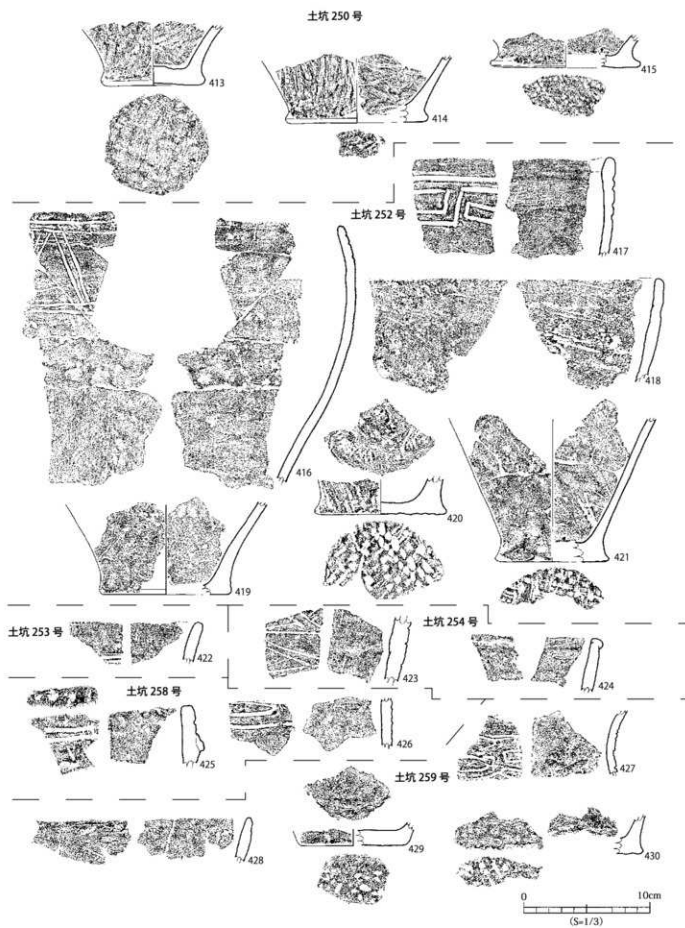
第110图 土坑内出土遗物实测图 (20)



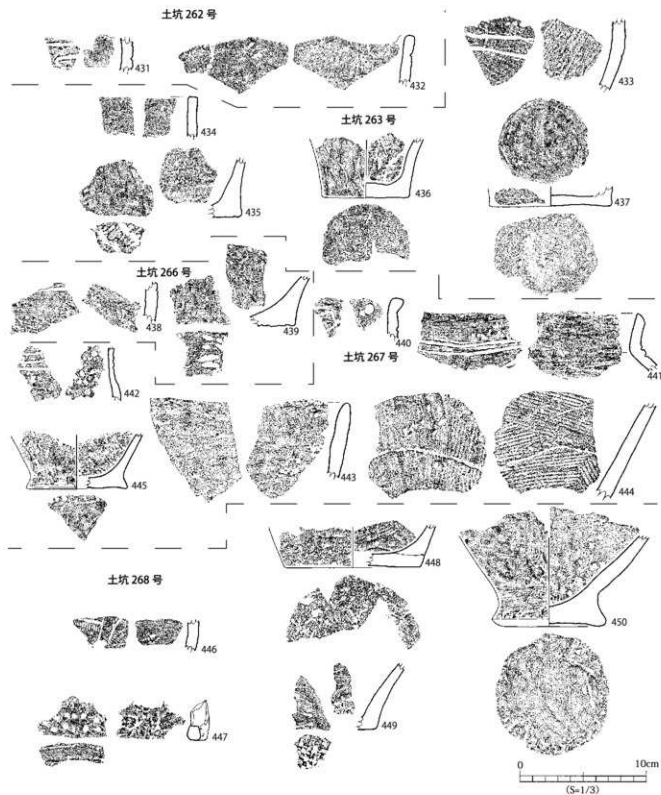
第111图 土坑内出土遗物实测图 (21)



第112图 土坑内出土遗物实测图 (22)



第113图 土坑内出土遗物实测图 (23)

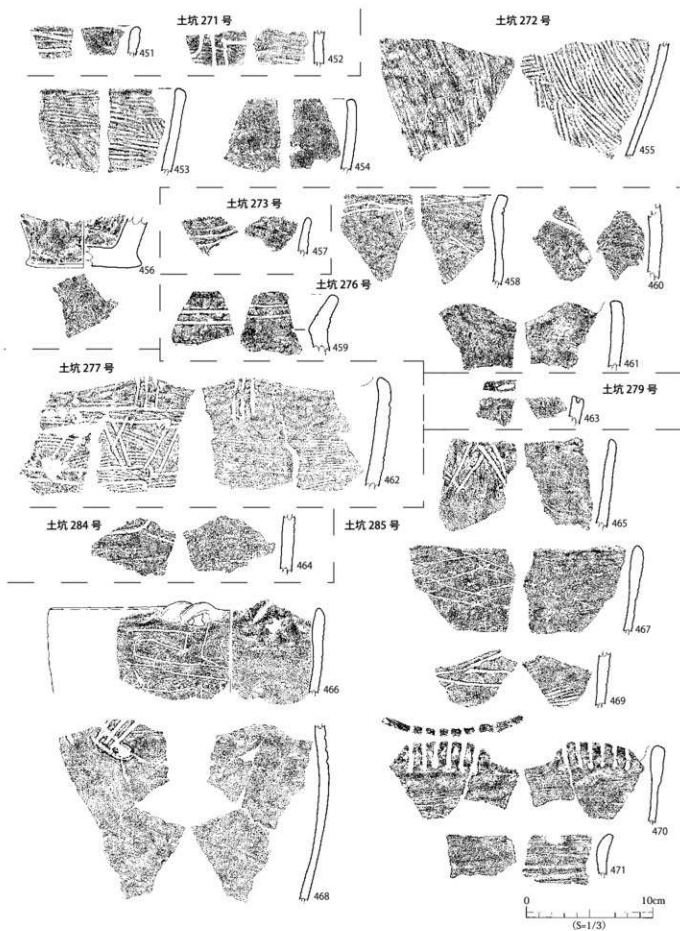


第114図 土坑内出土遺物実測図 (24)

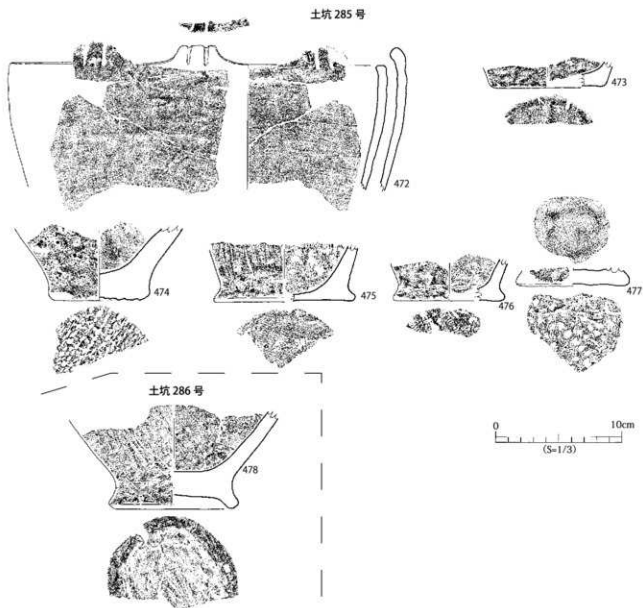
沈線文が施されている。393は、口唇部に台形状の突起が付く。突起の外面には2本1組の沈線文が交差するように施されている。394は、沈線間にヘラ状の工具による刻目が横位に施されている。395は、2本1組の沈線による入組文が施されている。鉢形の土器の可能性が

ある。396は、無文の土器である。口縁部に補修のための穿孔がある。397は、底部から胴部へはぼくびれがなくひらきながら立ち上がるタイプである。398は、脚状を呈した底部で、外面には横位の沈線文が施されている。399から404は、土坑246号出土の土器である。399は、棒





第115图 土坑内出土遗物实测图 (25)



第116図 土坑内出土遺物実測図 (26)

状の工具による2本1組の沈線文が施されている。400は、棒状の工具による沈線文が施されている。403は、沈線間に棒状の工具による刺突文が施されている。404は、無文の土器である。399から403は3群であると思われる。405は、土坑247号から出土した土器である。沈線間にヘナタリによると思われる回転文(擬似縄文)が施されている。鉢形土器であると思われる。406は、土坑248号から出土した土器である。ヘラ状の工具による沈線文が施されている。407は、土坑249号から出土した土器である。口縁部に棒状の工具による沈線文が縦位や斜

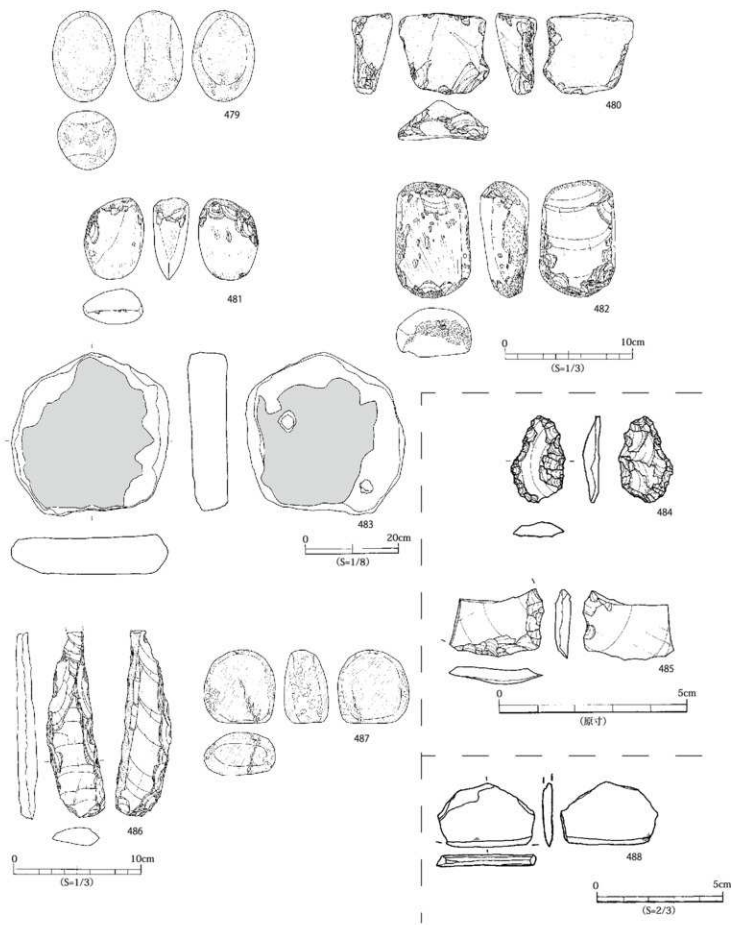
位に施されている。3群であると思われる。408から415は、土坑250号から出土した土器である。408から410は、棒状の工具による沈線文を2条横位に施し、その下位に2本1組の沈線文が施されている。411・412は、無文の土器である。412は、口縁部が外反する。413から415は、底部端部が膨らむタイプである。408から410は、3群であると思われる。416から421は、土坑252号から出土した土器である。416・417は、2本1組の沈線文が施されている。417は、靴形文が施されている。418は、無文である。419から421は、底部端部がやや膨らむタイプであ

る。421は、底部端部に指頭痕が観察される。416・417は3群であると思われる。422は、土坑253号から出土した土器である。口縁部に横位の沈線文が施されている。3群であると思われる。423・424は、土坑254号から出土した土器である。423は、ヘラ状の工具による2本1組の沈線により扇歯状の文様が施されている。424は、無文である。口唇部は、平らに仕上げである。425・426は土坑258号から出土した土器である。425は、太い突帯を作り出すことにより口縁部を強調している。口縁部には、棒状の工具により横位の沈線文が2条施されている。口縁部は波状を呈している。426は、棒状の工具による沈線文が施されている。425は2群、426は3群であると思われる。427から430は、土坑259号から出土した土器である。427は、ヘラ状の工具による沈線文が施されている。428は、無文の土器である。429・430は、底部である。427は、3群であると思われる。431・432は、土坑262号から出土した土器である。431は、棒状の工具による沈線文が施されている。432は、無文の土器で、低い山形の突起が付く。433から437は、土坑263号から出土した土器である。433は、棒状の工具による沈線文が横位に施されている。434は、無文の土器である。435は、底部端部がやや膨らむタイプの底部である。436・437は、底部から胴部へほとんどびれがなくややひらきながら立ち上がるタイプである。438・439は、土坑266号から出土した土器である。438は、棒状の工具による横位の沈線文が施されている。439は、底部端部がやや膨らむタイプの底部である。440から445は、土坑267号から出土した土器である。440から442は、口縁部に棒状の工具による沈線文が施されている。440は、口縁端部が外反するものである。441は、頸部に棒状の工具による深い沈線文が2条施されている。443は、無文の土器である。445は、底部端部が膨らむタイプの底部である。440から442は、3群であると思われる。446から450は、土坑268号から出土した土器である。446は、沈線間に貝殻腹縁の刺突文が施されている。447から450は、底部である。447は、意をもつ脚状の底部であり、棒状の工具による刺突文が施されている。448は、削りにより成形し、底部から胴部へややひらきながら立ち上がるタイプの底部である。450は、底部端部が膨らむタイプである。446は3群であると思われる。451・452は、土坑271号から出土した土器である。ともに、棒状の工具による沈線文が施されている。3群であると思われる。453から456は、土坑272号から出土した土器である。453は、器面調整が内外面ともに貝殻条痕である無文の土器である。454は、口縁部がやや内湾する無文の土器である。456は、底部端部が膨らむタイプである。457は、土坑273号から出土した土器である。口縁部にヘラ状の工具による横位の沈線文が施されている。3群であると思われる。458から

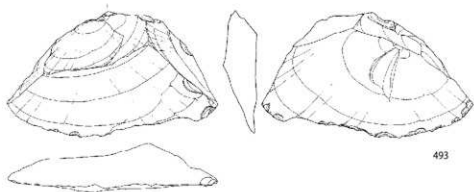
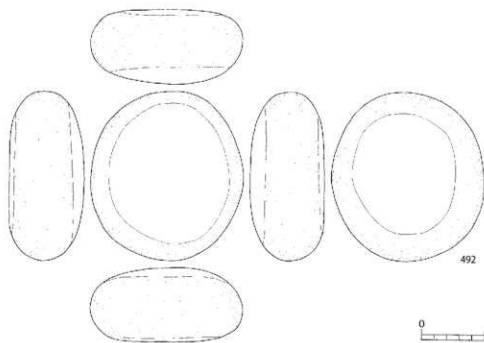
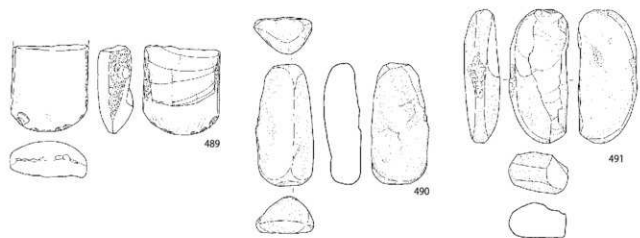
461は、土坑276号から出土した土器である。458は、棒状の工具による2本1組の沈線によりステップ状に文様が施されている。459は、棒状の工具による沈線文が2条横位に施されている。461は、無文の土器である。458から460は3群であると思われる。462は、土坑277号から出土した土器である。ヘラ状の工具による2本1組の沈線文が施されている。3条の沈線文が口縁部上位から頂部・口縁部内面へと施されている。3群であると思われる。463は、土坑279号から出土した土器である。無文の土器である。口唇部にはヘラ状の工具による深い刺突文が施されている。464は、土坑284号から出土した土器である。沈線間には貝殻腹縁による刺突文が施されている。3群であると思われる。465から477は、土坑285号から出土した土器である。465は、2本1組の斜位の沈線により山形の文様が施されている。466は、口縁部に縦位や横位の沈線文が施されている。口唇部には、ねじり紐状の突起が付く、その下位には意が付いている。467は、口縁部にヘラ状の工具による細い2本1組の沈線により菱形の文様が施されている。468は、棒状の工具による沈線文が施されている。469は、ヘラ状の工具による横位や斜位の沈線文が施されている。470から472は、無文の土器である。470・472は、口唇部に台形状の突起が付く。この突起の外側から内側にかけて棒状の工具による沈線文が施されている。この沈線の終始は刺突状になっている。473から477は、底部である。ほとんどが底部端部が膨らむタイプであるが、474は底部から胴部にひらきながら立ち上がるタイプである。478は、土坑286号から出土した土器である。底部端部が膨らみ接着面が狭い上げ底状の底部である。

## (2) 出土石器 (第117図～第120図)

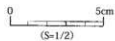
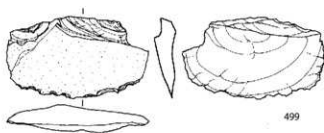
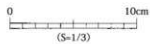
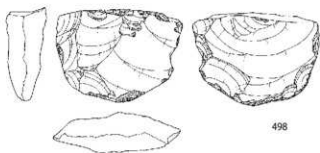
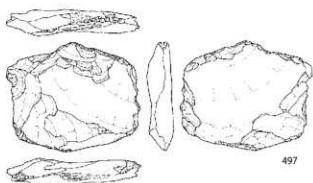
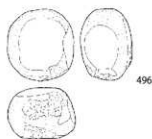
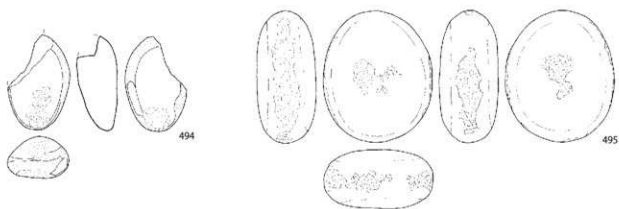
479は、土坑17号から出土した磨石である。表裏面ともに磨面を有する。下面に使用による敲打痕が見られる。480は、土坑20号から出土した敲石である。両側面に敲打痕があり、わずかに抉りが入る。481・482は、土坑21号から出土した石器である。481は、磨製石斧の刃部片である。482は、上下面に敲打痕があり、磨製石斧を転用した敲石である。483は、土坑21号から出土した石皿である。表裏面ともに顕著な磨面を有する。484は、土坑48号から出土した二次加工剥片である。表裏面ともに両側面及び上部に剥離が施されている。485から487は、土坑73号から出土した石器である。485は、スクレイパーである。486は、打製石斧である。487は、磨製石である。表裏面及び下面に磨面を有する。両側縁には、敲打痕がある。488は、擦切石器である。刃部に並行する擦痕が見られる。489から491は、土坑145号から出土した石器である。489は、磨製石斧の刃部片である。刃部には刃こぼれが観察される。490・491は、磨製石である。491は、表面右側を欠損しているが、表裏面ともに磨面を有している。左



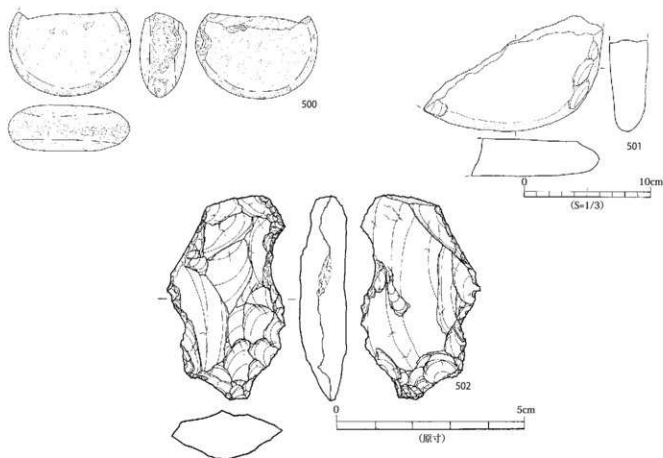
第117図 土坑内出土遺物実測図 (27)



第118図 土坑内出土遺物実測図 (28)



第119図 土坑内出土遺物実測図 (29)



第120図 土坑内出土遺物実測図(30)

側には強い敲打痕が観察される。492は、土坑157号から出土した磨石である。表裏面ともに磨面を有している。493は、土坑161号から出土したスクレイパーである。裏面下縁に剥離が観察される。494は、土坑198号から出土した磨石である。上部を欠損している。表裏面に磨面を有し、表裏面下部に敲打痕が見られる。495は、土坑207号から出土した磨石である。496は、土坑217号から出土した磨石である。表裏面に磨面を有し、下部に強い敲打痕が見られる。497は、土坑217号から出土した石器である。下部に敲打痕と線状痕が見られる。磨石のような使い方をしたと思われる。498は、土坑245号から出土した打製石斧の刃部片である。499は、土坑245号から出土したスクレイパーである。表面下縁部に調整を施し刃部を形成している。500は、土坑271号から出土した磨石である。501は、土坑276号から出土した石皿である。502は、土坑286号から出土した抉入石器である。右側縁部に顕著な抉りが見られる。

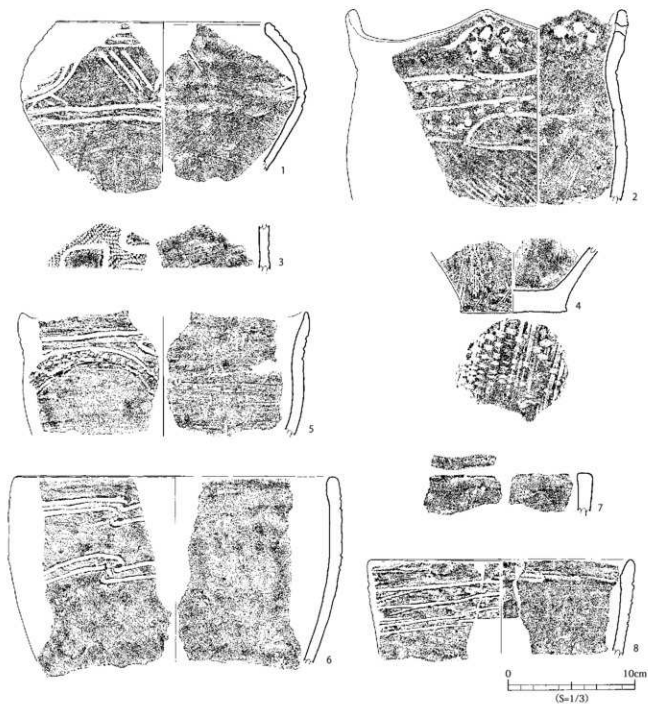
#### 4 ビット (第121図・第122図)

縄文時代中期後葉から後期該当のビットは、C・D-23区～C・D-31区、D-21・22区付近を除くほとんどの調査区から383基が確認され、調査区北側から番号を付けていった。埋土の状況から該期に位置付けを行った

が、上層で検出できなかったものも含まれている可能性も考えられる。加えて、明確なまとまりをつかむには至らず、平地式住居などの可能性を指摘することはできなかった。

##### (1) 出土土器 (第121図)

1は、ビット168号から出土した鉢形の土器である。棒状の工具による沈線文が横位に施されている。3群であると思われる。2は、ビット173号から出土した土器である。棒状の工具による沈線文が横位に施され、沈線間にはケバのついた工具による刺突文が施されている。口縁部には、透かしの付いた突起が3か所に付く。3群であると思われる。3は、ビット223号から出土した土器である。沈線間に縄文が施されている。4群であると思われる。4は、ビット247号から出土した土器である。底部端部がやや膨らむタイプである。5は、ビット251号から出土した土器である。ヘラ状の工具による横位の沈線文が施され、その下位には沈線間に半截竹管状の工具による刺突文が施されている。3群であると思われる。6は、ビット295号から出土した土器である。棒状の工具による2本1組の沈線により入組文が施されている。3群であると思われる。7は、ビット308号から出土した無文の土器である。8は、ビット337号から出土した土器である。ヘラ状の工具による沈線文が施さ



第121図 ビット内出土遺物実測図(1)

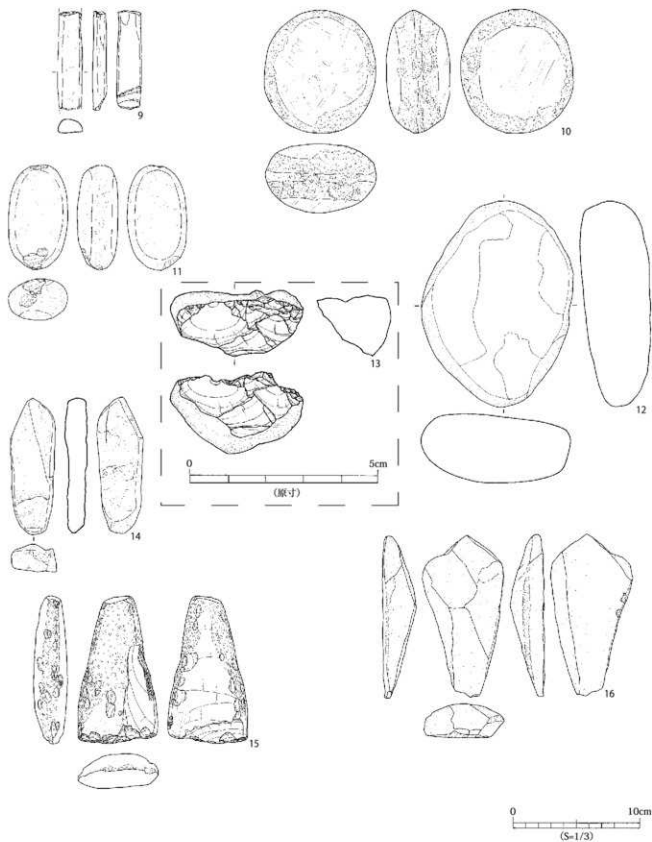
れている。3群であると思われる。

(2) 出土石器(第122図)

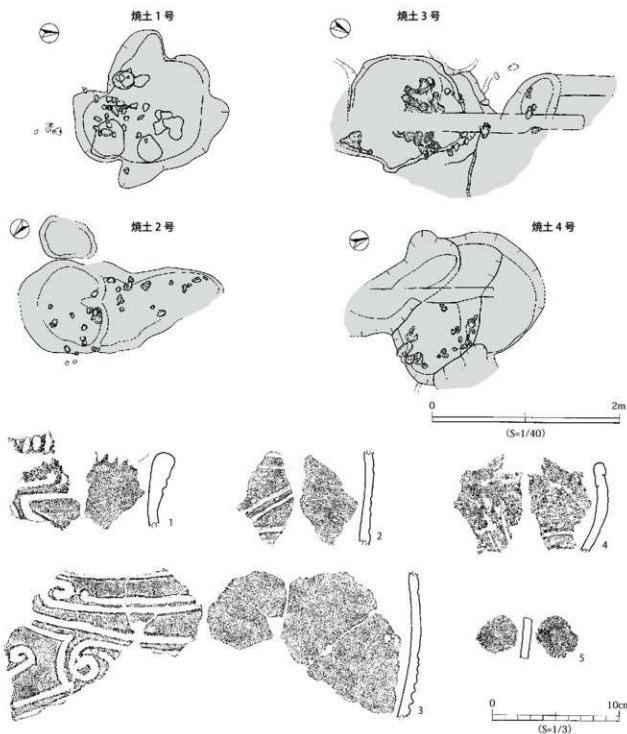
9は、ビット68号から出土した石器である。ノミ状石斧と思われる。両側から抉りを意識した磨りが見られる。10は、ビット114号から出土した磨石である。側面には複数の小さな面が形成され、敲打痕が残る。11は、ビット132号から出土した敲石である。火熱を受けている。両端に敲打痕が残る。12は、ビット272号から出土した石皿である。表面に磨面を有する。13は、ビット308から出土した石核である。14は、ビット318号から出

土した敲石である。棒状礫の両端に敲打痕が残る。15は、ビット321号から出土した磨製石斧である。刃部が敲打により摩耗しており転用されたと思われる。16は、ビット345号から出土した石器である。左右側縁部に線状痕が残る。磨石の一種と思われる。





第122図 ビット内出土遺物実測図(2)



第123図 焼土実測図及び焼土内出土遺物実測図

#### 5 焼土 (第123図)

縄文時代中期後葉から後期該当の焼土は、5基確認された。ピットと同様、建物などと組み合わさるのか単体で完結するものなのか明確にすることはできなかった。全体的に赤化しており、B-34区に1基、D-29区に1基、E-30区に3基検出されている。焼土5号からは、1から5の土器が出土している。1は、肥厚した口縁部に凹線文が施され、口唇部は棒状の工具により刺突され

ている。2・3は削片であるが、どちらも凹線文が施されている。4は、内湾する無文の土器である。5は、円盤形の土製品である。1から3は、3群であると思われる。

## 6 埋設土器 (第124図～第129図)

土器を埋設するものとして、堅穴住居内に埋設する埋  
壺や深鉢形土器が逆さまの状態でも出土する倒置深鉢など  
があるが、ここでは埋設土器として報告することとする。

縄文時代中期後葉から後期該当の埋設土器が5基が確  
認された。C-19・20区で3基、A-25区で1基、E-  
25区で1基検出されている。掘り込みを確認すること  
ができたのは埋設土器1号のみであり、埋設土器2号から  
埋設土器5号については明確な掘り込みは確認するこ  
とはできなかった。また、これらの出土状況を見てみると、  
口縁部を上にした正位の状態でも出土したものは埋設土  
器1号のみであり、埋設土器2号から埋設土器5号は口縁  
部を下向きにした逆位の状態でも出土している。

### (1) 埋設土器1号 (第124図, 第126図)

埋設土器1号は、A-25区Ⅵ層で検出した。検出時  
には掘り込みプランを見つけることはできなかったが、半  
截時に掘り込みを確認することができた。0.41m×0.34  
mの土坑を伴い、深さ0.45mである。口縁部を上にした  
正位の状態でも出土した。1は、無文土器であり、  
指頭痕が内外面に観察される。また、口縁部は横方向に

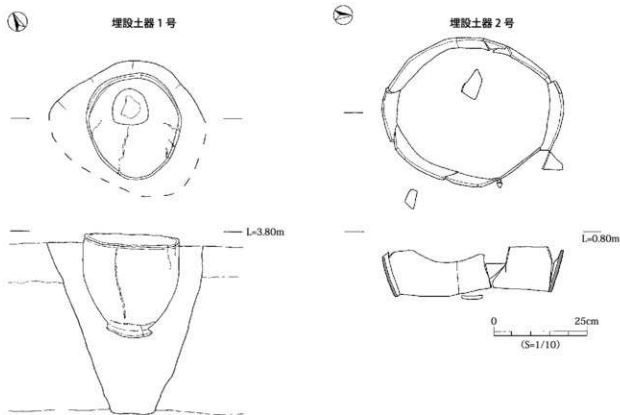
ナデ、口縁部下位から胴部にかけては横方向や縦方向の  
ヘラ削りが観察される。

### (2) 埋設土器2号 (第124図, 第127図)

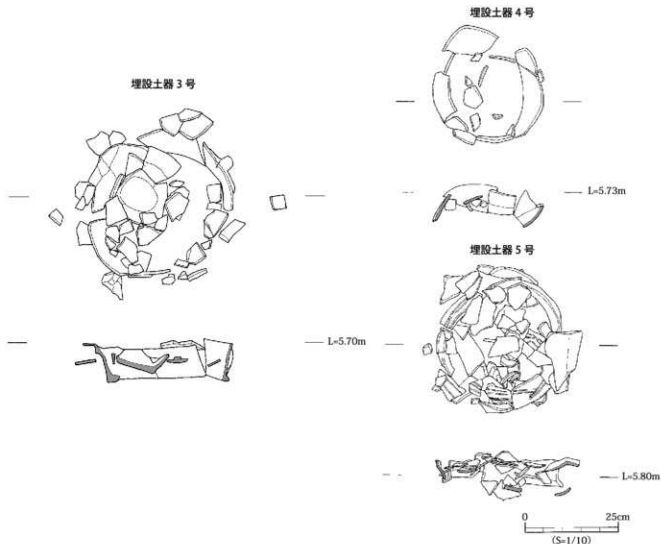
埋設土器2号は、E-25区で検出した。口縁部を下向  
きにした逆位の状態であるが、ほぼ水平に埋設されて  
いる。掘り込みを確認することはできなかった。2は、3  
か所の波頂部をもつ波状口縁の土器である。口縁部下  
に1条横位の沈線文が施され、その下位にステップ状の3  
条の並行する沈線文が施されている。また、3か所の波  
頂部内面には、3本の短沈線文が施されている。器面調  
整は内外面ともに貝殻条痕である。3群の土器である  
と思われる。

### (3) 埋設土器3号 (第125図, 第128図)

埋設土器3号は、C-20区Ⅶ層で検出した。口縁部を  
下向きにした逆位の状態であるが、ほぼ水平に埋設され  
ている。掘り込みを確認することはできなかった。接合  
作業では、口縁部から胴部上位と底部は復元できたが、  
胴部下位部分の復元ができなかった。3は、橋状の把手  
の付く無文の大型深鉢である。口縁部を強調するかの  
ように口縁部下位に粘土紐を貼り付け、断面三角形の尖帯



第124図 埋設土器出土状況実測図 (1)



第125図 埋設土器出土状況実測図(2)

を作り出している。把手の上部上面には渦巻き状の粘土紐を貼り付けている。把手は3か所に付いていたと思われる。2群の土器であると思われる。

(4) 埋設土器4号(第125図, 第128図, 第129図)

埋設土器4号は、C-20区Ⅱ層で検出した。口縁部を下向きにした逆位の状態であるが、ほぼ水平に埋設されている。掘り込みを確認することはできなかった。4は、無文の深鉢である。胴部上位がやや張り出し、口縁部は直行する。器面調整は内外面ともに貝殻条痕であり、その後ナデている。3群の土器であると思われる。

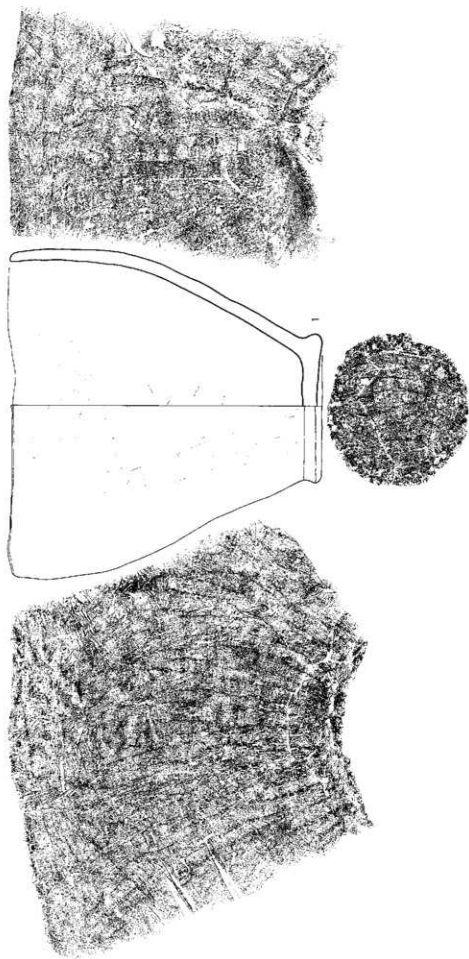
(5) 埋設土器5号(第125図, 第129図)

埋設土器5号は、C-19区Ⅱ層で検出した。口縁部を下向きにした逆位の状態であるが、ほぼ水平に埋設されている。掘り込みを確認することはできなかった。土器片が多数出土したが、接合作業では口縁部付近のみしか復元することができなかった。5は、深鉢である。4か所の波頂部をもつ波状口縁で、口縁部は外反する。波頂部端部はヘラ状の工具により刻み目を施し、内面にはヘラ状の工具による沈線文が施されている。口縁部には、

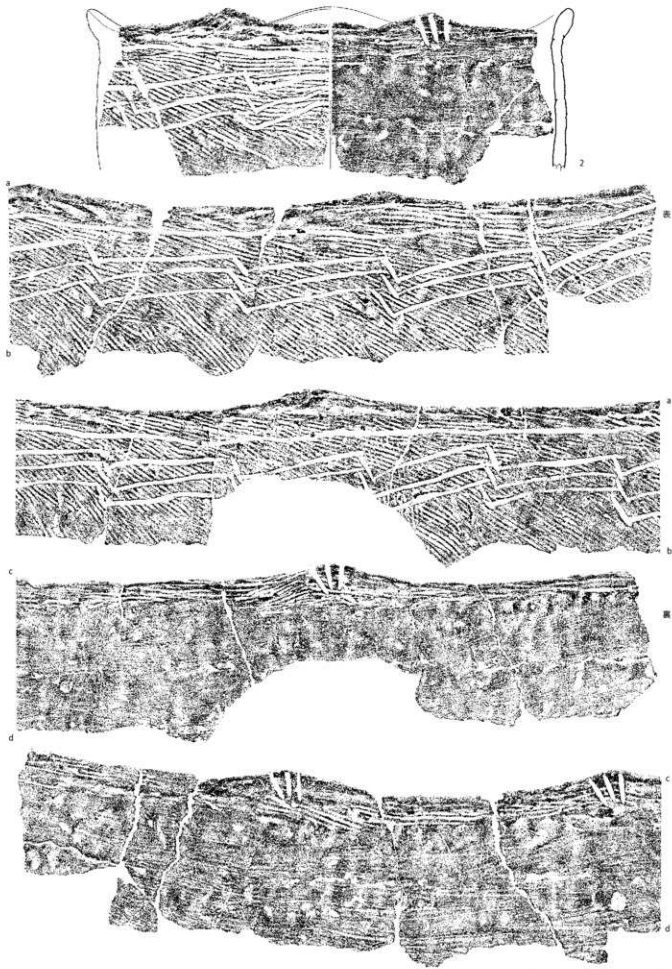
ヘラ状の工具による2本1組の平行沈線文が横位や斜位に施されている。3群の土器であると思われる。

7 石皿集積(第130図)

縄文時代中期後葉から後期該当の石皿集積が、D-33区で1基が確認された。2と3は重なり、1はその0.2m離れた状態で検出された。1は、最大長37.50cm・最大幅32.90cm・最大厚9.80cmの大きさと、重さ19.80kgである。2は最大長35.10cm・最大幅33.80cm・最大厚13.70cmの大きさと、重さ26.40kgである。3は、最大長42.10cm・最大幅41.30cm・最大厚11.30cmの大きさと、重さ30.50kgである。どの石皿も使用による磨面が顕著であり、表面が凹んでいる。

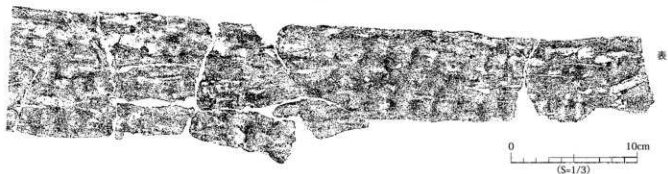
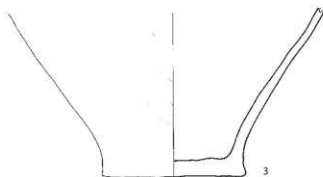
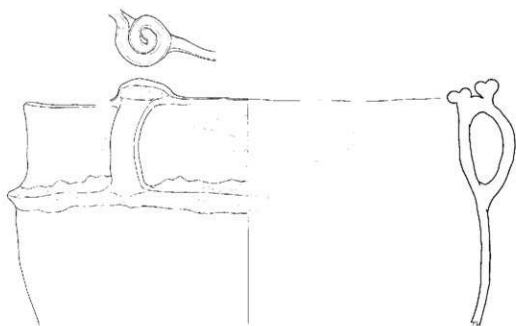


第126図 埋設土器 1号実測図

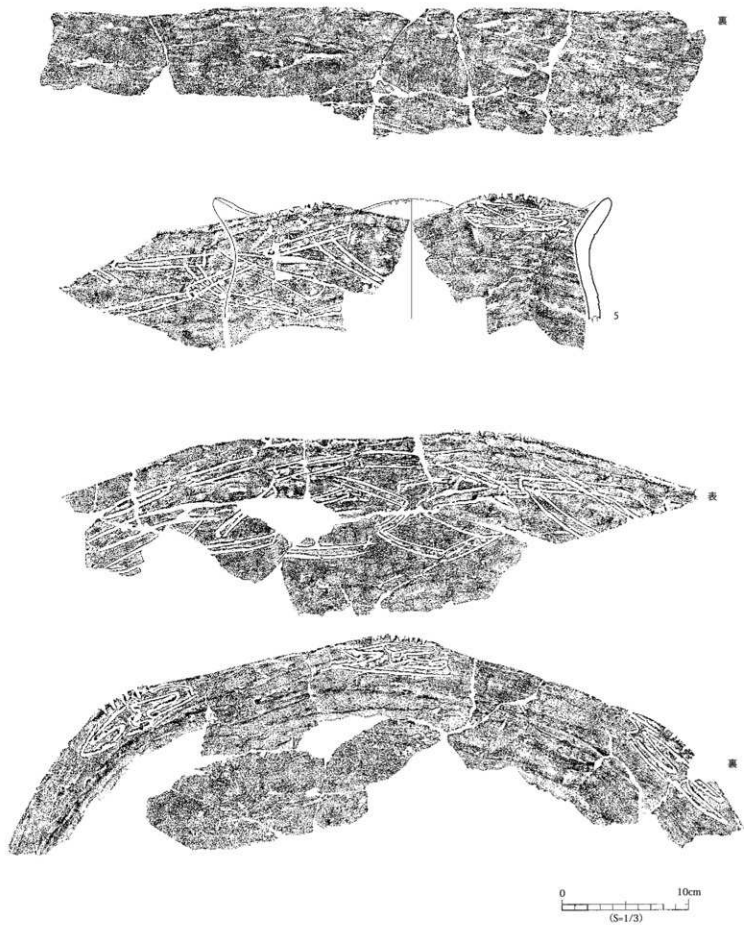


第127图 埋設土器2号实测图

0 10cm  
(S-1/3)

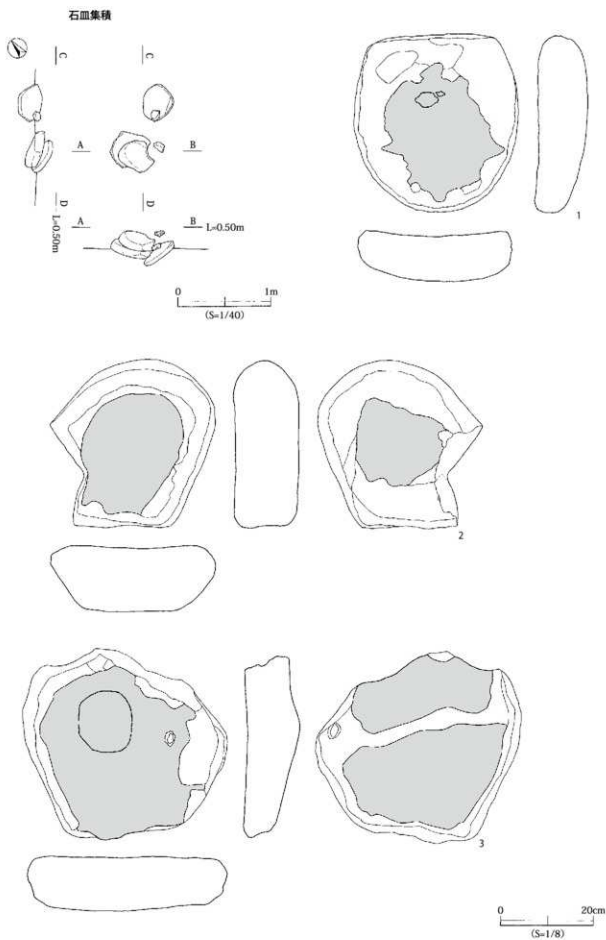


第128图 埋股土器3号・4号实测图



第129图 埋設土器4号・5号实测图





第130図 石皿集積実測図及び石皿実測図

**8 落ち込み状遺構 (第23図, 第25図, 第28図, 第30図, 第31図, 第33図, 第35図, 第36図, 第40図, 第41図, 第44図, 第45図, 第46図, 第131図～第223図)**

縄文時代中期後葉から後期該当の落ち込み状遺構が、16か所確認された。この落ち込み状遺構については、自然の凹み、自然流路、人工的な掘り込みなど考えられるが、埋土状況などの詳細な記録がなく、落ち込み状遺構がどのようなものであるかを明らかにすることはできなかった。また、落ち込み状遺構から出土する土器などの遺物出土状況が自然の流れ込みとは異なり、大きな土器片が出土することや出土した土器がローリングを受けていないこと、土器などの遺物の出土量が多いことなどから廃棄遺構のような意図的なものである可能性があるのではないかと考え、ここでは落ち込み状遺構として報告することとした。

**(1) 落ち込み状遺構 1号 (第23図, 第131図)**

落ち込み状遺構 1号は、C-37区で検出した。最大幅2m×最大長6mである。土器は接合作業を経て5点を図化した。

**A 出土土器 (第131図)**

1は、口縁部にヘラ状の工具でW字状の文様が施されている。口縁部は、指頭による凹点により波状を呈している。2は、口縁部に指頭による凹線と凹点により文様が施されている。口縁部は、指ナデによる凹点により波状を呈している。この凹点には爪痕が観察される。口縁部内面には、外面の凹線文と凹点による膨らみが観察される。3・4は、胴部である。3は、胴部上位に低い突帯が付く。4は、器面調整が内外面ともに貝殻条痕である。5は、口縁部がく字状の断面を呈している。口縁部外面はナデにより丁寧に器面調整が施され、斜位の連続

した貝殻刺突文が上下2条施される。その間に2条の沈線文が施されている。2条の沈線の一部にも貝殻刺突文が施されている。1から3は2群、5は5群であると思われる。

**(2) 落ち込み状遺構 2号 (第23図)**

落ち込み状遺構 2号は、D-37区で検出した。最大幅2.7m×最大長5mで、検出面からの深さは0.2mから0.4mである。

**(3) 落ち込み状遺構 3号 (第25図)**

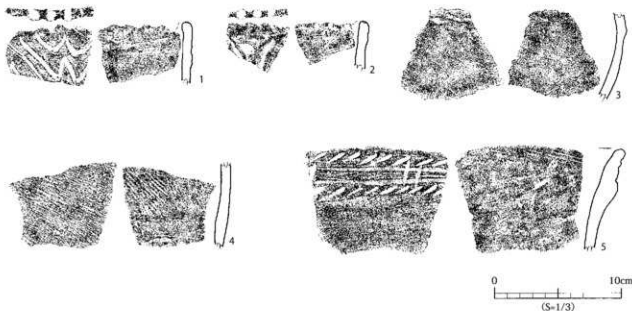
落ち込み状遺構 3号は、B-31区で検出した。最大幅2.2m×最大長5.8mで、検出面からの深さは0.1mから0.3mである。

**(4) 落ち込み状遺構 4号 (第28図, 第132図～第140図)**

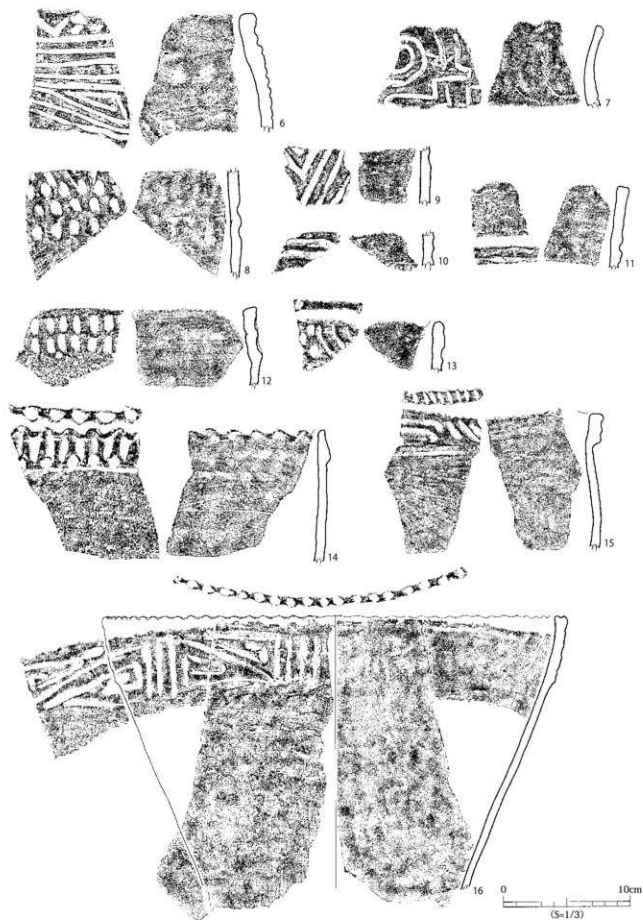
落ち込み状遺構 4号は、B-31区で検出した。最大幅6.7m×最大長5.8mで、検出面からの深さは0.5mから0.7mである。土器は接合作業を経て57点、石器は26点を図化した。

**A 出土土器 (第132図～第136図)**

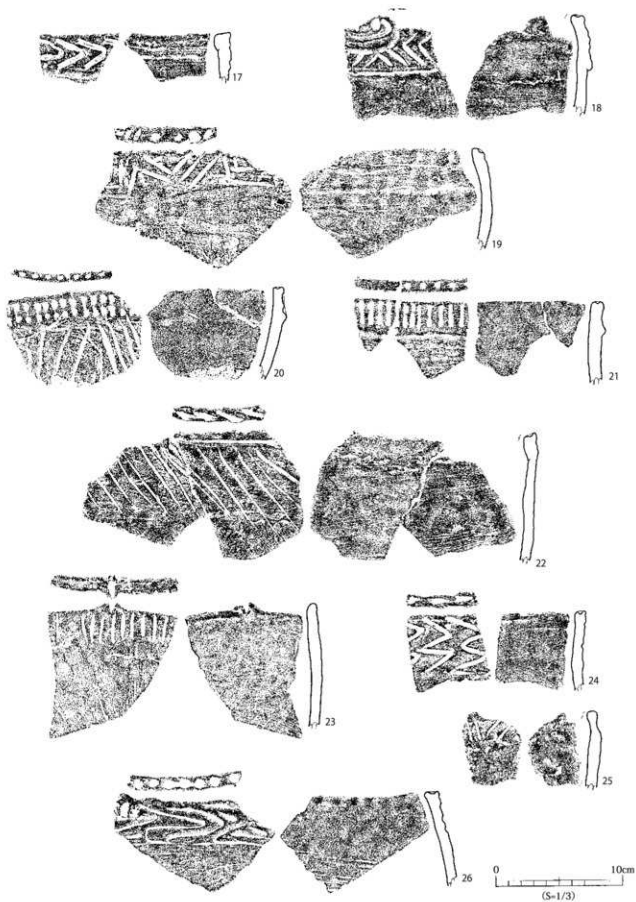
6は、口縁部直下に丸みのある棒状の工具でV字状や斜位の凹線文が施され、その下位に凹線により回転三角形の文様が施されている。7は、ヘラ状の工具による凹線と曲線文が施されている。8から13は、量に違いはあるが胎土に滑石が混入されている土器である。8は、指頭による凹点が施され、凹点には爪痕が観察される。この凹点の上位には、指頭による凹線文が施されている。滑石が多量に混入されているため、内外面ともにつるつるしている。9・10は、胴部片である。9は、凹線によるV字状の文様が施されている。10は、指頭による横位の凹線文が施されている。11は、口縁部下位に指頭による横位の凹線文が施されている。この凹線文は、幅8mm



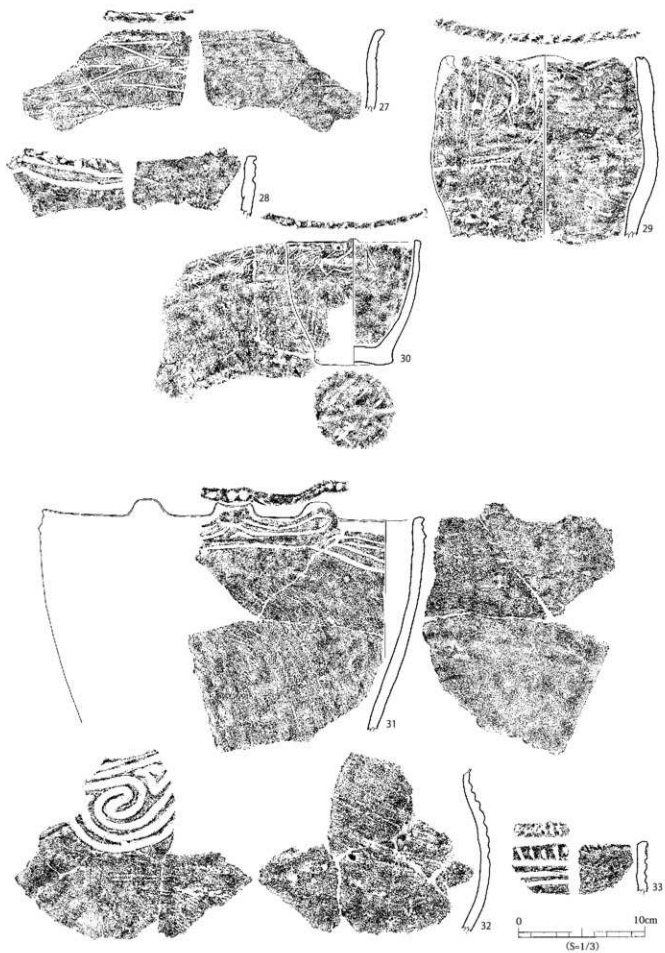
第131図 落ち込み状遺構 1号内出土遺物実測図



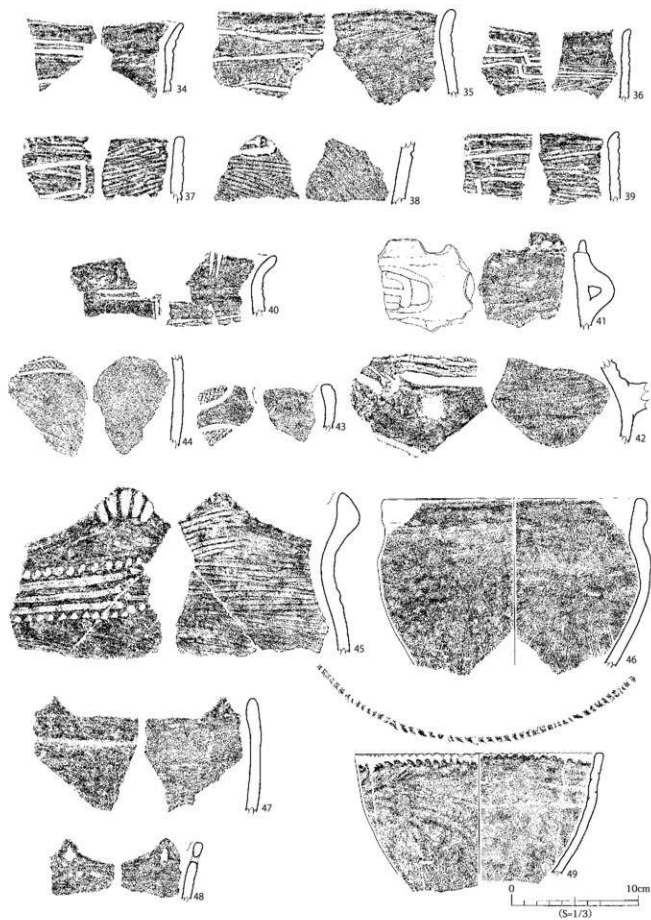
第132図 落ち込み状遺構4号内出土遺物実測図(1)



第133図 落ち込み状遺構4号内出土遺物実測図(2)



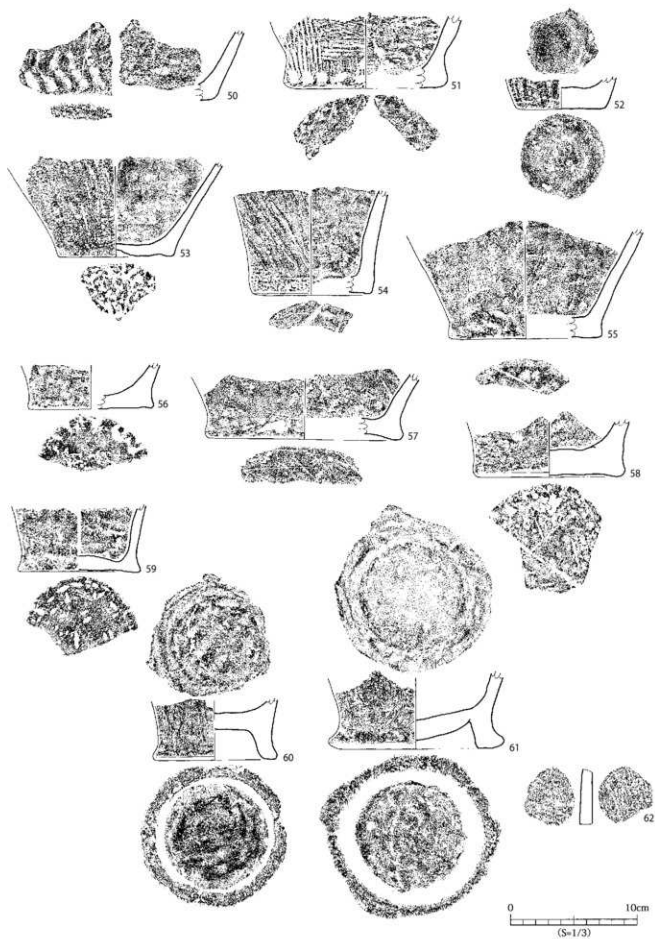
第134図 落ち込み状遺構4号内出土遺物実測図(3)



第135図 落ち込み状遺構4号内出土遺物実測図(4)

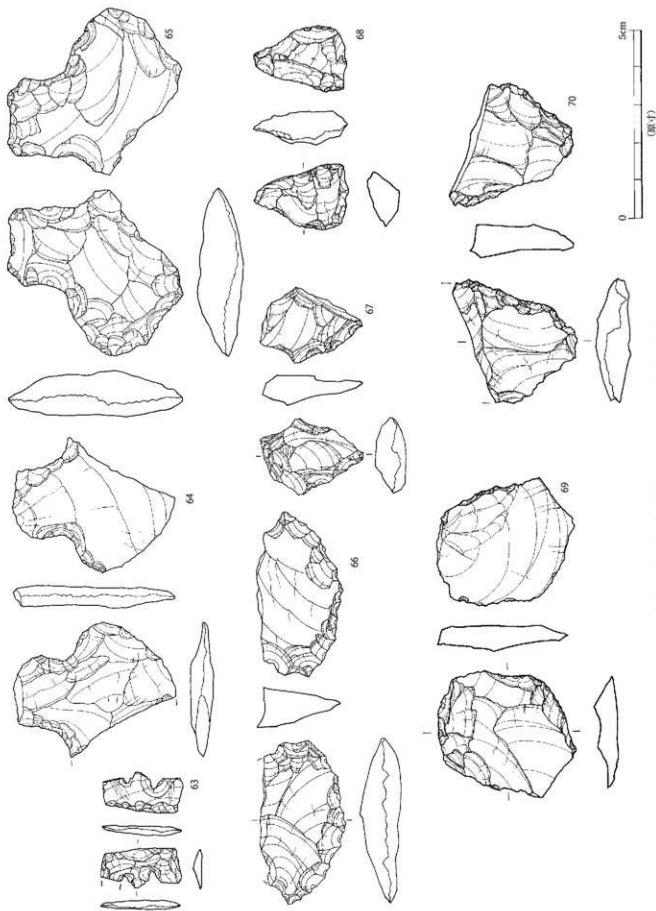
である。口唇部には、指頭による凹点が施されている。12は、口縁部下位を削ることにより、口縁部を肥厚させている。口縁部にヘラ状の工具による凹点を2条巡らせている。口唇部は平らに仕上げている。13は、口縁部に指頭による凹線文と凹点による文様が施されている。この凹点には、爪痕が観察される。口唇部には、指頭による凹点が施されている。14は、口縁部下位を削ることにより、口縁部を肥厚させている。口唇部にはヘラ状の工具による浅い刻み目が施されている。口縁部には、ヘラ状の工具による縦位の短凹線文が施されている。口縁部下位には、短凹線文と短凹線文の間に指頭による凹点が施されている。この凹点には爪痕が観察される。15は、粘土の貼り付けと口縁部下位を削ることにより口縁部を肥厚させている。低い山形の突起の付く土器である。口縁部には、横位と斜位の凹線文が施されている。16は、口縁部下位を削ることにより口縁部を肥厚させている。口縁部には、縦位の凹線文と凹線による回転三角形文が施されている。口縁部には指頭による凹点により波状を呈している。この凹点には爪痕が観察される。17は、口縁部下位を削ることにより口縁部を肥厚させている。口縁部には、ヘラ状の工具による凹線により速く字状の文様が施されている。胎土に少量の滑石が混入されている。口唇部は平らに仕上げられている。18は、粘土を貼り付けることにより口縁部を肥厚させている。口唇部には台形状の突起が付く。口縁部には、ヘラ状の工具による凹線によりく字状やハ字状の文様や凹点による文様などが施されている。19は、口縁部下位を削ることにより口縁部をやや肥厚させている。口縁部には、縦位や横位の沈線文、斜位の沈線文が施されている。口唇部には、半葎竹管状の工具による刺突文やヘラ状の工具による沈線文が施されている。20は、口縁部下位を削ることにより口縁部を肥厚させている。口縁部には、丸い棒状の工具による刺突文を2条巡らせている。口縁部下位には、斜位の沈線文が施されている。21は、粘土を貼り付けることにより口縁部を肥厚させている。口縁部には、丸い棒状の工具を上下ともに斜位に刺突し、その後この2つの刺突痕を結び縦位の沈線にしている。口唇部には、丸い棒状の工具による刺突文が一部に施されている。22は、口唇部下位に横位の凹線文が施され、その下位に斜位の沈線文が施されている。口唇部には、ヘラ状の工具による押し引きにより刻み目と沈線文が施されている。23は、口縁部下位を削ることにより口縁部をやや肥厚させている。口縁部には、縦位の短沈線文が施されている。口唇部には、刻みのある低い突起が付く。24は、口縁部下位を削ることにより口縁部をやや肥厚させている。口縁部には、沈線による扇歯状の文様が施されている。口唇部には、丸い棒状の工具による斜位の刺突文が施されている。25は、口縁部下位を削ることにより口縁部を肥厚させている。

口縁部には、ヘラ状の工具で刻み目を施したかのような深い沈線文が縦位・斜位に施されている。口唇部には、低い突起が付く。26は、口縁部下位を削ることにより口縁部を強調している。口縁部には、ヘラ状の工具による沈線と曲線文と指頭による凹点が施されている。この凹点には、爪痕が観察される。口唇部には、指頭による凹点が施されており、爪痕が観察される。27は、口縁部下位を削ることにより口縁部を強調している。口縁部には、ヘラ状の工具による沈線と扇歯状の文様が施されている。口唇部には、爪によるとと思われる刺突文が施されている。28は、口縁部上位に丸い棒状の工具による刺突文が施され、その下位に丸い棒状の工具による沈線文が施されている。29は、口縁部にヘラ状の工具による沈線と縦位や斜位の直線や曲線文が施されている。口唇部には、ヘラ状の工具による刻み目が施されている。30は、ミニチュアの土器である。口縁部下位を削ることにより口縁部を強調している。口縁部には、ヘラ状の工具による沈線により曲線の文様が施されている。口唇部には、低い台形状の突起が付く。31は、口縁部下位を削ることにより口縁部を強調している。口縁部には、横位の沈線文が施されている。口唇部には、台形状の突起が付く、その上部には指頭による凹点が2つずつ施されている。32は、胎土に金雲母を多く含む土器である。胴部上位にかけて凹線による渦巻き状の文様が施されている。33は、口縁部上位に棒状の工具を斜位に刺突した刺突文とその下位に横位の沈線文が施されている。口唇部は平らに仕上げられ、貝殻腹縁による刺突文が施されている。34から36は、横位の沈線を1条あるいは2条巡らせて、その下位に2本1組の平行な沈線により文様が施されている。37から40は、2本1組の平行な沈線により靴形の文様が施されている。41・42は、鉢形の土器と思われる。41は、橋状の把手が付く。42は、横位の凹線文が施されている。43・44は、沈線間に縄文が施されている。45は、波状凹線である。波頂部の断面は三角形である。口縁部には、上下に指頭による連続する凹点が1条ずつ巡らされ、その間を横位の凹線文が3条巡らされている。この凹線は始めと終わりを強調し、刺突文のようになっている。46から49は、無文土器である。46・47は、口縁部下位を削ることにより口縁部を肥厚させている。49は、口縁部が押圧により波状を呈している。50から61は、底部である。底部から胴部へひらくように立ち上がるタイプのもので、底部端部が影らむタイプのものがある。50は、外面に凹線文が施されており、底部から胴部へひらくように立ち上がるものである。51は、外面に指頭痕が観察でき、底部が影らむタイプのものである。52は、底部から胴部へひらくように立ち上がるものである。53から59は、底部端部が影らむタイプのものである。57は、やや上げ底状になっている。60・61は、接着面が狭い脚をもち、

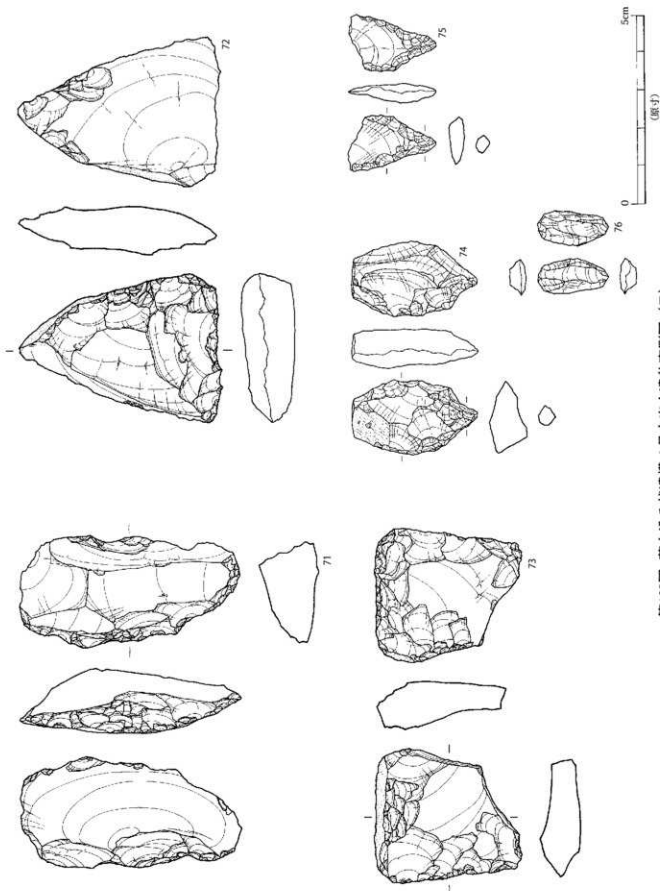


第136図 落ち込み状遺構4号内出土遺物実測図(5)

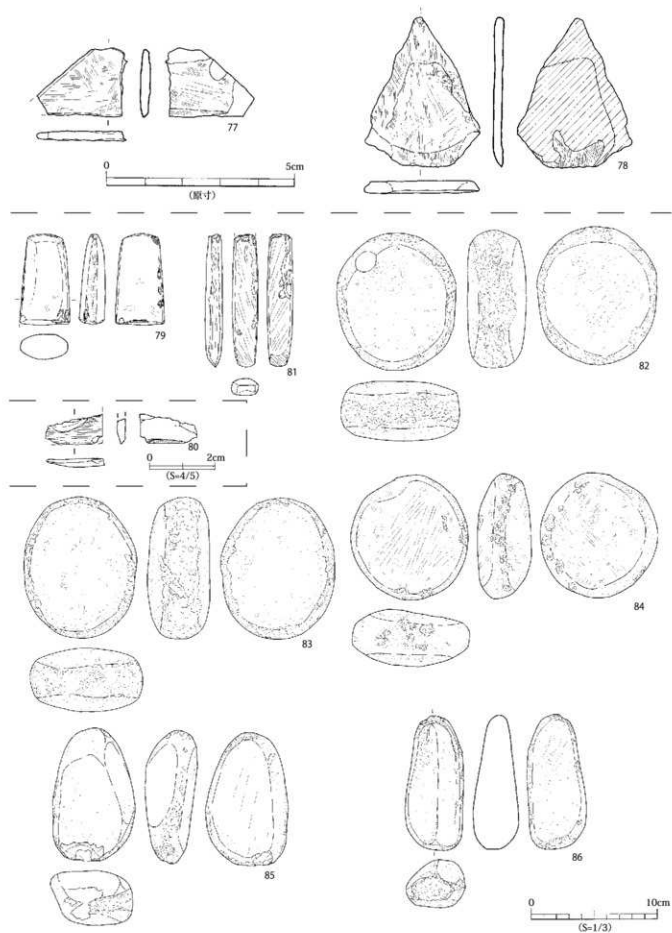




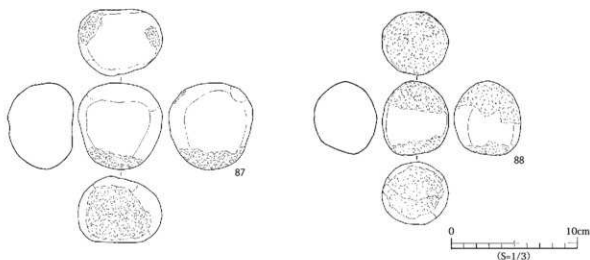
第137図 落ち込み状遺構4号内出土遺物実測図(6)



第138図 落ち込み状遺構4号内出土遺物実測図(7)



第139図 落ち込み状遺構4号内出土遺物実測図(8)



第140図 落ち込み状遺構4号内出土遺物実測図(9)

上げ底状になっているものである。62は、円盤形の土製品である。6から33・41・42は2群、34から40は3群、43・44は4群であると思われる。

イ 出土石器(第137図～第140図)

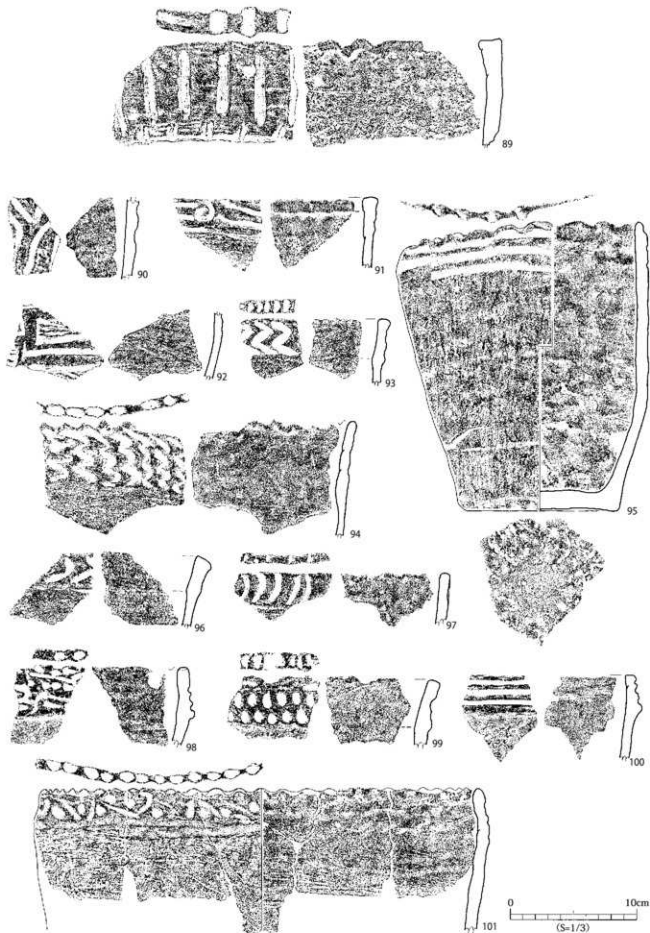
63は、鋸歯縁石器である。左側縁部に2か所の抉りを作成している。右側縁部は表表面ともに微細剥離により刃部のように作出している。64・65は、石匙片か。64は、剥片の鋭い一辺を刃部に、打点の両側から抉りを施す。66は、スクレイパーとしたが左側に先端部を作出している感もある。67から73は、二次加工剥片である。67・68は、荒い剥片が刺突具状を呈するがはっきりしない。69は、薄い楕円状の剥片の右側に微細剥離が施されている。71は、厚みのある横長剥片である。裏面からの剥離が施されている。72は、厚みのある剥片に二次加工が施されている。73は、珪質頁岩を素材とする。74・75は、石錐である。76は、楔形石器である。77・78は、摺切石器である。78は、他と比べるとやや鋭さのある刃部で、表表面で摩擦の度合いが異なる。79は、磨製石斧の基部片である。複数の磨り面を形成している。80は、磨製石斧の刃部片である。81は、ノミ形石斧である。頁岩源ホルンフェルス石材としている。基部を欠損する。82から86は、磨製石である。82から84は、やや扁平な円礫を素材としている。87・88は、敲石である。

(5) 落ち込み状遺構5号(第30図, 第141図～第167図)

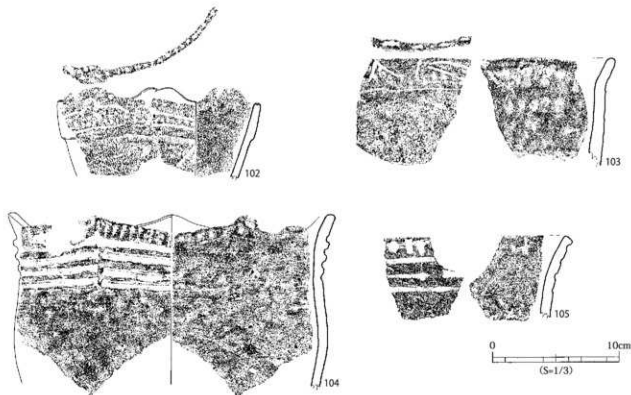
落ち込み状遺構5号は、A'・A-30・31区で検出した。最大幅7m×最大長13mで、検出面からの深さは0.2mから0.5mである。土器は接合作業を経て156点、石器は29点を図化した。

ア 出土土器(第141図～第163図)

89は、口縁部が肥厚している。口縁部には、指頭による凹線文や凹点が施されている。口唇部には、指押さえによる凹点や指頭による凹線文が施されている。90は、棒状の工具による凹線が施されている。胎土に滑石が混入されている。91・93・94は、口縁部下位を削ることにより口縁部を肥厚させている。91は、口縁部に棒状の工具による沈線により直線文や曲線文が描かれている。口唇部は、平らに仕上げられている。93は、口縁部にヘラ状の工具による沈線により逆S字状に文様が施されている。94は、口縁部にヘラ状の工具による沈線により連続した逆S字文が施されている。口唇部には、指頭による凹点が施され、この凹点には爪痕が観察される。92は、ヘラ状の工具による凹線文が施されている。沈線間をヘラ状の工具により削っている部分がある。胎土に滑石が混入されている。95は、指頭による凹線文が横位に施されている。口唇部は、指押さえにより一部波状になっている。96から102は、口縁部下位を削ることにより口唇部を肥厚させている。96は、口縁部にヘラ状の工具による沈線により逆く字状に文様が施されている。97は、口縁部にヘラ状の工具による沈線がノ字状に施されている。口唇部には、ヘラ状の工具による刻み目が施されている。98は、口縁部に竹管状の工具による斜位の刺突文や棒状の工具による沈線文が施されている。口唇部外面側には、指頭による押圧が施されている。99は、口縁部に指頭による連続した凹点が2条施されている。100は、口縁部にヘラ状の工具による横位の沈線文が施されてい



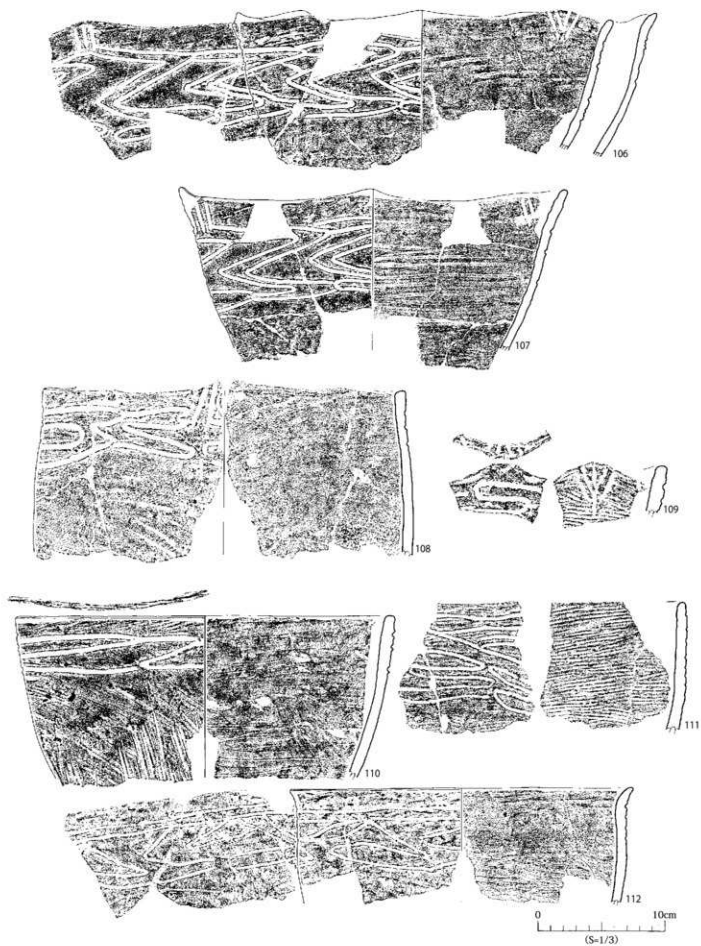
第141图 落ち込み状遺構5号内出土遺物実測図(1)



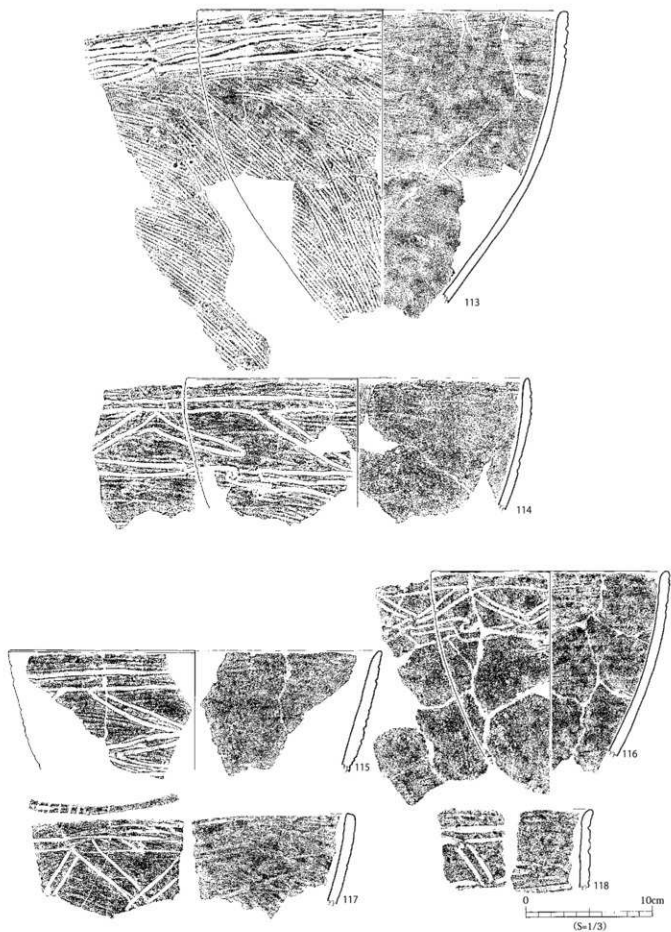
第142図 落ち込み状遺構5号内出土遺物実測図(2)

る。口唇部は平らに仕上げられている。101は、口縁部に凹線文や凹点が施されている。口縁部は、指押さえにより波状を呈している。102は、口縁部に浅い沈線文が施され、この沈線間に細い棒状の工具による刺突文が施されている。口唇部にはねじり紐状の突起が付く。口唇部には、細い棒状の工具による刺突が施されている。103は、口縁部を外反させるとともに口縁部下位を削ることにより口縁部を強調している。口縁部にはへら状の工具による沈線文が施されている。104は、口縁端部に貝殻腹縁による押し引き文が施されている。その下位に半截竹管状の道具による凹線文が4条施されている。口唇部には、低い山形の突起が付く。105は、口縁端部に半截竹管状の道具による下からの刺突文が施され、その下位に棒状の工具による浅い沈線文が施されている。この沈線文には、竹管状の工具の刺突文が施されている。106から127は、口縁部下に横位の沈線文が施され、その下位に主に2本1組の平行沈線による曲線文や入組文などが施されている。106は、波状口縁であり、波状部分に縦位の沈線文が施されている。また、口唇部から内面に棒状の工具による沈線がV字状に施されている。107は、波状口縁であり、波状部分に縦位の沈線文が施されている。また、口唇部から内面に棒状の工具による沈線文が施されている。109は、波状口縁であり、この部分の内面にはへら状の工具によりV字状に刻みが施されている。116は、2本1組の平行な沈線により三角文や鈎手文が施されている。122は、連続したS字文が施され

ている。連続したS字文が施されている部分の口唇部は他より厚く、外面から内面に粘土紐を貼り付けた突起を付け、突起の左右に凹みが施されている。125は、波状口縁であり、波状口縁部の下位に孔が穿たれている。126は、2本1組の平行な沈線によりZ字状の文様が施されている。128から144は、口縁部下に横位の沈線文が施され、その下位に2本1組の平行な沈線により靴形文が施されている。129は、口唇部に4か所の突起が付き、突起の口唇部から内面にかけて棒状の工具による縦位の短沈線文が3条施されている。131は、波頂部を4か所もつものと思われるが、この波頂部の内外面にはへら状の工具による短沈線文や刺突文が施されている。134は、口縁部には波頂部があり、波頂部には外面から内面にかけてへら状の工具による刻みが施されている。135は、口唇部に肥厚した突起が付き、突起部には凹みが施され、貝殻腹縁による刺突文が施されている。140は、窓のある波頂部が付く。141は、口縁部に波頂部があり、波頂部内面には短沈線文が施されている。145から157は、口縁部下に横位の沈線文が施され、その下位にステップ状の沈線文や波状の沈線文など比較的単純な文様が施されている。145から147は、口縁部下に横位の沈線文が施され、その下位に入組文が施されている。145は、口縁部に波頂部が3か所ある。波頂部内面に棒状の工具によるV字状の短沈線文とその下位に刺突文が施されている。146は、口縁部に三角形の突起が付き、口唇部には棒状の工具による押圧が施されている。147は、口

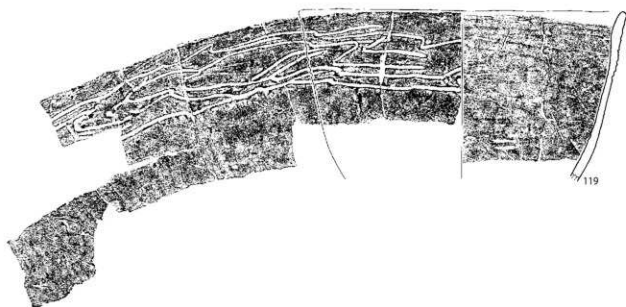


第143図 落ち込み状遺構5号内出土遺物実測図(3)

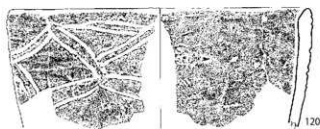


第144図 落ち込み状遺構5号内出土遺物実測図(4)





119



120



121



122



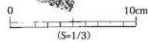
123



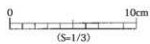
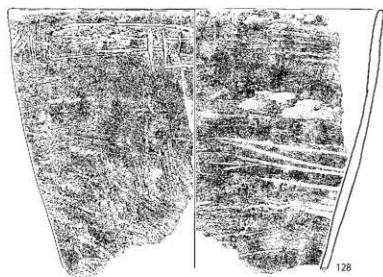
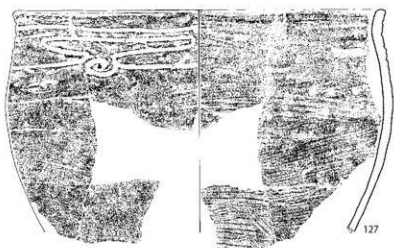
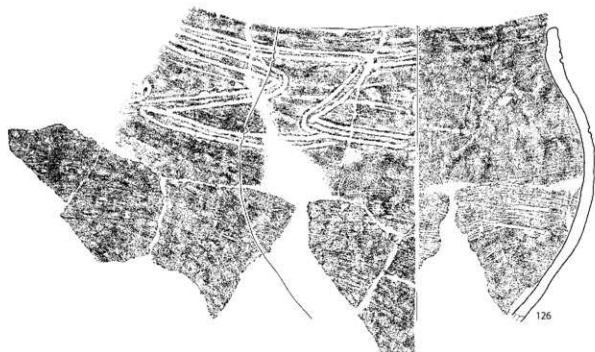
124



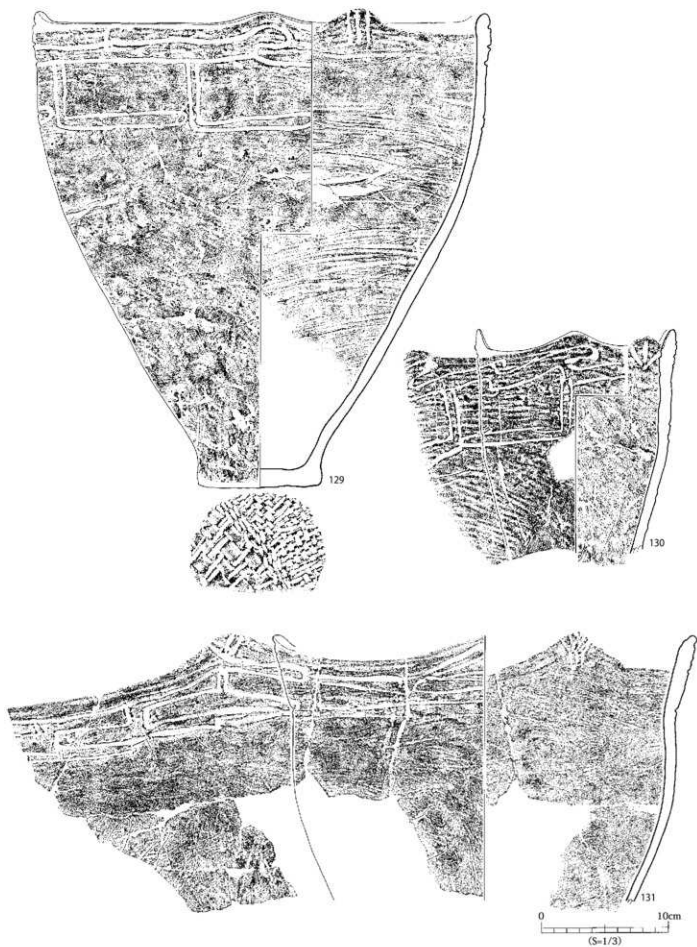
125



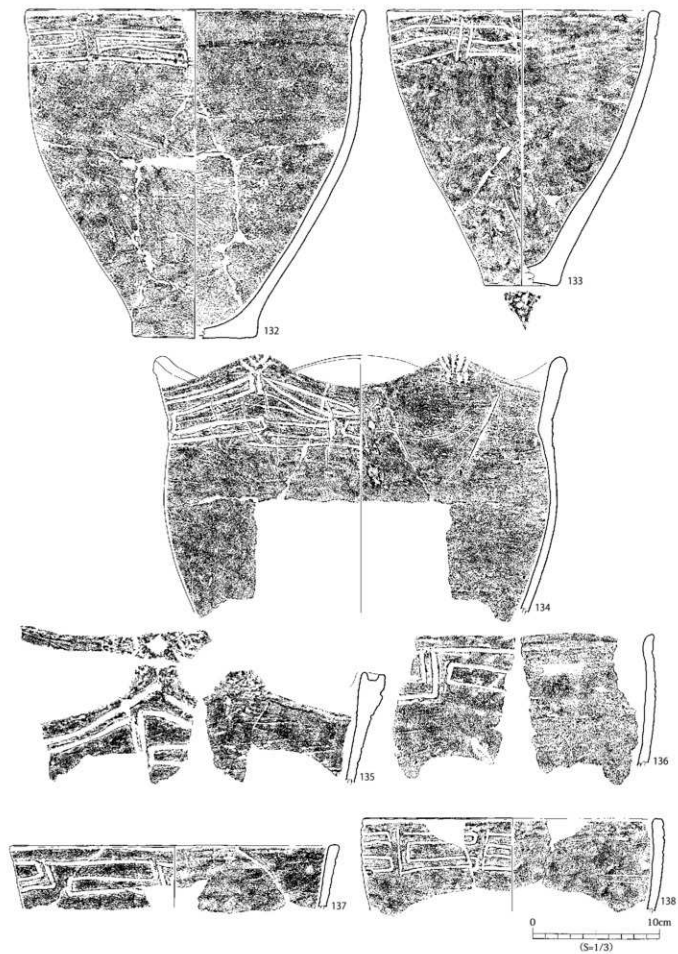
第145図 落ち込み状遺構5号内出土遺物実測図(5)



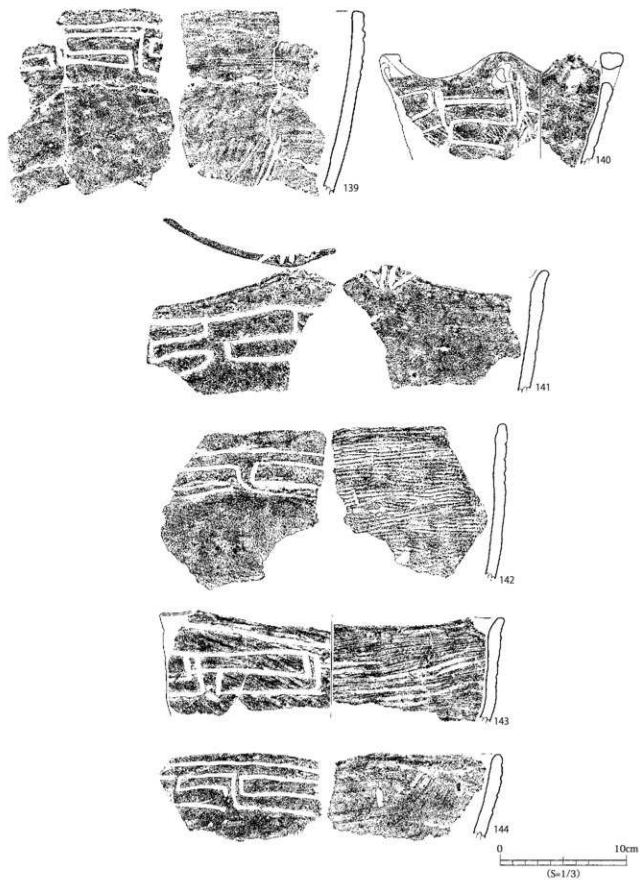
第146図 落ち込み状遺構5号内出土遺物実測図(6)



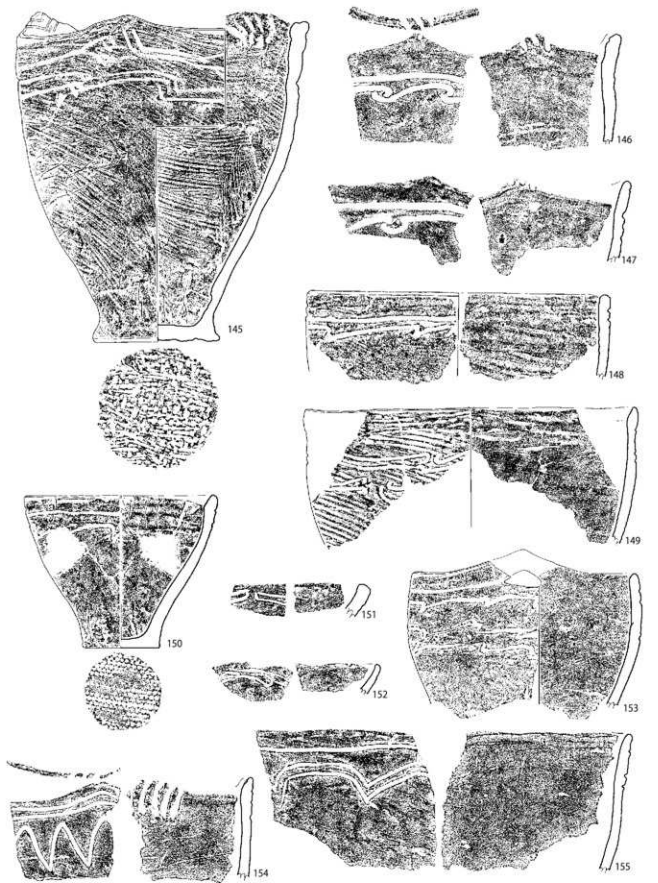
第147図 落ち込み状遺構5号内出土遺物実測図(7)



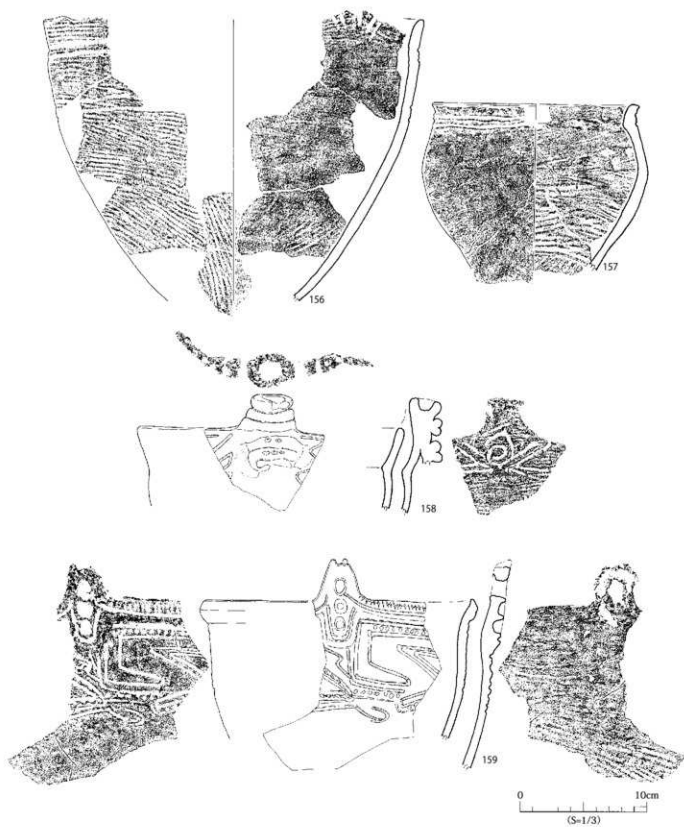
第148図 落ち込み状遺構5号内出土遺物実測図(8)



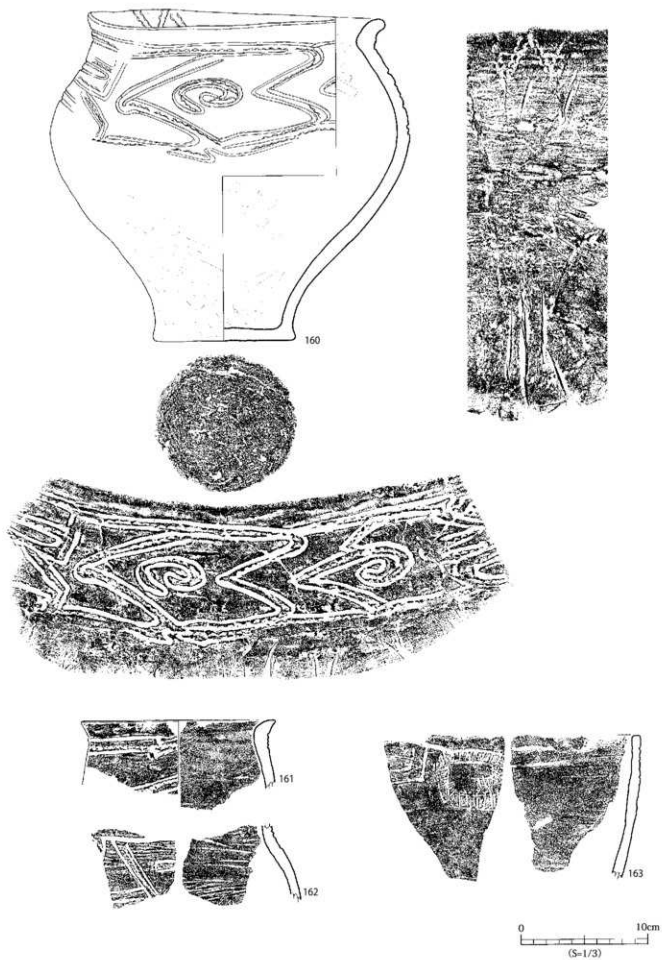
第149図 落ち込み状遺構5号内出土遺物実測図(9)



第150図 落ち込み状遺構5号内出土遺物実測図 (10)

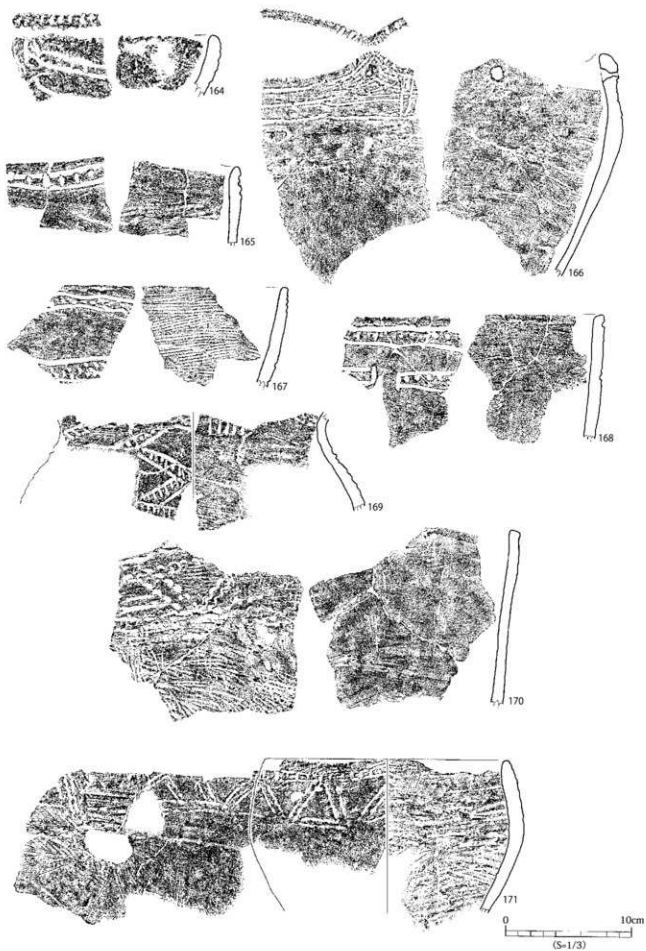


第151図 落ち込み状遺構5号内出土遺物実測図 (11)



第152図 落ち込み状遺構5号内出土遺物実測図 (12)

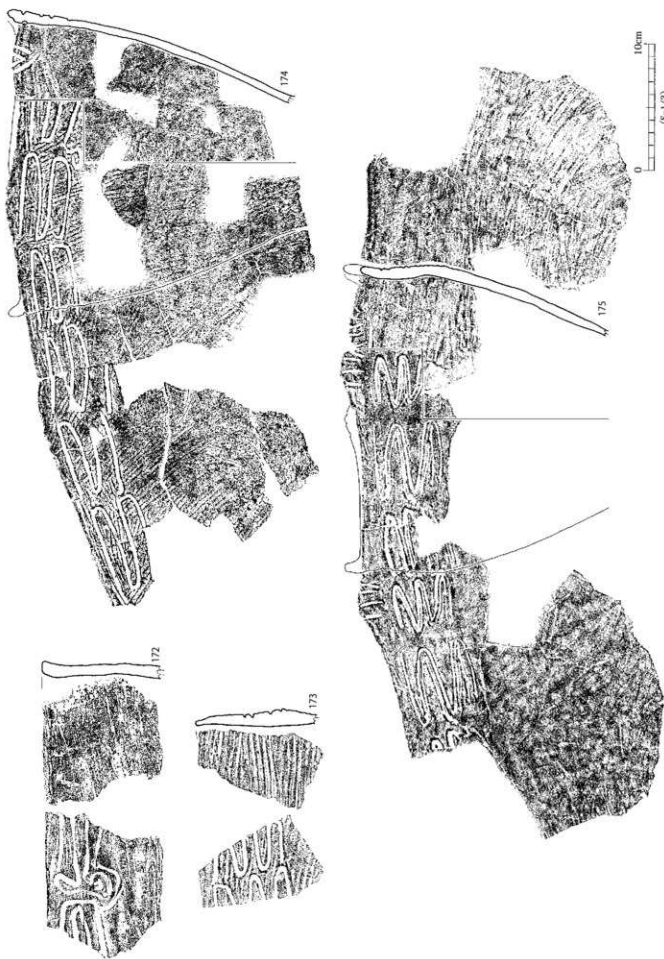




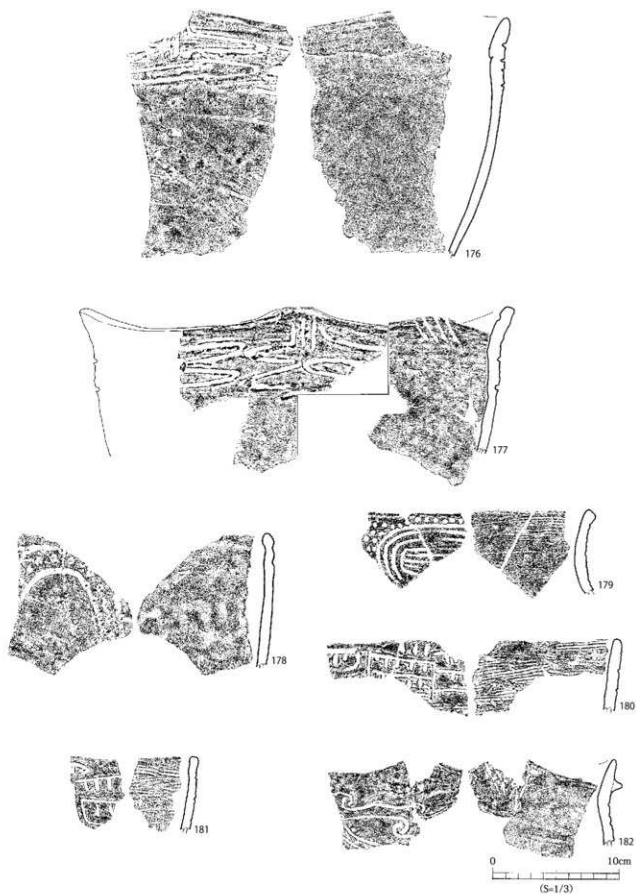
第153図 落ち込み状遺構5号内出土遺物実測図 (13)

縁部に三角形の突起が付き、口唇部には棒状の工具による押圧が施されている。148は、ステップ状の文様が施されている。149は、鈎手文が施されている。150は、波状の文様が施されている。151は、口縁端部がやや内湾する。153は、ステップ状の文様が施されている。口唇部には、窓のある突起が付くと思われる。154は、鋸歯状の文様が施されている。口唇部には、なだらかな突起が付き、口唇部に棒状の工具による沈線文が内面上位まで施されている。この沈線は刺突して終わっている。156は、波状口縁であり、波状部の内面には縦位の沈線文が施されている。157は、細い棒状の工具による沈線文が2条施されている。158は、粘土紐を2つ付けた飾りのある把手部分である。把手は橋状であったと思われる。把手の付く口縁部には、粘土紐を2つ付けた凹みのある突帯が付く。口縁部には、ヘラ状の工具による沈線文が施されている。口縁部内面には、沈線により幾何学文が施されている。159は、ヘラ状の工具による沈線文が施されている。沈線間には、竹管状の工具による刺突文が施されている。口縁部には窓のある長楕円状の突起が付く。突起の外下面部には、粘土を貼り付けた飾りを付けている。口縁端部外面には、刺突文が施されている。160から169は、2本1組の平行な沈線間に棒状の工具や貝殻腹縁による刺突文が施されている。160は、2本1組の平行な沈線により逆S字状の文様が施されている。沈線間には、貝殻腹縁による刺突文が施されている。口縁部内面には、3か所にW字状に貝殻腹縁による刺突文が施されている。161・162は、ヘラ状の工具による沈線間に貝殻腹縁による刺突文が施されている。163は、ヘラ状の工具による沈線間にヘラ状の工具による刺突文が施されている。164は、口縁部にヘラ状の工具による沈線文が施され、沈線間にヘラ状の工具による刺突文が施されている。口唇部には、刺突文が施されている。165は、棒状の工具による深い沈線間に竹管状の工具により斜位に刺突文が施されている。166は、波状口縁であり、この波頂部の下位に孔が穿たれている。波頂部の口唇には、ヘラ状の工具による刻み目が施されている。沈線間には、ヘラ状の工具による刺突文が一部施されている。167は、ヘラ状の工具による沈線間に貝殻による刺突文が施されている。168は、ヘラ状の工具による沈線間に竹管状の工具による刺突文が施されている。170・171は、貝殻腹縁による刺突文で2本1組の平行な沈線文を表現している。171は、把手が付くと思われる。口縁部には、端部にヘラ状の工具による沈線文を施し、この沈線間にヘラ状の工具による刻み目が施されている。この下位には、2本1組の貝殻腹縁による刺突文より三角文が施されている。172から182は、沈線文や刺突文による文様をもつものである。173から177は、ヘラ状の工具による沈線により逆S字状の文様が施されている。175は、口縁部

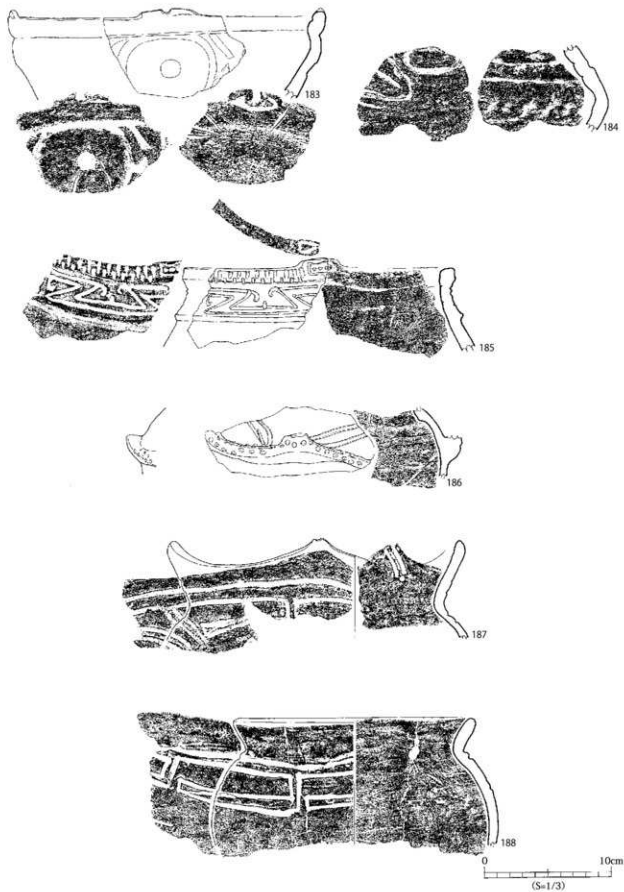
が波状を呈するが、この波状部分の外面にはヘラ状の工具による縦位の沈線文が施され、内面には貝殻腹縁による縦位の刺突文と横位の刺突文が施されている。177は、波状口縁であり、波状部分に縦位の沈線文が施されている。また、口唇部から内面に棒状の工具による沈線が4条施されており、この沈線の終わりには刺突文が施されている。178は、棒状の工具による浅い沈線文で曲線を描き、この沈線や沈線間に竹管状の工具による刺突文が施されている。179は、竹管状の工具による連続した刺突文とヘラ状の工具による沈線文が施されている。180は、ヘラ状の工具による沈線文の下位に棒状の工具による刺突文が施されている。181は、ヘラ状の工具による沈線文の下位にヘラ状の工具による刻み目が施されている。182は、波状の口縁である。この波状部の下位に粘土を貼り付けた突帯が付く。口縁部には、ヘラ状の工具による浅い沈線により入組文が施されている。183から200は、鉢形の土器であると思われる。183は、口縁部を外反させるとともに口縁部下位を削ることにより口縁部を強調している。胴部上位にヘラ状の工具による沈線文、凹点が施されている。口縁部には棒状の工具による押さえにより刻みのある突帯が付き、口縁部内面にはヘラ状の工具による沈線文が施されている。184は、ヘラ状の工具による沈線文が施されている。185は、口縁端部を肥厚せたり口縁部下位を削ったりすることにより口縁部を強調させている。口縁端部には上に向けての刺突文が施されている。口縁部には、棒状の工具による沈線により幾何学文が施されている。186は、ヘラ状の工具による沈線文が施されている。粘土を貼り付けた突帯には、細い棒状の工具による刺突文が施されている。把手が付くと思われる。187は、ヘラ状の工具による沈線文を2条施し、その下位に2本1組の平行な沈線により靴形文などが施されている。188は、ヘラ状の工具による沈線文を1条施し、その下位に2本1組の平行な沈線により靴形文が施されている。187・188は深縁の可能性もある。189は、波状口縁であり、波状部分に橋状の把手が付く。把手には、細い棒状の工具による刺突文が施されている。把手の上部には凹みが施されている。口縁部には、ヘラ状の工具による沈線文が施されている。190は、胴部がそばんの玉の形をし、把手をもつ。橋状の把手が2か所に付き、粘土を貼り付けた突帯による飾りが2か所に付く。把手中央部には深い溝が掘られ、その両側はヘラ状の工具により刻み目が施されている。口縁部にはヘラ状の工具により刻み目が施され、4か所の突起があり、把手の付く突起が高くなっている。把手の付く突起の内面には、貝殻腹縁による刺突文が2重に施されている。191は、把手の付くものである。口縁部には、棒状の工具による沈線文が施されている。把手の付く口縁部は大きく外反し、内面に凹みのある飾りをつける。こ



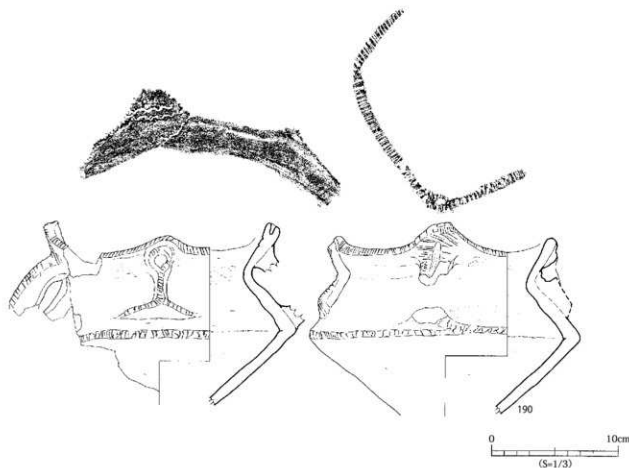
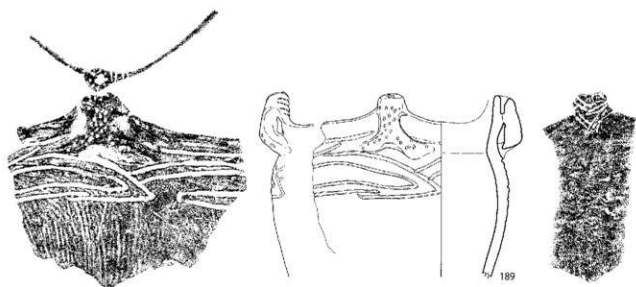
第154図 落ち込み状遺構5号内出土遺物実測図 (14)



第155図 落ち込み状遺構5号内出土遺物実測図 (15)



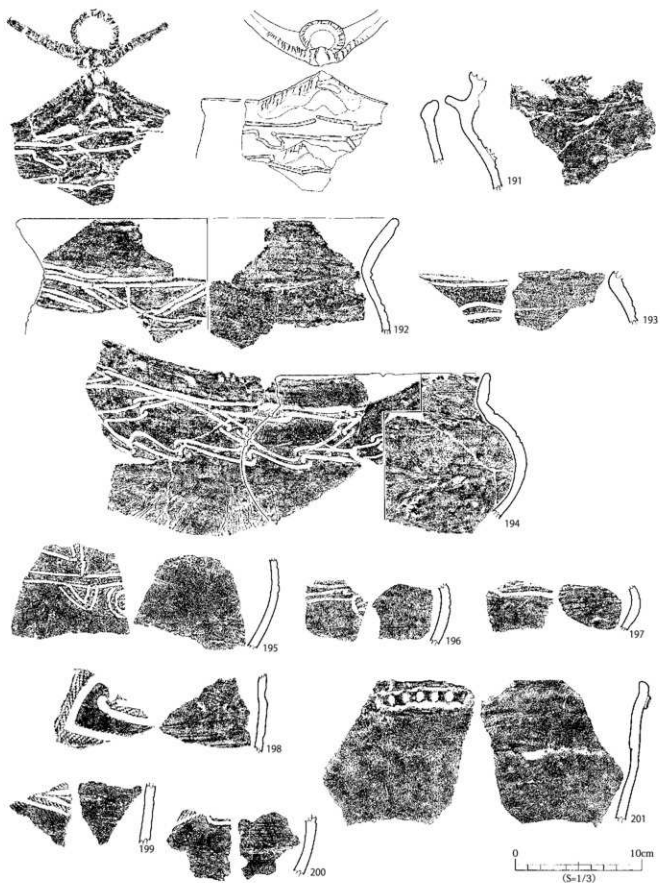
第156図 落ち込み状遺構5号内出土遺物実測図 (16)



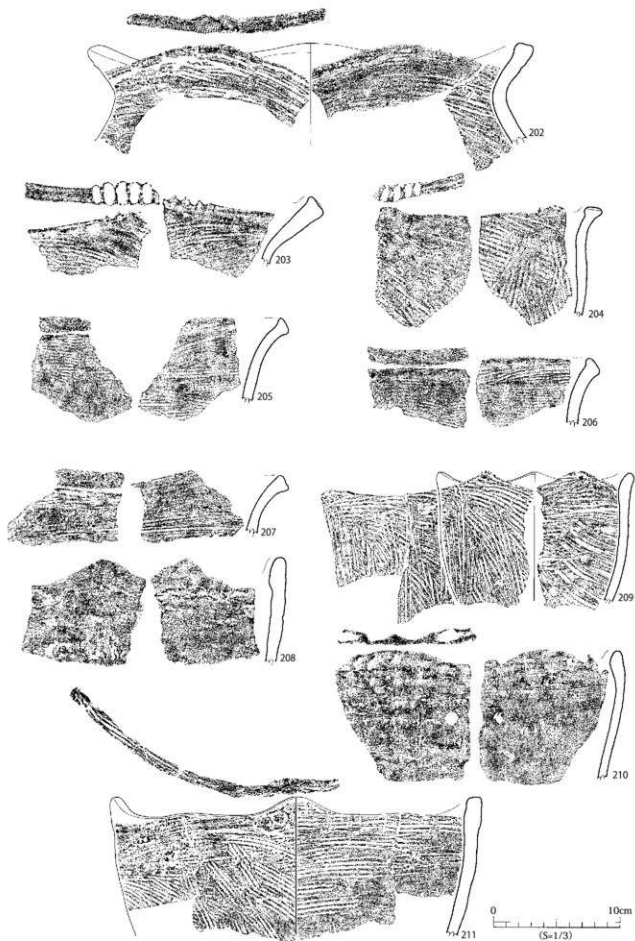
第157図 落ち込み状遺構5号内出土遺物実測図 (17)

の部分の口唇部には具腹縁による刺突文が施されている。192は、頭部にヘラ状の工具による沈線文が横位に2条施され、その下位に2本1組の平行な沈線により三角文などが施されている。193は、頭部に横位の沈線文を施し、その下位に2本1組の平行な沈線文が施されて

いる。指宿色と言われるピンク系の色をしている。194は、頭部に横位の沈線文を施し、その下位に2本1組の平行な沈線により入組文が施されている。197は、ヘラ状の工具による沈線文が施されている。内面にはミガキが施されている。198から200は、ヘラ状の工具による沈

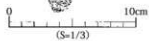
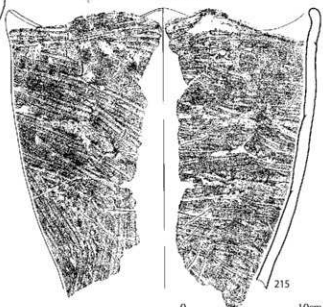
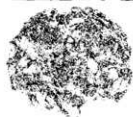
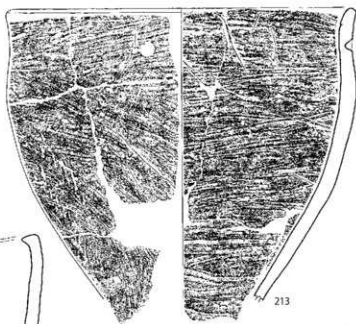
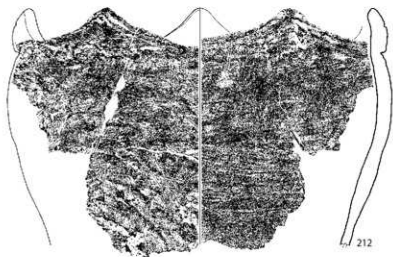


第158図 落ち込み状遺構5号内出土遺物実測図 (18)

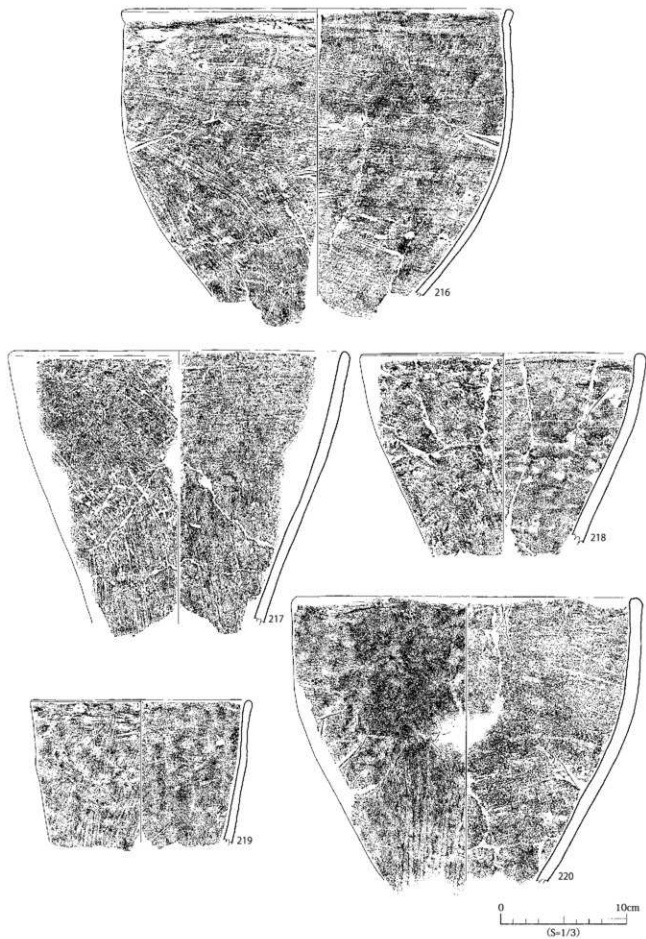


第159図 落ち込み状遺構5号内出土遺物実測図 (19)

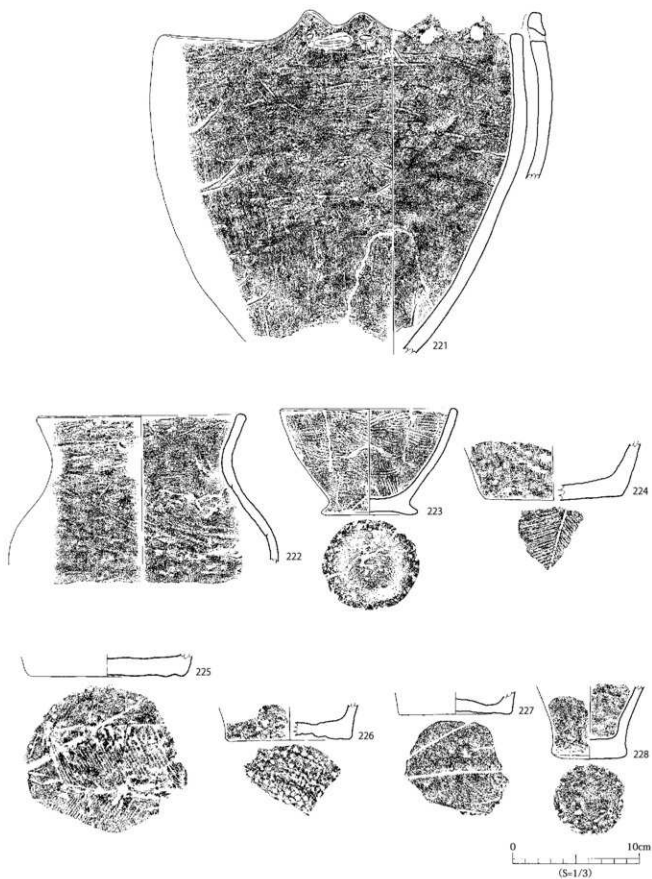




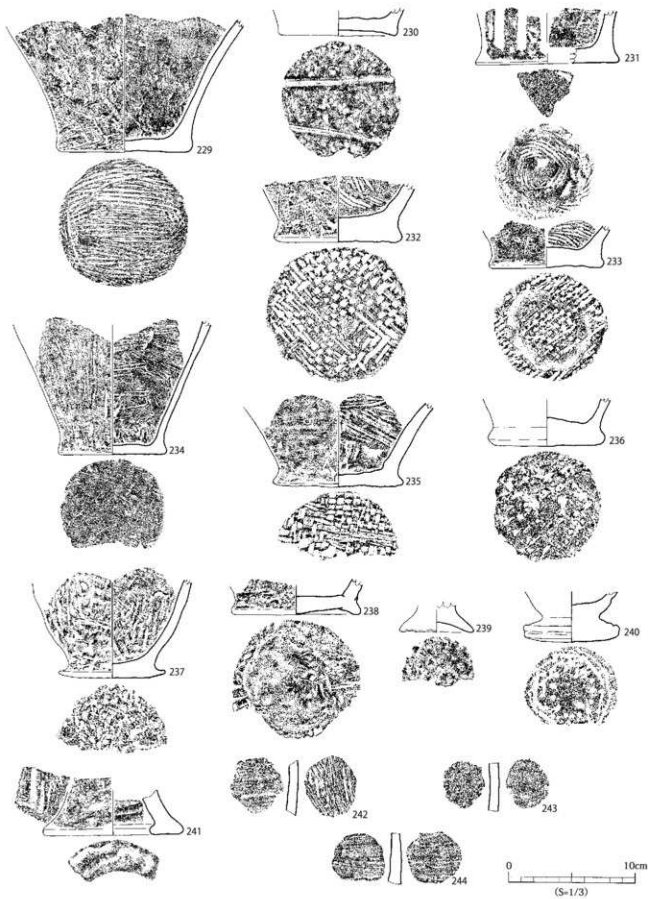
第160図 落ち込み状遺構5号内出土遺物実測図 (20)



第161図 落ち込み状遺構5号内出土遺物実測図 (21)



第162図 落ち込み状遺構5号内出土遺物実測図 (22)



第163図 落ち込み状遺構5号内出土遺物実測図 (23)

線間に縄文が施されている。200は、内外面ともにミガキが施され、沈線間に縄文が施されている。201は、口縁部上部に粘土紐を貼り付けた指頭による凹点のある突起が付く。202から223は、無文の土器である。202から207は、口縁部が断面三角形を呈する無文の土器である。202から204は、波状口縁である。202は、口唇部に貝殻背の押圧が施されている。203・204は、波状部に棒状の工具の押圧により刻み目が施されている。205は、平口縁である。208から212は、口縁部が肥厚するものである。210は、口縁部に台形状の突起の付く無文の土器である。補修用であったのか穿孔が施されている。212は、口縁部下位を削るにより段ができて無文の土器である。213から223は、口縁部が肥厚しないものである。213は、口縁部に外面から孔を穿とうとした痕が残る。214は、口縁部がやや内湾する無文の土器である。口唇部は幅広く平らに仕上げられている。215は、山形の突起を4か所に貼り付けた無文の土器である。221は、口唇部に窓のあるラグタのこぶ形の突起が付く。窓の付き方がそれぞれ違う。222は、壺形の土器である。223は、小型である。224から241は、底部である。底部表面には、作成時に敷物とした葉（オオタニワタリ）の痕やアンギン編みによる敷物などの痕跡が観察できる。224から229は、くびれがなく底部から胴部にひらきながら立ち上がるタイプのものである。226・227は、やや上げ底である。230から241は、底部端部が膨らむタイプのものである。231は、底部外面に棒状の工具による深い凹線文が縦位に施されている。239は、底部端部が大きく膨らみ、上げ底状になっている。240は、底部を大きくつくり、この上面に棒状の工具による沈線文を一点波状に施したり、側面に沈線文を施したりしている。また、底部表面には、貝殻縁による刺突や棒状の工具による刺突が円を描くように施されている。241は、底部端部が大きく膨らむ脚状の底部である。242から244は、円盤形の土製品である。89から105、183から186は2群、106から182、187から196は3群、197から200は4群であると思われる。

#### イ 出土土器 (第164図～第167図)

245から247は、二次加工剥片である。245は、良質の黒曜石を素材とする。裏面に線条痕が不規則に見られ、表面の稜の一部は稜頂部が摩滅している。247は、硬質の石材を用いている。大振り厚みのある剥片素材である。縁辺に大きめの剥離を有することから石核の可能性も考えられる。248から250は、擦切石器である。249は、刃部以外の辺は欠損しつつも摩滅を受けている。使用時の摩滅も考えなくてはいけない資料である。251から257は、磨製石斧である。251は、入念なミガキが見られ、刃部には刃こぼれが観察される。255は、基部と刃部を欠く。両側に剥離を施した後には敲打が施される。や

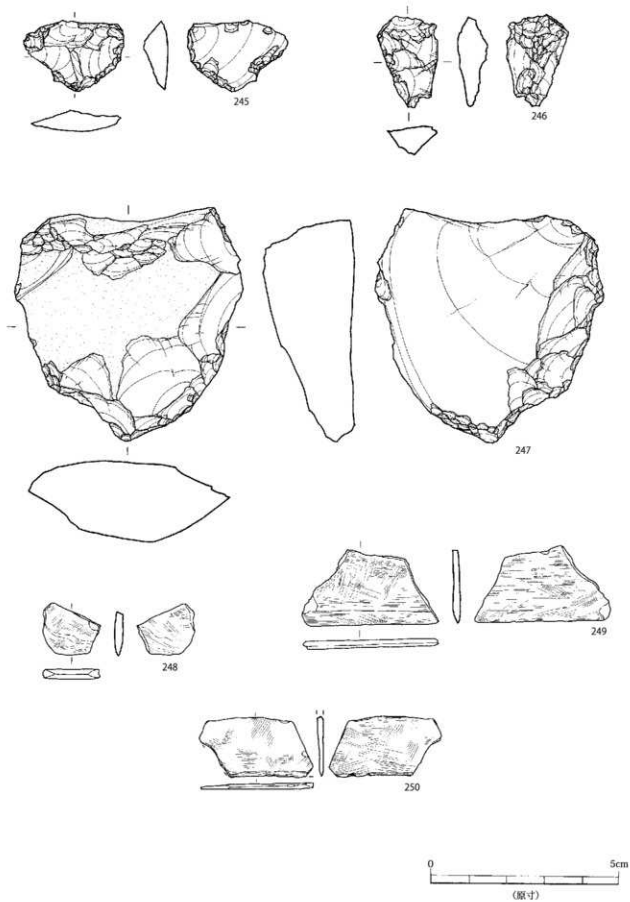
や扁平で厚みがある。257は、風化のためはつきりしない。良岩源ホルンフェルス石材としている。258は、石英の円礫を分割した後剥片を剥離しているのか風化のためはつきりしないが、礫器と思われる。259から273は、磨製石である。260は、光沢面の側面を敲打している。266は、厚みのある扁平な円礫を用い、表裏面には光沢があり、中央と側面に敲打痕が残る。271は、棒状礫を素材とする。全体的にトロッとし先端部にわずかに敲打痕が残る。

#### (6) 落ち込み状遺構6号 (第30図, 第168図～第170図)

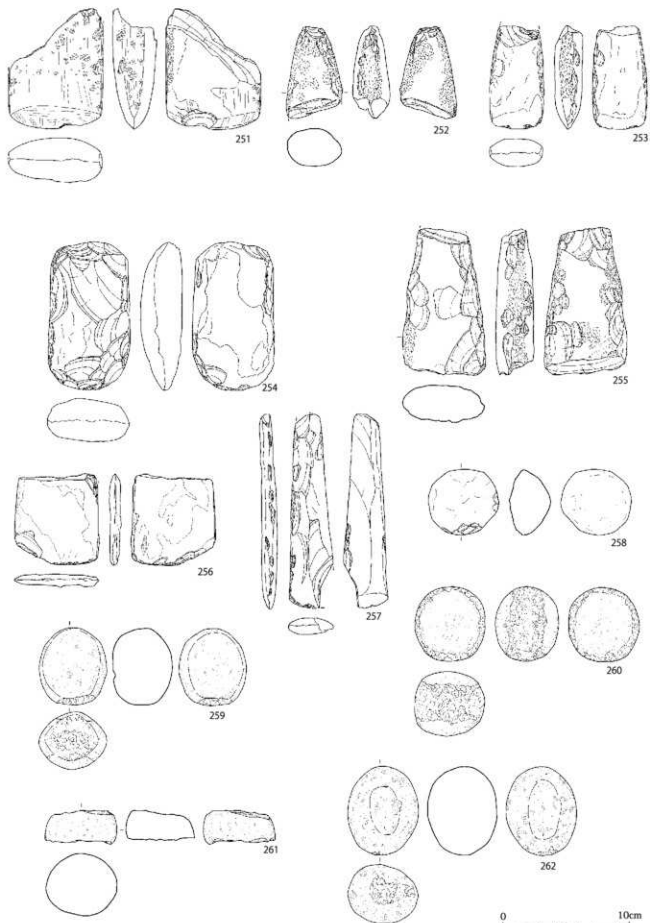
落ち込み状遺構6号は、A'-30・31区で検出した。最大幅5.3m×最大長5.1mで、検出面からの深さは0.1mから0.4mである。土器は接合作業を経て29点、石器は2点を図化した。

#### ア 出土土器 (第168図～第170図)

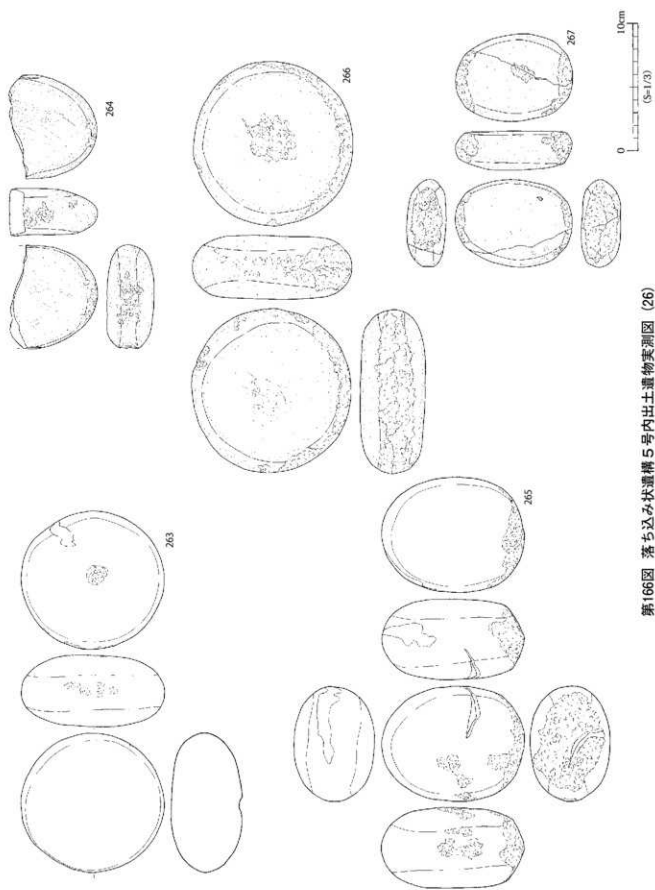
274は、棒状の工具による沈線文が横位や楕円状に施されている。口縁部には、わじり紐状の突起が付く。口唇部には、棒状の工具の押圧による刻み目が施されている。突起横の口唇部には、刻みの上に粘土紐を貼り付け、さらに棒状の工具の押圧による刻み目が施されている。275は、ヘラ状の工具による沈線文が横位に施され、その下位にV字状や縦位に沈線文が施されている。276は、指頭による凹線により菱形の回転文が施文されている。277は、指頭による縦位や横位の凹線文が施されている。胎土には、滑石が混入されている。278から281、283から288、290、293は、口縁部下位を削るにより口縁部を肥厚させている。278は、口縁部に指頭による凹線や凹点により文様が施されている。口唇部には、指頭による凹点が施されている。胎土には、滑石が混入されている。279は、口縁部にヘラ状の工具による沈線により幾何学文が施文されている。口唇部には、指頭による凹点が施されている。280は、口縁部にヘラ状の工具による縦位の短凹線文と指頭による凹点、横位の凹線文が施されている。口唇部には、指による凹点が施されている。281は、口縁部にヘラ状の工具による沈線文が縦位や斜位に施されている。283は、口縁部に棒状の工具による沈線文が縦位・横位に施されている。284は、口縁部にヘラ状の工具による沈線文が斜位に施されている。口唇部には、指頭による凹点が施されている。285は、口縁部に棒状の工具による斜位の連続した刺突文が2条施されている。286は、口縁部にヘラ状の工具による沈線文が斜位に施されている。口唇部には、指頭による凹点が施されている。287は、口縁部に縦位の短凹線文が施されている。横位の把手が付く。把手部分の口唇部には、指頭の押圧による刻み目が施されている。290は、口縁部にヘラ状の工具による沈線文が縦位や横位に施されている。口唇部には、ヘラ状の工具による刻み目が一部に施されている。293は、口縁部にヘラ状の工具による沈線



第164図 落ち込み状遺構5号内出土遺物実測図 (24)

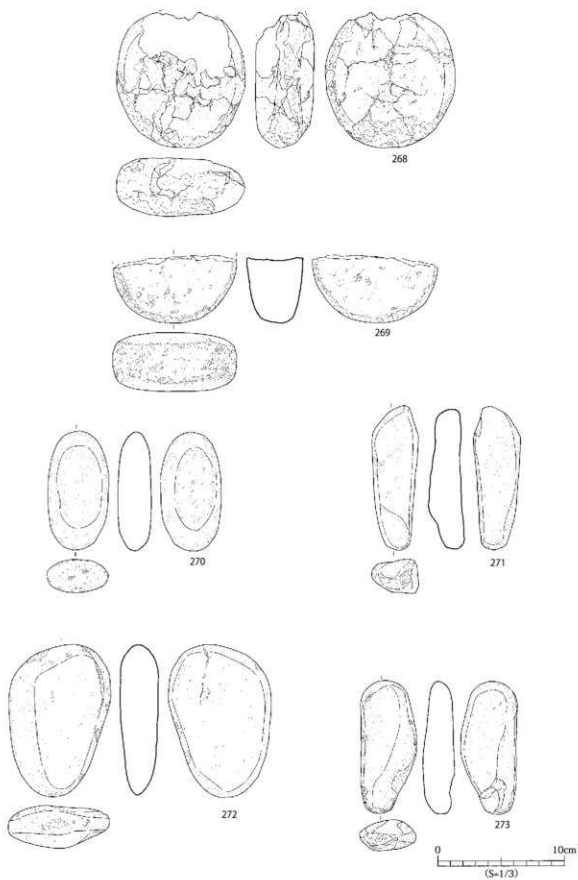


第165図 落ち込み状遺構5号内出土遺物実測図 (25)

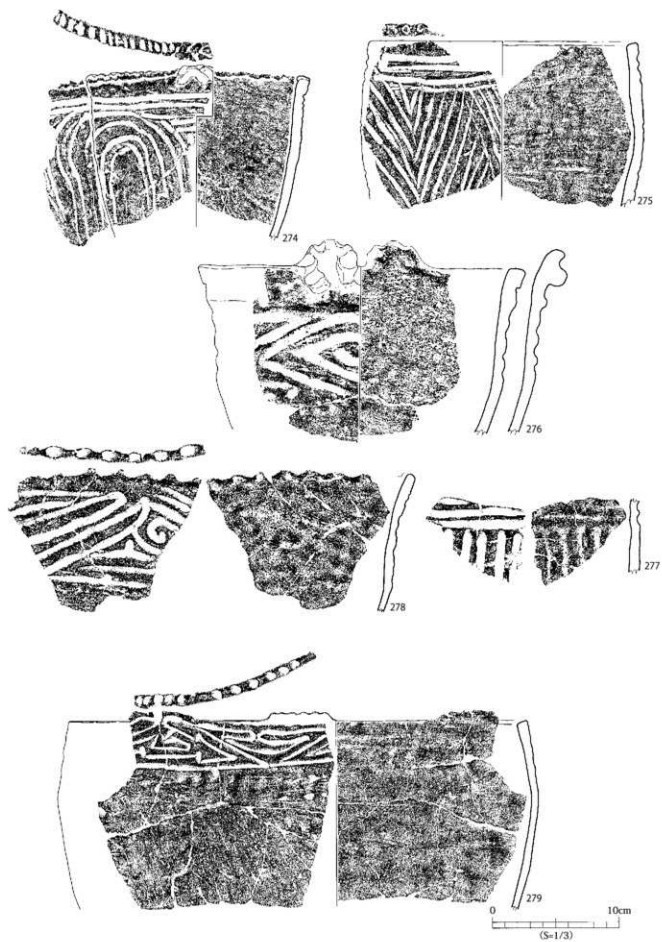


第166図 落ち込み状遺構5号内出土遺物実測図 (26)

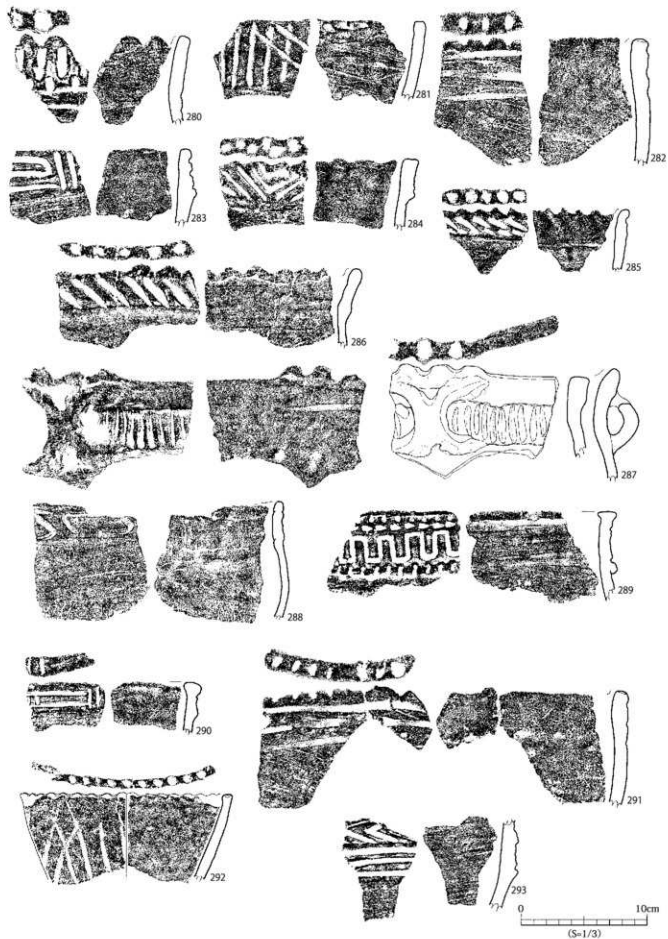




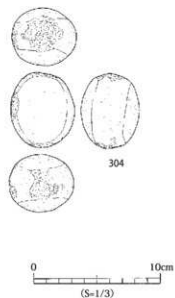
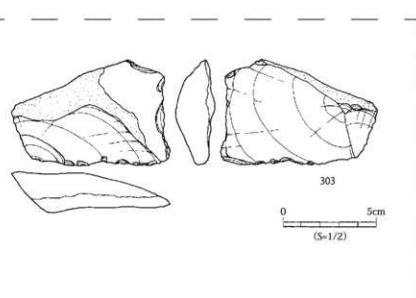
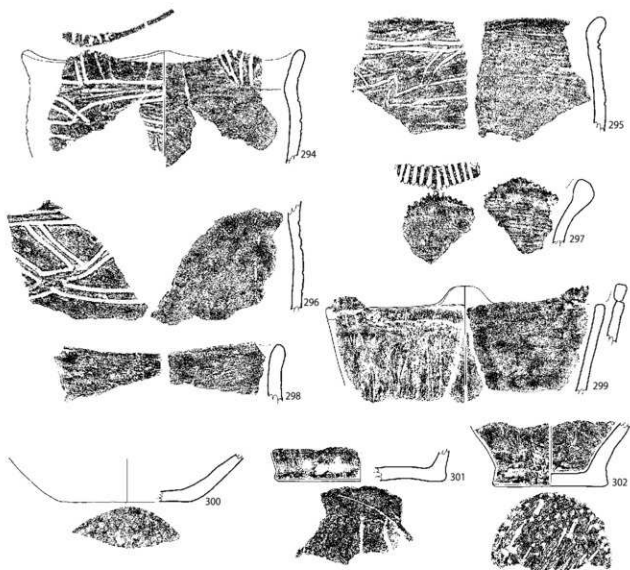
第167図 落ち込み状遺構5号内出土遺物実測図 (27)



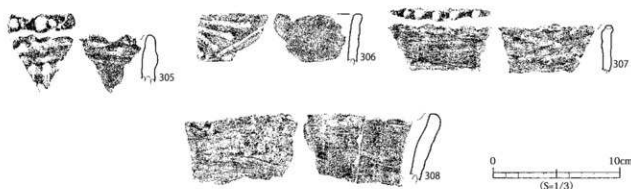
第168図 落ち込み状遺構6号内出土遺物実測図(1)



第169図 落ち込み状遺構6号内出土遺物実測図(2)



第170図 落ち込み状遺構6号内出土遺物実測図(3)



第171図 落ち込み状遺構7号内出土遺物実測図

文がく字状や横位に施されている。282は、棒状の工具による浅い沈線文が横位に施されている。口唇部には、指頭による凹点が施されている。289は、口縁部下部の突帯を作り出すことにより、口縁部を強調している。口縁部には、棒状の工具による連続した刺突文が2条施され、その下に凹凸状の沈線文が施されている。291は、ヘラ状の工具による沈線文が横位に施されている。口唇部には、指頭による凹点が施されている。292は、ヘラ状の工具による沈線文が施されている。指頭による凹点が施されている。294から296は、ヘラ状の工具による沈線文が横位に施され、その下に2本1組の平行な沈線文が施されている。297から299は、無文の土器である。297は、口縁部が断面三角形を呈している。口唇部には、細い棒状の工具による押圧により刻み目が施されている。299は、意のある突起が付く。突起の上部には、貝殻腹縁による刺突文が施されている。300は、くびれがなく底部から胴部にひらきながら立ち上がるタイプの底部である。301・302は、底部端部が彫らむタイプである。301は、胎土に滑石が混入されている。274から293は2群、294から296は3群であると思われる。

#### イ 出土石器 (第170図)

303は、二次加工剥片である。剥片の縁辺に微細な二次加工が施されている。304は、円礫を素材とした磨礫石である。上下面に使用による敲打痕が見られる。

#### (7) 落ち込み状遺構7号 (第30図, 第171図)

落ち込み状遺構7号は、A-29・30区で検出した。最大幅2.2m×最大長5.3mで、検出面からの深さは0.05mから0.35mである。土器は接合作業を経て4点図化した。

#### ア 出土土器 (第171図)

305は、指頭による凹線文と凹点が施されている。口唇部には、指による凹点が施されている。306は、ヘラ状の工具による沈線文が横位・斜位に施されている。307・308は、無文の土器である。307は、口唇部には指

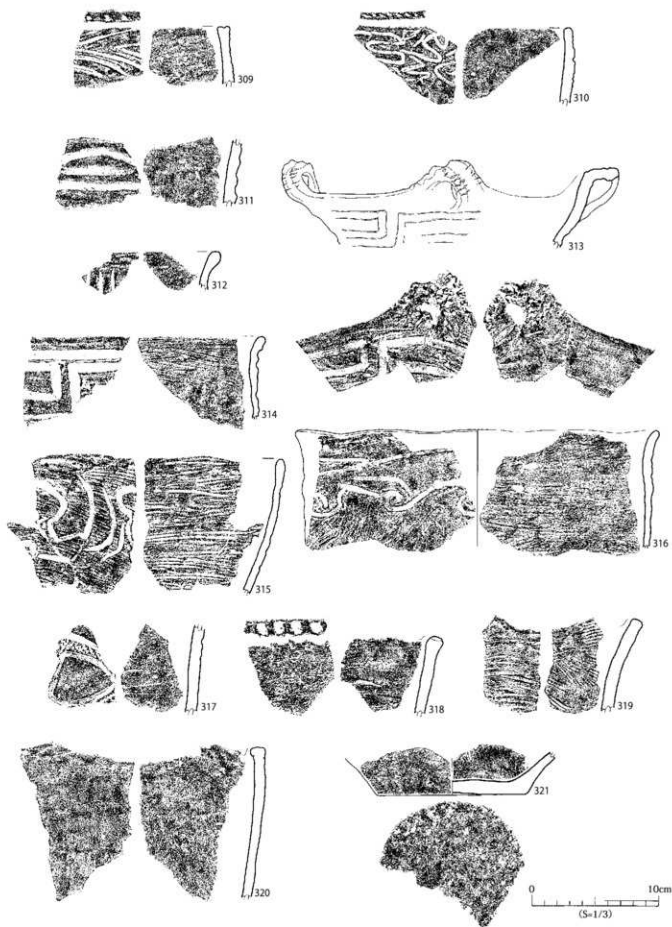
頭による凹点が施され波状を呈している。305・306は、2群であると思われる。

#### (8) 落ち込み状遺構8号 (第31図, 第172図・第173図)

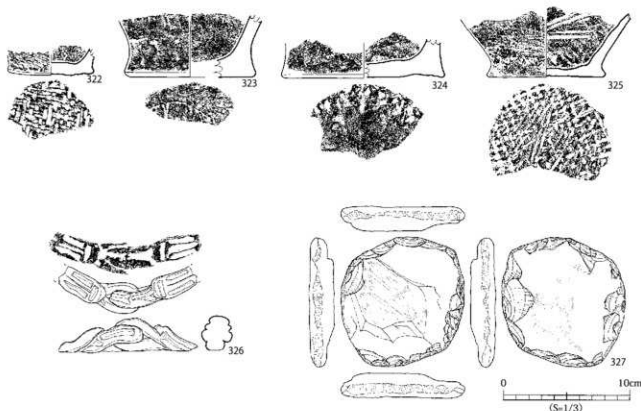
落ち込み状遺構8号は、A-29区で検出した。最大幅3.6m×最大長6.5mで、検出面からの深さは0.15mから0.45mである。土器は接合作業を経て18点、石器は1点を図化した。

#### ア 出土土器 (第172図・第173図)

309・310は、口縁部下部を削ることにより口縁部を強調している。309は、口縁部にヘラ状の工具による沈線文がく字状に施されている。口唇部には、半截竹管状の工具による刺突文が斜位に施されている。310は、口縁部に棒状の工具による沈線により幾何学文が施されている。311は、指頭による凹線文が横位に施されている。312は、口縁部にヘラ状の工具による沈線文が縦位に施されている。313・314は、靴形状の文様が施文されている。313は、口唇部に幅の広い粘土帯が把手状に折り曲げられるように付けられている。この粘土帯には、貝殻腹縁による刺突文が施されている。315・316は、ヘラ状の工具による沈線により文様が施されている。316は、補修孔と思われる穿孔がある。317は、外面にミガキが施されている。ヘラ状の工具による沈線間に縄文が施されている。318から320は、無文の土器である。318は、口唇部に指頭による凹点が施されている。319・320は、口縁部に山形の突起が付く。321から325は、底部である。321は、くびれがなく底部から胴部へひらきながら立ち上がるタイプである。322から325は、底部端部が彫らむタイプである。326は、口唇部の突起部分であると思われる。2つの粘土紐を組み合わせている。粘土紐には、縦位や横位の溝状の凹みがある。309から312は2群、313から316は3群、317は4群であると思われる。



第172図 落ち込み状遺構8号内出土遺物実測図(1)



第173図 落ち込み状遺構8号内出土遺物実測図(2)

#### イ 出土石器(第173図)

327は、表表面に磨面を有し、側縁に線状痕が残るものである。磨石の一種と思われる。

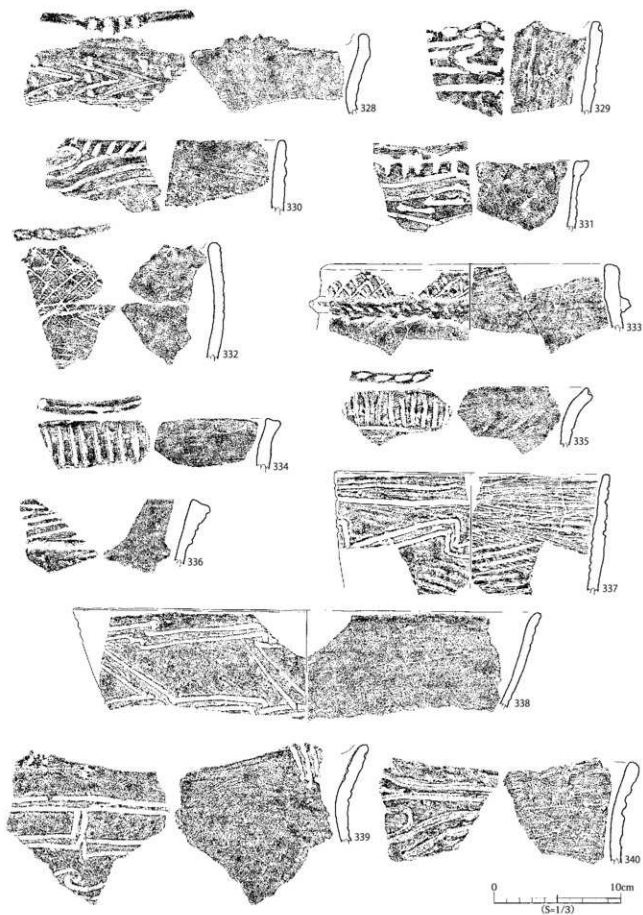
#### (9) 落ち込み状遺構9号(第31図,第174図～第179図)

落ち込み状遺構9号は、A'-B-28・29区で検出した。最大幅9m×最大長14.5mで、検出面からの深さは0.15mから0.45mである。土器は接合作業を経て53点、石器は10点を図化した。

#### ア 出土石器(第174図～第178図)

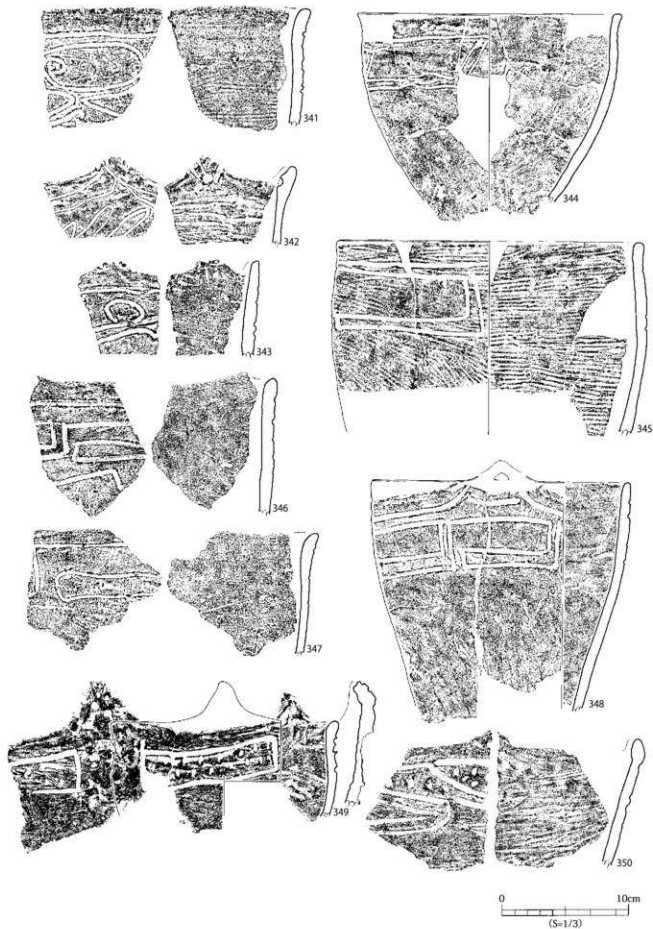
328は、口縁部下位を削ることにより口縁部を肥厚させている。口縁部には、ヘラ状の工具による沈線文が逆く字状に施され、指頭による凹点も施されている。329は、口縁端部に指頭による凹点が施され、その下位に棒状の工具による沈線文が施されている。330は、口縁端部に棒状の工具による浅い短沈線文が斜位に施され、その下位に横位の沈線文が施されている。331は、ヘラ状の工具による沈線文が施されている。口縁端部には、棒状の工具による押圧が施されている。332は、ヘラ状の工具による沈線文が格子状に施されている。333は、口縁部下部に突帯を付けることにより口縁部を強調している。口縁部には、ヘラ状の工具による沈線により格子文が施されている。突帯には、棒状の工具による刻み目が施されている。334は、口縁部には、ヘラ状の工具

による沈線文が縦位に施されている。口唇部には、指頭による凹点が施されている。335は、口縁部下位を削ることにより口縁部を肥厚させている。口縁部には、ヘラ状の工具による縦位の短沈線文が施されている。口縁部には、半截竹管状の工具による斜位の刺突文が施されている。336は、口縁部下位を削ることにより口縁部を肥厚させている。337から343は、口縁部下に横位の沈線文が施され、その下位に主に2本1組の平行な沈線による曲線文や鉤手文などが施されている。342は、口唇部に山形の厚い突起が付き、突起頂部にはヘラ状の工具により沈線文が施されている。突起の内側には、凹点のような穴がある。343は、口唇部に台形状の突起が付き、刺突文や沈線文が施されている。344から348は、棒状の工具による沈線文が横位に施され、その下位に靴形文が施されている。349から351は、沈線間に刺突文が施されている。349は、把手が付くものであり、把手部分の口唇部には棒状の工具により刺突文が施されている山形の突起が付く。352から355は、沈線文をもつ。352は、口縁部に窓のある突起が付く。353は、蕨手文状の文様が施されている突起が付く。356から362は、鉢形の土器である。356は、橋状の把手の付くものである。把手の付く口唇部にはねじり紐状の突起が付く。357は、X字状の橋状の把手が付く。358は、口縁部には、橋状の把手が

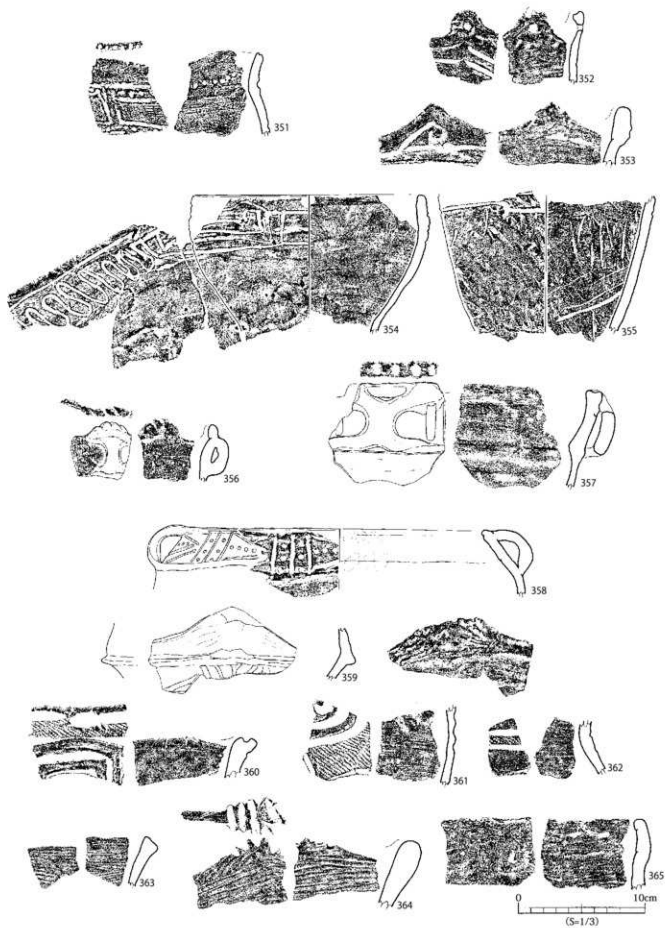


第174図 落ち込み状遺構9号内出土遺物実測図(1)

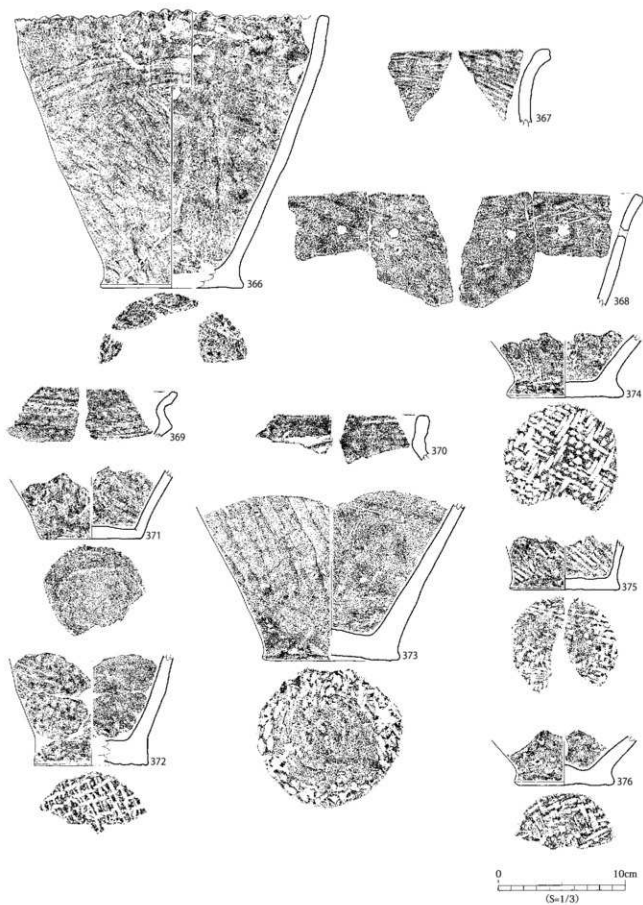




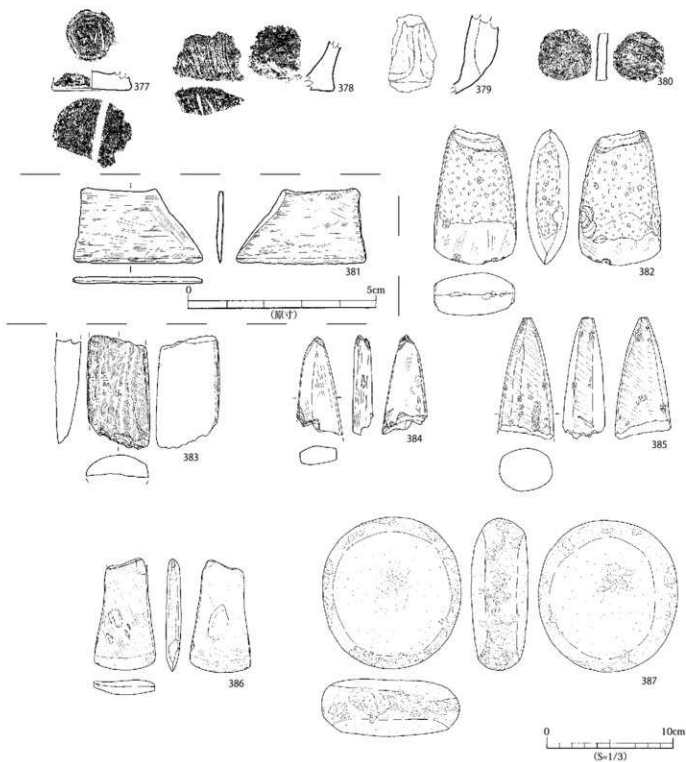
第175図 落ち込み状遺構9号内出土遺物実測図(2)



第176図 落ち込み状遺構9号内出土遺物実測図(3)



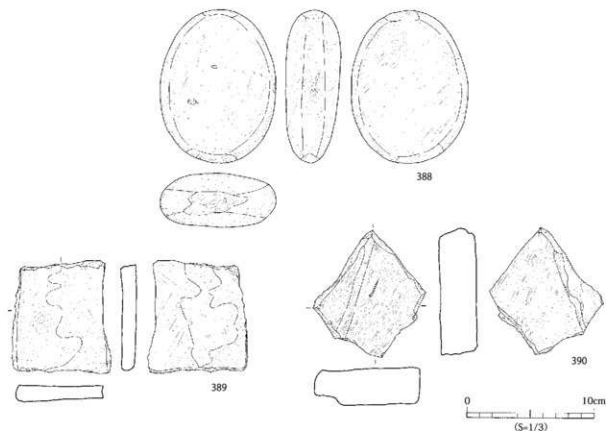
第177図 落ち込み状遺構9号内出土遺物実測図(4)



第178図 落ち込み状遺構9号内出土遺物実測図(5)

付く。口縁部には、棒状の工具による沈線文が縦位や斜位に施され、沈線間に竹管状の工具による刺突文が施されている。359は、橋状の把手の付くものである。胴部下部にヘラ状の工具による沈線文が施されている。胎土に滑石が混入されている。360から362は、縄文が施されている。360は、口唇部に溝状の深い沈線と凹みが施さ

れ、その外側に縄文が施されている。362は、内外面ともにミガキが施されている。363から368は、無文の土器である。363は、口縁部が断面三角形を呈している。364は、厚い突起の頂部に棒状の工具の押圧による刻み目が施されている。366は、口縁部に指頭による刻み目が施されている。367は、口縁部が外反している。368は、補



第179図 落ち込み状遺構9号内出土遺物実測図(6)

穿孔と思われる穿孔がある。369は、内外面ともにミガキが施されている。371から378は、底部である。371は、くびれがなく底部から胴部にひらきながら立ち上がるタイプである。372から378は、底部端部が膨らむタイプである。379は、口縁部の飾り部分であると思われる。380は、円盤形の土製品である。328から336、356から359は2群、337から355は3群、360から362は4群であると思われる。

イ 出土石器 (第178図・第179図)

381は、擦切石器である。図面上左側を欠くが、右は残存。右側は複数の剥離の後に直行するスリを施す。刃部はいくつかの刃こぼれ状の剥離があるが、その後に刃部と平行するスリと斜位のスリとが施される。382から386は、磨製石斧である。382は、敲打と刃部付近のスリが見られる。384は、平坦面長軸方向へのスリが見られる。頁岩源ホルンフェルス素材としていたるところからノミ状石斧の可能性が。386は、扁平な石斧で両側のスリにより刃部が幅広に見られる。387・388は、磨製石である。389・390は、扁平な石皿である。

(10) 落ち込み状遺構10号 (第33図, 第180図)

落ち込み状遺構10号は、A-28区で検出した。最大幅

2.3m×最大長2.5mで、検出面からの深さは0.3mから0.55mである。土器は接合作業を経て3点を図化した。

ア 出土土器 (第180図)

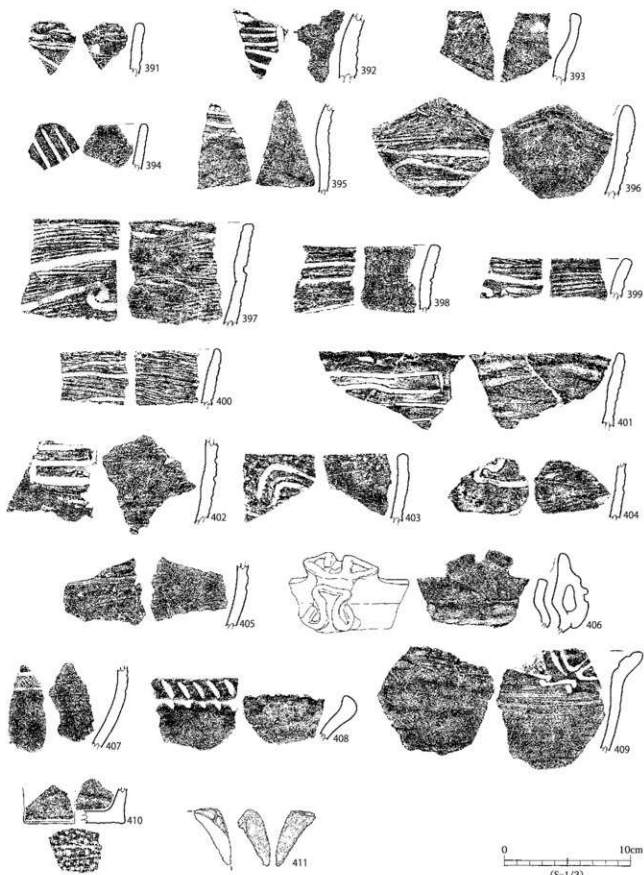
391は、ヘラ状の工具による沈線文が横位や斜位に施されている。392は、ヘラ状の工具による沈線文が縦位や横位に施されている。393は、無文の土器である。391・392は、2群であると思われる。

(11) 落ち込み状遺構11号 (第33図, 第180図)

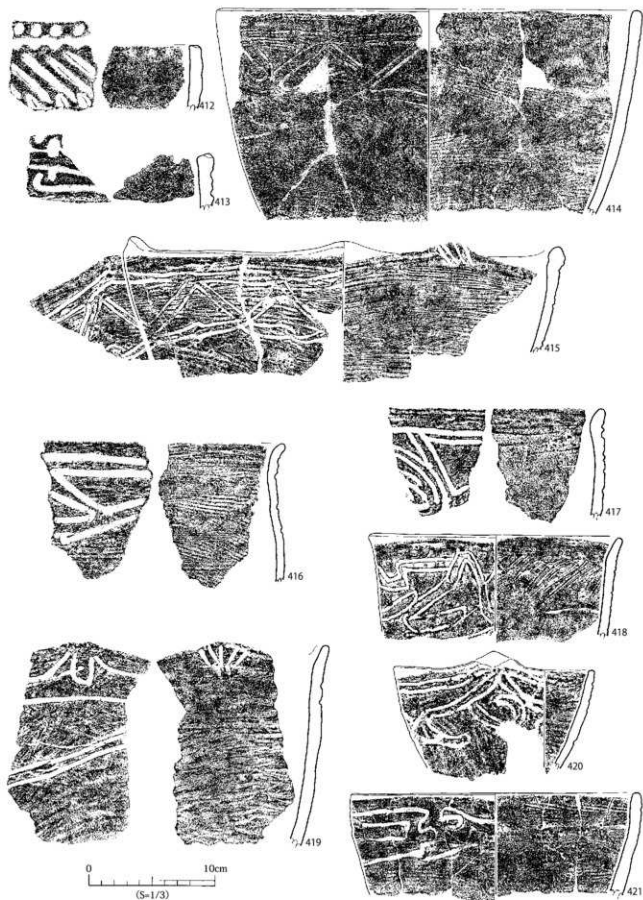
落ち込み状遺構11号は、A-27区で検出した。最大幅2.9m×最大長5.2mで、検出面からの深さは0.05mから0.25mである。土器は接合作業を経てこのうち17点、石器は1点を図化した。

ア 出土土器 (第180図)

394・395は、ヘラ状の工具による沈線文が斜位や横位に施されている。395は、口縁部下位を削ることにより口縁部をやや肥厚させている。396から400は、棒状の工具やヘラ状の工具による沈線文が横位に施され、その下位に沈線文が施されている。401から405は、棒状の工具による沈線文が施されている。406・407は、鉢形の土器である。406は、橋状の把手が付く。把手には、粘土紐



第180図 落ち込み状遺構10号・11号内出土遺物実測図



第181图 落ち込み状遺構12号内出土遺物実測図(1)

を貼り付けた文様が施されている。把手部分の口唇部には突起が付く。407は、ヘラ状の工具による沈線間に縄文が施されている。408・409は、無文の土器である。408は、口縁部が断面三角形形状である。口唇部には、棒状の工具による押圧により刻み目が施されている。409は、口唇部から内面にかけて、棒状の工具による沈線文が施されている。410は、底部である。底部裏面には網代編みの圧痕が残る。394・395・406は2群、396から404は3群、407は4群であると思われる。

#### イ 出土石器 (第180図)

411は、磨製石斧の基部片である。

#### (12) 落ち込み状遺構12号

(第35図・第36図、第181図～第189図)

落ち込み状遺構12号は、B-25～27区で検出した。最大幅9m×最大長10mである。土器は接合作業を経て62点、石器は11点を図化した。

#### ア 出土土器 (第181図～第187図)

412は、口縁部に斜位の凹線文と指頭による凹点が施されている。この凹点には、爪痕が観察できる。口唇部には、指頭による凹点が施されている。胎土に滑石が混入されている。413は、口縁部に指頭による凹線文と凹点が施されている。口唇部には、内面側と外面側交互に指頭による凹点が施されている。414から428は、口縁部下に横位の沈線文が施され、その下位に主に2本1組の平行な沈線による曲線文や鈎手文などが施されている。426・427は、口唇部に貝殻腹縁による刺突文が施されている。また、口縁部内面にも貝殻腹縁による刺突文が施されている。429から435は、口縁部下に横位の沈線文が施され、その下位に2本1組の平行な沈線により靴形文が施されている。436から443は、口縁部下に横位の沈線文が施され、その下位にステップ状の沈線文や波状の沈線文など比較的単純な文様が施されている。444から446は、2本1組の平行な沈線間に棒状の工具や貝殻腹縁による刺突文が施されている。444は、ヘラ状の工具による沈線間にヘラ状の工具による刺突文が施されている。445・446は、棒状の工具による沈線間に貝殻腹縁による刺突文が施されている。447は、2本1組の平行な沈線文を貝殻腹縁の刺突により表現している。448から451は、沈線文や刺突文による文様をもつものである。452から457は、鉢形の土器である。452は、橋状の把手が2か所付き、口縁部に山形の突起が4か所付くものである。口縁部には、ヘラ状の工具による沈線文が横位に施され、その下位に2本1組の平行な沈線文が施されている。突起の内面には、三角文が施文され、その中に棒状の工具による深い刺突文が施されている。453は、橋状の把手が付くものである。口縁部には、ヘラ状の工具による浅い沈線文が施されている。把手部分の口縁部には突起が付き、さらに小さな橋状の把手が付くと思われる。454は、

ヘラ状の工具による浅い2本1組の平行な沈線文が施されている。455は、橋状の把手の付く鉢形の土器である。口縁部には、棒状の工具による沈線文を横位に施し、その下位に2本1組の平行な沈線文が施されている。456は、橋状の2連の把手が付くものである。口縁部には、棒状の工具による沈線により入組文が施されている。把手の付く口縁部には、窓のある突起が付く。把手や突起には、貝殻腹縁による刺突文が施されている。また、把手の中央部分には、溝状の深い沈線文が施されている。457は、ヘラ状の工具による沈線により文様が施されている。沈線の区画外に縄文が施されている。458から464は、無文の土器である。458から460は、口縁部が断面三角形を呈する無文の土器である。458は、山形の突起が付き、突起の頂部に細い棒状の工具による刻み目が施されている。465から472は、底部である。465から471は、底部端部が影らむタイプである。472は、接着面の狭い上げ底状の底部である。473は、円盤形の土製品である。両面から穿孔をしようとした痕が残る。412・413は2群、414から456は3群、457は4群であると思われる。

#### イ 出土石器 (第188図・第189図)

474は、横長剥片を素材としたスクレイパーである。475から478は、磨製石斧である。475は、刃部を欠損している。欠損後に小さめの剥離が施されている。476は、扁平な磨製石斧である。基部と刃部を欠損している。頁岩源ホルンフェルス素材としている。477は、蛇紋岩製の磨製石斧である。478は、角柱状である。先端は先細りするが、平坦面を意識したスリが見られる。479は、扁平打製石斧を呈する。明確な切り部を有するが、刃部の摩滅等は観察されない。480から484は、磨製石器である。480は、全面に光沢がありわずかな敲打があるが、自然礫の可能性も考えられる。481は、側面・表裏面中央に敲打がある。482は、重量がある。両端を中心に敲打があり、表面中央にも敲打がありわずかに凹む。483は、全面に光沢がある。左側に面に直行する鋭いスリが長さ約5cmの範囲に見られ、面を形成している。

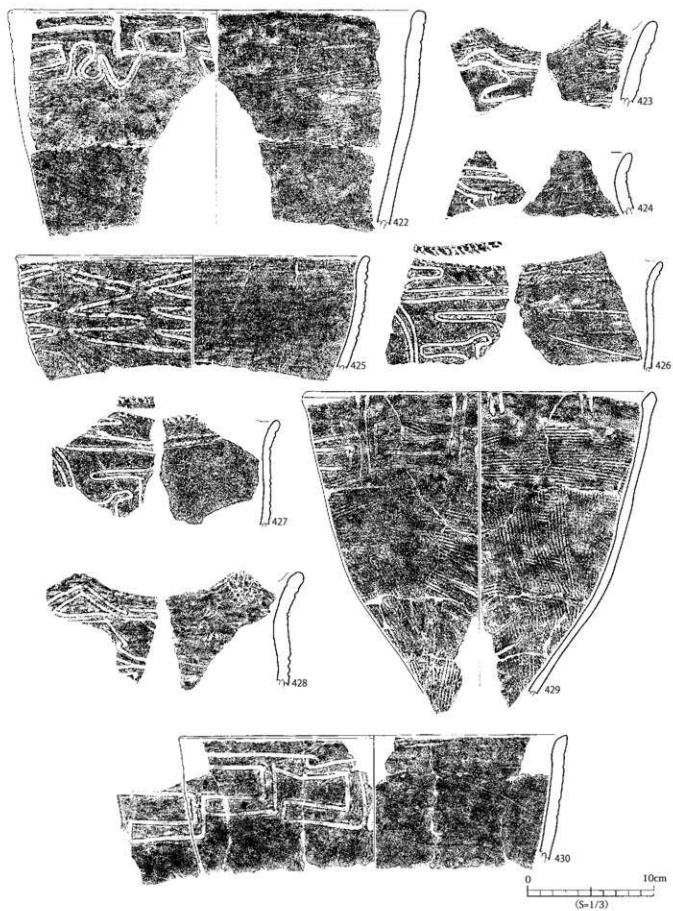
#### (13) 落ち込み状遺構13号 (第35図、第190図)

落ち込み状遺構13号は、C-25・26区で検出した。最大幅2.5m×最大長6.7mで、検出面からの深さは0.01mから0.25mである。土器は接合作業を経て6点、石器は2点を図化した。

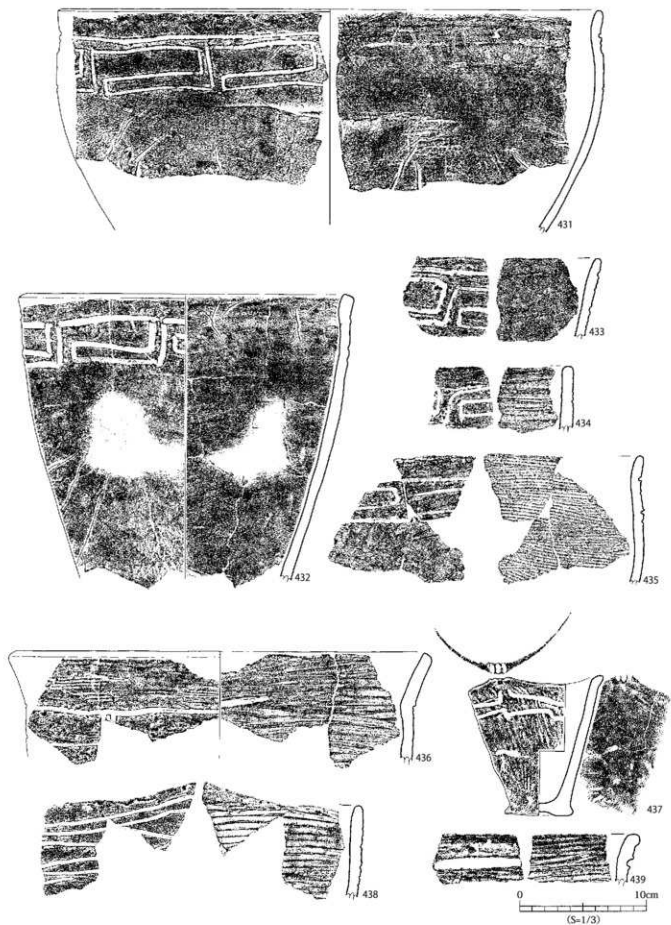
#### ア 出土土器 (第190図)

485・487は、棒状の工具による沈線文を横位に施し、その下位に棒状の工具による沈線文が施されている。486は、ヘラ状の工具による沈線文が施されている。波状口縁である。波状部の外面には、ヘラ状の工具による沈線によりV字状に施文されている。また、内面には、ヘラ状の工具による斜位の短沈線文や靴手文状に施文されている。488は、ヘラ状の工具による沈線間に棒状の

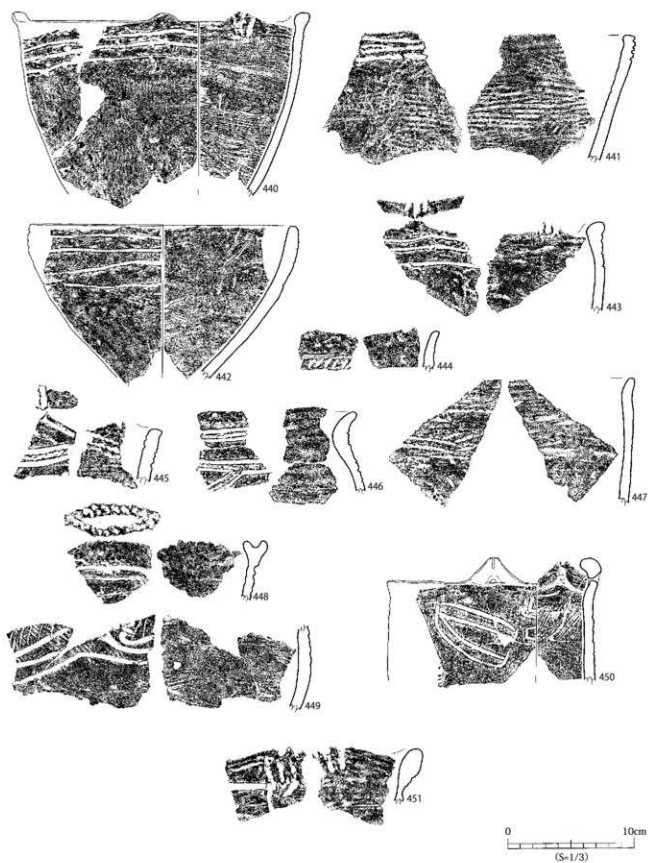




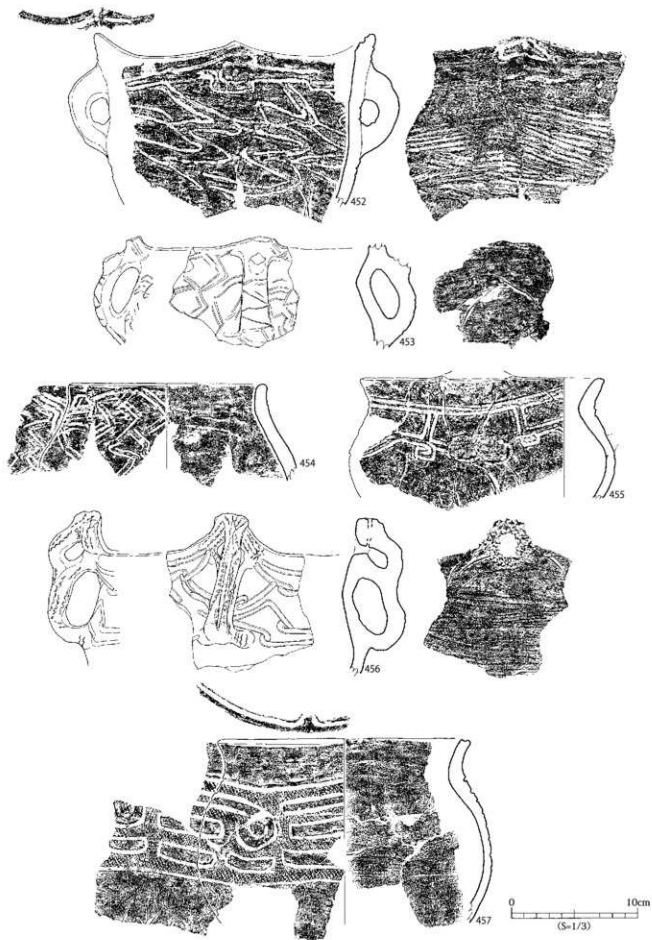
第182図 落ち込み状遺構12号内出土遺物実測図(2)



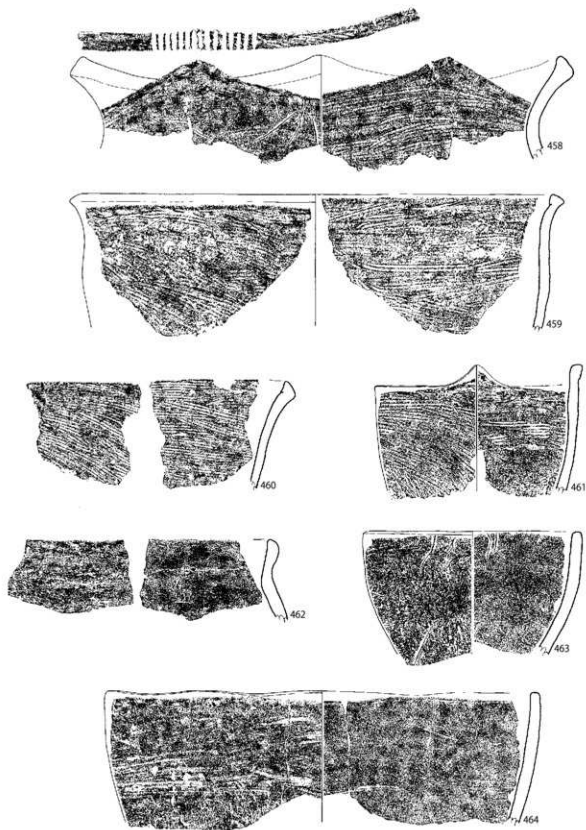
第183図 落ち込み状遺構12号内出土遺物実測図(3)



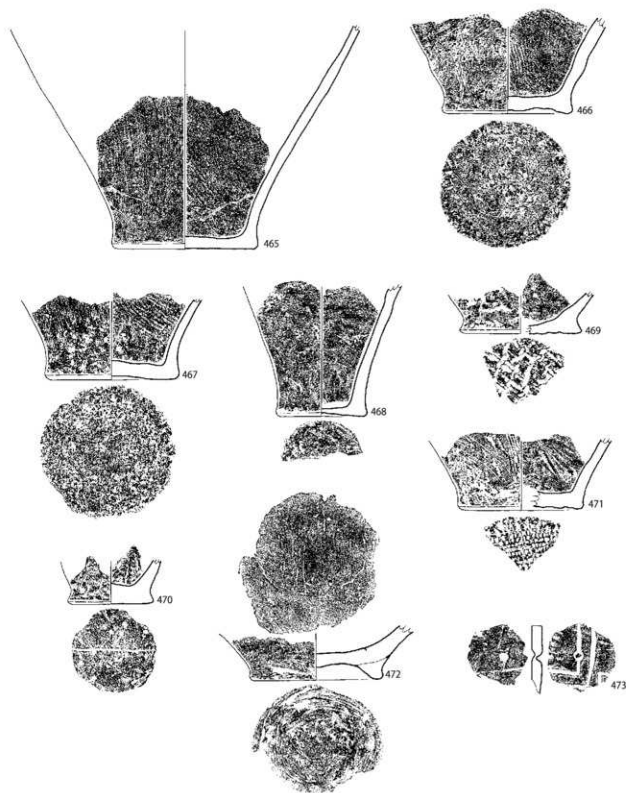
第184図 落ち込み状遺構12号内出土遺物実測図(4)



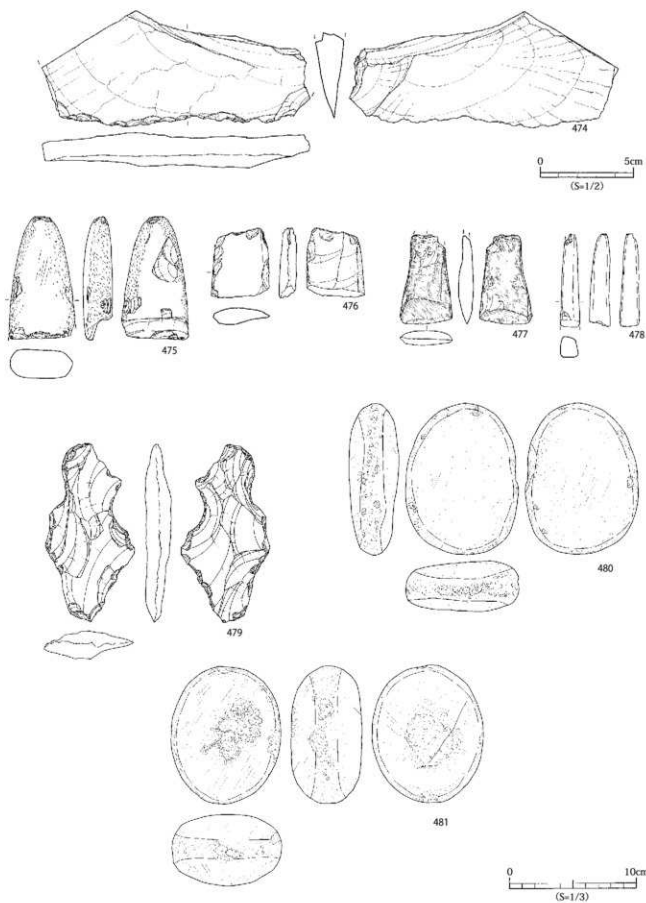
第185図 落ち込み状遺構12号内出土遺物実測図(5)



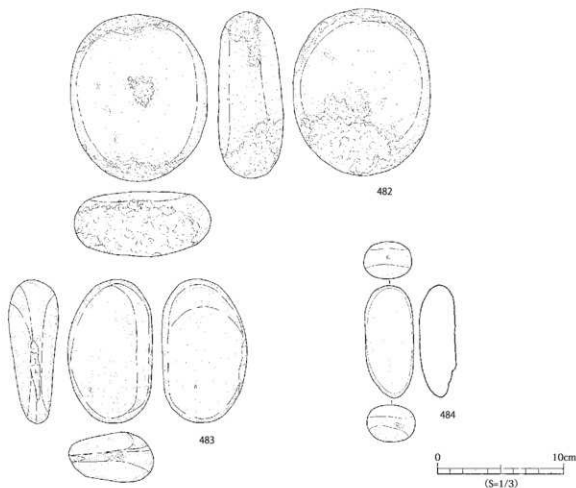
第186図 落ち込み状遺構12号内出土遺物実測図(6)



第187図 落ち込み状遺構12号内出土遺物実測図 (7)



第188図 落ち込み状遺構12号内出土遺物実測図(8)



第189図 落ち込み状遺構12号内出土遺物実測図(9)

工具による刺突文が施されている。489は、鉢形の土器と思われる。棒状の工具による沈線文が施されている。490は、底部である。底部裏には、網代編みの圧痕が残る。485から489は、3群であると思われる。

#### イ 出土石器 (第190図)

491・492は、磨盤石である。492の側面には、敲打による平坦面が形成されている。

#### (14) 落ち込み状遺構14号 (第40図, 第191図～第203図)

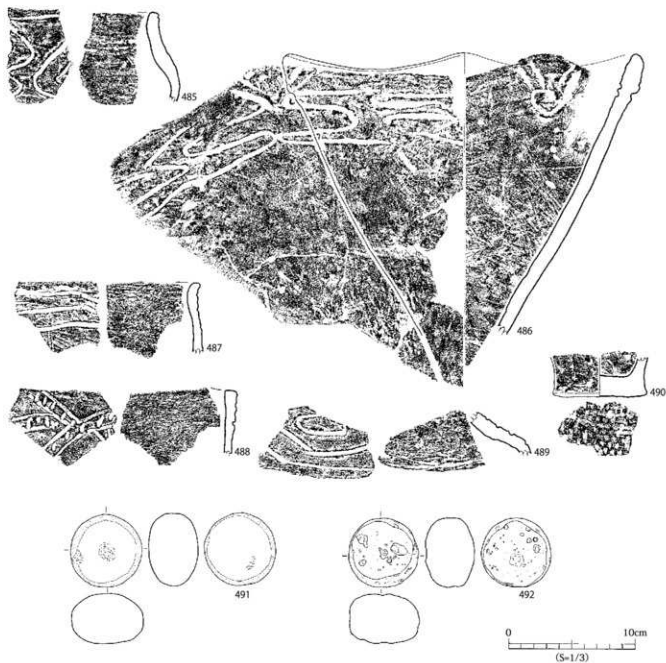
落ち込み状遺構14号は、A・B-22・23区で検出した。最大幅8.5m×最大長15mで、検出面からの深さは0.01mから0.2mである。土器は接合作業を経て86点、石器は9点を図化した。

#### ア 出土土器 (第191図～第201図)

493から504は、口縁部下位を削ったり突帯を作り出したりすることにより口縁部を肥厚したり強調したりしている。493は、橋状の把手の付くものである。口縁部と下部に粘土を貼り付け突帯を作り出し、口縁部を強調している。口縁部には、ヘラ状の工具による沈線文が施されている。突帯には指頭による凹点が施されている。

494は、口縁部下位を削ること及びその上部を突帯のようにすることにより口縁部を強調している。口縁部には、ヘラ状の工具による沈線文が縦位や横位に施されている。口縁部には低い台形状の突起が付く。この突起の上部はねじり紐を意識したと思われるヘラ状の工具による斜位の刻み目が施されている。495は、口縁部に棒状の工具による沈線文を横位に施し、その下位に沈線文が施されている。口縁部にはねじり紐状の突起が付く。496は、細い棒状の工具による沈線により横広りのS字状の文様が施されている。口唇部には、ねじり紐状の突起が付く。497は、ヘラ状の工具による沈線により波状の文様が施されている。口縁部には、ねじり紐状の突起が付く。ヘラ状の工具により刻み目が施されている。498は、口縁部には沈線により逆く字状の文様が施されている。499は、細い半葦竹管状の工具による沈線文が縦位や横位に施されている。横位の沈線文の端は、斜位の刺突文が施されている。500は、口縁部にねじり紐を意識したかのように貝殻腹縁による刺突文が施された突起が付く。突起の外面には、指頭による凹点が施されている。

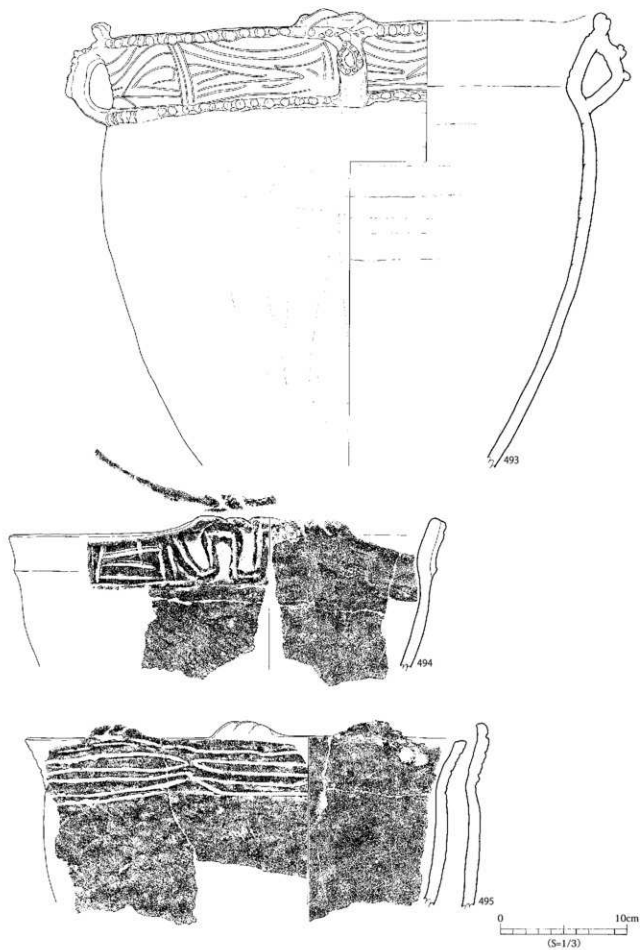




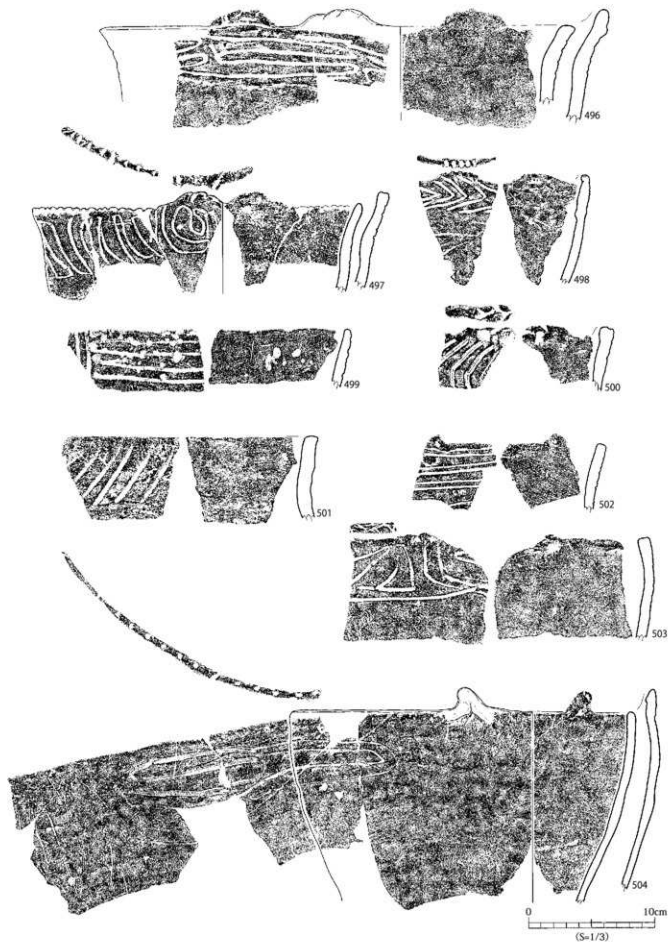
第190図 落ち込み状遺構13号内出土遺物実測図

501は、口縁部下位を削ることにより口縁部を強調している。503は、口縁部に低い突起が付く。口唇部には、ヘラ状の工具による刺突文が施されている。504は、口唇部に竹管状の工具による刺突文が一部施されている。口縁部には、波状の突起が付く。505は、指頭による2条の凹線文が横位に施され、その下位に凹線文が施されている。口縁端部を肥厚させ貝殻腹縁による刺突文が施されている。胎土に金雲母が多く見られる。506は、口縁端部に貝殻腹縁による刺突文が施され、その下位に2条の凹線文などが施されている。507から524は、棒状の工具やヘラ状の工具による沈線文が横位に施され、その

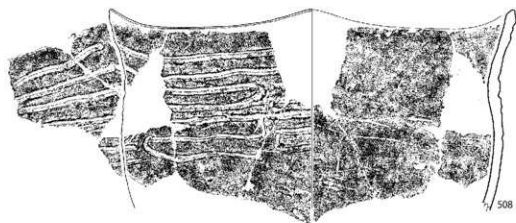
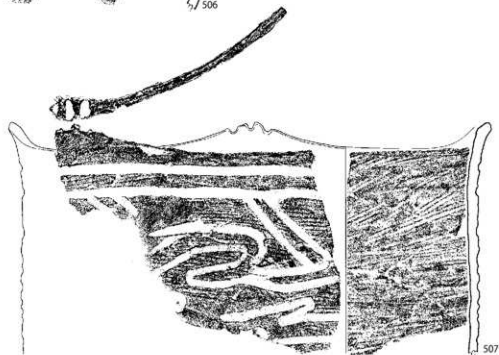
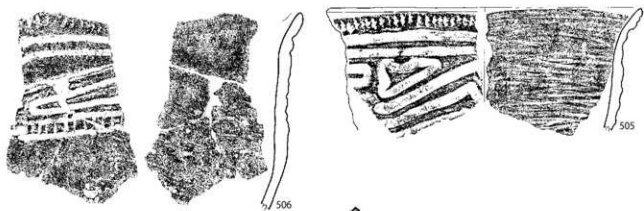
下位に沈線文が施されている。507は、指頭による凹線文が横位に施され、その下位に2本1組の平行な凹線文が施されている。口縁部は波状であり、頂部には丸い棒状の工具による押圧により刻み目が施されている。508は、ヘラ状の工具による沈線文が横位に施され、その下位に沈線文が施されている。509は、口縁部に低い波頂部があり、頂部の端部はヘラ状の工具により刻み目が施されている。510は、口縁部に突起が付き、突起端部に刺突文が施されている。511は、ヘラ状の工具による沈線文が横位に施され、その下位に2本1組の平行な沈線文が施されている。514は、ヘラ状の工具による沈線文



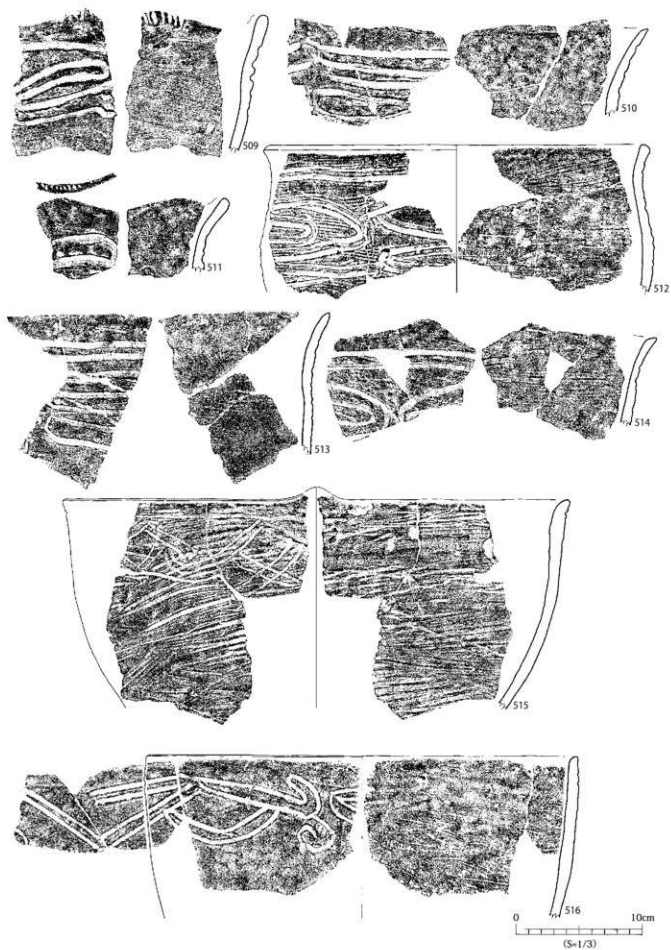
第191図 落ち込み状遺構14号内出土遺物実測図(1)



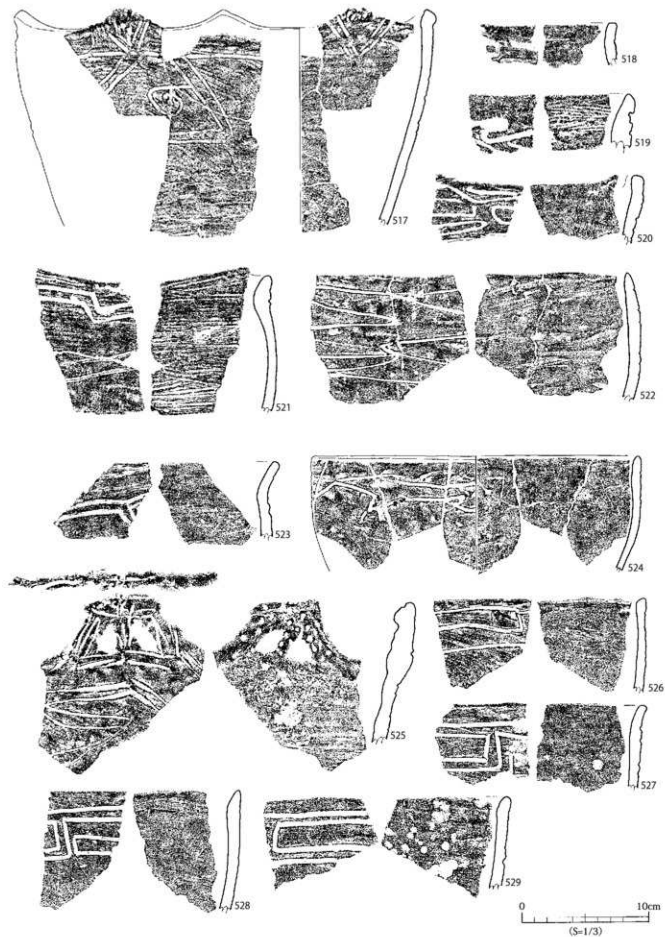
第192図 落ち込み状遺構14号内出土遺物実測図(2)



第193図 落ち込み状遺構14号内出土遺物実測図(3)



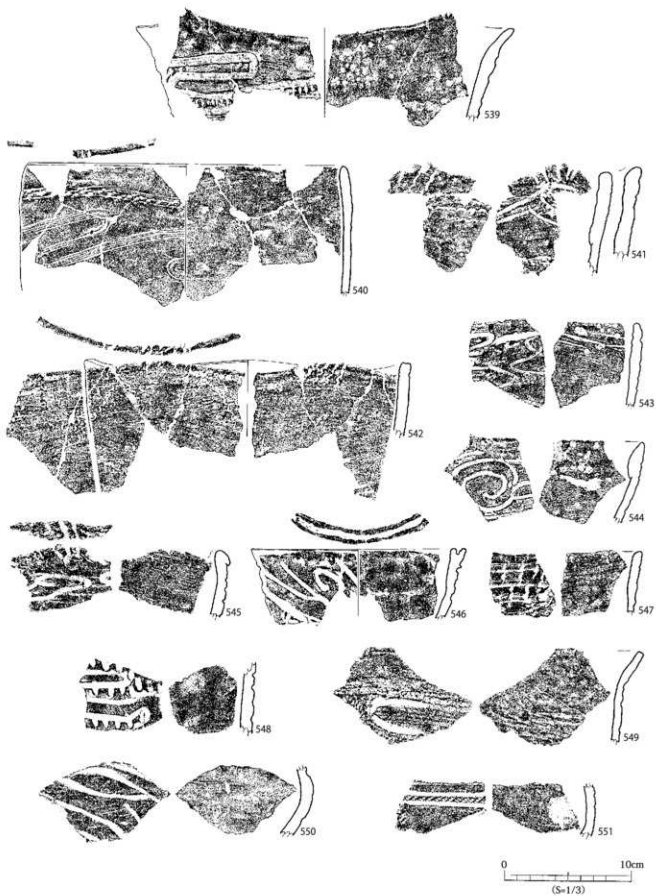
第194図 落ち込み状遺構14号内出土遺物実測図(4)



第195図 落ち込み状遺構14号内出土遺物実測図(5)

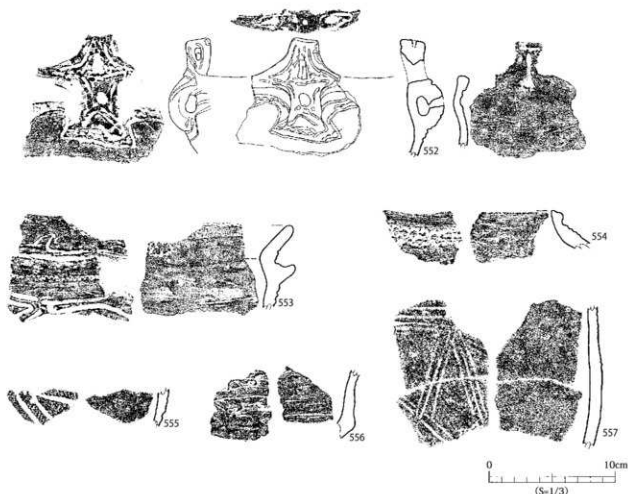


第196図 落ち込み状遺構14号内出土遺物実測図(6)



第197図 落ち込み状遺構14号内出土遺物実測図(7)

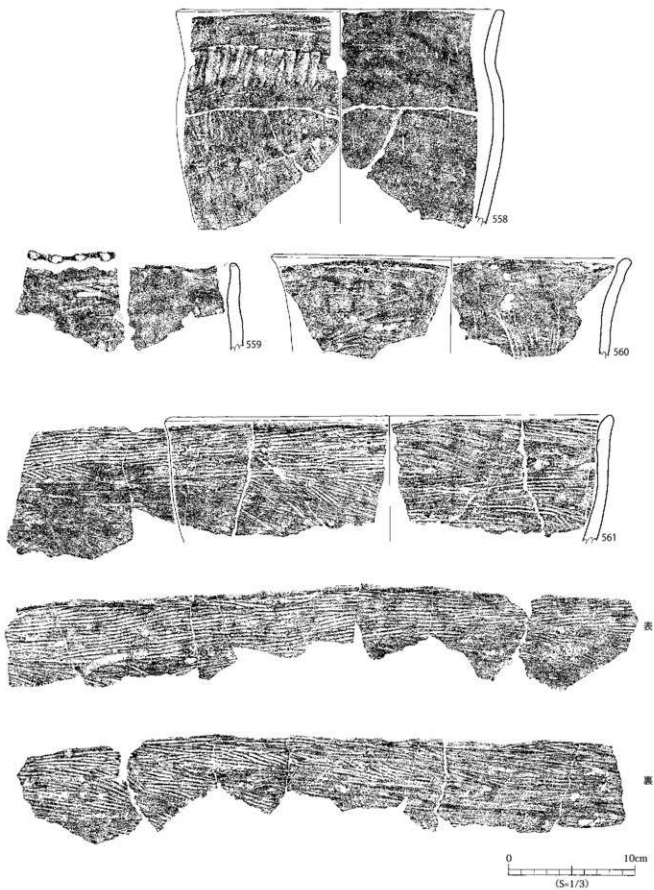




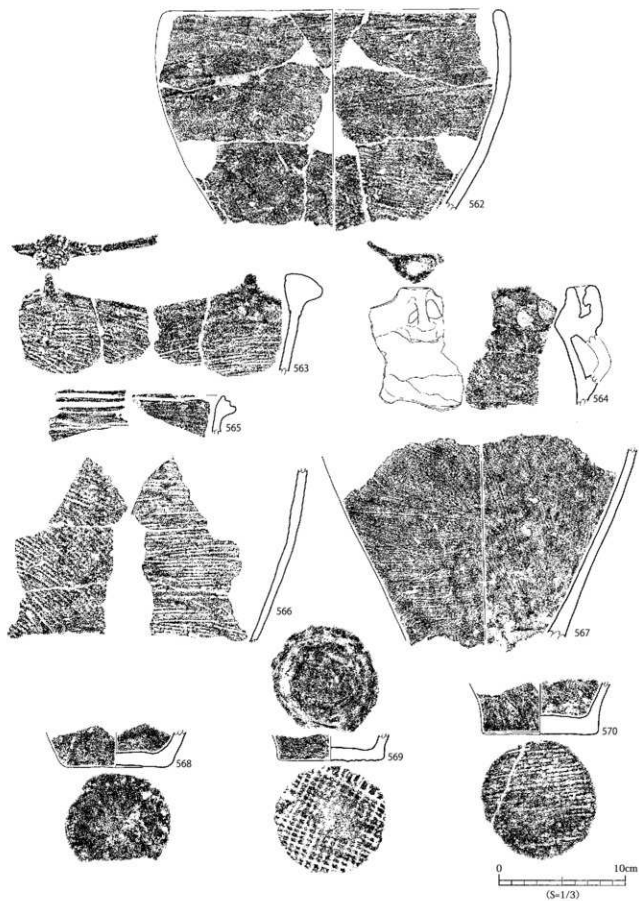
第198図 落ち込み状遺構14号内出土遺物実測図(8)

を横位に施し、その下位に2本1組の平行な沈線により菱形文が施されている。517は、波状口縁である。波状部外面には、斜位の刺突文やV字状に沈線文が施されている。波状部内面にも、V字状に沈線文が施されている。521は、ヘラ状の工具による沈線文がステップ状に施され、その下位にヘラ状の工具による浅い沈線文が施されている。522は、ヘラ状の工具による沈線により鋸歯状の文様が施されている。523は、ヘラ状の工具による2本1組の平行な沈線文が施されている。525は、口唇部に窓が2つある台形状の突起が付く。突起外面や口縁部には、ヘラ状の工具による文様が施されている。突起の口唇部や内面には、棒状の工具による刺突文が施されている。526から529は、ヘラ状の工具による沈線文が横位に施され、その下位に靴形文が施されている。530から535は、ヘラ状の工具による沈線により単純な文様が施されている。531は、ヘラ状の工具による沈線により入組文やステップ状の文様が横位に施され、その下位に入組文が施されている。532は、口縁部に棒状の工具による深い沈線文が横位に施されている。534は、ヘラ状の工具による沈線文が横位に2条施され、その下位に2

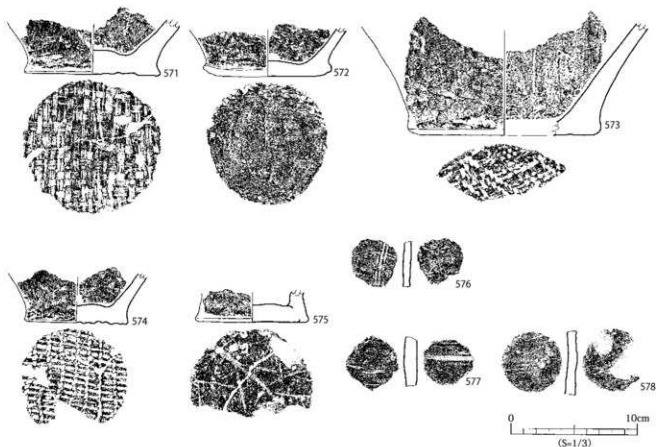
本1組の平行な沈線文が施されている。535は、ヘラ状の工具による沈線文が横位に施され、その下位に沈線による文様が施されている。口縁部には、窓の付いた突起が付く。536から540は、沈線間に棒状の工具や貝殻腹縁などによる刺突文が施されている。536は、一部沈線間にヘラ状の工具による刻み目が施されている。537は、刺突文が施された突帯が付く。棒状の工具による沈線間には、棒状の工具による刺突文が施されている。538は、沈線間にヘラ状の工具による刻み目が施されている。539は、棒状の工具による沈線間にヘラ状の工具による刻み目が施されている。口唇部に山形の突起が付き、突起頂部にヘラ状の工具による刻み目が施されている。540は、ヘラ状の工具による浅い沈線文が横位に施され、その下位に波状の文様が施されている。横位の沈線文には、貝殻腹縁による刺突文が施されている。541-542は、2本1組の平行な沈線文を貝殻腹縁の刺突で表現したものである。541は、口縁部に貝殻腹縁による刺突線が横位に施されている。口縁部は波状である。波頂部外面には貝殻腹縁による刺突文が施され、口唇部には刻み目が施され、口縁部内面には沈線文が施されている。542は、



第199図 落ち込み状遺構14号内出土遺物実測図(9)



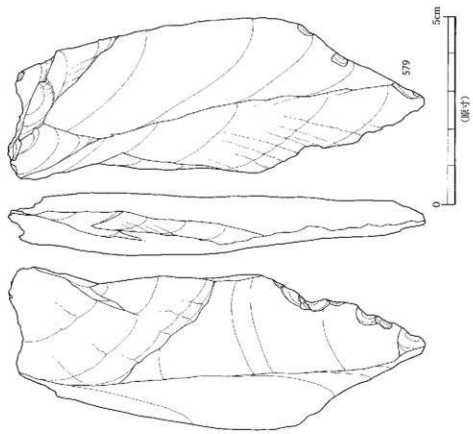
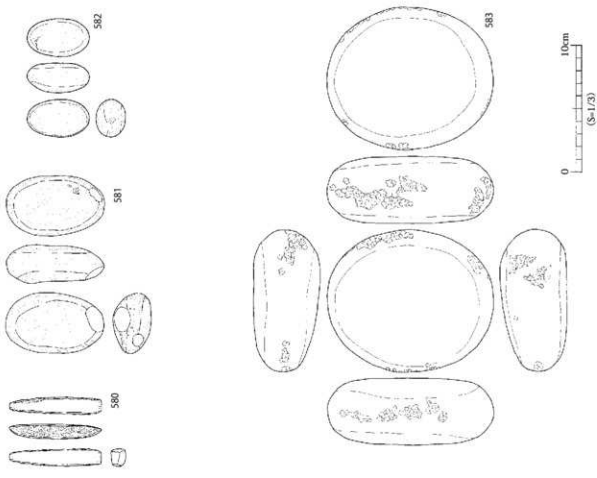
第200図 落ち込み状遺構14号内出土遺物実測図 (10)



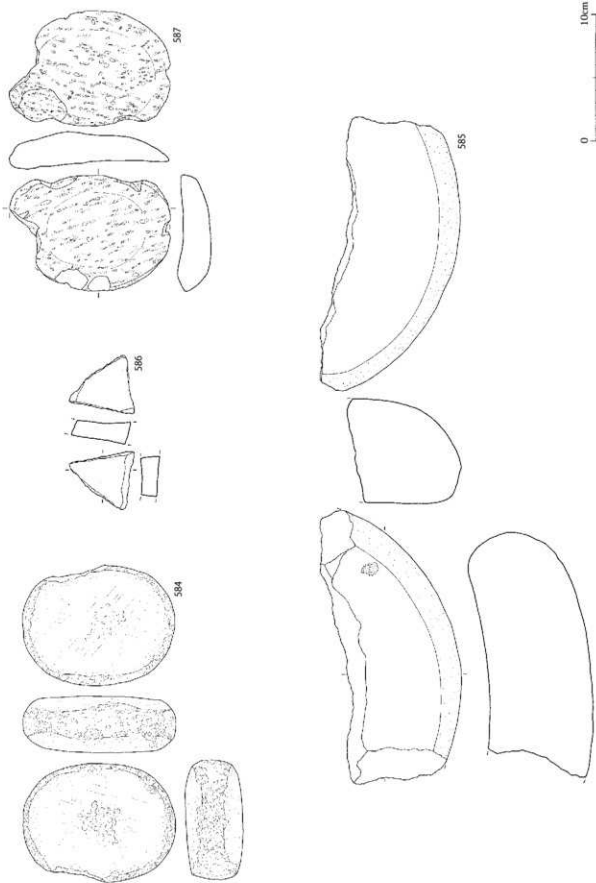
第201図 落ち込み状遺構14号内出土遺物実測図 (11)

口縁部に2重の貝殻腹縁による刺突線によりW字状の文様が施されている。波状口縁であり、波頂部の頂部から内面に貝殻腹縁による刺突文が施されている。543から548は、沈線文や刺突文が施されているものである。543は、ヘラ状の工具による沈線文が施されている。545は、棒状の工具による深い沈線文が施されている。口縁部にねじり紐状の突起が付く。546は、ヘラ状の工具による斜位の沈線文が施されている。口縁部をやや厚みさせ、口唇部に沈線文が施されている。547は、ヘラ状の工具による沈線文が施されている。浅い沈線間には貝殻腹縁による刺突文が施されている。548は、ヘラ状の工具による沈線間にヘラ状の工具による刺突文が施されている。549は、ヘラ状の工具による沈線間に縄文が施されている。550から555は、鉢形の土器である。550は、ヘラ状の工具による沈線間に貝殻腹縁による刺突文が施されている。552は、橋状の把手や窓のある突起が付く。把手や突起には、沈線文や貝殻腹縁による刺突文が施されている。把手には、孔が穿たれている。また、突起には上面に小さな凹み、左右側面にやや大きな凹みが施さ

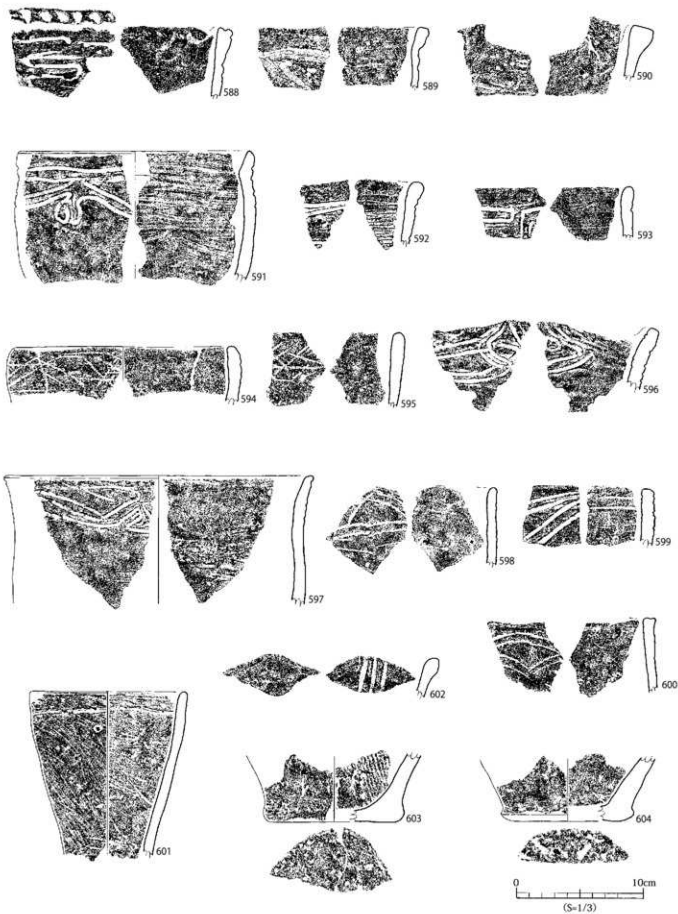
れている。553は、口唇部に高い突起の付くものである。口縁部にはヘラ状の工具による沈線文が施されている。突起には、貝殻腹縁による刺突文が施されている。554は、口縁部に横位の貝殻腹縁による刺突線が施されている。555は、棒状の工具による沈線間にヘナタリによる回転文(擬似縄文)が施されている。556は、口縁端部が内湾するものである。口縁部には、ヘラ状の工具による沈線文が施されている。557は、ヘラ状の工具による3本1組の沈線文が施されている。558から565は、無文の土器である。558は、口縁部下位を縦位に削ることにより口縁部を強調している。559は、口唇部に指頭による凹点が施されている。562は、口縁部がやや内湾している。563は、口唇部に突起が付く、突起全体に貝殻腹縁による刺突文が施されている。564は、橋状の把手が付く。把手の上部には橋状の把手状の飾りが付く。この飾りの上部からは把手状の飾りに向けて孔が穿たれている。565は、口唇部に2条の沈線文が施されている。566は、器面調整が内外面ともに貝殻条痕である。568から575は、底部である。568から570は、くびれがあまりなく胴部へ向けてひらきながら立ち上がるタイプのもので



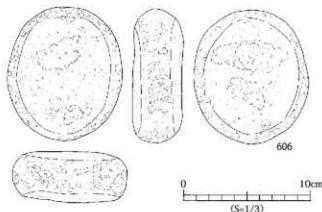
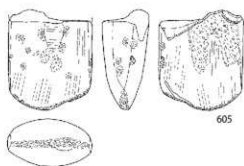
第202図 落ち込み状遺構14号内出土遺物実測図 (12)



第203図 落ち込み状遺構14号内出土遺物実測図 (13)



第204図 落ち込み状遺構15号内出土遺物実測図 (1)



第205図 落ち込み状遺構15号内出土遺物実測図(2)

ある。571から575は、底部端部が彫らむタイプのものである。576から578は、円盤形の土製品である。493から506・550は2群、507から549・552から555は3群、551は4群であると思われる。

#### イ 出土石器(第202図・第203図)

579は、二次加工剥片である。風化した頁岩製である。わずかに二次焼成を受けている。580は、小型のノミ状石斧である。両端に刃部が形成されている。両側面は敲打痕が見られる。581から584は、磨礫石である。581は、自然礫の可能性もある。584は、扁平な楕円形礫を素材とする。側面の敲打が「明瞭」に見られる。585は、石皿である。使用による凹みを有する。586は、砂岩製の砥石である。両面に光沢面がある。587は、軽石製品である。表面中央部分がやや凹むように作ってある。

#### (15) 落ち込み状遺構15号(第41図, 第204図・第205図)

落ち込み状遺構15号は、A・B-20・21区で検出した。最大幅3.2m×最大長10mで、検出面からの深さは0.08mから0.2mである。土器は接合作業を経て17点、石器は2点を図化した。

#### ア 出土石器(第204図)

588から590は、口縁部に沈線文が施されている。588は、口縁部下位を削ることで口縁部を肥厚させている。口唇部には、指による凹点が施されている。589は、ヘラ状の工具による沈線文が横位や斜位に施されている。590は、棒状の工具による沈線文が施されている。口縁部には、厚い突帯が付く。591から600は、棒状やヘラ状の工具による2本1組の平行な沈線文が施されている。596は、内面にヘラ状の工具により文様が施されている。602は、突帯の付く無文の土器である。突帯内面には棒状の工具による縦位の沈線文が施されている。603・604

は、底部である。どちらも底部端部が彫らむタイプである。588から590は2群、591から600は3群であると思われる。

#### イ 出土石器(第205図)

605は、磨礫石斧の刃部で欠損片である。刃部に敲打痕が見られ転用されたものと思われる。606は、磨礫石である。

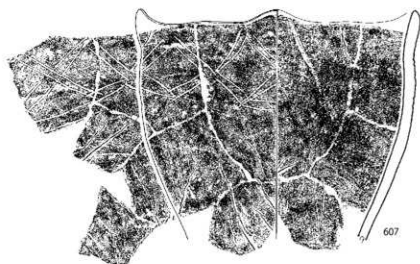
#### (16) 落ち込み状遺構16号(第45図, 第206図～第223図)

落ち込み状遺構16号は、B・C-17～19区で検出した。最大幅7m×最大長15mで、検出面からの深さは0.05mから0.45mである。土器は接合作業を経て70点、石器は12点を図化した。

#### ア 出土土器(第206図～第221図)

607から610は、口縁部下を削るなどするものである。607は、ヘラ状の工具による2本1組の平行な沈線文により菱形文が施されている。口縁部には、山形の突起が4か所付くと思われる。609・610は、棒状の工具による縦位や横位の沈線文が施されている。口縁部下や沈線間には、棒状の工具による刺突文が施されている。口唇部には、ねじり紐状の突起が付く。この突起の口唇部には、ヘラ状の工具による刻み目が施されている。611から622は、口縁部下に横位の沈線文が施され、その下位に主に2本1組の沈線による曲線文や鈎手文などが施されている。611は、口唇部に山形の突起が4か所に付き、突起の内面にはV字状に短沈線文が施されている。612は、口唇部に窓が2つ付く台形状の突起が付く。この突起には、口唇部から内面にかけて棒状の工具による沈線文が施されている。613は、ヘラ状の工具による沈線文を横位に1条施し、その下位に入組文や2本1組の平行な沈線文により三角文が施されている。丸い窓のある突起が4

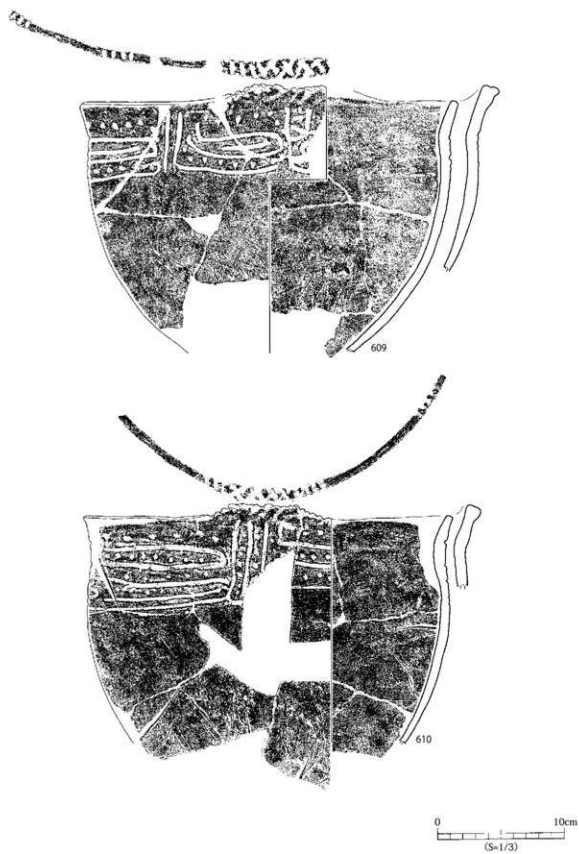




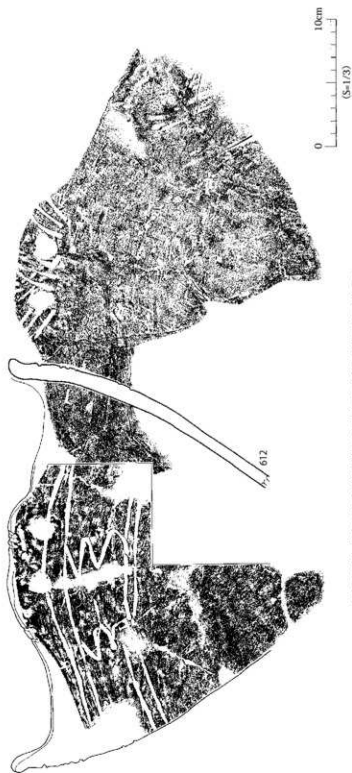
第206図 落ち込み状遺構16号内出土遺物実測図(1)

か所に付く。突起の内面には、沈線文が施されている。614は、口唇部に窓のある山形の突起が付く。615は、棒状の工具による2本1組の平行な沈線文が施され、その下位に2本1組の平行な沈線文が施されている。617は、補修孔と思われる穿孔がある。620は、ヘラ状の工具による沈線により渦巻文などが施されている。623は、指頭による沈線により靴形文が施されている。口縁部には、幅広い帯状の粘土を折り曲げた把手状の突起が3か所に付く。突起には、巻き貝を押しつけたような押圧痕がある。624は、ヘラ状の工具による沈線により横位のステッ

ブ状の文様が施されている。625から628は、沈線間に棒状やヘラ状の工具や貝殻腹縁による刺突文が施されているものである。625は、ヘラ状の工具による2本1組の平行な沈線により三角文や麻手文、菱形文などを施文している。沈線間には、ヘラ状の工具による刺突文が施されている。刻み目のある突起が4か所に付く。突起内面には、棒状の工具による沈線により幾何学文が施されている。626は、沈線間にヘラ状の工具による刻み目が施されている。627は、口縁部下や沈線間に棒状の工具による刺突文が施されている。628は、ヘラ状の工具によ



第207図 落ち込み状遺構16号内出土遺物実測図(2)



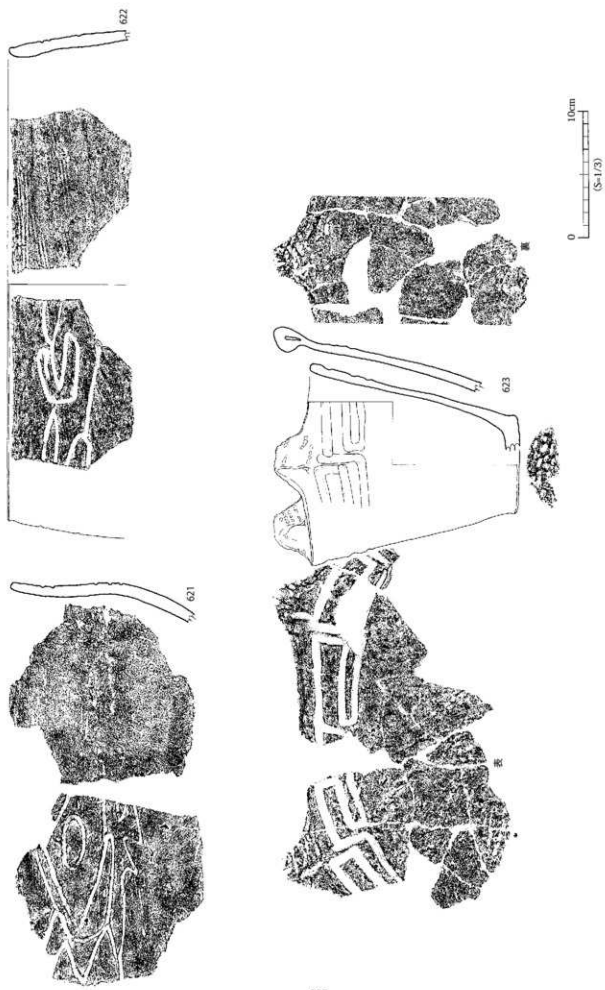
第208図 落ち込み状遺構16号内出土遺物実測図(3)



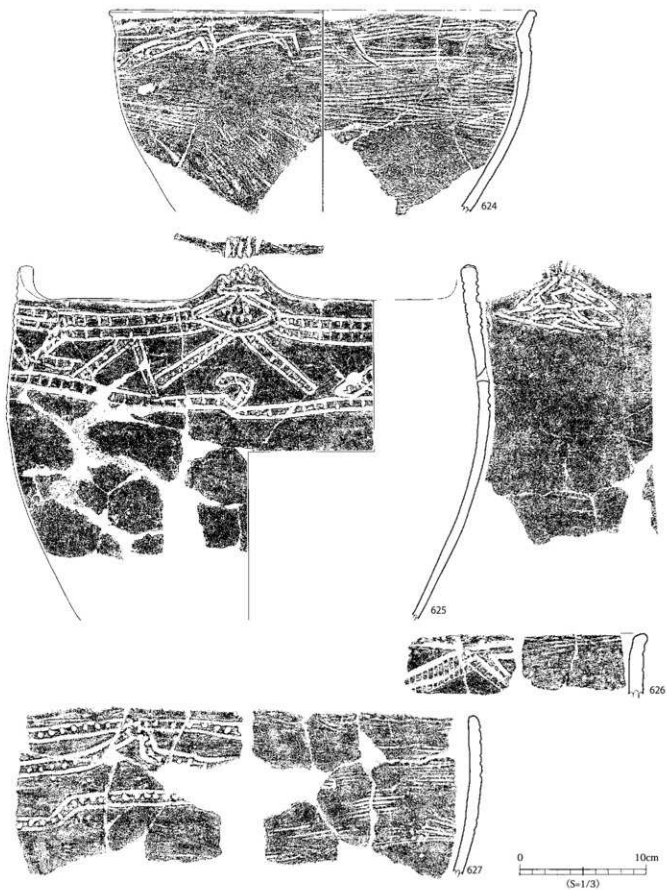
第209図 落ち込み状遺構16号内出土遺物実測図(4)



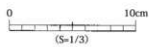
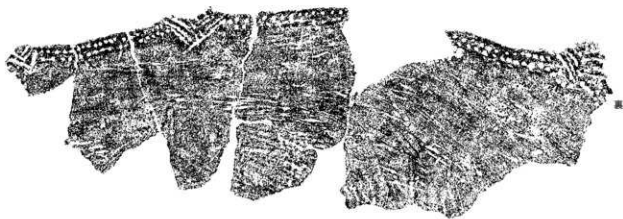
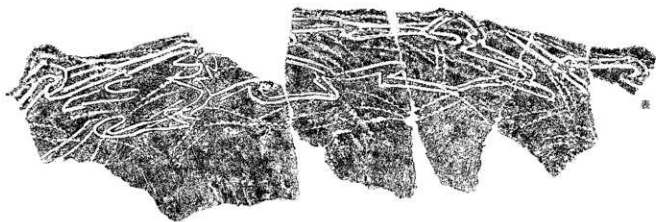
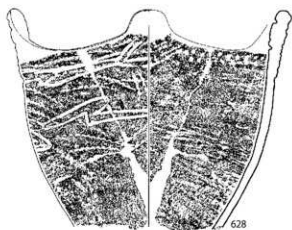
第210图 落ち込み状遺構16号内出土遺物実測図(5)



第211図 落ち込み状遺構16号内出土遺物実測図(6)

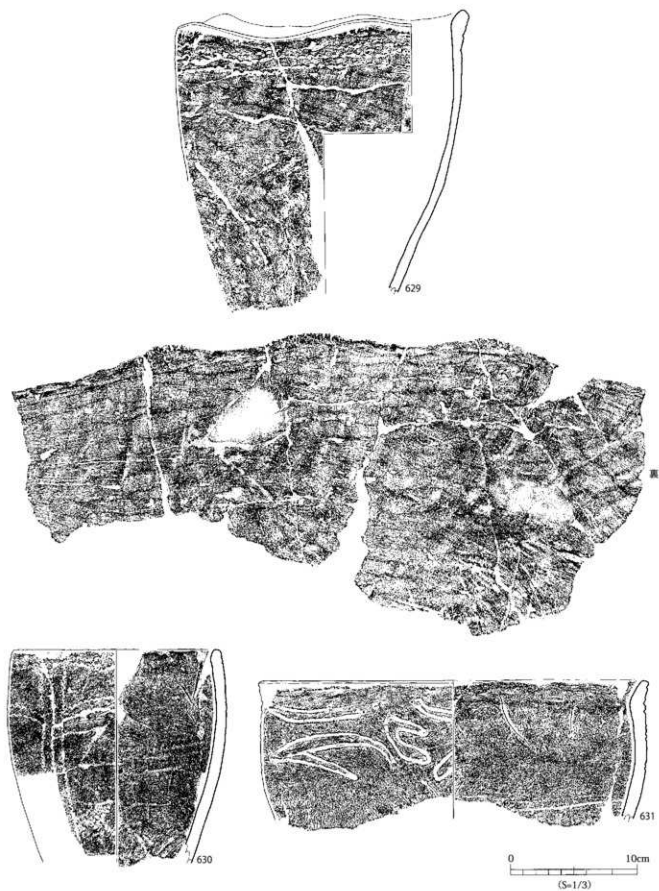


第212図 落ち込み状遺構16号内出土遺物実測図(7)

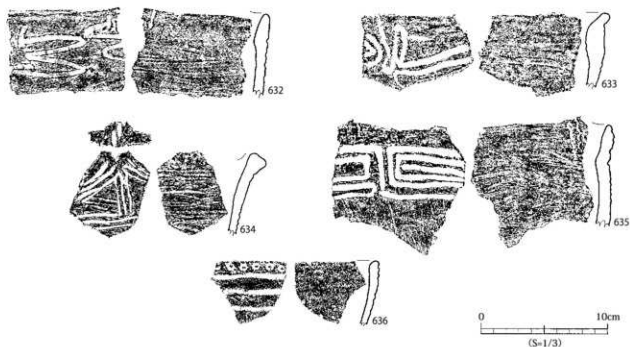


第213図 落ち込み状遺構16号内出土遺物実測図(8)





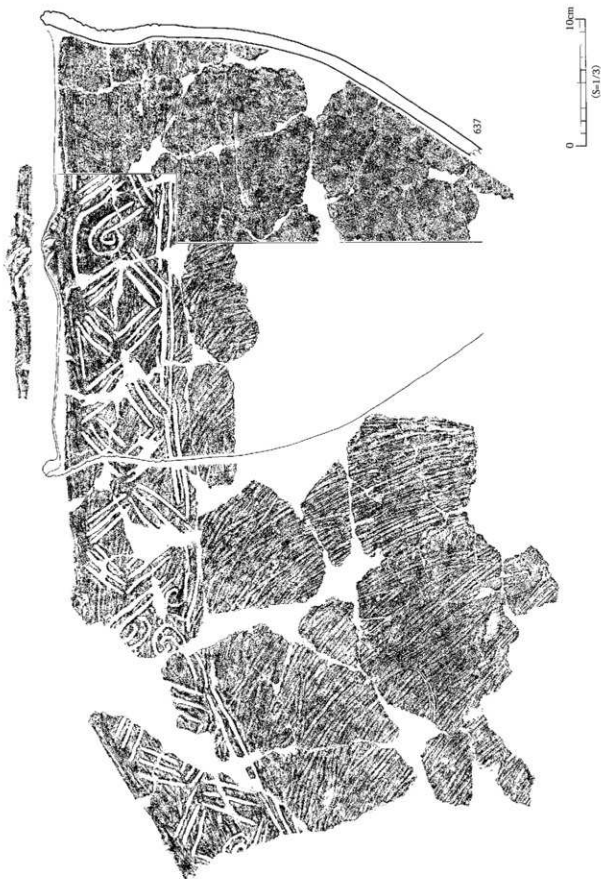
第214図 落ち込み状遺構16号内出土遺物実測図(9)



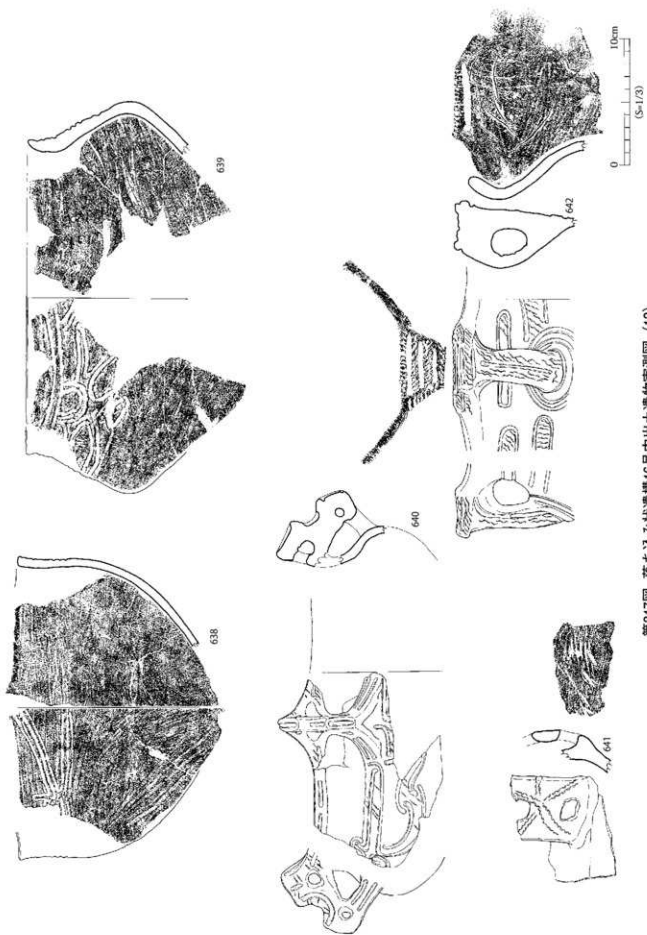
第215図 落ち込み状遺構16号内出土遺物実測図 (10)

る沈線文と貝殻腹縁による刺突文が施されている。口縁部には、山形の突起が4か所に付く。突起は、高いものと低いものがそれぞれ2か所ずつある。高い突起には、口唇部から内面にかけて貝殻腹縁による刺突文がV字状に施されている。低い突起には、口唇部から内面にかけてV字状に沈線文が施されている。口唇部には、細い竹管状の工具による刺突文が2条施されている。629・630は、2本1組の平行な沈線を貝殻腹縁の刺突線で表現したものである。629は、貝殻腹縁による刺突線が横位に3条施されている。なだらかな山形の突起が5か所に付く。突起の口唇部には、貝殻腹縁による刺突文が施されている。630は、貝殻腹縁による刺突線が縦位・横位に施されている。631から637は、沈線文や刺突文が施されているものである。636は、口縁部下に竹管状の工具による刺突文とヘラ状の工具による沈線文が横位に施されている。637は、棒状の工具による沈線文を斜位・横位に施し、菱形文などが施文されている。横位の沈線文や巖手文の沈線は2本1組であるが、菱形文の沈線は3本1組である。口縁部には、ねじり紐状の突起が4か所に付く。638から645は、鉢形の土器である。638は、ヘラ状の工具による3本1組の沈線文が施されている。639は、口縁部下にヘラ状の工具による沈線文を2条施し、その下位に2本1組の平行な沈線文が施されている。深鉢の可能性もある。640は、把手の付くものである。把

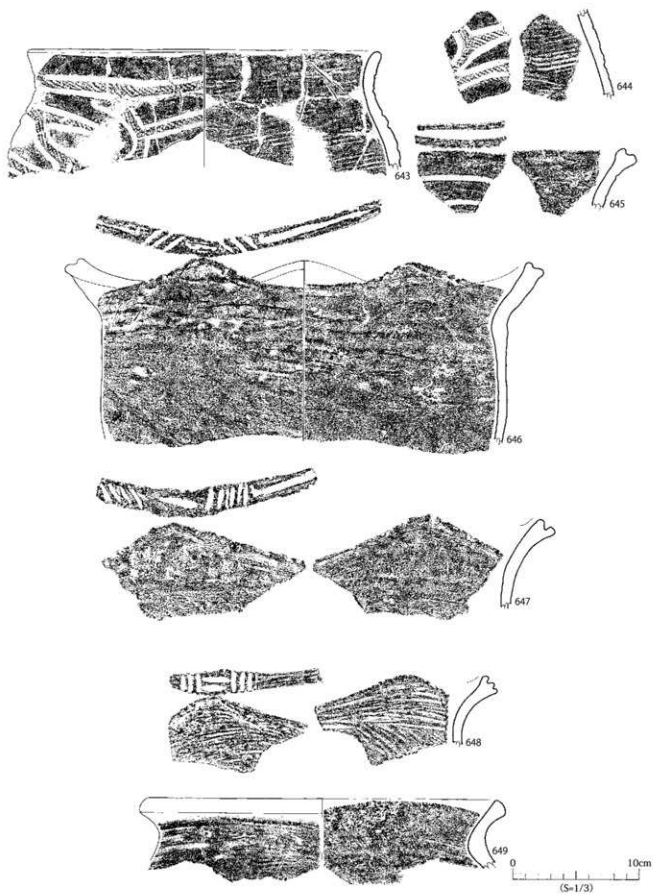
手には、上下部分にそれぞれ横方向に孔が穿たれており、棒状の工具による沈線文や刺突文が施されている。把手の下部は、二股になっている。外面には、棒状の工具による沈線により入組文などが施されている。641は、橋状の把手が付くものと思われる。橋状の把手には、貝殻腹縁による刺突文が施され、窓がある。642は、橋状の把手が付くものである。把手には、棒状の工具による縦位の沈線文が前面・左右面にそれぞれ1条ずつ施され、そのまわりに貝殻腹縁によると思われる刺突文が施されている。口縁部には、棒状の工具による沈線間に貝殻腹縁によると思われる刺突文が施されている。643・644は、ミガキが施された外面に、棒状の工具による沈線文が施されている。沈線間には縄文が施されている。646から648は、口縁部断面が三角形を呈する無文の土器である。646は、山形の突起が付く。波状の口縁部である。口唇部には、棒状の工具による沈線文が施されている。沈線の始まりには、刺突文が施されている。突起の口唇部には、棒状の工具による斜位の沈線文が左右それぞれ3条ずつ施され、頭頂部には棒状の工具による沈線文が施されている。この沈線の端部には刺突文が施されている。647は、山形の突起が付く波状の口縁部である。突起の頭頂部には棒状の工具による沈線文が施され、その左右には6条の沈線文が施されている。口唇部には、棒状の工具による沈線文が施され、その端部には刺突



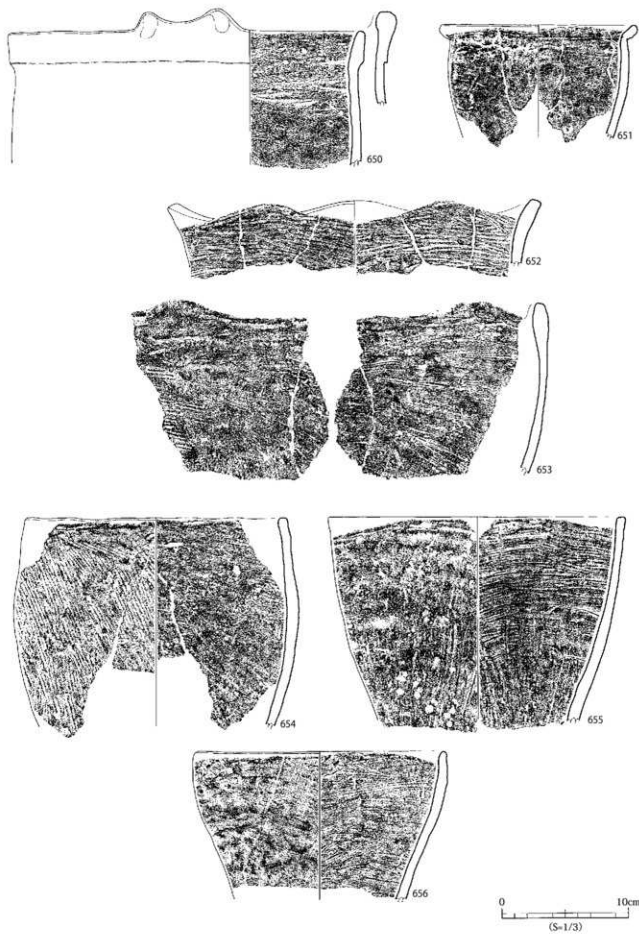
第216図 落ち込み状遺構16号内出土遺物実測図(11)



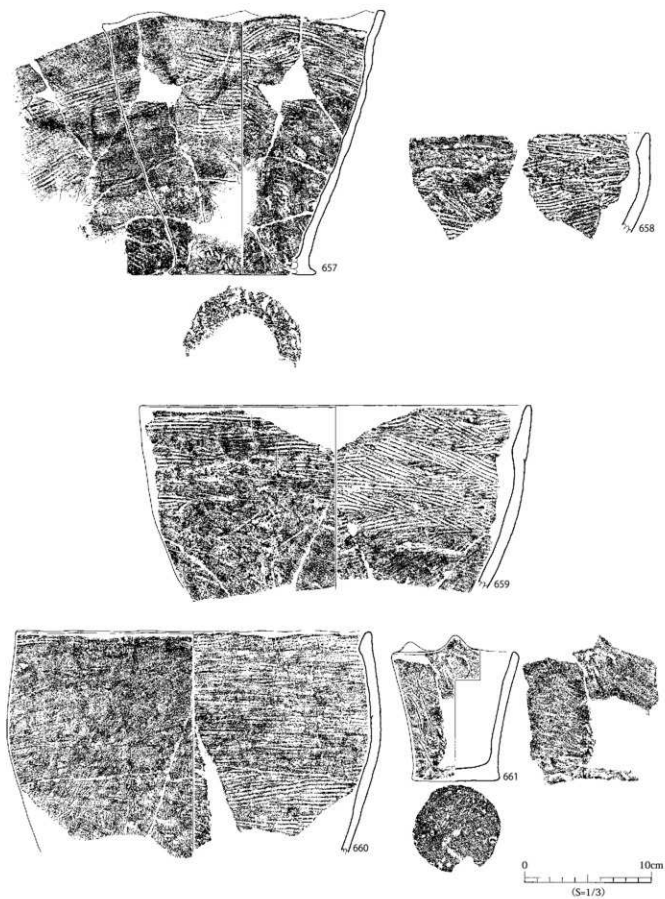
第217図 落ち込み状遺構16号内出土遺物実測図 (12)



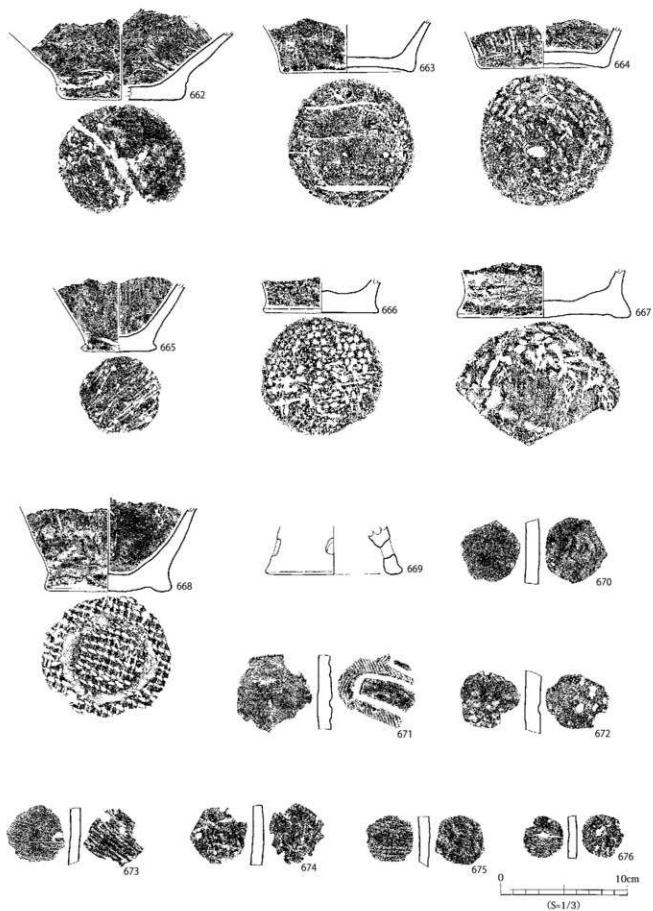
第218図 落ち込み状遺構16号内出土遺物実測図 (13)



第219図 落ち込み状遺構16号内出土遺物実測図 (14)

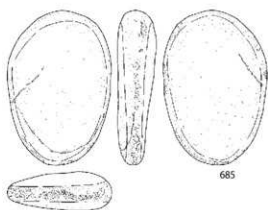
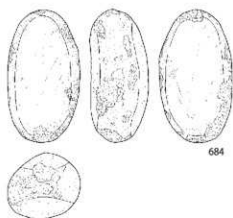
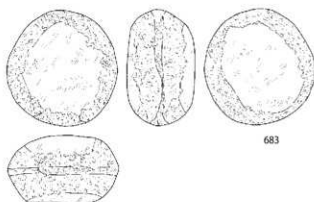
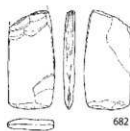
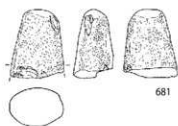
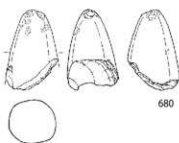
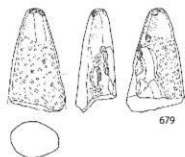
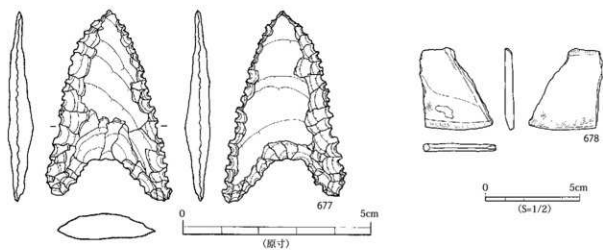


第220図 落ち込み状遺構16号内出土遺物実測図 (15)

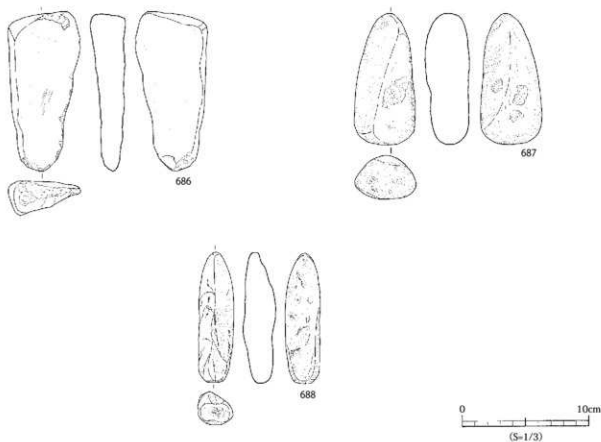


第221図 落ち込み状遺構16号内出土遺物実測図 (16)





第222図 落ち込み状遺構16号内出土遺物実測図 (17)



第223図 落ち込み状遺構16号内出土遺物実測図 (18)

文が施されている。648は、山形の突起が付く波状の口縁部である。突起の頭頂部には棒状の工具による沈線文が2条施され、その左右には3条の沈線文が施されている。650は、口縁部下位を削ることにより口縁部を肥厚させている。口縁部には、外面に粘土を貼り付けたリボン状の突起が付く。突起には、指押さえの痕が観察される。651は、口縁部が外反し、内面に段が付くものである。652は、山形の突起が付く波状口縁である。661は、山形の突起が付く、小型の土器である。662から669は、底部である。662から664は、底部から胴部に向けひろきながら立ち上がるタイプの底部である。662は、胴部へ大きくひろきながら立ち上がる。665から668は、外面端部が膨らむタイプである。667・668は、接着面が狭くなっている。669は、透かしのある脚状の底部である。670から676は、円盤形の土製品である。607から610は2群、611から642は3群、643から645は4群、646から648は5群であると思われる。

イ 出土石器 (第222図・第223図)

677は、鋸歯尖頭器である。平面形が二等辺三角形を

呈しているが左側縁部がやや膨らんでいる。側縁部は鋸歯状に作り出されている。基部は、逆U字状に挟られている。678は、擦切石器である。両端が欠損している。刃部は鈍く細長い面が形成されている。平坦面は両面共に擦痕が見られ、この擦痕は刃部と平行するものがわずかに見られる。679から682は、磨製石斧である。679から681は、刃部を欠く。いずれも成形時の敲打痕を明瞭に残す。682は、頁岩源ホルンフェルスで扁平であり、両側面に入念なミガキが残る。683から688は、磨製石である。683は、側面の敲打痕は面を形成しながら全面に展開している。684は、楕円形で厚みがある。両端部の敲打が明瞭である。685は、はっきりとしないが側面にわずかに敲打痕が見られる。686は、不定形の礫の先端に敲打が見られる。各稜が潰れているが不明確である。687は、不定形の礫の先端に敲打が見られる。平坦面中央が敲打によりわずかに凹んでいる。688は、棒状礫の両端に敲打が見られる。

## 第5章 科学分析

### 第1節 分析の概要

芝原遺跡における化学分析は、発掘調査から報告書作成時の現段階に至るまでに、各種・各時代に関して実施してきた。報告書刊行が年度別に分冊形式で刊行されるため、これらの分析結果に関しても、所属する時期別に掲載することとした。なお、今回は縄文時代の遺構編であるが、特に重要と思われる泥炭層出土遺物に関してのみ先行して掲載している。

### 第2節 自然科学分析

パリオ・サーヴェイ株式会社

#### 1 はじめに

金峰町に所在する芝原遺跡は、薩摩半島南部を流れる万之瀬川中流域右岸の沖積低地上に位置する。これまでの発掘調査では、縄文時代から江戸時代に至るまでの各時期に相当する遺構や遺物が確認されている。今回の発掘調査では、主に古墳時代とされる遺構・遺物の調査が進められている。

本報告では、これら確認された遺物や遺構を対象として自然科学分析を行うことにより、これらの性格や年代に関わる資料の作成を目的とする。

具体的には、調査区付近で確認された泥炭層より出土した材の放射性炭素年代測定と樹種同定を行うことにより、泥炭層の年代および植生を検討するという課題の調査分析を行う。

#### 2 試料

本分析の試料および分析項目を一覧にして表4に示す。泥炭層出土の炭化木とされた試料番号6は、状態を確認したところ、生木であることが判った。

#### 3 分析方法

##### (1) 放射性炭素年代測定

測定は株式会社加速器分析研究所の協力を

得て、AMS法により行った。なお、放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma)に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.0 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer)を用い、いずれの試料も北半球の大気圏における暦年較正曲線を用いる条件を与えて計算させている。

##### (2) 樹種同定

剃刀の刃を用いて木口(横断面)・柀目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール(抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液)で封入しプレバートを作製する。作製したプレバートは生物顕微鏡で観察・同定する。

##### (3) 種実同定

試料番号3-2は84.3g、3-3は67.7g、4-2は60.2g、4-3は40.7g、5-1は300.9g、5-2は301.4gの土壌試料を、0.5mm目の篩を通して水洗し、残渣をシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し、同定可能な種実や2mm角以上の炭化材などを抽出する。検出された植物遺体は、48時間80℃で乾燥後の重量を求め、種類毎にビンに入れて保管する。

## 3 結果

### (1) 放射性炭素年代測定

結果を表5に示す。試料の測定年代(補正年代)は、試料番号1の土器付着物で約3800年前、試料番号2の土器付着物で約4700年前、泥炭層出土材の試料番号3は約4600年前である。また、較正暦年を表6に示す。試料番号1の土器付着物については、およそ4000～4200calBP、試料番号2の

付着物と試料番号6の泥炭層出土材については、およそ5300～5400calBPとなる。

#### (2) 樹種同定

木材は、常緑広葉樹のタブノキ属に同定された。解剖学的特徴等を記す。

・タブノキ属 (Persea)      クスノキ科

散孔材で管壁は厚く、横断面では楕円形、単独および2・3個が放射方向に複合して散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1・3細胞幅、1・20細胞高。柔組織は周囲状、翼状および散在状。柔細胞はしばしば大型の油細胞となる。年輪界は明瞭。

#### 4 考察

##### (1) 土器の年代について

柴畑・東(1997)は、南九州における桜島や開聞岳さらには霧島火山などのテフラ層と各時代の土器型式との層位関係を整理し、それらの年代観(放射性炭素年代)を示している。今回、試料番号1の土器付着物から得られた放射性炭素年代は、約3800年前とされている開聞岳のテフラである黄コラの放射性炭素年代に近い。黄コラは、指宿式土器の時期に噴出したとされており、縄文時代後期に位置づけられている。したがって、試料番号1の年代が土器使用時の年代に関わるとすれば、試料番号1が付着していた土器の年代観として、縄文時代後期という時期が与えられる。

一方、試料番号2の示す年代は、約4900年前とされている桜島のテフラであるP5と約4200年前とされている霧島火山の御池軽石との間に入る。南九州ではこれらのテフラにはさまれた層位から、春日式などの土器が出土しており、縄文時代中期前半の時期が与えられている。すなわち、試料番号2の年代により、それが付着していた土器の年代観として縄文時代中期前半という時期が与えられる。

##### (2) 泥炭層の年代と植生について

年代測定により、約4600年前の縄文時代中期前半には、泥炭層が形成されていたことが窺える。泥炭層から出土した埋木はタブノキ属であった。タブノキ属にはタブノキとホソバタブノキの2種類がある。いずれも常緑広葉樹であり、タブノキはスタジイと共に暖温帯常緑広葉樹林の主構成種である。埋木出土層位の前後に遺跡周辺に常緑広葉樹のタブノキ属等が生育する植生が見られたことが推定される。古植生については、今後泥炭層の花粉分析等も行って検討する必要がある。

#### (引用文献)

- 天野洋司・太田 健・草場 敬・中井 信1991「中部日本以北の土壌型別蓄積リンの形態別計量」農林水産省農林水産技術会議事務局編『土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発』28-36p
- BowenHJM1983「環境無機化学-元素の循環と生化学-」浅見輝男・茅野充男訳 博友社297p
- BoltGH・BruggenwertMGM1980「土壌の化学」岩田進午・三輪睿太郎・井上隆弘・陽 捷行訳学会出版センター-309p
- 土壌養分測定法委員会編1981「土壌養分分析法」養賢堂440p
- 藤野直樹・小林哲夫1997「開聞岳火山の噴火史」『火山』42195-211
- 藤貫 正1979「カルシウム」『地質調査所化学分析法』5257-61
- 川崎 弘・吉田 滯・井上恒久1991「九州地域の土壌型別蓄積リンの形態別計量」農林水産省 農林水産技術会議事務局編『土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発』23-27
- 近藤 鍊三1976「樹木起源の珪酸体について」『ペドロジスト』20 176-189
- 近藤 鍊三・ピアスン友子1981「樹木葉のケイ酸体に関する研究(第2報)双子葉被子植物樹木葉の植物ケイ酸体について」『帯広畜産大学研究

報告] 12 217-229.

近藤 鎌三・佐瀬 隆1986「植物珪酸体分析その特  
性と応用」『第四紀研究』25 31-64

柴畑光博・東 和幸1997「南九州の火山灰と考古遺  
物」『月刊地球』19 208-214

京都大学農学部農芸化学教室編1957「農芸化学実験  
書」第1巻 産業図書 411p

農林省農林水産技術会議事務局監修1967「新版標準  
土色帖」

奥野 充2002「南九州に分布する最近約3万年間の  
テフラ的年代」『第四紀研究』41 225-236

バリノ・サーヴェイ株式会社1991「自然科学分析」『東  
京都新宿区戸山遺跡-厚生省戸山研究舎(仮称)  
建設に伴う緊急発掘調査報告書-本文編』戸山  
遺跡調査会133-168

ペドロジスト懇談会1984「野外地性の判定」ペドロ  
ジスト懇談会編「土壌調査ハンドブック」博  
友社39-40

杉山 真二1999「植物珪酸体分析からみた最終氷期  
以降の九州南部における照葉樹林発達史」『第  
四紀研究』38 109-123

表4 試料一覧

番号	試料名称	試料数量	14 C	W	S	P・C a	P O	T	備考
6	泥炭層出土の炭化木	1点	○	○					

14C:放射性炭素年代測定 W:樹種同定 S:種実同定 P・C a:リン・カルシウム分析 T:テフラ分析

表5 放射性炭素年代測定結果

番号	試料名称	試料の質	樹種	補正年代	$\delta^{13}C$ (‰)	測定年代 BP	Code. No
6	泥炭層出土の炭化木	生材	タブノキ属	4630±50	-28.94	4700±50	IAAA-42233

1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。

2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であることを示す。

3) 付記した誤差は、測定誤差 $\delta$ (測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

表6 暦年較正結果

番号	試料名称	補正年代 (BP)	暦年較正年代 (cal)		相対比	Code. No
6	泥炭層出土の炭化木	4631 ± 45	calBC3.501 - calBC3.428 calBC3.381 - calBC3.358	calBP5.451 - 5.378 calBP5.331 - 5.308	0.769 0.231	IAAA-42233

計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.0 (Copyright 1986-2005M Stuiverand PJ Reimer) を使用

計算には表に示した丸める前の値を使用している。

付記した誤差は、測定誤差 $\delta$ (測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

### 第3節 鹿児島県南さつま市芝原遺跡出土土料の<sup>14</sup>C年代測定

国立歴史民俗博物館・年代測定研究グループ  
(小林謙一・坂本稔・遠部慎・住田雅和)

#### 概要

鹿児島県南さつま市芝原遺跡出土土材・土器付着物の加速器を用いた年代測定を行ったので、その結果を報告する。資料は小林謙一が鹿児島県立埋蔵文化財センターに提供を受け、国立歴史民俗博物館にて住田雅和とともに採取した。資料の出土層位や大凡の所属時期は、黒川によるものである。

試料の前処理は、国立歴史民俗博物館で行い、測定はパレオラボ社によるものである。測定結果は計測値(補正)とともに実年代の確率を示す較正年代値を示した。また、その根拠となった較正曲線を示した。

今回の年代測定の目的は、この遺跡の年代を調べることであり、縄文時代後期の有効な測定結果を得ることができた。また、鱗茎状を呈する付着物については別稿で検討結果を記す。

#### 1 炭化物の処理

対象資料は、F24区VI層出土縄文後期指箱式に属する深鉢の底部近くの破片で、内面に鱗茎状におおげが付着している。そのおおげを一部掻き取って資料とした。国立歴史民俗博物館での資料番号は、鹿児島県立埋蔵文化財センター資料の通しナンバーでKAMB-198とした。なお、同時に同一個体の別破片からKAMB-197および199を採取しているが、今回は処理せず保存してある。

試料については、注1に記した手順で試料処理を行った。(1)の作業は、国立歴史民俗博物館の年代測定資料実験室において行い、(2)(3)は、パレオラボ社に2007年7月に委託した。KAMB-198は、45mgの試料を採取し、AAA処理の結果30.99mgを回収した。AAA済みの炭化物3.6mgを燃焼し、炭素量で2.18mg相当の二酸化炭素を得た。

#### 2 測定結果と暦年較正

AMSによる<sup>14</sup>C測定は、(株)パレオラボ社に委託した。測定結果は、注2に示す方法で、同位体効果を補正し、暦年較正年代を算出した。前処理後の試料から分取し、(株)昭光通商に委託して安定同位体比を質量分析計で測定し26.0‰の $\delta^{13}\text{C}$ 値を得た。測定結果は、下記の通りである。

測定機関番号	炭素14年代
PLD-8290	3720 ± 20 <sup>14</sup> CBP

#### 3 測定結果の解釈と暦年較正年代の解釈

資料は縄文後期指箱式土器底部内面の鱗茎状付着物であるが、安定同位体比を見ると $\delta^{13}\text{C}$ 値は、-26.0‰で、窒素同位体比などを合わせ、陸生植物由来と考えられる付着物である。

較正年代は、図24に確率密度分布を示す。較正年代で前2195-2030cal BCに95.4%の確率で含まれ、その中でも2105-2035cal BCに含まれる確率が50%で一応最も高い。ただし、そこに絞り込めるというほどではなく、前2195年よりは新しく、前2030年よりは古いある時点の炭化物であるということである。東日本の測定例に照らすと縄文後期壱之内1式後半、最も確率が高い2105-2035cal BCはおおよそ壱之内1式新段階に対比される(小林2006)。

平成19年度科学研究費補助金(学術創成研究)「弥生農耕の起源と東アジア炭素年代測定による高精度編年体系の構築—」(研究代表 西本豊弘 課題番号16GS0118)の成果である。

暦年較正については今村肇雄の方法に従う。

#### 注1

(1) 前処理:酸・アルカリ・酸による化学洗浄(AAA処理)。

AAA処理に先立ち、土器付着物については、アセトンに浸け振とうし、油分など汚染の可能性のある不純物を溶解させ除去した(1-2回)。AAA処理として、80℃、各1時間で、希塩酸溶液(1N-HCl)で岩石などに含まれる炭酸カルシウム等を除去(2-3回)し、さらにアルカリ溶液(NaOH、0.1N)でフミン酸等を除去した。アルカリ溶液による処理は3-4回行い、ほとんど着色がなくなったことを確認した。さらに酸処理(1N-HCl 12時間)を行いアルカリ分を除いた後、純水により洗浄した(4回)。

(2) 二酸化炭素化と精製:酸化銅により試料を燃焼(二酸化炭素化)、真空ラインを用いて不純物を除去。

(3) グラファイト化:鉄触媒のもとで水素還元し、二酸化炭素をグラファイト炭素に転換。アルミ製カソードに充填。

(4) AMS<sup>14</sup>C測定と暦年較正計算方法

年代データの<sup>14</sup>CBPという表示は、西暦1950年を基点にして計算した<sup>14</sup>C年代(モデル年代)であることを示す。<sup>14</sup>C年代を算出する際の半減期は、5568年を用いて計算することになっている。誤差は測定における統計誤差(1標準偏差、68%信頼限界)である。

AMSでは、グラファイト炭素試料の<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>C比を加速器により測定する。正確な年代を得るには、試料の同位体効果を測定し補正する必要がある。同時に加速器で測定した<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>C比により、<sup>14</sup>C/<sup>13</sup>C比に対する同



写真5 洞下部内面鱗茎状付着物

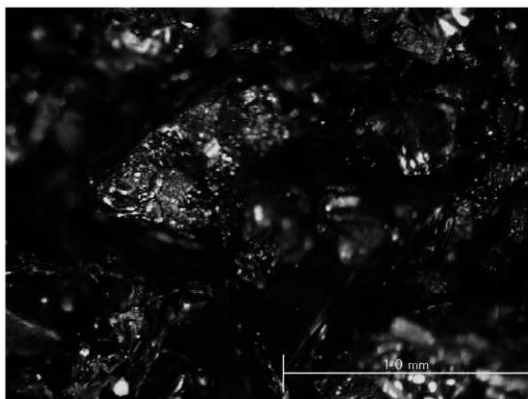


写真6 付着物前処理後の状態





#### 第4節 鹿児島県南さつま市芝原遺跡から出土した縄文時代後期の土器付着物の残存デンプン分析

渋谷綾子（総合研究大学院大学文化科学研究科）

##### 1. はじめに

植物のデンプンは、光合成によって二酸化炭素と水から合成された植物体に蓄積される炭水化物（多糖類）の一種で、種子の発芽や球根・塊茎の萌芽のエネルギー源として機能する微小な天然高分子である。デンプン粒は構造上結晶部分と非結晶部分を含み、化学的にもアミロースとアミロペクチンが混在するため、偏光下で特有の複屈折（偏光十字）が観察される（植田1983; 藤本1994; 不破ほか2004: 58-59）。さらに、植物の種類によってデンプン粒の大きさや形、組成、性質が異なる。これらの特徴を活かして、遺跡土壌や遺物からデンプン質残留物を検出し、過去の植物利用の実態を解明するのが残存デンプン研究である。

考古学における残存デンプン研究は比較的新しい研究方法である。近年その重要性が認められ、研究事例が蓄積され始めており、その結果、残存デンプンがさまざまな時期の遺跡から検出され、さまざま埋没環境においても遺存していることがわかっていく。土器の炭化付着物のデンプン粒については、報告事例が必ずしも多くはないが、土器による煮炊きによって変質したデンプンの事例として注目されており、近年本格的な研究が取り組まれ始めている（Crowther 2005; Shoda et al. 2008; 渋谷2007）。

こうした研究成果をもとにして、芝原遺跡から出土した土器の付着物から残存デンプン粒の検出を試み、土器で煮炊きされた内容物の検討を行った。

##### 2. 試料と分析方法

調査資料は、芝原遺跡の中で河川に近く、湧水の著しい調査区から出土した土器片2点（KAMB197・KAMB198）の付着炭化物である。KAMB197はF25区のVI層（泥炭）から出土したものであり、炭化物は内面に広範囲に付着していた。KAMB198はF24区のVI層から出土したものであり、土器の内面に付着した炭化物はKAMB197より厚みがあった。どちらも副部の小さな破片であり、接合作業を行っていないため土器型式についての詳細は不明であるが、周辺から出土した土器の型式から、指宿式前後の土器である可能性が考えられる。

分析用試料の採取には次の2つの方法を用いた。(i) マイクロピペットを土器の付着物に直接あてて、付着物が精製水を少量含ませ、その液体を吸い取る方法と、(ii) 微量の付着物をメスで切除する方法、である（Crowther

2005）。(i)の方法では試料の採取量が $96\mu\text{l}$ （ $=\text{mm}^3$ ）以上に達するまで行い、(ii)の方法で採取した試料には精製水 $40\mu\text{l}$ を加えて攪拌した。調査資料KAMB197とKAMB198のどちらも、それぞれ(i)の方法で2か所（IS1・IS2）、(ii)の方法で1か所（IS3）の試料を採取した（表7、図版7）。

試料はすべてグリセロール・ゼラチンで封入してプレパラートを作製し、偏光顕微鏡（Nikon ECLIPSE E600、倍率：100-400倍）を用いて観察した。デンプン粒を検出した場合は、外形と大きさを正確にとらえるため、開放ニコルと直交ニコルの画像をそれぞれ記録し撮影した。

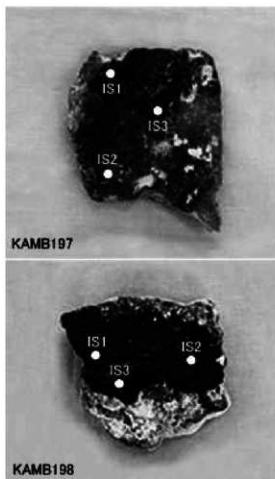


写真7 調査資料と試料の採取箇所（縮尺1/2）

##### 3. 分析結果

###### (1) KAMB197

どの試料においても植物繊維や細胞組織などの植物性物質が非常に少なく、炭の微粒子が多く見られた。デンプン粒については、マイクロピペットで採取したIS1

とIS 2からは全く検出できず、炭化物そのものを採取したIS 3から4個検出した。このうち、分解・損傷したデンプンが2個あり(図版8-1, 図版8-2)、これらは原形を全くとめていない。残りは円形のデンプン粒である(図版8-3, 図版8-4)。検出したデンプンはすべて単独粒(1粒単独の状態)である。

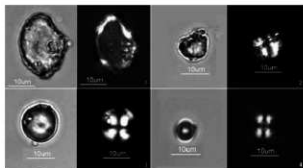


写真8 KAMB197の残存デンプン  
(光学顕微鏡400倍)

※いずれも左が開放ニコル、右が直交ニコルの撮影画像(図版9も同じ)

#### (2) KAMB198

いずれの試料にも植物繊維や細胞組織などの物質が多く含まれており、炭の微粒子も多く見られた。デンプン

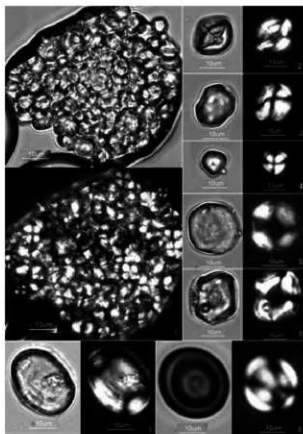


写真9 KAMB198の残存デンプン  
(光学顕微鏡400倍)

粒についても、試料3点とも検出した。このうち、デンプン粒を最も多く検出した試料はIS 2であり、複数粒(複数の粒が密集した状態, 図版9-1)と四角形の単独粒1個を検出した(図版9-2)。複数粒の正確な数は不明だが、少なくとも78個以上あり、すべて同じ形(丸みをおびた四角形)で同じ大きさの粒が密集したものである。

一方、IS 2と同じ方法で採取したIS 1からは角張った円形のデンプン1個(図版9-3)と四角形のデンプン1個(図版9-4)を検出しており、炭化物自体の試料IS 3では円形3個(図版9-5, 図版9-7, 図版9-8)、四角形1個(図版9-6)のデンプン粒を確認した。これらはすべて単独粒である。

#### 4. 考察

##### (1) 検出デンプンの形態的特徴

残存デンプンの検出量と形態との関係、デンプンの形態と資料の種類との関係を検討するため、参照デンプン標本(渋谷2006)から設定した分類基準(第225図)に沿って形態分類を行った。この基準はデンプンの外形をA: 円形主体, B: 半円形・三角形・四角形, C: 多角形の3種類, 大きさをI: 10µm未満, II: 10~20µm, III: 20µmより大, の3種類に分類するものである。

表2はこの形態分類の結果を示したものである。分解・損傷したデンプンはDの項目に分類した。結果として、KAMB197ではAI(図版8-2)とAII(図版8-1)の2形態、KAMB198ではAII(図版9-3, 図版9-5)・AIII(図版9-7, 図版9-8)・BI(図版9-1, 図版9-4)・BII(図版9-2, 図版9-6)の4形態を検出したことが判明した。

KAMB197, KAMB198のどちらも同じ形態AIIのデンプンを検出しているが、大きさはまったく異なっている。しかも、KAMB198ではB類の形態を検出しており、こうした検出状況から、両資料の内容物は異なるものであると推定できる。

##### (2) 残存デンプンの候補となる植物

残存デンプン研究は日本では最近始まった研究であり、残存デンプンの検出事例と参照標本の蓄積を第一に進めている状況である。残存デンプンのもととなる植物の同定は、研究の中でも特に厳密性や慎重性を要するため、残存デンプンの外形や大きさを参照標本のもとと単純に比較し、植物の種を同定することはできない。ただし、現在までの研究成果(渋谷2006, 2007, 2008a, b)によって、いくつかの種類の植物は残存デンプンの候補植物から除外できることが判明している。

	I (<10 $\mu$ m)	II (10-20 $\mu$ m)	III (>20 $\mu$ m)
A			
B			
C			

第225図 残存デンプンの形態分類の基準

これまで筆者は現生の植物から、トチノキ、クリ、ワラビ、クズ、サトイモ、ヤマノイモ、アズキ、リョクトウなど、49属133種の植物のデンプンの参照標本を作製している。これらの標本との比較によって、本分析で検出したデンプン粒についてはその候補となる植物から、サトイモやヤマノイモ、ハシバミ、コジイ、スダジイ、オニグルミ、リョクトウ、イネ、キビ、ヒエ、アワ、ソバ、コムギなど、25属35種の植物は除外できる。

サトイモやハシバミはデンプン粒の大きさが直径2~4 $\mu$ mと小さく、遺跡から粒が密集した状態で検出されることが多い。ヤマノイモのデンプンは、卵形や半楕円形など特徴的な形態をもち、コジイやスダジイ、オニグルミ、アズキやリョクトウはデンプンの大きさが今回検出したものよりも非常に大きい。さらに、雑穀類の多くは多角形のデンプンをもつ植物であるため、検出デンプンとは外形が全く異なる。そのため、これらの植物については、検出したデンプンの候補となる植物から除外可能である。

## 5. まとめ

分析した芝原遺跡の土器片2点の付着物について、いずれの試料からも残存デンプン粒を検出した。検出量の差や検出デンプンの形態的特徴の違いによって、2つの土器で煮炊きした内容物は異なっていると推定した。さらに、残存デンプンの候補となる植物については、25属35種の植物を除外することができた。

今後、芝原遺跡周辺の古環境の復元や、他の手法による土器付着物の科学的分析が実施され、芝原遺跡での植物利用や土器の内容物の検討がさまざまな角度から行われれば、残存デンプンの候補植物の範囲がより狭められ、デンプンの植物同定が可能となる。本研究の成果を含めて、縄文時代の植物利用を学際的な視点から研究していくことが必要である。

## (引用文献)

- Crowther, A. 2005. 「Starch residues on undecorated Lapita pottery from Anir, New Ireland.」 [Archaeology in Oceania] 40: 62-66.
- Shoda, S., A. Shibutani, A. Matsutani, D. Kunikida. 2008. 「A Microcosm of Charred Remains of Pottery.」 [Sixth World Archaeological Congress (WAC- 6)]. University College Dublin, Ireland.
- 植田利喜造編1983 『植物構造図説』 森北出版
- 渋谷綾子2006 『日本の現存植物を用いた参照デンプン標本』 [新潟県立歴史博物館研究紀要] 7: 7-16
- 渋谷綾子2007 『佃道跡・更良岡山遺跡の石皿および三宅西遺跡の土器付着物における残存デンプン』 [古代文化] 59 (2): 116-126
- 渋谷綾子2008a 『残存デンプン分析からみた三内丸山遺跡の植物食—加工・利用技術の発展と展開—』 [特別史跡三内丸山遺跡年報] (青森県教育庁文化財保護課三内丸山遺跡対策室編) 11 47-55 青森県教育委員会
- 渋谷綾子2008b 『鹿兒島県の旧石器・縄文草創期の石器残存デンプン—立切・加栗山・掃除山・奥ノ内田遺跡—』 [古代文化] 60 (1): 130-140
- 藤本誕生1994 『澱粉と植物—各種植物澱粉の比較—』 p233 草書房
- 不破英次 小巻利章 檢作進 貝沼圭二 編 2004 『澱粉科学の事典』 p 554 朝倉書店

表7 分析試料とその特徴

資料	試料 No.	採取前の状態	水の量 ( $\mu$ l x 回)	採取量 ( $\mu$ l)	含ませた水の蒸発・吸収の様子	試料の特徴
KAMB 197	IS1	層状部分	10x2+20x2=60	22	吸収率は大、最初の10~20 $\mu$ lはすぐに吸収し広がる	液は透明、微量の炭化物を含む
	IS2	層状部分	10x1+20x2+30x3+40x2=220	8	吸収率：非常に大、最初の10~30 $\mu$ lはすぐに吸収し広がる	炭化物を含む
	IS3	炭化物	40	40	-	-
KAMB 198	IS1	層状部分	10x3=30	24	吸収率：やや小	液はやや白く濁り、大きな炭化物を含む
	IS2	層の厚い部分	10x3=30	27	吸収率：やや小	液はやや白く濁り、微量の炭化物を含む
	IS3	炭化物	40	40	-	-

表8 検出デンプンの分類結果 (単位: 個)

資料	AI	AII	AIII	BI	BII	BIII	CI	CII	CIII	D	計
KAMB197	1	1	0	0	0	0	0	0	0	2	4
KAMB198	0	2	2	79	2	0	0	0	0	0	85
計	1	3	2	79	2	0	0	0	0	2	89

## 第6章 調査のまとめ

### 第1節 縄文時代中期中葉の遺構

縄文時代中期中葉の遺構は、B-18・19区に分布している。遺構は、堅穴状遺構2基、土坑1基が確認された。

該期の堅穴住居跡は検出例が少ない。事例としては、志布志市松山町（旧松山町）の前谷遺跡がある。前谷遺跡では平面形が隅丸方形と円形のタイプの堅穴住居が5基検出されている。本遺跡の堅穴状遺構は、これまでに検出された該期の堅穴住居跡とは平面形が異なることなどから、堅穴住居跡とは認定できず堅穴状遺構として報告したが、さらに検討を要する。

土坑は土坑1号が1基検出された。埋土から春日式土器が2点、石鏝1点、石皿1点が出土している。しかし、土坑の用途・性格を明らかにすることはできなかった。

次に、当遺跡の縄文時代中期中葉の遺構内出土の土器について述べる。縄文時代中期中葉の堅穴状遺構1号・2号、土坑1号から出土した土器は、1群の春日式土器である。口縁部がキャリバー形によく発達し、文様は頸部から上位に施されていることから、前谷段階の春日式土器である。

次に、当遺跡の縄文時代中期中葉の遺構内出土の石器について述べる。堅穴状遺構1号・2号、土坑1号からは、石鏝、銅歯尖頭器、石匙、二次加工剥片、スクレイパー、石核、磨礫石、石皿が出土している。食材加工具として磨礫石や大型の石皿の出土から、堅果類の採集による生活の痕跡をうかがい知ることができる。また、食材獲得に関連して、石鏝の出土からは狩猟による獣肉の獲得や銅歯尖頭器の出土からは大型の魚の獲得がうかがえ、狩猟とともに漁労による生活もうかがえる。

### 第2節 縄文時代中期後葉から後期の遺構

縄文時代中期後葉から後期の遺構は、A～I-1～14区を除くすべての調査区に検出されている。遺構は、堅穴状遺構3基、集石57基、土坑292基、ピット383基、焼土5基、埋設土器5基、石皿集積1基、落ち込み状遺構16か所が確認された。

堅穴状遺構は、D-34区、C-33区、E-29・30区でそれぞれ1基ずつ検出された。該期の堅穴住居跡の事例として、日置市伊集院町（旧伊集院町）の上ノ平遺跡から出水式土器や指宿式土器とともに堅穴住居跡が5軒検出されている。これらの住居跡の平面形は、略円形や隅丸方形のものである。また、鹿児島市の山ノ中遺跡では、南福寺式土器や指宿式土器とともに堅穴住居跡が17軒検出されている。これらの堅穴住居跡の平面形は、円形のものである。上述した該期の堅穴住居跡と当遺跡のものとは平面形が異なることなどから、堅穴状遺構として報告したが、さらに検討を要すると思われる。

集石は、A～I-1～14区を除く調査区に検出されている。その形態として、礫が集中し掘り込みがあるタイプ、礫が集中しているが掘り込みがないタイプ、礫がばらけているタイプの3つのタイプがある。当遺跡では、礫が集中し掘り込みがあるタイプのものが47%と約半数を占めている。また、礫の総重量が10kgから30kgの集石が48%と約半数を占める。当遺跡のすぐ前を流れる万之瀬川の河原から集石用の礫を調達することができ、運搬に便利な準大の礫を用いて集石を構成したと思われる。

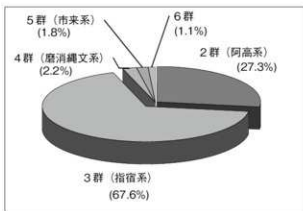
土坑は、A～I-1～14区を除く調査区に検出されている。その形態として、平面形が円形、楕円形、不定形の3つのタイプがある。平面形が円形・楕円形が49%、不定形が51%とはほぼ同じ割合である。大きさは長径が2mをこえるものから46cmのもの、深さは検出面の違いはあるが8cmから75cmと大きさも深さも様々である。また、土坑からは土器や石器が出土しているが、その用途などについては明らかにすることはできなかった。

ピットは、A～I-1～14区を除く調査区に検出されている。その形態として、平面形が円形、楕円形、不定形の3つのタイプがある。平面形が円形・楕円形がほとんどを占める。ピットの配置から明確なまとまりをつかむには至らず、平地式住居などの可能性を指摘することはできなかった。

埋設土器は、C-19・20区で3基、A-25区・E-25区でそれぞれ1基計5基確認されている。埋設土器とは、意図的に土中に埋設された土器である。埋設土器の中でも、堅穴住居内の床面下に埋設された土器は埋爇、埋爇でも逆位（倒置）で埋設されたものは伏爇と称されたりしている。堅穴住居内の床面上あるいは堅穴住居外に検出され意図的に倒置状態に深鉢を設置したものは倒置深鉢と総称されたりしている。その用途・性格として、妊婦呪術に関連する幼児埋葬施設もしくは胎盤収納施設などの妊婦や出産にかかわる呪術的なものであると考える説、建物建設時の動物供養説、甕被葬説、堅穴住居廃絶に伴う儀礼行為説などの様々な説があるが、その用途・性格はまだ明らかではない。当遺跡で確認された5基については、堅穴住居跡などの遺構との関連がなくそれぞれが単独に確認されていたり、その用途・性格を明らかにすることができなかつたために、埋設土器として報告した。埋設土器1号のみが完形で正位の状態に検出された。埋設土器2号・3号・4号・5号は、逆位（倒置）の状態に検出されている。埋設土器2号・4号・5号は復元した結果、口縁部付近のみであった。埋設土器4号については、口縁部及び底部はあるが胴部が欠けていた。逆位の埋設土器や伏爇、倒置深鉢では、底部穿孔や底部

が欠けている例が報告されている。当遺跡の埋設土器2号・3号・5号はその事例に似ているが、底部だけというより底部や胴部が欠けており、これまで報告されている事例とは異なっていると考えるが、その用途・意味については明らかにすることはできなかった。九州における埋設土器の研究においては、九州全域に拡大するのは、縄文時代後期後半から晩期中葉であるという。当遺跡の5基については、南福寺式土器から指宿式土器の後期前葉から後期中葉である。当遺跡の5基の埋設土器については、今後さらなる検討を行う必要があると考える。

次に、当遺跡の縄文時代中期後葉から後期の遺構内出土の土器について述べる。第226図は、型式不明や胴部片・底部片を除いた各群ごとの出土割合を示したものである。該期の芝原遺跡は指宿式土器を中心とした沈線文系の一群が主体であったことが分かる。



第226図 土器の出土割合

2群は、口縁部を中心として凹線文や沈線文が施されている一群を一括している。既存の土器型式で言うところの阿高式土器から出水式土器・岩崎系土器の範疇で理解可能である。本報告では、阿高式系統の土器群の型式の範疇や属性のとらえ方などバリエーションの豊富さゆえに明確に示すことができず、阿高式土器から出水式土器、岩崎系土器として一括して報告した。傾向としては、よりための凹線文を施すものの胎土中には滑石が混入されており、混入される滑石の量に違いが見られるものがあった。また、口縁部下位を削ることにより口縁部を肥厚させているものが多く見られた。3群は、指宿式土器及びこれに類する一群を一括した。指宿ピンクと呼ばれる指宿焼成色の指宿式土器も出土している。当遺跡の指宿式系統の土器の傾向として、器面調整に貝殻条痕を残すものと残さないものに分けられる。指宿式土器の前段階とされる岩崎式系統の土器には貝殻条痕が残され

ているものが多く、新旧関係の想定ができるのではと考えるが、指宿式土器に後続する市来式系統の松山式土器にも貝殻条痕を残すため今後検討の余地がある。文様については、2本1組の平行する曲線で施文されたもの、2本1組の平行する直線で施文されたもの、2本1組の平行する曲線や直線間に棒状施文具や貝殻腹線による刺突文が施されたもの、2本1組の平行する曲線や直線の沈線文の代わりに貝殻腹線による刺突文で表現するものなどがある。器形については、深鉢形を中心としながらも多くのバリエーションを有している。口縁部は平口縁や波状口縁があり、口縁部がまっすぐ立ち上がるものや外反するものがあり、外反の程度も様々ある。胴部については、まっすぐ立ち上がるもの、深鉢形であるが最大径が胴部上位にあるもの、胴部が球状に膨らみ最大径がこの胴部にあるものがある。このように当遺跡の指宿式系統の土器は、バリエーションに富んでいる。4群は、磨滑縄文土器を一括した。5群は、市来式土器を一括した。6群は、1群から5群に分類できないものを一括した。

次に、縄文時代中期後葉から後期の遺構内出土の石器及び石製品について述べる。遺構内出土の石器数は、遺構内出土の土器数に比べると数は少ない。しかし、様々な器種の石器が出土している。鋸歯尖頭器、鋸歯縁石器、石錐、楔形石器、擦切石器、磨製石斧、磨製石、石皿などである。敲石と石皿の出土からは、堅果類の採集による生活の一端をうかがい知ることができる。また、1点だけの出土ではあるが、鋸歯尖頭器の出土からは大型の魚の獲得という漁労による生活も考えられる。さらに、磨製石斧の出土からは、森林伐採もしくは木材加工の存在も垣間見ることができる。さらには、擦切石器が出土している。擦切石器は、幅狭の柱状石斧を制作する際に使用するものでもと考えられている。当遺跡からは細身の鑿形石斧もまともに出て出土していることから、鑿形の石斧を製作していたのではと考えられる。ただし、擦切石器で擦り切られた痕跡のある鑿形の石斧など製作過程を示す資料は、現段階の作業の中では確認することはできなかった。今後、出土資料を十分に精査し、擦切石器による鑿形の石斧などの製作過程を示す資料を検討していく必要がある。

### 第3節 竪穴状遺構2号出土の鋸歯尖頭器について

当遺跡では、竪穴状遺構2号から前谷段階の春日式土器とともに鋸歯縁をもつ大振りな石鎌が出土している(註1)。志布志市松山町(旧松山町)の前谷遺跡では、春日式土器とともに100本以上の石鎌が出土している。これらの中には、鋸歯縁をもつ石鎌が出土している(第228図)。また、当遺跡の上流に位置する上水流遺跡でも、前谷段階の春日式土器とともに100本以上の石鎌が出土し、鋸歯縁をもつ石鎌が出土している(第228図)。中には、鋸歯縁をもつ大振りな石鎌も出土している。

このような鋸歯縁をもつ大振りな石鎌は、石鉏と同じように大型の魚類などを捕るための漁労具と考えられている。石鉏、鋸歯尖頭器などの利突具は、九州北部から西岸地域及び対馬島、壱岐島、五島列島、天草諸島を含む地域から多く出土している。石鉏は、縄文時代中期後葉の長崎県つぐめのはな遺跡からの出土が著名である。つぐめのはな遺跡では、石鉏が50点以上出土し、石匙・スクレイパーや鯨骨を伴っていることから、クジラ類の捕獲及び解体を行っていた場所である可能性が考えられている。鋸歯尖頭器・鋸歯縁石器(石鉏)は、縄文時代早期末から前期の長崎県越高遺跡の鋸歯尖頭器があるが、韓国新石器時代の土器とともに出土したため、韓国からの搬入品である可能性も考えられている。鋸歯尖頭器・鋸歯縁石器がともに出土する九州西岸の遺跡として、福岡県天神山貝塚、佐賀県徳蔵谷遺跡、長崎県名切遺跡・門前遺跡、熊本県黒橋貝塚などの縄文時代中期後葉から後期前葉にかけての遺跡がある。鹿児島県内で、漁労具と考えられている石鉏、鋸歯尖頭器、鋸歯縁石器が出土した遺跡として、川上(市来)貝塚(いちき串木野市市来町)、上焼田遺跡(南さつま市金峰町)、上ノ平遺跡(日置市伊集院町)がある。上焼田遺跡では、黒曜石製の鋸歯縁石器がⅣ層・Ⅴ層(縄文時代早期から前期の包含層)から1点、Ⅲa層・Ⅲb層(縄文時代中期から後期の包含層)から1点出土している。川上(市来)貝塚では、安山岩製の鋸歯尖頭器1点がⅤ層(縄文時代後期の包含層)から出土している。上ノ平遺跡では、Ⅲa層(縄文時代後期から晩期の包含層)から黒曜石製の石鉏と黒曜石製の鋸歯縁石器がそれぞれ1点ずつ出土している(註2)。また、川上(市来)貝塚ではクジラ・イルカ・サメなどの骨が出土し、上焼田遺跡ではメジロザメの骨が出土している。このことから、鋸歯尖頭器単独や石鉏あるいは鋸歯尖頭器と鋸歯縁石器を組合せ鉏として使用し、イルカ・サメなどを捕っていたのではと考えられる。ただし、上ノ平遺跡は、標高100m前後の山間部に位置し、海岸からはかなり離れたところに位置する。このような場所から大形の魚類などを捕るための漁労具と考えられている石器が出土したことは、どのような意味があるのかあるいはどのような道具としていたのかは

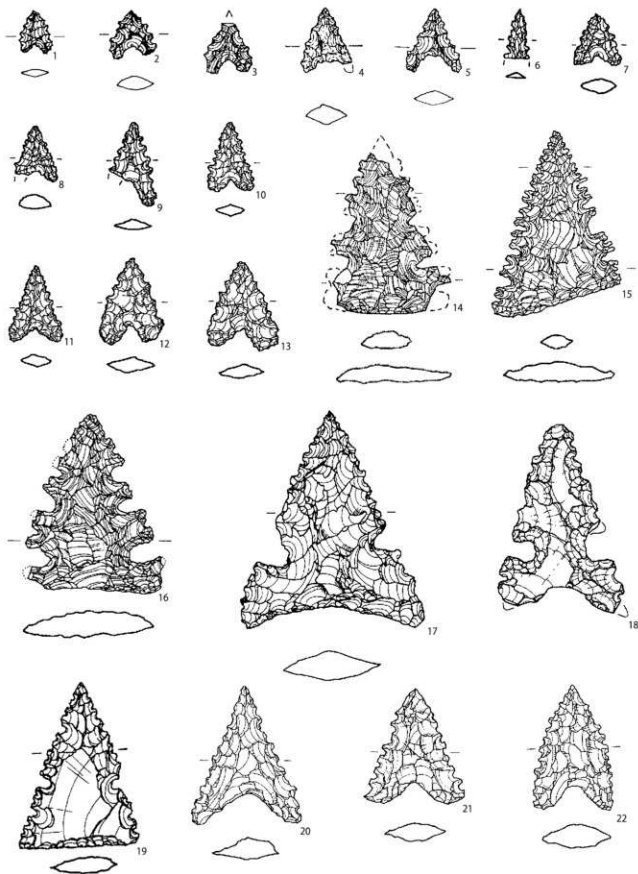
今後検討する必要がある。

ここでは、縄文時代中期後葉から後期前葉にかけて九州西岸の遺跡から出土した鋸歯尖頭器や鹿児島県内の遺跡から出土した鋸歯尖頭器と、当遺跡竪穴状遺構2号から出土した鋸歯尖頭器について、その形状や大きさ、時期などについて比較・検討していきたい。(第228図)



第227図 鋸歯尖頭器出土遺跡の位置図

まず、形状についてみてみたい。14から16は、平面形が二等辺三角形を呈し、側縁部が鋸歯状に作り出され、歯先はもう一度小さく鋸歯状に作り出される複式のものである。14は、先端部が欠損している。15は、平面形が三角形を呈し、側縁部が鋸歯状に丁寧に作り出され、歯先はもう一度小さく鋸歯状に作り出される複式のものである。下縁部は、斜めになっている。14・16よりも、鋸歯状の凹凸が小さくなっている。17は、平面形が二等辺三角形を呈し、側縁部が丁寧に鋸歯状に作り出されている。体部下半の基部近くの側縁部に大きく抉入加工が施され、基部は逆U字状に挟られている。18は、平面形が二等辺三角形を呈し、側縁部が鋸歯状に作り出されている。体部下半の基部近くの側縁部に大きく抉入加工が施され、基部は逆U字状に挟られている。19は、平面形が二等辺三角形を呈し、側縁部が鋸歯状に作り出され、歯先はもう一度小さく鋸歯状に作り出される複式のものである。20は、平面形が二等辺三角形を呈し、



※ 1～5 は前谷遺跡、6～13 は上水流遺跡、14～16 は徳蔵谷遺跡、  
 17 は門前遺跡、18 は黒橋貝塚、19 は川上（市来）貝塚、20～22  
 は芝原遺跡出土である。

第228図 石鏃及び鋸齒尖頭器実測図



個縁部が鋸歯状に作り出されている。基部は、逆V字状に挟られている。21は、平面形が二等辺三角形形状を呈し、個縁部が鋸歯状に丁寧に作り出されている。基部は、逆V字状に挟られている。22は、平面形が二等辺三角形形状を呈しているが個縁部がやや膨らむものである。個縁部が鋸歯状に丁寧に作り出されている。基部は、逆V字状に挟られている。14から19は、個縁部の鋸歯状の作り出しが複式である。基部は、平坦なもの、挟られるものがある。20から22は、個縁部の鋸歯状の作り出しが単式である。基部については、すべて挟られている。

表9 鋸歯尖頭器出土遺跡及び計測値

No	遺跡名	第228回 レイアウト番号	計測値(長さ×幅×厚さはmm, 重さはg)			
			長さ	幅	厚さ	重さ
1	徳蔵谷遺跡	14	43	32	6	5.6
2		15	49	33	6	6.1
3		16	47	35	7.5	9
4	門前遺跡	17	57	46	9	13.41
5	黒橋貝塚	18	50	33	5.5	6.2
6	川上(市来)貝塚	19	43	32	5	5.29
7	芝原遺跡	20	37	29	6	3.38
8		21	31	27	7	2.86
9		22	34	21	8	3.04

次に、大きさを比較してみたい(表9)。14から19は、長さが約4cmから約6cm、幅が約3cmから約5cm、厚さが約0.5cmから約0.9cmであり、重さは約5gから約13gである。20から22は、長さが約3cmから約4cm、幅が約2cmから約3cm、厚さが約0.6cmから約0.8cmであり、重さは約3gである。20から22は、14から19に比較すると小振りである。

次に、時期をみてみたい。徳蔵谷遺跡・門前遺跡の主体の土器は坂の下系土器と報告されており、縄文時代中期後葉から後期前葉に該当するものである。黒橋貝塚については出土地点・層位ともに不明と報告されている。川上(市来)貝塚の鋸歯尖頭器が出土したV層は出水式土器・指宿式土器が主体と報告されており、縄文時代後期前葉に該当する。当遺跡の鋸歯尖頭器は、先に述べたように縄文時代中期中葉の春日式土器をともなう堅穴状遺構から出土しており、時間的には14から19の時代よりも古いと考えられる。また、鋸歯尖頭器の個縁部の作り出し方の形態的特徴による新旧、すなわち個縁部の鋸歯状の作り出しが複式よりも単式が古いということにも合致する(注3)。

当遺跡の鋸歯尖頭器が小振りであることは、漁労の対象とする魚類の違いによるものであるのか、それとも地

域差によるものなのかなどについては明らかにできていない。今後検討する必要がある。

当遺跡で生活していた人々は、東シナ海へ出かけサメ類や大型の魚類を捕獲していたことがうかがえる資料である。今回は鋸歯尖頭器として報告したが鋸歯縁をもつ大振りな石鏝という可能性もあり、類例の増加を待ち、大きさや重さ、形態による分類などを通して今後さらに検討が必要であると考えられる。

## 注

注1 本報告書では、その大ききから組合せ話の先端部として使用される鋸歯尖頭器として報告している。

注2 報告者は、石鏝については尖頭器として報告している。

注3 遺物指導における山崎純男氏によるご教示。

## 引用・参考文献

- 山崎純男 1988「西北九州漁撈文化の特性」『季刊考古学』第25号 雄山閣
- 市来町教育委員会1991「川上(市来)貝塚 市来町埋蔵文化財発掘調査報告書(1)」
- 市来町教育委員会1993「川上(市来)貝塚2 市来町埋蔵文化財発掘調査報告書(2)」
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター2004「上ノ平遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(70)
- 唐津市教育委員会1995「徳蔵谷遺跡(2)」唐津市埋蔵文化財調査報告書第63集
- 唐津市教育委員会1996「徳蔵谷遺跡(3)」唐津市文化財調査報告書第68集
- 唐津市教育委員会2004「徳蔵谷遺跡(5)」唐津市文化財調査報告書第117集
- 金峰町教育委員会2003「上焼田A遺跡 上焼田B遺跡」金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書(5)
- 熊本県教育委員会1998「黒橋貝塚」熊本県文化財調査報告書第166号
- 志摩町教育委員会1974「天神山貝塚」志摩町埋蔵文化財調査報告書第1集
- 長崎県教育委員会1985「名切遺跡」長崎県文化財調査報告書第71集
- 長崎県教育委員会1986「つぐめのはな遺跡」長崎県文化財調査報告書第82集
- 長崎県教育委員会2006「門前遺跡」長崎県文化財調査報告書第190集
- 松山町教育委員会1986「前谷遺跡」松山町埋蔵文化財調査報告書(1)
- 牧園町教育委員会1995「九日田遺跡2」牧園町埋蔵文化財発掘調査報告書(5)

#### 第4節 縄文時代中期前半期の堅穴状遺構

芝原遺跡では、春日式土器を伴う堅穴住居状の遺構が発見されている。平面形態としては、方形に近い不定形もしくは台形状を呈している。遺構内から地床材などの屋内物が発見されていないので、明確な「住居跡」とは言い難いが、ここではこの遺構を「堅穴状遺構」として扱い、周辺地域の類似資料を集め、比較検討を行いたい。

まず、南部九州において縄文時代中期前半に該当する堅穴状遺構について、報告書等であたってみたところ、前谷遺跡（志布志市〔旧松山町〕）と、下耳切第3遺跡（宮崎県児湯郡高鍋町）、後田山下遺跡（肝付町〔旧高山町〕）の3か所に存在することが判明した（表10）。つまり、本遺跡を含めて、4遺跡のみでの発見である。

この中で、後田山下遺跡については、報告書では縄文時代前期の葬式土器に伴うものとされていた。しかしながら、住居内及びその周辺から出土した土器の実見を行って検討した結果、中期の条痕文土器であることを確認した。これまで、中期の条痕文土器はその形態と器面に施された貝殻条痕の類似性から前期の葬式土器と混同されてきたわけであるので、やむを得ないことといえよう。

下耳切第3遺跡では、船元Ⅱ式およびⅢ式土器と、中期条痕文土器、春日式土器北手牧段階が出土している。

前谷遺跡においては、春日式土器前谷段階が出土している。本遺跡では、春日式土器前谷段階が出土しているため、前谷遺跡とは近い時期のものであるが、ほかの2つの遺跡とは異なる段階のものであるとみられる。

形態的には、後田山下遺跡が長方形ないしは台形、下耳切第3が円形ないしは略円形、前谷が長方形及び円形ないしは不定形である。本遺跡のものは、長方形ないしは不定形状を呈するので強いというならば、前谷遺跡のものに近い印象を持つ。

ここまで比較を行ったが、やはり比較資料が少ないので傾向をつかむということはなかなか困難である。当該時期の前後の時代の堅穴状遺構についても、前期についてはほぼ皆無に等しいし、中期後半もまた同様である。後期になると、円形状を呈するという傾向があるが、これ以上の検討については今後の課題としておきたい。

ところで、下耳切第3遺跡では掘立柱の建物（平地建物）が発見されている。平面形態が長方形をなす平地建物はもちろんのこと、柱を円形に配置した円形の平地建物についても数棟発見されており、注目される。これまでも縄文時代の包含層では、ピットも少なからず発見されているが、建物としてまとめられたものは少なかった。今後は、下耳切第3遺跡での例のような円形の平地建物や不定形の建物なども想定しながら復元に努める必要があろう。

また、当該時期については、円形土坑を目にする機会が多い印象がある。これについては、前谷遺跡、下耳切第3遺跡、上水流遺跡で発見例がある。少し時期が新しくなるが、宮之迫遺跡（曾於市〔旧末吉町〕）などでも中期後半の円形土坑は発見されている。これらは、堅穴状遺構とも言い難いが、規模によっては十分住居としても機能できるものも含まれる。今後は、堅穴住居に加え、これまであまり注目されてこなかった「土坑」や「ピット」とされているものにも目を向けながら生活・文化に関して考察を行う必要があるのではなからうか。

本文を作成するにあたっての資料実見及び資料収集にあたっては、東和幸氏や、柴畑光博氏、相美伊久雄氏、真邊彩氏らの協力を得た。記して感謝したい。

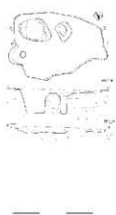
#### 【参考文献】

- 高山町教育委員会1996『後田山下遺跡』高山町教育委員会発掘調査報告書（5）
- 松山町教育委員会1986『前谷遺跡』松山町教育委員会発掘調査報告書（1）
- 宮崎県埋蔵文化財センター2006『下耳切第3遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書（125）
- 九州縄文研究会福岡大会事務局編2000『九州の縄文住居』—第10回九州縄文研究会福岡大会資料—九州縄文研究会
- 九州縄文研究会熊本大会事務局編2008『九州の縄文住居Ⅱ』縄文住居の形態・規模・構造、その変遷と地域性—第18回九州縄文研究会熊本大会資料—九州縄文研究会

表10 南部九州における縄文時代中期の堅穴状遺構

遺跡名	所在地	時期（土器型式）	軒数	平面形態
後田山下	肝付町（旧高山町） 後田字後田山下	中期前葉 （中期条痕文）	1	長方形ないしは台形
下耳切第3	宮崎県児湯郡高鍋町 大字上江字下耳切	中期前葉～中葉 （船元Ⅱ～春日式北手牧段階）	9	円形ないしは略円形
前谷	志布志市松山町 新橋字砂田	中期中葉 （春日式前谷段階）	5	長方形及び円形ないしは不定形
芝原	南さつま市（旧金峰町） 宮崎字芝原	中期中葉 （春日式前谷段階）	2	長方形ないしは不定形

後田山下遺跡



前谷遺跡



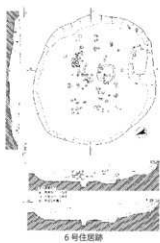
2号住居跡



3号住居跡



4号住居跡



6号住居跡

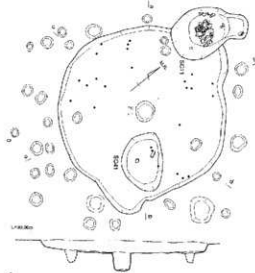
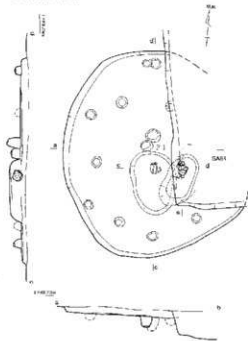


5号住居跡

下耳切第3遺跡



下耳切第3遺跡



第229図 南部九州における縄文時代中期前半期の竪穴状遺構

---

# 觀察表

---



表11 土坑計測表(1)

No	遺構番号	長径 (c m)	短径 (c m)	深さ (c m)
±1	2022	107.0	56.5	19.0
±2	12462	59.5	48.0	13.2
±3	9934	206.0	120.0	19.2
±4	9935	240.0	75.0	33.9
±5	9937	116.0	106.5	32.3
±6	9938	107.5	78.5	36.6
±7	12453	-	-	-
±8	13104	76.0	47.0	20.0
±9	12301	58.0	45.5	31.0
±10	12226	70.5	-	-
±11	12278	64.0	-	-
±12	12317	81.5	-	-
±13	12225	101.0	-	-
±14	12320	51.0	46.0	27.0
±15	12354	125.5	-	-
±16	12355	76.5	-	-
±17	12356	129.0	99.5	55.0
±18	9818	180.0	80.0	64.0
±19	12315	119.0	80.5	22.0
±20	12314	80.0	60.0	48.5
±21	12251	-	-	-
±22	12313	90.5	72.5	29.0
±23	12311	52.5	52.0	27.0
±24	12121	65.5	64.5	32.0
±25	12120	57.5	51.5	29.0
±26	12309	75.5	67.0	43.0
±27	12310	67.5	60.0	21.0
±28	12086	69.0	60.0	12.0
±29	12023	71.0	50.0	12.0
±30	12204	63.5	49.5	10.0
±31	9814	64.0	34.0	12.5
±32	9815	152.0	93.0	65.0
±33	9813	96.0	82.0	38.5
±34	9816	70.0	68.0	41.0
±35	9812	55.5	36.5	21.2
±36	9971	88.0	50.5	24.9
±37	9783	49.0	39.0	14.0
±38	9941	100.0	52.0	33.5
±39	9943	62.5	57.5	21.5
±40	9944	65.0	50.0	35.0
±41	9945	67.0	58.0	28.8
±42	9953	218.0	147.5	43.0
±43	9963	66.0	50.5	42.0
±44	9964	112.0	67.5	33.3
±45	12248	60.0	42.5	27.0
±46	9962	89.0	31.0	31.0
±47	9924	134.0	87.0/50.0	16.0
±48	9961	135.0	110.0/99.0	73.0
±49	9981	75.0	(58.0)	13.4
±50	9959	100.0	75.0	31.9
±51	9982	57.5	49.0	11.2
±52	12236	61.5	31.0	25.0
±53	12246	70.5	44.5	14.0
±54	9929	85.0	80.0	59.5
±55	13091	242.5	110.0	-
±56	9975	203.0	71.5	38.8
±57	9976	73.0	45.0	30.2
±58	9955	95.0	70.0/56.0	24.0
±59	9967	120.0	70.0/34.0	16.0
±60	9958	104.0	64.0/52.0	19.0
±61	9957	110.0	93.0/70.0	40.0
±62	9956	64.0	60.0	26.0
±63	9969	74.0	60.0	16.0
±64	3071	(64.0)	(50.0)	50.0
±65	3072	(123.0)	(82.0)	19.0
±66	3073	(76.0)	(50.0)	21.0
±67	3075	92.0	82.0	21.0
±68	3074	107.0	60.0	31.0

No	遺構番号	長径 (c m)	短径 (c m)	深さ (c m)
±69	3067	(210.0)	(116.0)	38.0
±70	3068	104.0	87.0	19.0
±71	3063	72.0	54.0	26.0
±72	3064	109.0	36.0	16.0
±73	3066	123.5	59.0	46.0
±74	3069	155.0	78.0	29.0
±75	3059	141.0	107.0	71.0
±76	3058	242.0	124.0	38.0
±77	3060	(119.0)	(100.0)	47.0
±78	2846	74.5	70.0	29.0
±79	3057	55.5	53.0	42.0
±80	2822	162.0	59.0	42.0
±81	3056	287.0	180.0	16.0
±82	8721	182.0	146.0	35.0
±83	10603	97.5	79.5	-
±84	10602	102.0	93.0	-
±85	2807	175.0	122.0	23.0
±86	2809	134.0	103.0	19.0
±87	2811	-	-	-
±88	2818	162.0	90.0	13.0
±89	2810	-	-	-
±90	2845	118.0	97.0	23.0
±91	2844	217.0	160.0	21.0
±92	2815	74.0	62.0	53.0
±93	2819	170.0	76.0	-
±94	2820	81.0	78.0	16.0
±95	2824	110.0	54.0	14.0
±96	2825	235.0	63.0	14.0
±97	2826	111.0	68.0	24.0
±98	2823	217.0	149.0	31.0
±99	2821	68.0	44.0	30.0
±100	2827	78.0	77.0	13.0
±101	11033	240.0	120.0	28.5
±102	2813	106.0	89.0	35.0
±103	13076	93.0	50.0	46.0
±104	2853	108.0	100.0	62.0
±105	2798	80.0	69.0	20.0
±106	2797	75.0	61.0	16.0
±107	2851	97.0	76.0	45.0
±108	2848	114.0	97.0	41.0
±109	2852	94.5	53.0	9.0
±110	2806	64.0	59.0	13.0
±111	2837	88.0	48.0	24.0
±112	11057	52.0	36.0	20.0
±113	11126	175.0	90.0	-
±114	2795	62.0	53.0	32.0
±115	2784	(119.0)	(38.0)	34.0
±116	2787	152.0	81.0	22.0
±117	2786	76.0	62.0	42.0
±118	2792	90.0	82.0	41.0
±119	2791	101.0	67.0	25.0/19.0
±120	2788	99.0	87.0	56.0
±121	2789	76.0	52.0	14.0
±122	2855	73.0	68.0	14.0
±123	2856	123.0	82.0	55.0
±124	2800	84.5	67.0	10.0
±125	2767	80.0	70.0	18.0
±126	2766	(105.0)	(74.0)	21.0
±127	2778	155.0	107.0	27.0
±128	2768	93.0	63.0	18.0
±129	2769	102.0/86.0	52.0/38.0	20.0/12.0
±130	2775	152.0	61.0	23.0
±131	2770	86.0	63.0	25.0
±132	2764	111.5	77.5	26.0
±133	2763	1979.0	95.0	25.0
±134	2759	61.5	40.0	8.0
±135	2760	132.0	74.0	14.0
±136	2732	149.0	85.0	30.0

表12 土坑計測表(2)

No	遺構番号	長径 (c m)	短径 (c m)	深さ (c m)
±137	2729	104.0	50.0	12.0
±138	2728	116.0	57.0	23.0
±139	2757	159.0	123.0	28.0
±140	2761	150.0	91.0	15.0
±141	2762	114.0	80.0	31.0
±142	2771	105.0	48.0	20.0
±143	2772	96.0	56.0	13.0
±144	2773	84.0	79.0	21.0
±145	11125	83.5	80.0	25.5
±146	2721	81.0	67.0	29.0
±147	2722	145.0	68.0	20.0
±148	2720	206.0	119.0/116.0	41.0/23.0
±149	2717	224.0	112.0	15.0
±150	2716	(144.0)	(116.0)	18.0
±151	2709	195.0	88.0	16.0
±152	2707	156.0	114.0/48.0	20.0/13.0
±153	2708	148.0	67.0	21.0
±154	2712	112.0	86.0	16.0
±155	2706	75.5	66.0	40.0
±156	2724	66.0	43.0	15.0
±157	2702	-	-	-
±158	2719	64.0	40.0	15.0
±159	2742	97.0	39.0/43.0	15.0/5.0
±160	2741	217.0	97.0	23.0
±161	2739	98.0	71.0	37.0
±162	2740	73.0	46.0	13.0
±163	2685	100.0	53.0	23.0
±164	2743	64.0	40.0	21.0
±165	2744	94.0	36.0	10.0
±166	2750	52.0	33.0	8.0
±167	2752	86.0	61.0	34.0
±168	2689	66.0	53.0	31.0
±169	2694	207.0	178.0	65.0
±170	2693	69.0	54.0	22.0
±171	2691	145.0	88.0	18.0
±172	2701	69.0	48.0	12.0
±173	2700	115.0	93.0	9.0
±174	2698	87.0	64.0	32.0
±175	2682	67.0	47.0	11.0
±176	2684	85.0	38.0	15.0
±177	2676	97.0	55.0/42.0	23.0/12.0
±178	2678	129.0	53.0/70.0	17.0/28.0
±179	2655	81.0	58.0	27.0
±180	2654	103.0	49.0	15.0
±181	2653	91.0	69.0	25.0
±182	2657	68.5	57.0	21.0
±183	2656	144.0	93.0	42.0
±184	2658	92.0	69.0	23.0
±185	2675	80.5	77.0	11.0
±186	2665	81.0	64.0	18.0
±187	2669	74.0	52.0	22.0
±188	2664	88.0	50.0	13.0
±189	2662	129.5	75.0/54.0	21.0/10.0
±190	2659	78.0	73.0	40.0
±191	2626	140.0	121.0	19.0
±192	2661	149.0	128.0	25.0
±193	2618	90.0	88.0	22.0
±194	2619	214.0	120.0	25.0
±195	2630	96.0	47.0	14.0
±196	2636	130.0	91.5	27.0
±197	2635	75.0	54.0	10.0
±198	2647	150.0	123.0	14.0
±199	2625	83.5	59.0	28.0
±200	2555	91.0	52.0/39.5	38.0
±201	2559	115.0	111.0	46.0
±202	2651	131.0	99.0	32.0
±203	2573	63.0	47.0	15.0
±204	2584	71.5	70.0	17.0

No	遺構番号	長径 (c m)	短径 (c m)	深さ (c m)
±205	2587	88.5	54.0	19.0
±206	13073	69.0	66.0	18.0
±207	2543	95.0	88.0	41.0
±208	13072	70.0	67.0	20.0
±209	13074	68.0	61.0	17.0
±210	2585	51.0	31.5	24.0
±211	2600	72.0	57.0	14.0
±212	2595	76.0	66.0	27.0
±213	2606	96.0	80.0	18.0
±214	2605	100.0	74.0	29.0
±215	2608	148.0	137.0	44.0
±216	2607	92.0	84.0	13.0
±217	2614	131.0	119.0	59.0
±218	1443	85.0	77.0	46.0
±219	1442	109.0	91.0	31.0
±220	1439	69.0	30.0	22.0
±221	1433	74.0	48.0	26.0
±222	1434	96.5	62.0	25.0
±223	2554	96.0	44.0	14.0
±224	2540	83.0	71.0	37.0
±225	1436	63.0	52.0	16.0
±226	13070	130.0	119.0/113.0	30.0/30.0
±227	2539	86.0	51.0	19.0
±228	2533	(80.0)	(48.0)	25.0
±229	1595	147.0	59.0	23.0
±230	1591	99.0	65.0	20.0
±231	2537	112.0	110.0	38.0
±232	2536	171.0	144.0	18.0
±233	2535	98.0	89.0	23.0
±234	2529	89.0	87.0	62.0
±235	2538	129.0	110.0	27.0
±236	13069	76.0	40.0	15.0
±237	2524	184.0	137.0	24.0
±238	2522	187.0	159.0	23.0
±239	2523	222.0	180.0	20.0
±240	1444	(124.0)	(124.0)	20.0
±241	1445	(167.0)	(66.0)	18.0
±242	1448	(123.0)	(73.0)	24.0
±243	1447	169.0	125.0	39.0
±244	1593	133.0	97.0/50.0	13.0/20.0
±245	1415	177.0	145.0	75.0
±246	1416	139.0	98.0/83.0	49.0/44.0
±247	1587	104.0	90.5	45.0
±248	1413	159.0	76.0	19.0
±249	2528	86.0	69.0	42.0
±250	2648	175.0	156.0	58.7
±251	2518	141.0	97.0	19.0
±252	2516	132.5	74.0	48.0
±253	2517	344.0	123.0	89.0
±254	2515	166.0	139.0/136.0	15.0
±255	2507	124.5	82.0	30.0
±256	2519	84.5	70.0	41.0
±257	2508	110.0	101.0	27.0
±258	2509	(233.0)	(103.0)	22.0
±259	2520	49.0	42.0	29.0
±260	1430	101.0	81.0	35.0
±261	1555	99.0	51.0	16.0
±262	1425	131.0	115.0	28.0
±263	1429	-	-	-
±264	1558	144.0	43.0	14.0
±265	1562	64.5	59.0	50.0
±266	1410	156.0	146.0	13.0
±267	1412	100.0	69.0	27.0
±268	1411	146.0	120.0	32.0
±269	1409	90.0	71.0	15.0
±270	1581	94.0	69.0/53.0	20.0
±271	1406	129.5	101.0	27.0
±272	2503	207.0	104.0	33.0

表13 土坑計測表(3)

No	遺構番号	長径 (c m)	短径 (c m)	深さ (c m)
+273	2501	98.0	75.0	11.0
+274	13083	67.0	52.0	27.0
+275	1564-1	92.0	80.0	18.0
+276	1420	132.0	73.0	18.0
+277	1405	262.0	154.0	75.0
+278	13106	68.0	53.0	36.0
+279	1408	126.0	85.0	12.0
+280	1583	139.5	88.0/45.0	48.0
+281	1578	133.0	69.0	12.0
+282	1573	99.0	87.0	16.0
+283	1575	113.0	98.0	22.0
+284	1574	163.0	110.0	20.0
+285	12469	100.5	83.0	33.0
+286	1131	153.0	138.5	36.5
+287	1127	70.5	62.5	26.0
+288	1126	71.5	69.0	37.5
+289	1608	89.0	73.0	63.0
+290	5139	128.0	90.0	28.0
+291	1607	91.0	72.0	38.0
+292	1605	83.0	75.0	26.0
+293	13079	46.5	31.0	20.5

表14 ビット計測表(1)

No	遺構番号	長径 (c m)	短径 (c m)	深さ (c m)
P1	12328	36.0	25.0	27.0
P2	12300	39.0	25.0	20.0
P3	12415	28.0	27.0	9.0
P4	12416	25.5	22.5	8.0
P5	12334	38.0	35.0	39.0
P6	12445	30.0	26.0	20.6
P7	13094	-	-	-
P8	13093	-	-	-
P9	11836	29.0	24.0	20.0
P10	11856	37.5	27.0	20.0
P11	11834	30.5	27.0	17.0
P12	11835	55.5	46.5	25.0
P13	12447	38.0	36.0	37.8
P14	12443	36.5	31.5	19.9
P15	12444	35.0	31.5	40.1
P16	13105	31.5	25.0	27.0
P17	12430	27.5	24.0	28.5
P18	12436	38.0	32.0	13.6
P19	12435	27.0	26.5	18.5
P20	12463	17.5	17.0	6.9
P21	12464	27.0	24.5	10.7
P22	12446	25.0	22.5	14.0
P23	12442	24.0	21.5	10.6
P24	12441	38.0	36.0	16.0
P25	12460	27.0	24.0	17.7
P26	12431	25.0	21.0	11.6
P27	12437	24.0	22.5	8.8
P28	12440	26.5	23.5	23.5
P29	12432	30.0	29.0	12.0
P30	12461	31.5	24.5	17.9
P31	12426	39.0	32.5	20.0
P32	12438	25.0	24.0	10.2
P33	12439	32.0	21.5	36.1
P34	12318	41.5	31.5	22.0
P35	12021	43.5	-	-
P36	12079	20.0	16.0	14.0
P37	12080	19.0	17.5	21.0
P38	12277	34.0	32.5	7.0
P39	12224	31.5	24.5	29.0
P40	12028	37.5	34.0	18.0
P41	12029	34.5	34.0	15.0
P42	12033	42.5	37.0	22.0
P43	12115	35.0	34.0	13.0

No	遺構番号	長径 (c m)	短径 (c m)	深さ (c m)
P44	12117	40.0	30.0	17.0
P45	12118	20.5	17.5	21.0
P46	12116	20.0	19.0	19.0
P47	12114	44.0	31.0	19.0
P48	12279	23.5	20.0	12.0
P49	12340	33.0	28.5	23.0
P50	12308	38.5	37.5	15.0
P51	12203	29.0	28.5	11.0
P52	12202	29.0	25.5	11.0
P53	12125	37.5	34.0	16.0
P54	12230	29.0	25.0	22.0
P55	12088	28.5	26.5	15.0
P56	12087	31.0	30.0	16.0
P57	12091	28.5	22.5	22.0
P58	12090	29.0	26.0	17.0
P59	12089	29.0	28.5	17.0
P60	12085	36.5	30.5	18.0
P61	12026	30.5	27.5	13.0
P62	12027	24.5	23.5	13.0
P63	12205	30.0	26.0	22.0
P64	12082	41.0	32.0	13.0
P65	12081	33.5	31.0	4.0
P66	12084	37.0	32.0	12.0
P67	12083	40.5	28.0	25.0
P68	9819	34.0	25.0	24.0
P69	9785	31.5	30.5	29.0
P70	9786	31.0	29.0	20.0
P71	9978	37.5	34.5	4.4
P72	9980	50.5	43.5	13.3
P73	13092	26.5	21.0	12.2
P74	9784	30.0	25.0	12.0
P75	9951	34.0	32.0	25.5
P76	9940	43.0	41.0	23.9
P77	9942	29.5	29.0	16.1
P78	9947	47.0	41.5	13.4
P79	9952	51.5	44.0	23.0
P80	9950	42.5	41.5	34.9
P81	9948	47.0	43.0	16.7
P82	9949	60.0	59.0	26.6
P83	9946	39.0	27.0	14.5
P84	12229	32.5	27.5	32.0
P85	12252	27.0	24.0	24.0
P86	12253	46.0	41.0	24.0
P87	12254	34.0	29.0	15.0
P88	9939	44.0	28.0	18.5
P89	9960	56.0	48.0	25.0
P90	12242	36.5	32.5	22.0
P91	12240	22.0	20.0	17.0
P92	12239	20.0	19.0	25.0
P93	12238	20.5	19.0	13.0
P94	12237	18.5	15.0	17.0
P95	12235	26.5	25.5	24.0
P96	12234	28.5	21.5	20.0
P97	12233	23.5	20.0	29.0
P98	12231	21.5	20.0	30.0
P99	12232	33.5	31.5	29.0
P100	12243	27.5	24.0	30.0
P101	12245	21.5	21.0	20.0
P102	12244	30.5	25.5	17.0
P103	12299	26.5	21.0	16.0
P104	12247	34.0	22.0	10.0
P105	12298	31.5	26.5	25.0
P106	12303	42.0	37.0	41.0
P107	12297	42.5	38.0	34.0
P108	9825	42.0	36.0	32.0
P109	9983	40.0	39.0	14.5
P110	9797	32.0	28.5	14.5
P111	9798	38.0	37.0	22.5



表15 ビット計測表(2)

No	遺構 番号	長径 (c m)	短径 (c m)	深さ (c m)
P112	12241	42.0	38.5	27.0
P113	13089	-	-	-
P114	3065	32.0	29.0	10.0
P115	3070	51.0	49.0	32.0
P116	10727	39.0	(32.0)	20.5
P117	10728	27.5	25.5	21.6
P118	10733	22.5	20.5	14.3
P119	10732	32.5	24.0	35.3
P120	10731	31.5	29.0	8.9
P121	10730	47.5	42.5	32.1
P122	10734	51.5	41.5	29.5
P123	2808	66.0	53.0	27.0
P124	2812	65.0	65.0	17.0
P125	2840	31.0	31.0	11.0
P126	2841	29.0	26.0	13.0
P127	2842	41.0	39.0	11.0
P128	13077	52.0	47.0	24.0
P129	13078	-	-	-
P130	11041	20.0	18.0	12.5
P131	2854	59.0	54.0	49.0
P132	2835	56.0	54.0	18.0
P133	2834	51.0	51.0	40.0
P134	2833	42.0	38.0	20.0
P135	2849	51.5	46.0	12.0
P136	2836	46.0	42.0	32.0
P137	2828	43.0	42.0	22.0
P138	2832	54.5	45.0	9.0
P139	2831	50.0	42.0	18.0
P140	2830	47.0	41.0	21.0
P141	2829	39.0	34.0	38.0
P142	11052	11.5	11.0	15.0
P143	11048	32.5	23.0	19.0
P144	11047	29.0	29.0	16.0
P145	11046	26.5	23.5	38.5
P146	11045	15.0	14.0	12.0
P147	11044	18.5	17.0	16.0
P148	11043	18.0	15.5	14.0
P149	11042	20.0	18.0	15.0
P150	11049	23.0	22.5	16.0
P151	11050	20.0	19.0	16.0
P152	11051	13.0	13.0	11.0
P153	11053	16.5	16.0	10.5
P154	2783	56.0	47.0	31.0
P155	2782	54.0	51.0	19.0
P156	2781	(77.0)	(69.0)	23.0
P157	2785	60.0	46.0	11.0
P158	2796	46.0	37.5	11.0
P159	2780	54.0	42.0	12.0
P160	2790	62.0	43.0	12.0
P161	2779	54.5	48.0	12.0
P162	2793	60.0	51.0	12.0
P163	2794	64.0	61.0	22.0
P164	2805	46.0	45.5	11.0
P165	2803	36.0	28.0	16.0
P166	2804	46.0	31.0	22.0
P167	2802	62.0	45.0	32.0
P168	2801	66.0	46.0	12.0
P169	2850	49.5	44.0	14.0
P170	2857	52.0	44.5	22.0
P171	2858	57.0	54.0	14.0
P172	11040	31.0	30.0	23.5
P173	2731	54.0	53.0	17.0
P174	2765	46.5	43.0	20.0
P175	2777	54.5	48.0	12.0
P176	2776	62.0	49.0	13.0
P177	2730	54.0	52.0	11.0
P178	2774	(58.0)	(42.5)	15.0
P179	2758	46.0	41.0	9.0

No	遺構 番号	長径 (c m)	短径 (c m)	深さ (c m)
P180	2726	31.0	29.0	19.0
P181	2727	41.0	39.0	23.0
P182	2754	37.0	34.0	20.0
P183	2755	37.0	34.0	8.0
P184	2756	44.0	41.5	8.0
P185	2859	45.0	32.0	26.0
P186	2715	41.5	36.0	12.0
P187	2711	44.0	39.0	16.0
P188	2710	55.0	43.0	13.0
P189	2713	54.0	35.0	14.0
P190	2714	29.0	26.0	24.0
P191	2704	56.5	52.0	11.0
P192	2705	49.0	42.0	15.0
P193	2734	31.0	30.0	12.0
P194	2718	52.0	47.0	12.0
P195	2735	53.0	41.0	18.0
P196	2736	32.0	27.0	14.0
P197	2737	31.0	28.0	13.0
P198	2738	43.5	36.0	11.0
P199	2733	45.5	40.5	13.0
P200	2725	43.5	38.0	15.0
P201	2723	44.0	39.0	14.0
P202	2703	49.0	45.0	28.0
P203	2686	40.0	35.5	18.0
P204	2745	54.0	42.0	21.0
P205	2746	43.0	37.0	28.0
P206	2751	41.0	36.0	12.0
P207	2749	40.0	32.0	7.0
P208	2748	42.0	40.0	12.0
P209	2747	50.0	45.0	23.0
P210	2687	36.0	34.0	14.0
P211	2688	61.0	59.0	25.0
P212	2690	56.0	52.0	14.0
P213	2696	62.0	40.0	16.0
P214	2697	(43.0)	(35.0)	11.0
P215	2695	38.0	37.0	8.0
P216	2692	56.0	48.0	11.0
P217	2699	54.0	44.5	19.0
P218	2679	55.5	50.0	26.0
P219	2680	44.5	41.0	19.0
P220	2681	52.0	45.5	12.0
P221	2652	(57.0)	(44.0)	11.0
P222	2650	68.0	55.0	33.0
P223	2677	49.0	44.0	28.0
P224	2683	52.0	41.0	12.0
P225	2671	30.0	28.0	16.0
P226	2670	42.0	35.0	10.0
P227	2672	32.0	31.0	18.0
P228	2674	44.0	42.0	19.0
P229	2673	42.0	41.0	17.0
P230	2668	54.0	40.0	6.0
P231	2667	42.0	41.5	7.0
P232	2666	58.0	52.0	20.0
P233	2660	75.0	62.0	18.0
P234	2663	39.0	32.0	7.0
P235	2639	62.0	53.0	20.0
P236	2627	53.0	44.0	15.0
P237	2638	28.0	24.0	15.0
P238	2628	74.0	53.0	18.0
P239	2621	58.0	50.0	8.0
P240	2620	32.0	26.0	12.0
P241	2629	69.0	54.0	19.0
P242	2637	54.0	45.0	27.0
P243	2634	50.0	46.0	5.0
P244	2631	61.5	44.0	17.0
P245	2624	53.0	43.0	20.0
P246	2622	43.0	43.0	27.0
P247	2623	55.0	49.0	26.0

表16 ビット計測表(3)

No	道構番号	長径 (c m)	短径 (c m)	深さ (c m)
P248	2632	39.0	38.0	24.0
P249	2633	34.5	28.0	13.0
P250	2556	41.0	41.0	9.0
P251	2541	76.0	69.0	24.0
P252	2557	62.0	54.0	10.0
P253	2558	41.5	39.0	10.0
P254	2561	51.0	48.0	17.0
P255	2562	67.0	60.0	17.0
P256	2564	37.0	34.0	15.0
P257	2568	28.0	27.0	9.0
P258	2569	40.0	37.0	14.0
P259	2570	45.5	42.5	15.0
P260	2571	68.0	64.0	16.0
P261	2572	38.0	29.0	17.0
P262	2565	48.5	45.0	17.0
P263	2566	38.5	38.0	23.0
P264	2563	76.0	58.0	31.0
P265	2560	36.0	31.0	14.0
P266	2567	38.5	38.0	9.0
P267	2574	44.0	39.0	28.0
P268	2575	36.0	33.0	21.0
P269	2576	35.5	33.0	19.0
P270	2582	7.0	54.0	14.0
P271	2649	70.0	70.0	28.0
P272	2581	58.0	47.0	8.0
P273	2580	38.0	34.0	23.0
P274	2578	32.0	31.0	12.0
P275	2577	37.0	36.0	27.0
P276	2589	56.0	51.0	39.0
P277	2590	46.0	42.0	18.0
P278	2592	36.0	34.0	17.0
P279	2591	50.0	43.0	10.0
P280	2593	53.0	46.0	29.0
P281	2594	41.5	38.0	29.0
P282	2588	36.0	31.0	20.0
P283	2579	31.0	28.5	15.0
P284	2583	52.5	47.0	10.0
P285	2586	42.0	33.0	16.0
P286	2596	32.0	26.0	13.0
P287	2597	28.5	27.0	20.0
P288	2598	30.0	27.0	19.0
P289	2599	62.0	37.0	23.0
P290	2601	29.5	26.0	8.0
P291	2602	67.0	56.0	24.0
P292	2610	47.0	45.5	36.0
P293	2611	55.0	46.0	30.0
P294	2612	49.0	46.0	26.0
P295	2613	61.0	52.0	32.0
P296	2603	29.0	26.0	13.0
P297	2604	27.0	24.0	7.0
P298	2609	36.0	29.0	14.0
P299	1432	74.0	58.0	37.0
P300	1441	56.0	54.0	37.0
P301	1438	35.0	31.0	12.0
P302	1435	61.0	39.0	19.0
P303	1437	46.0	42.0	39.0
P304	1418	50.0	32.0	46.0
P305	1450	49.0	46.0	16.0
P306	1594	56.0	48.0	20.0
P307	1417	65.0	63.0	19.0
P308	2534	72.0	62.0	16.0
P309	13071	44.5	40.0	19.0
P310	2542	72.0	61.0	20.0
P311	1590	51.0	49.0	11.0
P312	2531	76.0	63.0	36.0
P313	2532	65.0	61.0	38.0
P314	2530	73.0	67.0	39.0
P315	2525	57.5	50.5	44.0

No	道構番号	長径 (c m)	短径 (c m)	深さ (c m)
P316	2521	70.0	61.0	16.0
P317	1446	35.0	35.0	31.0
P318	1449B	76.0	68.0	16.0
P319	1449A	75.0	66.0	29.0
P320	13067	66.0	58.0	34.0
P321	1592	63.0	52.0	10.0
P322	13066	46.0	39.0	18.0
P323	1589	61.0	57.0	42.0
P324	1588	37.5	32.0	19.0
P325	2514	58.0	56.0	20.0
P326	2513	70.0	56.5	11.0
P327	2512	63.0	63.0	15.0
P328	2511	78.0	65.0	12.0
P329	2510	40.0	33.0	8.0
P330	1552	47.0	34.0	21.0
P331	1556	56.0	44.0	19.0
P332	1551	49.0	37.0	28.0
P333	1554	70.0	56.0	15.0
P334	1557	43.5	39.0	23.0
P335	1559	30.0	28.0	20.0
P336	1563	48.0	46.0	20.0
P337	1423	64.0	56.0	32.0
P338	1560	28.0	26.0	12.0
P339	1561	56.5	51.0	41.0
P340	1424	64.5	45.0	43.0
P341	1427	31.0	31.0	12.0
P342	1426	42.0	39.5	15.0
P343	13065	42.0	35.0	29.0
P344	1585	59.0	51.0	16.0
P345	1582	76.0	70.0	26.0
P346	1586	26.0	24.0	16.0
P347	1431	81.5	73.0	24.0
P348	1407	53.0	42.0	18.0
P349	2500	60.0	52.5	14.0
P350	2505	69.5	64.0	19.0
P351	2504	44.0	39.0	15.0
P352	2502	40.0	37.0	14.0
P353	2506	32.0	30.0	11.0
P354	2496	47.0	36.0	30.0
P355	2497	73.0	47.0	15.0
P356	2498	50.0	45.0	25.0
P357	2499	46.0	46.0	21.0
P358	2495	(69.0)	(42.0)	20.0
P359	1565	53.5	50.0	12.0
P360	1569	34.0	28.0	23.0
P361	1564-2	64.0	48.0	38.0
P362	1421	71.0	63.0	12.0
P363	1567	52.0	51.0	17.0
P364	1570	73.0	64.0	15.0
P365	1572	54.0	51.0	13.0
P366	1571	32.0	30.5	16.0
P367	1577	79.0	64.0	19.0
P368	1576	59.0	53.0	17.0
P369	1403	64.0	52.5	20.0
P370	1579	63.0	46.0	28.0
P371	1128	70.0	60.0	33.5
P372	1129	23.0	22.0	19.0
P373	1609	55.0	44.0	29.0
P374	1604	36.0	31.0	19.0
P375	1601	38.0	24.0	13.0
P376	1600	48.0	27.5	14.0
P377	1599	38.0	37.0	13.0
P378	1597	46.0	35.0	13.0
P379	1596	26.0	22.0	13.0
P380	1598	58.5	44.0	17.0
P381	1602	40.0	32.0	14.0
P382	1603	55.0	43.0	16.0
P383	5140	-	-	-



















表 25 土器観察表 (9)

館名	遺構番号	シフト別	取上番号	群	土 器				石 器				その他	備 考	
					内函	外函	内函	外函	石 瓦	瓦 石	瓦 石	瓦 石			
172	溝1込み状遺構8号		312	F28217	3	黄褐色	黄褐色	ナマ	ナマ	○	○	○	○		
			314	F28217	3	黄褐色	黄褐色	ナマ	ナマ	○	○	○	○		
			315	F28217	3	褐色	12.5%黄褐色	黄褐色ナマ	黄褐色ナマ	○	○	○	○		
			316	F28217	3	12.5%黄褐色	12.5%黄褐色	黄褐色ナマ	黄褐色ナマ	○	○	○	○		
			317	F28217	4	褐色	褐色	ナマ・ミヅキ	ナマ	○	○	○	○		
			318	F28217	7	赤褐色	褐色	ナマ	ナマ	○	○	○	○		
			319	F28217	7	褐色	12.5%黄褐色	黄褐色ナマ	黄褐色ナマ	○	○	○	○		
			320	F28217	7	赤褐色	褐色	ナマ	ナマ	○	○	○	○		
			321	F28217	8	赤褐色	黄褐色	ナマ	ナマ	○	○	○	○		
			322	F28217	8	黄褐色	黄褐色	黄褐色ナマ	黄褐色ナマ	○	○	○	○		
			323	F28217	8	褐色	褐色	ナマ	ナマ	○	○	○	○		
			173			324	F28217	8	黄褐色	褐色	ナマ	ナマ	○	○	○
325	F28217	8				黄褐色	黄褐色	黄褐色ナマ	黄褐色ナマ	○	○	○	○		
326	F28217	8				褐色	褐色	ナマ	ナマ	○	○	○	○		
328	F28214	2				褐色	褐色	ナマ	ナマ	○	○	○	○		
329	F28214	2				12.5%黄褐色	褐色	ナマ	ナマ	○	○	○	○		
330	F28213	2				赤褐色	12.5%黄褐色	ナマ	ナマ	○	○	○	○		
331	F28214	2				赤褐色	12.5%黄褐色	ナマ	ナマ	○	○	○	○		
332	F28214	2				12.5%赤褐色	12.5%赤褐色	ナマ	ナマ	○	○	○	○		
333	F28213	2				赤褐色	赤褐色	ナマ	ナマ	○	○	○	○		
334	F28214	2				赤褐色	褐色	ナマ	ナマ	○	○	○	○		
335	F28214	2				赤褐色	褐色	ナマ	ナマ	○	○	○	○		
174						336	F28214	3	赤褐色	褐色	ナマ	ナマ	○	○	○
			337	F28214	3	褐色	黄褐色	ナマ	ナマ	○	○	○	○		
			338	F28214	3	赤褐色	赤褐色	黄褐色ナマ	黄褐色ナマ	○	○	○	○		
			339	F28214	3	赤褐色	赤褐色	ナマ	ナマ	○	○	○	○		
			340	F28213	3	赤褐色	褐色	ナマ	ナマ	○	○	○	○		
			341	F28214	3	赤褐色	赤褐色	黄褐色ナマ	黄褐色ナマ	○	○	○	○		
			342	F28214	3	12.5%赤褐色	赤褐色	ナマ	ナマ	○	○	○	○		
			343	F28213	3	赤褐色	黄褐色	ナマ	ナマ	○	○	○	○		
			344	F28214	3	12.5%赤褐色	12.5%赤褐色	ナマ	ナマ	○	○	○	○		
			345	F28214	3	12.5%赤褐色	12.5%黄褐色	黄褐色ナマ	黄褐色ナマ	○	○	○	○		
			346	F28214	3	赤褐色	赤褐色	ナマ	ナマ	○	○	○	○		
			175			347	F28214	3	赤褐色	12.5%黄褐色	ナマ	ナマ	○	○	○
348	F28214	3				赤褐色	赤褐色	ナマ	ナマ	○	○	○	○		
349	F28214	3				赤褐色	赤褐色	ナマ	ナマ	○	○	○	○		
350	F28214	3				赤褐色	赤褐色	ナマ	ナマ	○	○	○	○		
351	F28214	3				赤褐色	12.5%黄褐色	黄褐色ナマ	黄褐色ナマ	○	○	○	○		
352	F28214	3				赤褐色	12.5%黄褐色	ナマ	ナマ	○	○	○	○		
353	F28214	3				12.5%黄褐色	12.5%黄褐色	ナマ	ナマ	○	○	○	○		
354	F28214	3				赤褐色	赤褐色	ナマ	ナマ	○	○	○	○		
355	F28214	3				赤褐色	12.5%黄褐色	黄褐色ナマ	黄褐色ナマ	○	○	○	○		
356	F28214	3				褐色	褐色	ナマ	ナマ	○	○	○	○		
357	F28214	2				赤褐色	12.5%黄褐色	ナマ	ナマ	○	○	○	○		
176						358	F28214	3	赤褐色	褐色	ナマ	ナマ	○	○	○
			359	F28214	3	褐色	褐色	黄褐色ナマ	黄褐色ナマ	○	○	○	○		
			360	F28214	4	12.5%黄褐色	12.5%黄褐色	ナマ	ナマ	○	○	○	○		
			361	F28214	4	12.5%黄褐色	12.5%黄褐色	ナマ	ナマ	○	○	○	○		
			362	F28214	4	黄褐色	12.5%黄褐色	ナマ・ミヅキ	ナマ・ミヅキ	○	○	○	○		
			363	F28214	7	褐色	褐色	黄褐色ナマ	黄褐色ナマ	○	○	○	○		
			364	F28214	7	赤褐色	赤褐色	黄褐色ナマ	黄褐色ナマ	○	○	○	○		
			365	F28214	7	12.5%黄褐色	黄褐色	ナマ	ナマ	○	○	○	○		
			366	F28214	7	褐色	褐色	ナマ	ナマ	○	○	○	○		
			367	F28214	7	赤褐色	赤褐色	ナマ	ナマ	○	○	○	○		
			368	F28214	7	赤褐色	赤褐色	黄褐色ナマ	黄褐色ナマ	○	○	○	○		
			369	F28214	7	赤褐色	赤褐色	ナマ	ナマ	○	○	○	○		
177			370	F28213	4	赤褐色	赤褐色	ナマ・ミヅキ	ナマ・ミヅキ	○	○	○	○		
			371	F28214	6	赤褐色	赤褐色	ナマ	ナマ	○	○	○	○		
			372	F28214	8	褐色	12.5%黄褐色	黄褐色ナマ	黄褐色ナマ	○	○	○	○		
			373	F28214	8	褐色	褐色	黄褐色ナマ	黄褐色ナマ	○	○	○	○		
			374	F28214	8	褐色	褐色	ナマ	ナマ	○	○	○	○		
			375	F28214	8	褐色	褐色	ナマ	ナマ	○	○	○	○		
			376	F28214	8	褐色	黄褐色	ナマ	ナマ	○	○	○	○		
			377	F28214	8	12.5%黄褐色	赤褐色	黄褐色ナマ	黄褐色ナマ	○	○	○	○		
			378	F28214	8	12.5%黄褐色	12.5%黄褐色	ナマ	ナマ	○	○	○	○		
			379	F28214	8	赤褐色	褐色	ナマ	ナマ	○	○	○	○		
			380	F28214	6	赤褐色	赤褐色	黄褐色ナマ	黄褐色ナマ	○	○	○	○		
			178			381	F28214	9	12.5%赤褐色	赤褐色	ナマ	ナマ	○	○	○
382	F28214	9				赤褐色	赤褐色	ナマ	ナマ	○	○	○	○		
383	F28214	9				赤褐色	赤褐色	ナマ	ナマ	○	○	○	○		
384	F28214	9				赤褐色	赤褐色	黄褐色ナマ	黄褐色ナマ	○	○	○	○		
385	F28214	9				赤褐色	赤褐色	ナマ	ナマ	○	○	○	○		
386	F28214	9				赤褐色	赤褐色	ナマ	ナマ	○	○	○	○		
387	F28214	9				赤褐色	赤褐色	ナマ	ナマ	○	○	○	○		
388	F28214	9				赤褐色	赤褐色	ナマ	ナマ	○	○	○	○		
389	F28214	9				赤褐色	赤褐色	ナマ	ナマ	○	○	○	○		
390	F28214	9				赤褐色	赤褐色	ナマ	ナマ	○	○	○	○		
391	F28214	9				赤褐色	赤褐色	ナマ	ナマ	○	○	○	○		
溝1込み状遺構10号						392	F28209	2	赤褐色	赤褐色	黄褐色ナマ	ナマ	○	○	○
			393	F28209	2	赤褐色	赤褐色	ナマ	ナマ	○	○	○	○		
			394	F28209	2	赤褐色	赤褐色	ナマ	ナマ	○	○	○	○		
			395	F28209	2	赤褐色	赤褐色	ナマ	ナマ	○	○	○	○		
			396	F28206	2	褐色	12.5%黄褐色	ナマ	ナマ	○	○	○	○		
			397	F28206	3	12.5%赤褐色	12.5%黄褐色	黄褐色ナマ	黄褐色ナマ	○	○	○	○		
			398	F28206	3	12.5%黄褐色	12.5%黄褐色	黄褐色ナマ	黄褐色ナマ	○	○	○	○		
			399	F28206	3	褐色	褐色	ナマ	ナマ	○	○	○	○		
			400	F28206	3	12.5%黄褐色	黄褐色	黄褐色ナマ	黄褐色ナマ	○	○	○	○		
			401	F28206	3	12.5%黄褐色	褐色	ナマ	ナマ	○	○	○	○		
			402	F28206	3	褐色	褐色	ナマ	ナマ	○	○	○	○		
			溝1込み状遺構11号			403	F28209	3	12.5%赤褐色	褐色	ナマ	ナマ	○	○	○
404	F28209	3				12.5%赤褐色	褐色	ナマ	ナマ	○	○	○	○		
405	F28209	3				12.5%赤褐色	褐色	ナマ	ナマ	○	○	○	○		
406	F28206	3				12.5%黄褐色	12.5%黄褐色	ナマ	ナマ	○	○	○	○		
407	F28206	4				赤褐色	12.5%黄褐色	ナマ	ナマ	○	○	○	○		
408	F28206	7				褐色	褐色	ナマ	ナマ	○	○	○	○		
409	F28206	7				12.5%黄褐色	12.5%黄褐色	黄褐色ナマ	黄褐色ナマ	○	○	○	○		
410	F28206	8				12.5%黄褐色	12.5%黄褐色	ナマ	ナマ	○	○	○	○		
411	F28247	3				12.5%赤褐色	12.5%赤褐色	ナマ	ナマ	○	○	○	○		
412	F28247	3				明赤褐色	赤褐色	ナマ	ナマ	○	○	○	○		
413	F28247	3				明赤褐色	赤褐色	ナマ	ナマ	○	○	○	○		
181						414	F28247	3	12.5%黄褐色	褐色	黄褐色ナマ	黄褐色ナマ	○	○	○
			415	F28247	3	褐色	赤褐色	黄褐色ナマ	黄褐色ナマ	○	○	○	○		
			416	F28247	3	赤褐色	12.5%黄褐色	黄褐色ナマ	黄褐色ナマ	○	○	○	○		
			417	F28247	3	黄褐色	黄褐色	ナマ	ナマ	○	○	○	○		
			418	F28247	3	赤褐色	明赤褐色	ナマ	ナマ	○	○	○	○		
			419	F28247	3	12.5%黄褐色	12.5%黄褐色	黄褐色ナマ	黄褐色ナマ	○	○	○	○		
			420	F28247	3	赤褐色	褐色	黄褐色ナマ	黄褐色ナマ	○	○	○	○		
			421	F28247	3	赤褐色	褐色	黄褐色ナマ	黄褐色ナマ	○	○	○	○		
			422	F28247	3	赤褐色	褐色	ナマ	ナマ	○	○	○	○		
			423	F28247	3	12.5%赤褐色	12.5%黄褐色	黄褐色ナマ	黄褐色ナ						

表 26 土器観察表 (10)

群別	遺跡番号	シフト別	取土番号	土 器				石 瓦				瓦目	土層	その他	備 考
				群	外周	内面	厚	外周	内面	石瓦	瓦目				
183	432	F29247	37903	3	12.0A+褐色	12.0A+褐色	ナズリ縁ナデ	ナデ	○	○		○			
	433	F29247	37904	3	12.0A+褐色	褐色	ナデ	ナズリ縁ナデ	○	○		○			
	434	F29247	37905	3	褐色	褐色	ナデ	ナズリ縁ナデ	○	○		○			
	435	F29247	37906	3	12.0A+赤褐色	12.0A+褐色	ナデ	ナズリ縁ナデ	○	○		○			
	436	F29247	37907	3	12.0A+褐色	12.0A+褐色	ナズリ縁ナデ	ナズリ縁ナデ	○	○		○			
	437	F29247	37908	3	褐色	褐色	ナズリ縁ナデ	ナズリ縁ナデ	○	○		○			
	438	F29247	37909	3	赤褐色	赤褐色	ナズリ縁ナデ	ナズリ縁ナデ	○	○		○			
	439	F29247	37910	3	赤褐色	12.0A+赤褐色	ナズリ縁ナデ	ナズリ縁ナデ	○	○		○			
	440	F29247	37911	3	赤褐色	赤褐色	ナズリ縁ナデ	ナズリ縁ナデ	○	○		○			
	441	F29247	37912	3	赤褐色	赤褐色	ナズリ縁ナデ	ナズリ縁ナデ	○	○		○			
184	442	F29247	37913	3	褐色	褐色	ナデ	ナデ	○	○		○			
	443	F29247	37914	3	赤褐色	赤褐色	ナズリ縁ナデ	ナズリ縁ナデ	○	○		○			
	444	F29247	37915	3	12.0A+褐色	赤褐色	ナデ	ナデ	○	○		○			
	445	F29247	37916	3	赤褐色	赤褐色	ナデ	ナズリ縁ナデ	○	○		○			
	446	F29247	37917	3	赤褐色	12.0A+赤褐色	ナデ	ナズリ縁ナデ	○	○		○			
	447	F29247	37918	3	赤褐色	赤褐色	ナズリ縁ナデ	ナズリ縁ナデ	○	○		○			
	448	F29247	37919	3	褐色	12.0A+褐色	ナデ	ナデ	○	○		○			
	449	F29247	37920	3	赤褐色	赤褐色	ナズリ縁ナデ	ナズリ縁ナデ	○	○		○			
	450	F29247	37921	3	赤褐色	赤褐色	ナズリ縁ナデ	ナズリ縁ナデ	○	○		○			
	451	F29247	37922	3	褐色	褐色	ナデ	ナデ	○	○		○			
185	452	F29247	37923	3	赤褐色	12.0A+赤褐色	赤褐色ナデ	赤褐色ナデ	○	○		○			
	453	F29247	37924	3	褐色	褐色	ナデ	ナデ	○	○		○			
	454	F29247	37925	3	褐色	褐色	ナズリ縁ナデ	ナズリ縁ナデ	○	○		○			
	455	F29247	37926	3	赤褐色	12.0A+赤褐色	ナデ	ナズリ縁ナデ	○	○		○			
	456	F29247	37927	3	12.0A+褐色	12.0A+褐色	ナデ	ナズリ縁ナデ	○	○		○			
	457	F29247	37928	3	褐色	褐色	ナデ	ナズリ縁ナデ	○	○		○			
	458	F29247	37929	3	赤褐色	赤褐色	ナデ	ナズリ縁ナデ	○	○		○			
	459	F29247	37930	3	赤褐色	赤褐色	ナズリ縁ナデ	ナズリ縁ナデ	○	○		○			
	460	F29247	37931	3	赤褐色	赤褐色	ナズリ縁ナデ	ナズリ縁ナデ	○	○		○			
	461	F29247	37932	3	明赤褐色	12.0A+褐色	赤褐色ナデ	赤褐色ナデ	○	○		○			
186	462	F29247	37933	3	褐色	褐色	ナデ	ナデ	○	○		○			
	463	F29247	37934	3	褐色	褐色	ナズリ縁ナデ	ナズリ縁ナデ	○	○		○			
	464	F29247	37935	3	褐色	12.0A+赤褐色	赤褐色ナデ	ナズリ縁ナデ	○	○		○			
	465	F29247	37936	3	12.0A+赤褐色	赤褐色	赤褐色ナデ	赤褐色ナデ	○	○		○			
	466	F29247	37937	3	12.0A+褐色	赤褐色	赤褐色ナデ	赤褐色ナデ	○	○		○			
	467	F29247	37938	3	褐色	赤褐色	赤褐色ナデ	赤褐色ナデ	○	○		○			
	468	F29247	37939	3	12.0A+赤褐色	12.0A+褐色	ナズリ縁ナデ	ナズリ縁ナデ	○	○		○			
	469	F29247	37940	3	褐色	褐色	ナデ	ナデ	○	○		○			
	470	F29247	37941	3	12.0A+褐色	12.0A+褐色	ナデ	ナデ	○	○		○			
	471	F29247	37942	3	赤褐色	赤褐色	ナズリ縁ナデ	赤褐色ナデ	○	○		○			
187	472	F29247	37943	3	12.0A+褐色	12.0A+褐色	ナデ	ナデ	○	○		○			
	473	F29247	37944	3	12.0A+褐色	12.0A+褐色	ナズリ縁ナデ	ナズリ縁ナデ	○	○		○			
	474	F29247	37945	3	褐色	褐色	ナデ	ナデ	○	○		○			
	475	F29247	37946	3	褐色	褐色	ナズリ縁ナデ	ナズリ縁ナデ	○	○		○			
	476	F29247	37947	3	褐色	褐色	ナデ	ナデ	○	○		○			
	477	F29247	37948	3	褐色	褐色	ナズリ縁ナデ	ナズリ縁ナデ	○	○		○			
	478	F29247	37949	3	褐色	褐色	ナデ	ナデ	○	○		○			
	479	F29247	37950	3	褐色	褐色	ナズリ縁ナデ	ナズリ縁ナデ	○	○		○			
	480	F29247	37951	3	褐色	褐色	ナデ	ナデ	○	○		○			
	481	F29247	37952	3	褐色	褐色	ナズリ縁ナデ	ナズリ縁ナデ	○	○		○			
188	482	F29247	37953	3	12.0A+褐色	12.0A+褐色	赤褐色ナデ	赤褐色ナデ	○	○		○			
	483	F29247	37954	3	褐色	褐色	ナズリ縁ナデ	ナズリ縁ナデ	○	○		○			
	484	F29247	37955	3	褐色	褐色	ナデ	ナデ	○	○		○			
	485	F29247	37956	3	褐色	褐色	ナズリ縁ナデ	ナズリ縁ナデ	○	○		○			
	486	F29247	37957	3	褐色	褐色	ナデ	ナデ	○	○		○			
	487	F29247	37958	3	褐色	褐色	ナズリ縁ナデ	ナズリ縁ナデ	○	○		○			
	488	F29247	37959	3	褐色	褐色	ナズリ縁ナデ	ナズリ縁ナデ	○	○		○			
	489	F29247	37960	3	褐色	褐色	ナズリ縁ナデ	ナズリ縁ナデ	○	○		○			
	490	F29247	37961	3	褐色	褐色	ナズリ縁ナデ	ナズリ縁ナデ	○	○		○			
	491	F29247	37962	3	褐色	褐色	ナズリ縁ナデ	ナズリ縁ナデ	○	○		○			
189	492	F29247	37963	3	褐色	褐色	ナズリ縁ナデ	ナズリ縁ナデ	○	○		○			
	493	F29247	37964	3	褐色	褐色	ナズリ縁ナデ	ナズリ縁ナデ	○	○		○			
	494	F29247	37965	3	褐色	褐色	ナズリ縁ナデ	ナズリ縁ナデ	○	○		○			
	495	F29247	37966	3	褐色	褐色	ナズリ縁ナデ	ナズリ縁ナデ	○	○		○			
	496	F29247	37967	3	褐色	褐色	ナズリ縁ナデ	ナズリ縁ナデ	○	○		○			
	497	F29247	37968	3	褐色	褐色	ナズリ縁ナデ	ナズリ縁ナデ	○	○		○			
	498	F29247	37969	3	褐色	褐色	ナズリ縁ナデ	ナズリ縁ナデ	○	○		○			
	499	F29247	37970	3	褐色	褐色	ナズリ縁ナデ	ナズリ縁ナデ	○	○		○			
	500	F29247	37971	3	褐色	褐色	ナズリ縁ナデ	ナズリ縁ナデ	○	○		○			
	501	F29247	37972	3	褐色	褐色	ナズリ縁ナデ	ナズリ縁ナデ	○	○		○			
190	502	F29247	37973	3	褐色	褐色	ナズリ縁ナデ	ナズリ縁ナデ	○	○		○			
	503	F29247	37974	3	褐色	褐色	ナズリ縁ナデ	ナズリ縁ナデ	○	○		○			
	504	F29247	37975	3	褐色	褐色	ナズリ縁ナデ	ナズリ縁ナデ	○	○		○			
	505	F29247	37976	3	褐色	褐色	ナズリ縁ナデ	ナズリ縁ナデ	○	○		○			
	506	F29247	37977	3	褐色	褐色	ナズリ縁ナデ	ナズリ縁ナデ	○	○		○			
	507	F29247	37978	3	褐色	褐色	ナズリ縁ナデ	ナズリ縁ナデ	○	○		○			
	508	F29247	37979	3	褐色	褐色	ナズリ縁ナデ	ナズリ縁ナデ	○	○		○			
	509	F29247	37980	3	褐色	褐色	ナズリ縁ナデ	ナズリ縁ナデ	○	○		○			
	510	F29247	37981	3	褐色	褐色	ナズリ縁ナデ	ナズリ縁ナデ	○	○		○			
	511	F29247	37982	3	赤褐色	褐色	ナデ	ナデ	○	○		○			
191	512	F29249	14081	3	赤褐色	褐色	赤褐色ナデ	赤褐色ナデ	○	○		○			
	513	F29249	14082	3	赤褐色	褐色	赤褐色ナデ	赤褐色ナデ	○	○		○			
	514	F29249	14083	3	赤褐色	褐色	ナデ	ナデ	○	○		○			
	515	F29249	14084	3	褐色	褐色	赤褐色ナデ	赤褐色ナデ	○	○		○			
	516	F29249	14085	3	褐色	褐色	赤褐色ナデ	赤褐色ナデ	○	○		○			
	517	F29249	14086	3	明赤褐色	褐色	赤褐色ナデ	赤褐色ナデ	○	○		○			
	518	F29249	14087	3	12.0A+赤褐色	褐色	赤褐色ナデ	赤褐色ナデ	○	○		○			
	519	F29249	14088	3	褐色	褐色	ナデ	ナデ	○	○		○			
	520	F29249	14089	3	12.0A+赤褐色	赤褐色	赤褐色ナデ	赤褐色ナデ	○	○		○			
	521	F29249	14090	3	12.0A+褐色	褐色	ナデ	ナデ	○	○		○			
192	522	F29249	14091	3	褐色	褐色	ナデ	ナデ	○	○		○			
	523	F29249	14092	3	赤褐色	褐色	ナズリ縁ナデ	ナズリ縁ナデ	○	○		○			
	524	F29249	14093	3	赤褐色	褐色	ナズリ縁ナデ	ナズリ縁ナデ	○	○		○			
	525	F29249	14094	3	赤褐色	褐色	ナズリ縁ナデ	ナズリ縁ナデ	○	○		○			
	526	F29249	14095	3	褐色	褐色	赤褐色ナデ	赤褐色ナデ	○	○		○			
	527	F29249	14096	3	褐色	褐色	ナズリ縁ナデ	ナズリ縁ナデ	○	○		○			
	528	F29249	14097	3	褐色	褐色	ナデ	ナデ	○	○					



表 28 土器観察表 (12)

館名	遺跡番号	シフト別	取上番号	群	土 質				土 質				土 質				備考			
					外周	内周	外周	内周	外周	内周	外周	内周	外周	内周	外周	内周				
217			640	F91125	1168	3	黄褐色	黄褐色	ナデ・ミダキ	ナデ	○	○				○				
			641	F91125		3	褐色	褐色	ナデ	ナデ	○	○				○				
			642	F91125	1228	3	褐色	12.5%黄褐色	赤褐色ナデ	赤褐色ナデ	○	○	○	○			○			
218			643	F91125		4	褐色	褐色	ナデ・ミダキ	赤褐色ナデ	○	○				○				
			644	F91125		4	褐色	浅黄褐色	ナデ・ミダキ	赤褐色ナデ	○	○				○				
			645	F91125		4	褐色	褐色	ナデ	ナデ	○	○				○				
			646	F91125		5	褐色	褐色	ナデ	ナデ	○	○				○				
			647	F91125		5	褐色	褐色	ナデ	ナデ	○	○				○				
			648	F91125		5	褐色	褐色	赤褐色ナデ	赤褐色ナデ	○	○				○				
			649	F91125		7	褐色	褐色	ナデ	ナデ	○	○				○				
			650	F91125		7	12.5%黄褐色	黄褐色	ナデ	ナデ	○	○				○				
			651	F91125		7	12.5%黄褐色	褐色	ナデ	赤褐色ナデ	○	○				○				
			652	F91125		7	明赤褐色	褐色	赤褐色ナデ	赤褐色ナデ	○	○				○				
219			653	F91125		7	褐色	褐色	赤褐色ナデ	赤褐色ナデ	○	○				○				
			654	F91125		7	12.5%黄褐色	12.5%黄褐色	赤褐色ナデ	ナデ	○	○				○				
			655	F91125		7	褐色	12.5%黄褐色	ナデ	赤褐色ナデ	○	○				○				
			656	F91125		7	12.5%黄褐色	12.5%黄褐色	ナデ	赤褐色ナデ	○	○				○				
			220	溝5.55m(深溝16号)		657	F91125	5611 6292 6294	7	12.5%黄褐色	12.5%黄褐色	赤褐色ナデ	赤褐色ナデ	○	○				○	赤紋
						658	F91125		7	12.5%黄褐色	褐色	赤褐色ナデ	赤褐色ナデ	○	○				○	
						659	F91125	32546	7	12.5%黄褐色	褐色	赤褐色ナデ	赤褐色ナデ	○	○				○	
						660	F91125		7	12.5%黄褐色	黄褐色	ナデ	ナデ	○	○				○	
						661	F91125		8	褐色	褐色	赤褐色ナデ	赤褐色ナデ	○	○				○	
						662	F91125	1188	8	黄褐色	黄褐色	ナデ	ナデ	○	○				○	
663	F91125					8	褐色	褐色	ナデ	ナデ	○	○				○				
664	F91125					8	褐色	褐色	ナデ	ナデ	○	○				○				
665	F91125					8	黄褐色	黄褐色	ナデ	ナデ	○	○				○				
666	F91125					8	褐色	褐色	ナデ	ナデ	○	○				○				
221			667	F91125	91	8	浅黄褐色	浅黄褐色	ナデ	-	○	○				○				
			668	F91125	879	8	黄褐色	黄褐色	ナデ	ナデ	○	○				○				
			669	F91125		8	黄褐色	黄褐色	ナデ	ナデ	○	○				○				
			670	F91125		9	褐色	褐色	ナデ・ミダキ	ナデ	○	○				○				
			671	F91125		9	黄褐色	黄褐色	ナデ	ナデ	○	○				○				
			672	F91125		9	12.5%黄褐色	赤褐色	ナデ	ナデ	○	○				○				
			673	F91125		9	12.5%黄褐色	褐色	ナデ	ナデ・ミダキ	○	○				○				
			674	F91125		9	褐色	褐色	ナデ・ミダキ	ナデ	○	○				○				
			675	F91125		9	12.5%黄褐色	褐色	ナデ	赤褐色ナデ	○	○				○				
			676	F91125		9	褐色	褐色	ナデ	ナデ	○	○				○				

表29 石器観察表(1)

採回 番号	レイアウト 番号	出土区	遺構名	器種	分類	石材 I	石材 II	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	
14	20	B	19	竪穴状遺構1号	石核	黒曜石	IV	1.55	1.30	0.60	1.34	
	21	B	19	竪穴状遺構1号	二次加工剥片	頁岩	II	6.20	6.32	1.50	57.20	
	22	B	19	竪穴状遺構1号	スクレイパー	頁岩	II	4.20	6.90	1.20	40.44	
	40	B	18	竪穴状遺構2号	石鏃	黒曜石	IV	1.80	1.20	0.45	0.51	
	41	B	18	竪穴状遺構2号	石鏃	黒曜石	IV	1.10	1.10	0.40	0.29	
20	42	B	18	竪穴状遺構2号	竈南尖頭器	黒曜石	IV	3.40	2.10	0.80	3.04	
	43	B	18	竪穴状遺構2号	竈南尖頭器	黒曜石	IV	3.10	2.70	0.70	2.86	
	44	B	18	竪穴状遺構2号	竈南尖頭器	安山岩	IV	3.70	2.90	0.60	3.38	
	45	B	18	竪穴状遺構2号	石匙	IIb	フォルンフェルス		1.80	2.80	0.35	2.02
	46	B	18	竪穴状遺構2号	二次加工剥片	安山岩	IV	4.50	3.10	1.00	17.98	
	47	B	18	竪穴状遺構2号	磨礫石	III	砂岩		12.10	3.70	1.90	138.40
	48	B	18	竪穴状遺構2号	石皿	III	砂岩		36.60	25.20	12.60	12700.00
	21	1	B	19	土坑1号	石鏃	II	黒曜石	II	1.75	1.30	0.40
2		B	19	土坑1号	石皿	III	砂岩		12.50	7.90	6.90	640.00
55	45	D・E	29・30	竪穴状遺構5号	軽石製品	軽石		9.25	6.90	3.90	71.00	
73	76	C	37	集石3号	磨製石斧	I	安山岩	IIIa	8.30	7.10	4.90	357.50
	77	C	37	集石3号	砥石	IIb	砂岩		6.80	5.30	3.10	147.41
	78	B	35	集石9号	磨石	IIa	安山岩	IV	11.40	9.60	4.45	725.00
	79	B	34	集石14号	二次加工剥片	III	安山岩	IIa	4.60	3.40	1.10	13.32
	80	B	34	集石14号	石核	IIb	黒曜石	III	2.90	3.60	2.60	25.26
74	81	B	34	集石14号	磨石	Ia	砂岩		6.70	4.95	3.90	170.59
	82	E	31	集石24号	磨石	IIb	安山岩	IV	13.00	10.80	4.80	1020.00
	83	E	30	集石31号	磨製石斧	I	安山岩	IV	11.40	5.80	2.00	248.00
	84	E	30	集石31号	磨製石斧	II	頁岩	III	11.30	6.35	2.18	216.72
	85	E	30	集石31号	磨石	Ia	砂岩		7.00	6.10	4.50	249.92
75	86	E	30	集石31号	石皿	III	砂岩		27.85	21.50	6.70	4800.00
	87	E	30	集石31号	砥石	III	砂岩		19.75	14.50	3.90	1420.00
	88	E	30	集石31号	砥石	III	砂岩		26.70	18.10	9.00	4100.00
	89	D	27	集石39号	石皿	III	安山岩	IV	14.20	16.55	9.00	2700.00
	90	E	27	集石42号	砥石	III	砂岩		10.45	5.50	5.90	475.00
76	91	E	27	集石42号	砥石	III	砂岩		26.00	15.20	9.20	4100.00
	92	E	27	集石44号	砥石	III	砂岩		27.10	19.00	5.90	3320.00
	93	E	27	集石45号	台石	III	安山岩	IV	13.30	16.80	6.20	1780.00
	479	B	35	土坑17号	磨石	Ib	安山岩	IV	7.20	4.95	4.60	208.30
	480	B	34	土坑20号	砥石	III	頁岩	III	6.40	7.20	2.95	1608.00
117	481	B	34	土坑21号	磨製石斧	I	安山岩	IV	6.50	4.80	2.80	111.70
	482	B	34	土坑21号	砥石	III	安山岩	IV	9.30	6.00	3.90	339.90
	483	B	34	土坑21号	石皿	III	安山岩	IV	34.70	32.30	8.80	17100.00
	484	D	33	土坑48号	二次加工剥片	III	黒曜石	II	2.30	1.30	0.40	1.16
	485	A'	30	土坑73号	スクレイパー	V	頁岩	II	1.80	2.45	0.40	1.89
	486	A'	30	土坑73号	打製石斧	V	頁岩	II	14.70	4.60	1.60	97.55
	487	A'	30	土坑73号	磨礫石	Ib	安山岩	IV	9.80	8.90	5.00	643.00
	488	A	30	土坑76号	擦切石器	III	砂岩		2.50	3.90	0.40	6.37
	489	E	26	土坑145号	磨製石斧	I	砂岩		7.00	6.10	2.90	181.40
	490	E	26	土坑145号	磨礫石	III	砂岩		9.50	4.30	2.60	180.00
118	491	E	26	土坑145号	磨礫石	Ib	砂岩		10.30	4.10	2.60	200.00
	492	A	25	土坑157号	磨石	IIa	砂岩		13.40	12.05	5.85	1410.00
	493	A	25	土坑161号	スクレイパー	II	頁岩	II	6.60	11.10	2.40	123.01
	494	B	24	土坑198号	磨礫石	Ib	砂岩		7.40	4.95	3.25	123.16
	495	A	23	土坑207号	磨礫石	IIb	砂岩		10.40	8.60	4.70	645.00
119	496	B	23	土坑217号	磨礫石	Ib	安山岩	IV	5.70	5.30	4.05	184.46
	497	B	23	土坑217号	磨礫石	III	頁岩	II	8.60	10.10	2.10	206.36
	498	A	21	土坑245号	打製石斧	V	安山岩	IV	7.40	10.10	3.30	249.20
	499	A	21	土坑245号	スクレイパー	III	頁岩	III	4.30	7.50	1.40	34.69
	500	B	20	土坑271号	磨礫石	IIb	安山岩	IV	6.70	9.60	3.60	352.80
120	501	A	19	土坑276号	石皿	III	安山岩	IV	9.15	14.20	3.00	480.00
	502	B	18	土坑286号	挟入石器	III	安山岩	IV	5.40	3.00	1.20	20.00
	9	C	34	ビット68号	磨製石斧	III	頁岩	III	7.80	1.90	1.10	29.14
122	10	A'	30	ビット114号	磨石	IIb	安山岩	IV	9.70	8.90	5.00	643.00
	11	A	28	ビット132号	砥石	IIb	砂岩		8.30	4.70	3.20	186.20
	12	A	29	ビット272号	石皿	III	安山岩	IV	16.25	12.00	5.50	1510.00

表30 石器観察表(2)

採回 番号	レイアウト 番号	出土区	遺構名	器種	分類	石材 I	石材 II	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	
122	13	A	22	ビット308号	石核	黒曜石	IV	2.20	3.50	1.60	12.45	
	14	A'	21	ビット318号	敲石	砂岩		10.70	3.60	2.20	98.35	
	15	A	21	ビット321号	磨製石斧	安山岩	I a	11.60	6.30	2.70	253.30	
	16	A	20	ビット345号	磨石	砂岩		12.80	6.50	2.65	210.90	
130	1	D	33	石皿集積	石皿	安山岩	IV	37.50	32.90	9.80	19800.00	
	2	D	33	石皿集積	石皿	砂岩		35.10	33.80	13.70	26400.00	
	3	D	33	石皿集積	石皿	安山岩	IV	42.10	41.30	11.30	30500.00	
137	63	B	31	落ち込み状遺構4号	断歯縁石器	安山岩	I a	2.10	1.10	0.25	0.55	
	64	B	31	落ち込み状遺構4号	石匙	頁岩	III	4.28	3.60	0.60	8.76	
	65	B	31	落ち込み状遺構4号	石匙	頁岩	III	4.60	4.40	1.23	17.72	
	66	B	31	落ち込み状遺構4号	スクレイパー	頁岩	III	2.30	4.30	1.10	9.38	
	67	B	31	落ち込み状遺構4号	二次加工剥片	頁岩	II	2.70	2.00	0.80	3.72	
	68	B	31	落ち込み状遺構4号	二次加工剥片	黒曜石	IV	2.50	1.70	0.90	3.32	
	69	B	31	落ち込み状遺構4号	二次加工剥片	頁岩	III	3.50	3.10	0.70	7.95	
	70	B	31	落ち込み状遺構4号	二次加工剥片	頁岩	III	2.70	2.90	0.90	7.25	
	71	B	31	落ち込み状遺構4号	二次加工剥片	頁岩	II	5.80	2.90	1.60	25.32	
	72	B	31	落ち込み状遺構4号	二次加工剥片	安山岩	II	5.40	3.90	1.30	29.22	
138	73	B	31	落ち込み状遺構4号	二次加工剥片	頁岩	II	3.80	3.50	1.15	19.43	
	74	B	31	落ち込み状遺構4号	石錐	頁岩	III	4.75	3.50	0.80	0.55	
	75	B	31	落ち込み状遺構4号	石錐	頁岩	II	3.30	1.98	1.07	6.82	
	76	B	31	落ち込み状遺構4号	楔形石器	黒曜石	IV	1.85	0.95	0.45	0.78	
	77	B	31	落ち込み状遺構4号	擦切石器	砂岩		4.10	5.30	0.55	22.01	
	78	B	31	落ち込み状遺構4号	擦切石器	砂岩		8.85	6.85	0.80	56.00	
	79	B	31	落ち込み状遺構4号	磨製石斧	頁岩	V	7.30	4.00	2.00	91.55	
	80	B	31	落ち込み状遺構4号	磨製石斧	頁岩	V	1.05	2.05	0.30	0.86	
	81	B	31	落ち込み状遺構4号	磨製石斧	頁岩	III	10.50	2.10	1.40	50.52	
	82	B	31	落ち込み状遺構4号	磨製石	III b	安山岩	IV	10.90	9.50	4.60	837.20
139	83	B	31	落ち込み状遺構4号	磨製石	III b	安山岩	IV	11.20	9.00	5.50	752.80
	84	B	31	落ち込み状遺構4号	磨製石	II b	凝灰岩		9.90	4.40	3.40	477.50
	85	B	31	落ち込み状遺構4号	磨製石	III	砂岩		10.60	6.60	4.30	389.90
	86	B	31	落ち込み状遺構4号	磨製石	III	砂岩		10.70	4.70	3.70	233.00
	87	B	31	落ち込み状遺構4号	磨製石	I b	安山岩	II	6.80	6.66	5.15	324.81
	88	B	31	落ち込み状遺構4号	敲石	砂岩		5.90	5.20	4.90	201.86	
	245	A	31	落ち込み状遺構5号	二次加工剥片	黒曜石	IV	1.80	2.65	0.70	2.56	
	246	A	31	落ち込み状遺構5号	二次加工剥片	黒曜石	IV	2.40	1.60	0.80	2.72	
	247	A	31	落ち込み状遺構5号	二次加工剥片	頁岩	II	6.15	6.10	2.45	104.25	
	248	A	31	落ち込み状遺構5号	擦切石器	砂岩		3.12	3.42	0.60	8.71	
164	249	A	31	落ち込み状遺構5号	擦切石器	砂岩		4.50	8.10	0.50	27.18	
	250	A	31	落ち込み状遺構5号	擦切石器	砂岩		3.60	6.60	0.35	11.53	
	251	A	31	落ち込み状遺構5号	磨製石斧	I	頁岩	V	9.50	7.50	3.50	270.20
	252	A	31	落ち込み状遺構5号	磨製石斧	I	砂岩		7.20	4.40	3.00	113.60
	253	A	31	落ち込み状遺構5号	磨製石斧	I	砂岩		8.10	4.30	2.20	130.80
	254	A	31	落ち込み状遺構5号	磨製石斧	I	頁岩		11.70	6.50	3.30	395.60
	255	A	31	落ち込み状遺構5号	磨製石斧	I	砂岩		11.60	6.50	3.00	357.60
	256	A	31	落ち込み状遺構5号	磨製石斧	II	頁岩	II	7.30	6.60	1.00	69.00
	257	A	31	落ち込み状遺構5号	磨製石斧	III	頁岩	II	15.30	3.50	1.30	86.20
	258	A	31	落ち込み状遺構5号	磨製石	II	めのう系		5.20	5.60	3.60	108.65
165	259	A	31	落ち込み状遺構5号	磨製石	I b	安山岩	IV	6.10	4.70	4.70	207.20
	260	A	31	落ち込み状遺構5号	磨製石	I b	安山岩	IV	5.90	5.60	5.60	251.60
	261	A	31	落ち込み状遺構5号	磨製石	I b	凝灰岩		2.60	5.70	4.90	93.60
	262	A	31	落ち込み状遺構5号	磨製石	I b	安山岩	IV	7.00	5.60	5.45	243.60
	263	A	31	落ち込み状遺構5号	磨製石	II b	安山岩	IV	11.30	11.00	5.60	1030.00
	264	A	31	落ち込み状遺構5号	磨製石	III b	安山岩	IV	7.00	8.20	3.70	299.10
	265	A	31	落ち込み状遺構5号	磨製石	III b	安山岩	IV	11.30	9.10	6.35	980.00
	266	A	30	落ち込み状遺構5号	磨製石	II b	砂岩		12.00	12.90	5.10	1307.70
	267	A	31	落ち込み状遺構5号	磨製石	II b	砂岩		9.30	6.90	3.10	309.30
	268	A	31	落ち込み状遺構5号	磨製石	II b	安山岩	IV	10.70	10.20	4.60	695.00
167	269	A	31	落ち込み状遺構5号	磨製石	II b	安山岩	IV	5.30	9.80	4.60	369.00
	270	A	31	落ち込み状遺構5号	磨製石	III	砂岩		9.40	4.80	2.60	183.30
	271	A	31	落ち込み状遺構5号	磨製石	III	砂岩		11.40	3.70	2.70	172.30



表31 石器観察表(3)

採回 番号	レイアウト 番号	出土区	遺構名	器種	分類	石材 I	石材 II	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)
167	272	A	31	落ち込み状遺構5号	磨礫石	III	砂岩	11.90	8.10	3.40	42000
	273	A	31	落ち込み状遺構5号	磨礫石	III	砂岩	10.50	4.50	2.50	171.40
170	303	A'	30	落ち込み状遺構6号	二次加工潤片		砂岩	5.50	8.30	2.10	79.00
	304	A'	30	落ち込み状遺構6号	磨礫石	I b	安山岩	5.95	5.10	4.60	193.93
173	327	A	29	落ち込み状遺構8号	磨石	III	砂岩	10.20	9.80	2.00	275.28
	381	A'	29	落ち込み状遺構9号	擦切石器		砂岩	4.52	7.70	0.40	201.3
178	382	A'	29	落ち込み状遺構9号	磨製石斧	I	安山岩	11.20	6.50	3.30	359.50
	383	A	28	落ち込み状遺構9号	磨製石斧	I	頁岩	8.09	5.00	1.90	121.42
	384	A	29	落ち込み状遺構9号	磨製石斧	I	頁岩	7.80	3.60	1.70	52.16
	385	A'	29	落ち込み状遺構9号	磨製石斧	I	頁岩	9.60	4.40	3.40	161.60
	386	A'	29	落ち込み状遺構9号	磨製石斧	II	頁岩	8.90	4.90	1.20	70.40
	387	A'	29	落ち込み状遺構9号	磨礫石	II b	砂岩	12.00	11.00	4.50	992.60
	388	A'	29	落ち込み状遺構9号	磨礫石	II b	砂岩	12.10	9.20	4.30	705.30
179	389	A'	29	落ち込み状遺構9号	石皿	II a	安山岩	8.90	7.90	1.60	191.80
	390	A'	29	落ち込み状遺構9号	石皿	II a	砂岩	10.10	9.00	3.00	300.70
	411	A	27	落ち込み状遺構11号	磨製石斧	I	頁岩	4.40	2.60	2.00	10.71
180	474	B	26	落ち込み状遺構12号	スクレイパー	II	安山岩	6.10	14.20	1.80	144.31
	475	B	27	落ち込み状遺構12号	磨製石斧	I	砂岩	9.70	5.30	2.30	173.20
	476	B	27	落ち込み状遺構12号	磨製石斧	II	頁岩	5.50	4.60	1.40	45.50
	477	B	26	落ち込み状遺構12号	磨製石斧	II	蛇紋岩	7.00	4.10	1.20	46.13
	478	B	27	落ち込み状遺構12号	磨製石斧	III	頁岩	7.30	1.60	1.70	28.54
	479	B	27	落ち込み状遺構12号	打製石斧	III	頁岩	14.10	7.10	2.20	143.35
	480	B	27	落ち込み状遺構12号	磨礫石	II b	安山岩	11.90	9.00	4.00	664.10
188	481	B	27	落ち込み状遺構12号	磨礫石	II b	砂岩	10.90	8.75	5.60	750.20
	482	B	27	落ち込み状遺構12号	磨礫石	II b	砂岩	13.20	10.90	5.20	1219.50
	483	B	27	落ち込み状遺構12号	磨礫石	III	砂岩	11.40	6.70	3.90	395.90
	484	B	26	落ち込み状遺構12号	磨礫石	III	砂岩	8.60	3.60	2.70	154.00
189	491	C	25	落ち込み状遺構13号	磨礫石	I b	砂岩	5.75	5.68	3.90	165.40
	492	C	25	落ち込み状遺構13号	磨礫石	I b	砂岩	5.48	5.59	3.85	104.02
	579	A・B	23	落ち込み状遺構14号	二次加工潤片		頁岩	11.00	4.30	1.70	70.35
202	580	A	23	落ち込み状遺構14号	磨製石斧	III	頁岩	7.30	1.40	1.20	17.59
	581	A	23	落ち込み状遺構14号	磨礫石	III	砂岩	7.85	4.80	3.10	130.30
	582	A・B	23	落ち込み状遺構14号	磨礫石	I b	砂岩	4.90	3.00	2.80	49.78
	583	A・B	23	落ち込み状遺構14号	磨礫石	II b	砂岩	13.15	11.20	5.30	1160.00
	584	A	23	落ち込み状遺構14号	磨礫石	II b	砂岩	12.10	9.50	4.50	867.90
203	585	A・B	23	落ち込み状遺構14号	石皿		砂岩	5.10	4.10	1.75	42.84
	586	A・B	23	落ち込み状遺構14号	砥石		砂岩	11.10	21.70	8.20	2500.00
	587	A・B	23	落ち込み状遺構14号	軽石製品		軽石	12.70	9.10	2.90	51.01
205	605	A・B	20・21	落ち込み状遺構15号	砥石	I b	安山岩	8.00	6.70	3.70	263.30
	606	A・B	20・21	落ち込み状遺構15号	磨礫石	II b	安山岩	10.60	9.15	4.00	536.70
222	677	B	18	落ち込み状遺構16号	蘆南尖頭器		安山岩	5.00	3.30	0.65	7.50
	678	B	18	落ち込み状遺構16号	擦切石器		砂岩	4.30	4.33	0.50	13.86
	679	B	18	落ち込み状遺構16号	磨製石斧	I	砂岩	8.20	4.60	3.30	133.10
	680	B	18	落ち込み状遺構16号	磨製石斧	I	砂岩	6.20	4.20	3.50	104.85
	681	B	18	落ち込み状遺構16号	磨製石斧	I	砂岩	5.40	4.30	3.00	96.15
	682	B	18	落ち込み状遺構16号	磨製石斧	II	頁岩	7.80	3.70	0.90	39.86
	683	B	18	落ち込み状遺構16号	磨礫石	II b	安山岩	9.20	8.70	5.40	672.30
223	684	B	18	落ち込み状遺構16号	磨礫石	II b	安山岩	10.50	5.80	5.20	404.90
	685	B	18	落ち込み状遺構16号	磨礫石	II b	砂岩	12.10	8.20	3.10	423.10
	686	B	18	落ち込み状遺構16号	磨礫石	III	砂岩	12.60	5.70	2.70	207.50
	687	B	18	落ち込み状遺構16号	磨礫石	III	砂岩	10.40	4.90	3.90	215.70
	688	B	18	落ち込み状遺構16号	磨礫石	III	頁岩	10.30	2.80	2.60	100.25

---

圖 版

---





① 竪穴状遺構2号埋土状況 ② 竪穴状遺構3号検出状況 ③ 竪穴状遺構4号検出状況 ④ 竪穴状遺構4号埋土状況  
⑤ 集石1号検出状況 ⑥ 集石4号検出状況 ⑦ 集石5号検出状況 ⑧ 集石9号検出状況

縄文時代中期中葉から後期遺構



⑨集石10号検出状況 ⑩集石11号検出状況 ⑪集石12号検出状況 ⑫集石14号検出状況  
 ⑬集石15号検出状況 ⑭集石17号検出状況 ⑮集石19号検出状況 ⑯集石22号検出状況

縄文時代中期後葉から後期遺構 (1)



⑰集石24号検出状況 ⑱集石24号 2段目検出状況 ⑲集石25号検出状況 ⑳集石26号検出状況  
 ㉑集石27号検出状況 ㉒集石28号検出状況 ㉓集石28号 2段目検出状況 ㉔集石29号検出状況

縄文時代中期後葉から後期遺構 (2)



25



26



27



28



29



30



31



32

㊸集石30号検出状況   ㊸集石31号検出状況   ㊸集石33号検出状況   ㊸集石34号検出状況  
 ㊸集石36号検出状況   ㊸集石38号検出状況   ㊸集石40号検出状況   ㊸集石42号検出状況  
 縄文時代中期後葉から後期遺構 (3)



⑬集石43号検出状況 ⑭集石44号検出状況 ⑮集石44号2段目検出状況 ⑯集石45号検出状況  
 ⑰集石46号検出状況 ⑱集石54号検出状況 ⑲土坑3号完掘状況 ⑳土坑20号内土器出土状況

縄文時代中期後葉から後期遺構 (4)





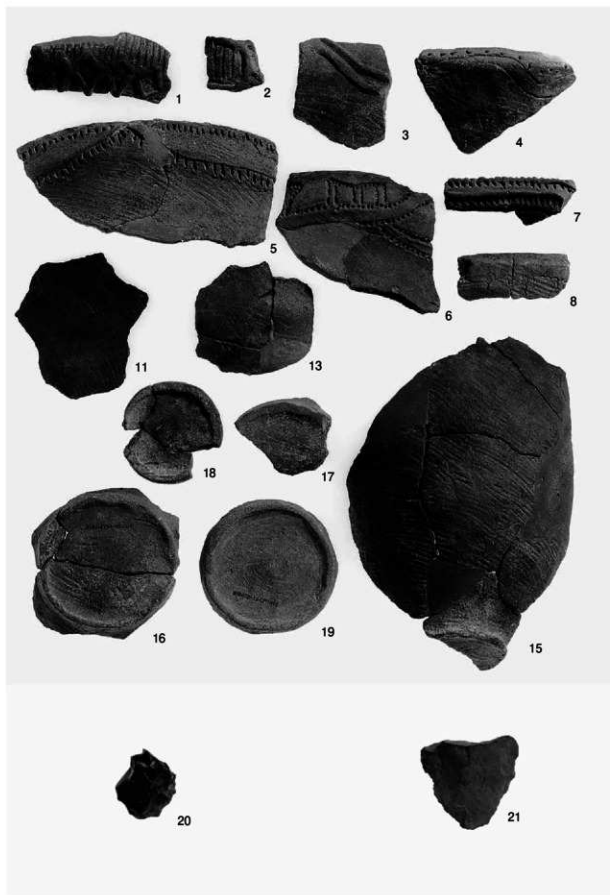
④土坑42号埋土状況 ②土坑84号・83号検出状況 ④土坑113号検出状況 ④土坑157号埋土状況  
 ④焼土1号検出状況 ⑥埋設土器1号検出状況 ④埋設土器2号検出状況 ⑥埋設土器3号検出状況

縄文時代中期後葉から後期遺構 (5)

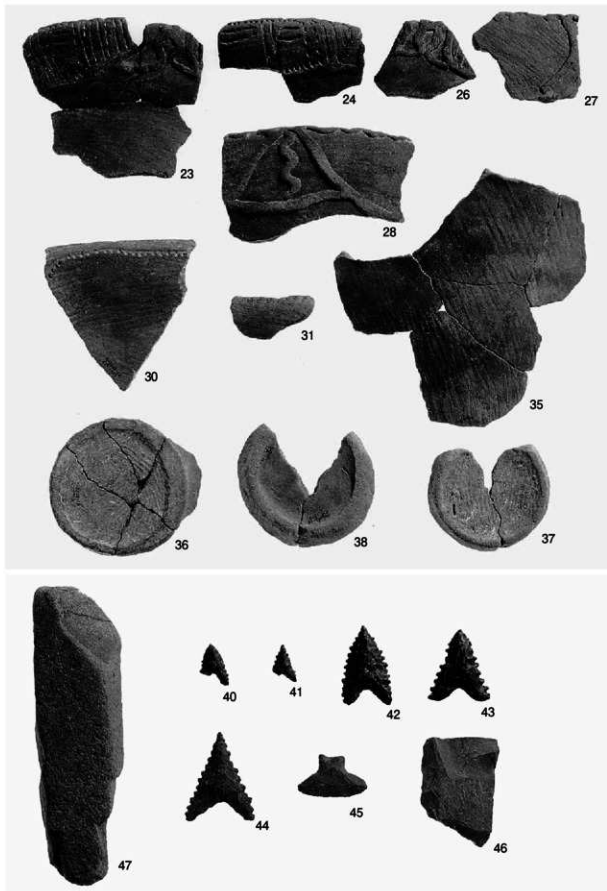


㊸埋設土器4号出土状況    ㊹埋設土器5号出土状況    ㊺石皿集積検出状況    ㊻落ち込み状遺構2号検出状況  
 ㊼落ち込み状遺構2号埋土状況    ㊽A-11~17区土層    ㊾A-17~20区土層    ㊿A'-28・29区土層

縄文時代中期後葉から後期遺構(6)及び土層断面



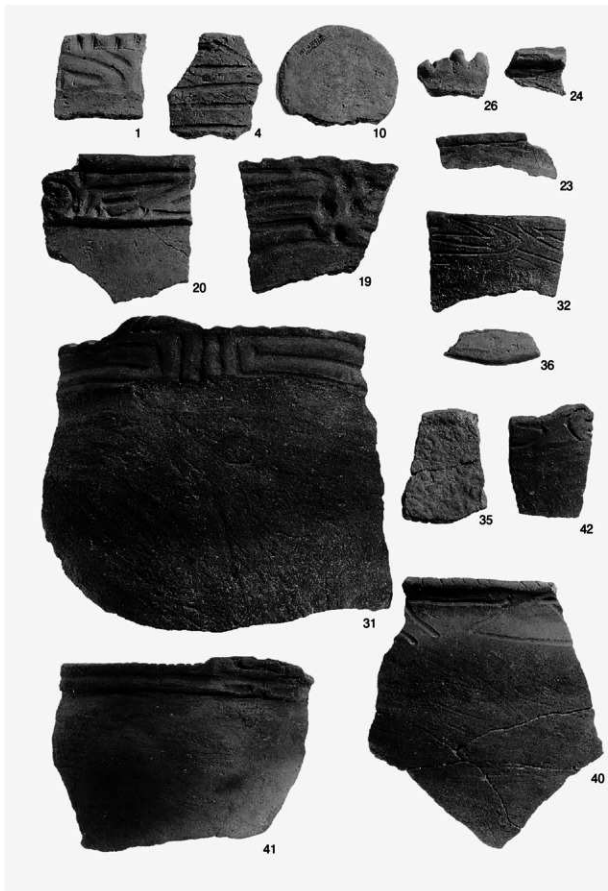
豎穴狀遺構 1 号内出土遺物



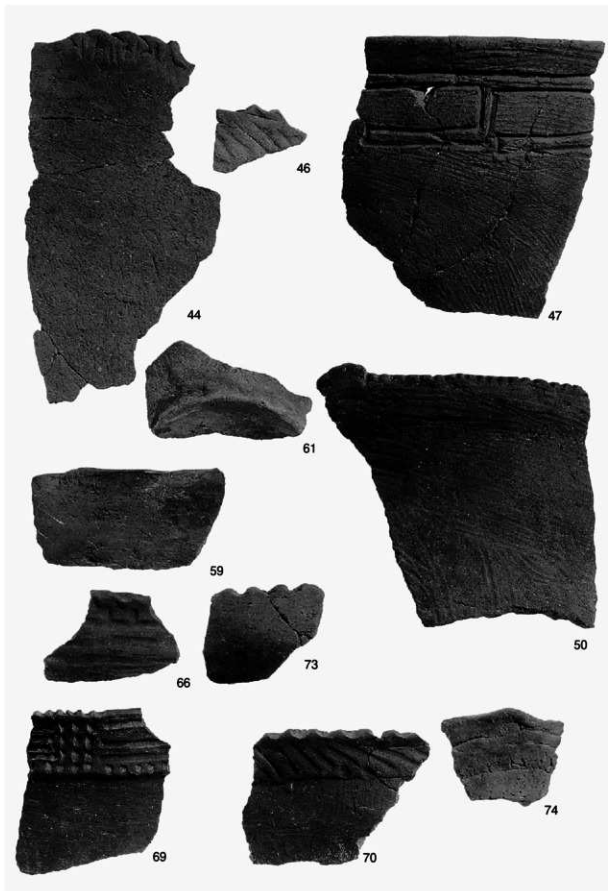
豎穴状遺構 2号内出土遺物



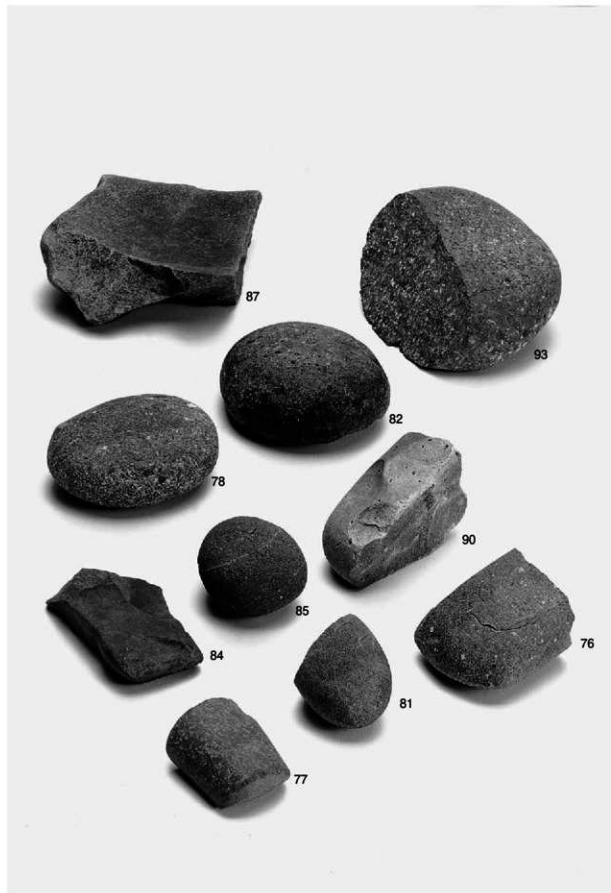
整穴伏遺構3号・5号内出土遺物



集石内出土遺物 (1)

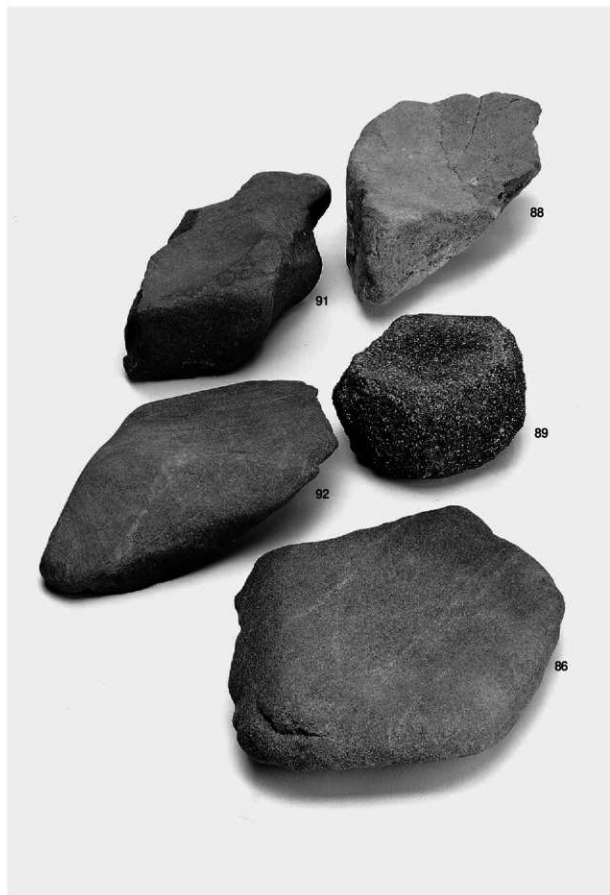


集石内出土遺物（2）

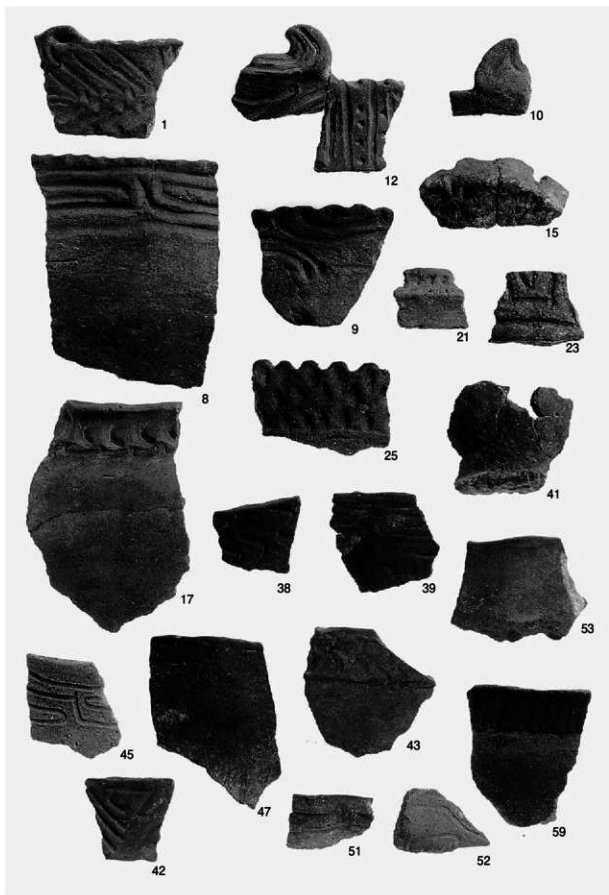


集石内出土遺物 (3)

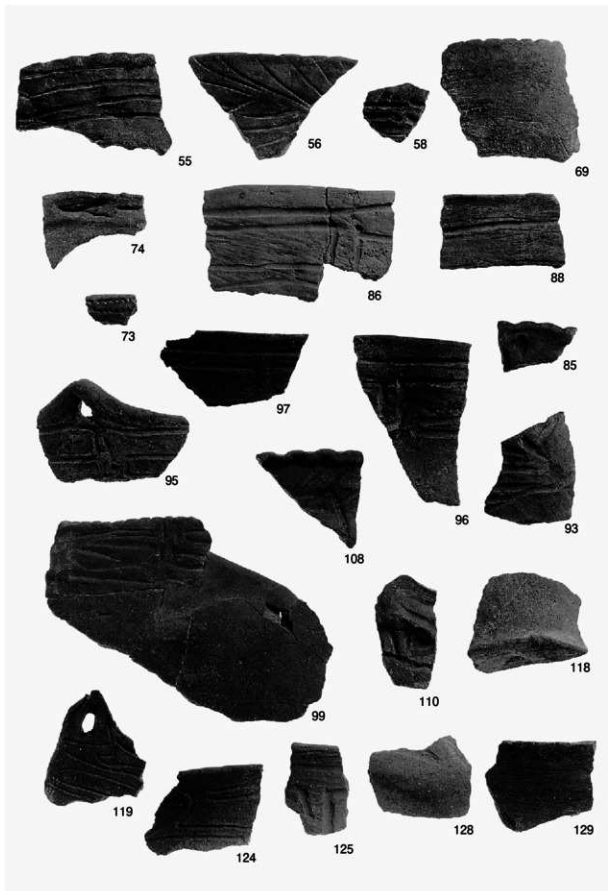




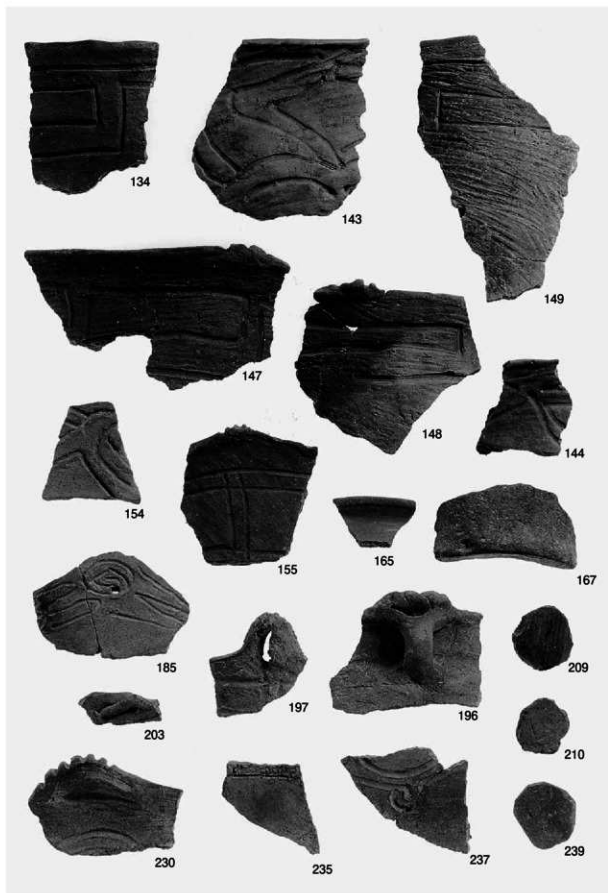
集石内出土遺物（4）



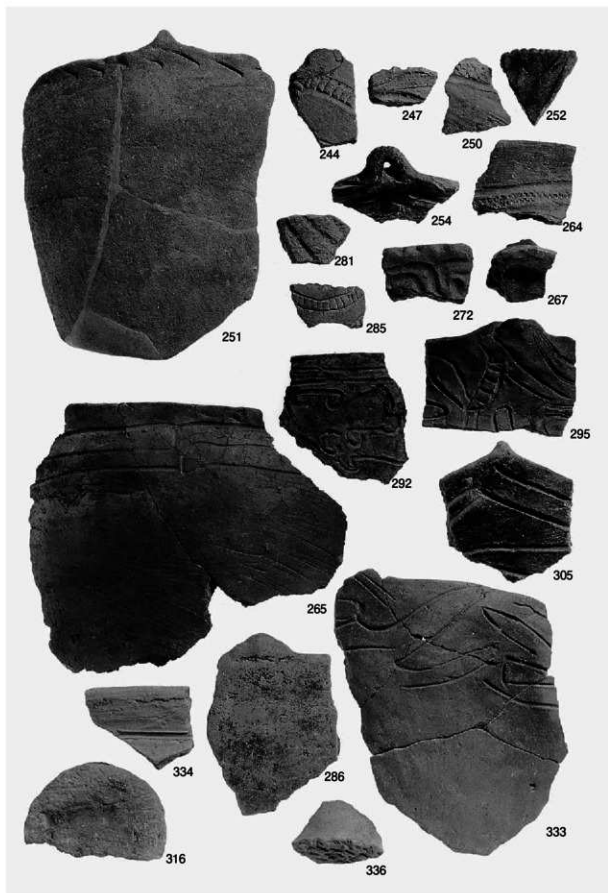
土坑内出土遺物 (1)



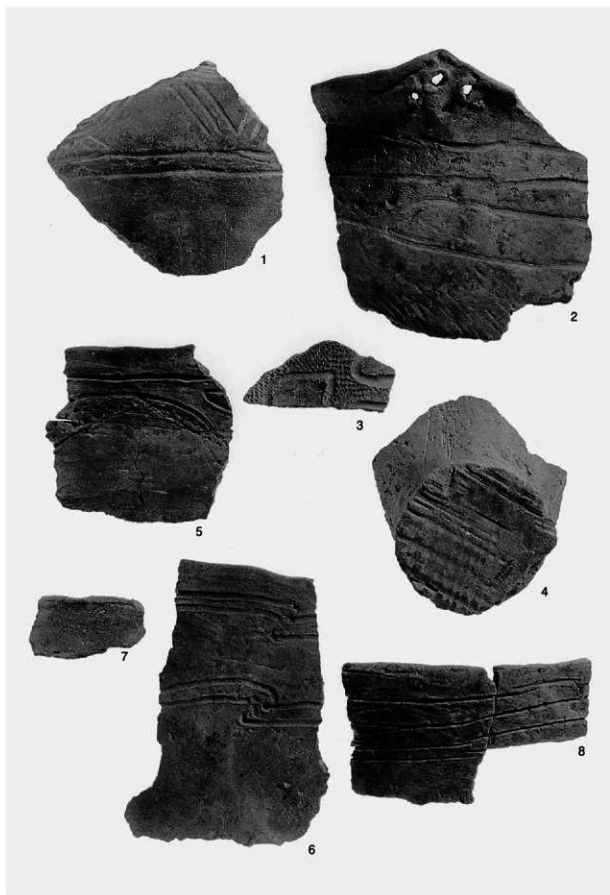
土坑内出土遺物（2）



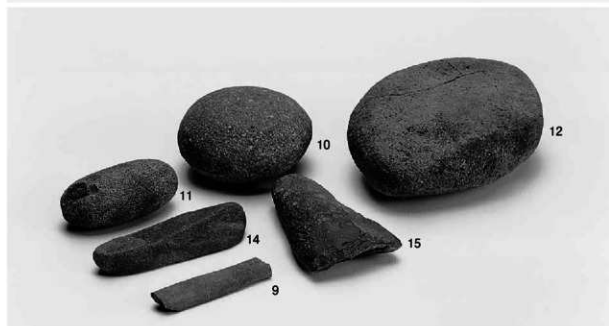
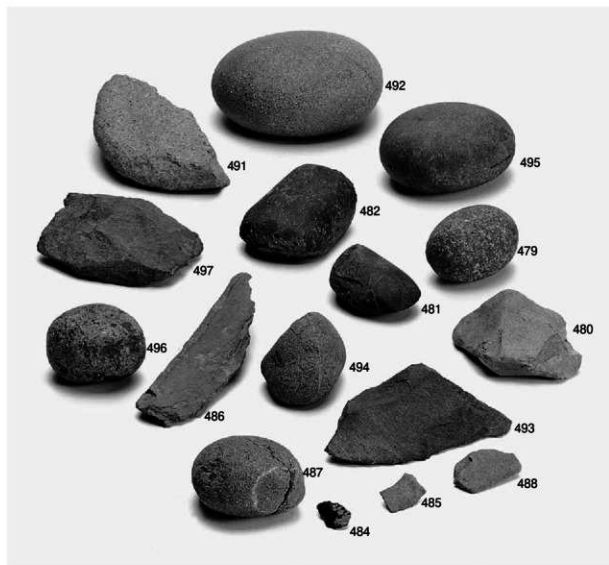
土坑内出土遺物 (3)



土坑内出土遺物 (4)



ピット内出土遺物



土坑・ピット内出土遺物



48



65



1



2



3



4

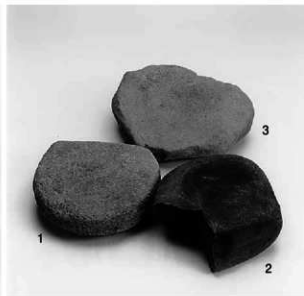
48 竪穴状遺構2号内出土  
3 埋設土器3号

65 集石54号内出土  
4 埋設土器4号

1 埋設土器1号 2 埋設土器2号

縄文時代中期から後期遺構内出土遺物





5 埋設土器5号 1・2・3 石皿集積 30 落ち込み状遺構4号内出土 95 落ち込み状遺構5号内出土  
112 落ち込み状遺構5号内出土 129 落ち込み状遺構5号内出土

縄文時代中期後葉から後期遺構内出土遺物(1)



130



131



132



133



145



150

130 落ち込み状遺構5号内出土 131 落ち込み状遺構5号内出土 132 落ち込み状遺構5号内出土  
133 落ち込み状遺構5号内出土 145 落ち込み状遺構5号内出土 150 落ち込み状遺構5号内出土

縄文時代中期後葉から後期遺構内出土遺物(2)



160



174



190



215



220



221

160 落ち込み状遺構5号内出土 174 落ち込み状遺構5号内出土 190 落ち込み状遺構5号内出土  
215 落ち込み状遺構5号内出土 220 落ち込み状遺構5号内出土 221 落ち込み状遺構5号内出土

縄文時代中期後葉から後期遺構内出土遺物(3)



223 落ち込み状遺構5号内出土    429 落ち込み状遺構12号内出土    437 落ち込み状遺構12号内出土  
452 落ち込み状遺構12号内出土    486 落ち込み状遺構13号内出土    493 落ち込み状遺構14号内出土

縄文時代中期後葉から後期遺構内出土遺物（4）



561



611



612



613



623



625

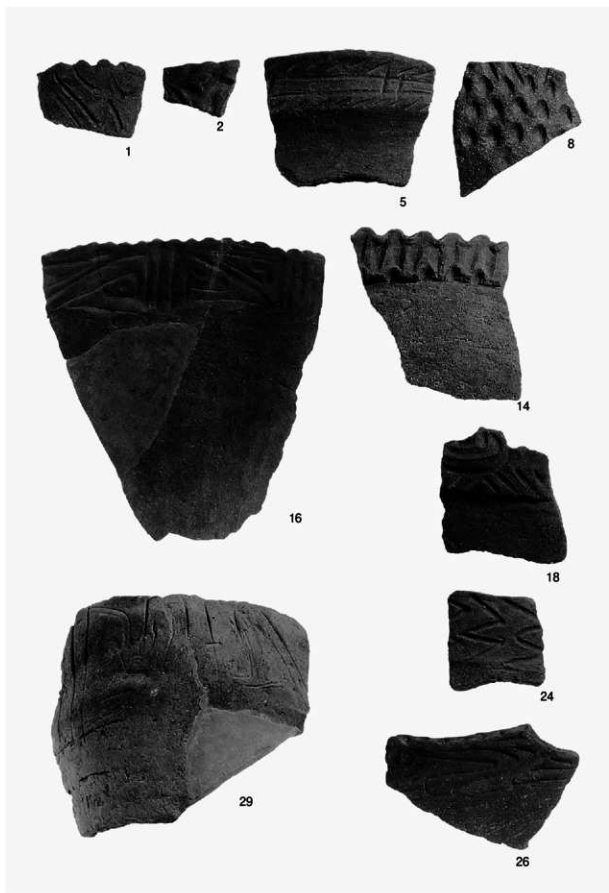
561 落ち込み状遺構14号内出土 611 落ち込み状遺構16号内出土 612 落ち込み状遺構16号内出土  
613 落ち込み状遺構16号内出土 623 落ち込み状遺構16号内出土 625 落ち込み状遺構16号内出土

縄文時代中期後葉から後期遺構内出土遺物 (5)

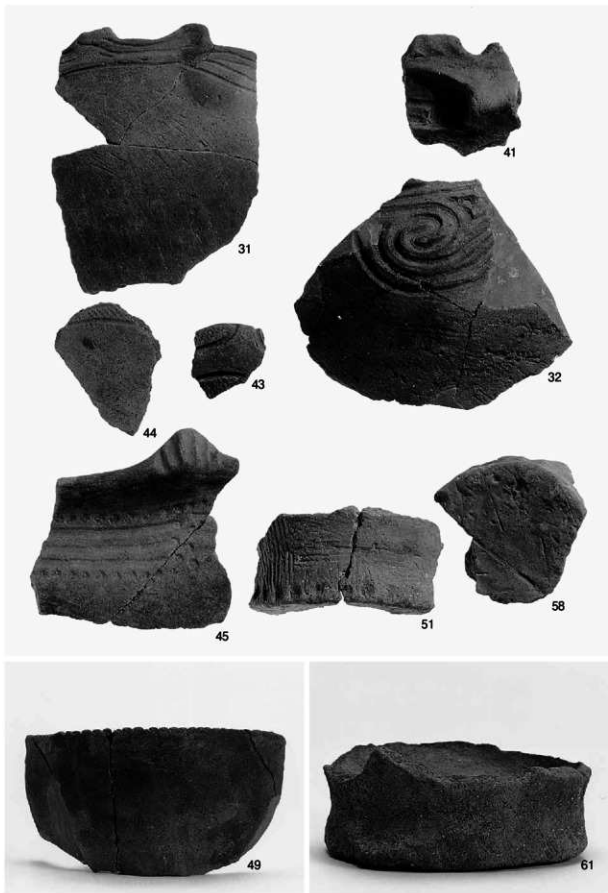


628 落ち込み状遺構16号内出土 629 落ち込み状遺構16号内出土 637 落ち込み状遺構16号内出土  
642 落ち込み状遺構16号内出土 657 落ち込み状遺構16号内出土 661 落ち込み状遺構16号内出土

縄文時代中期後葉から後期遺構内出土遺物 (6)

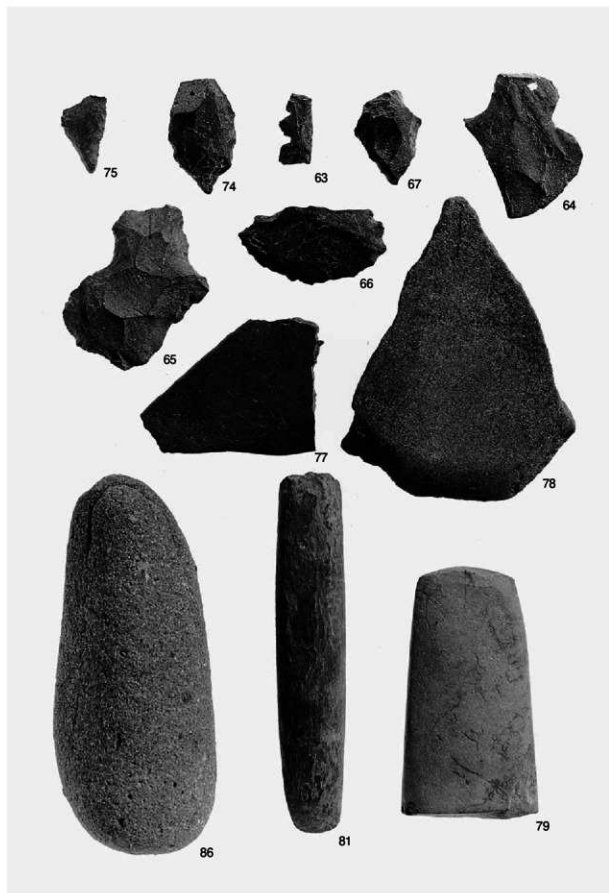


落ち込み状遺構 1号・4号内出土遺物

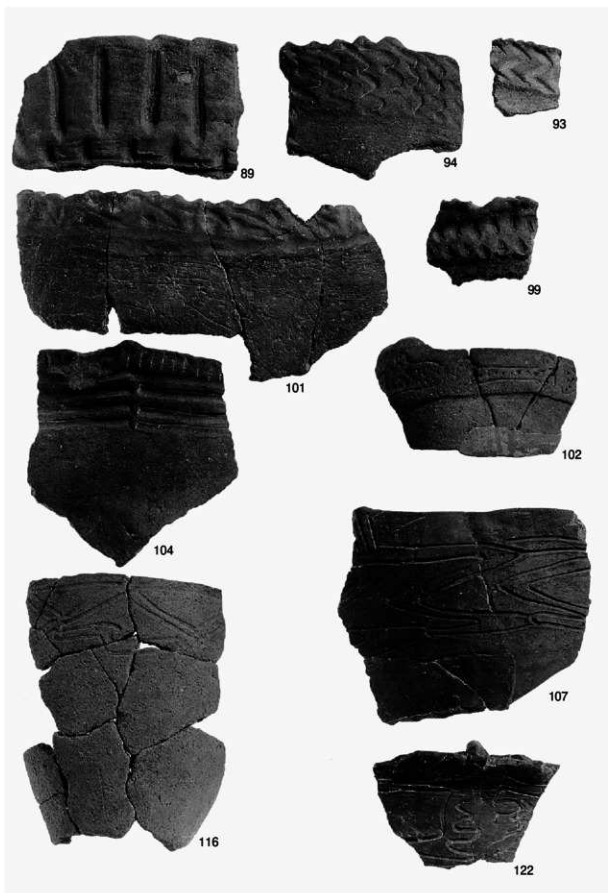


落ち込み状遺構4号内出土遺物（1）

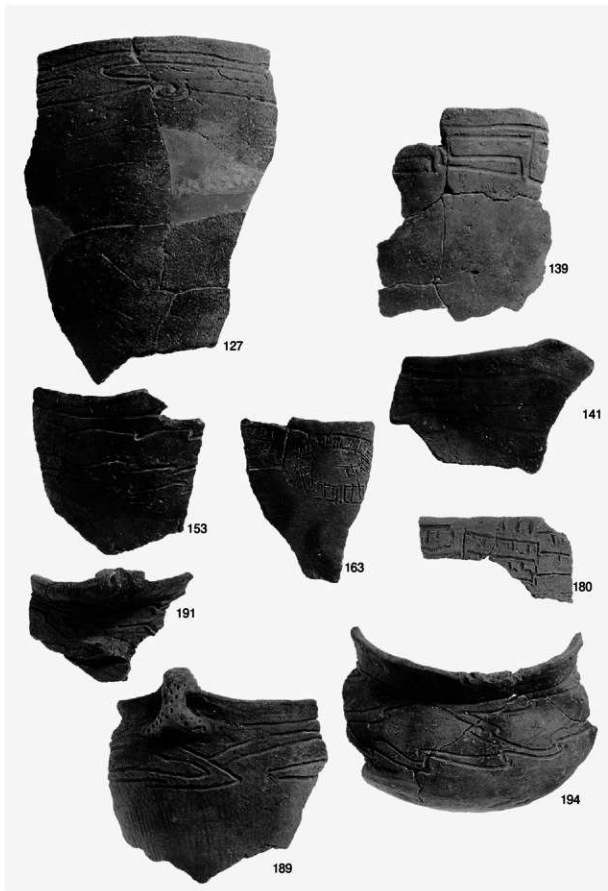




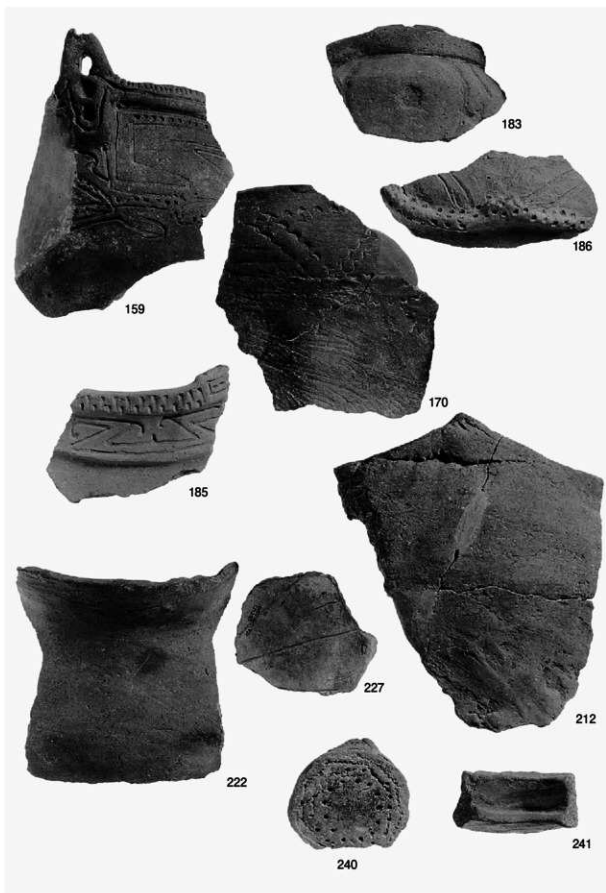
落ち込み状遺構4号内出土遺物(2)



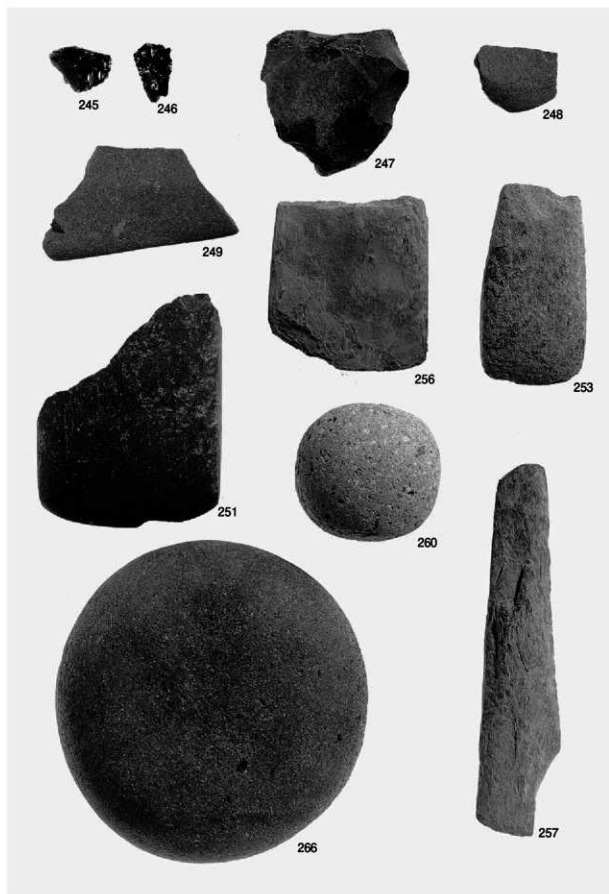
落ち込み状遺構5号内出土遺物(1)



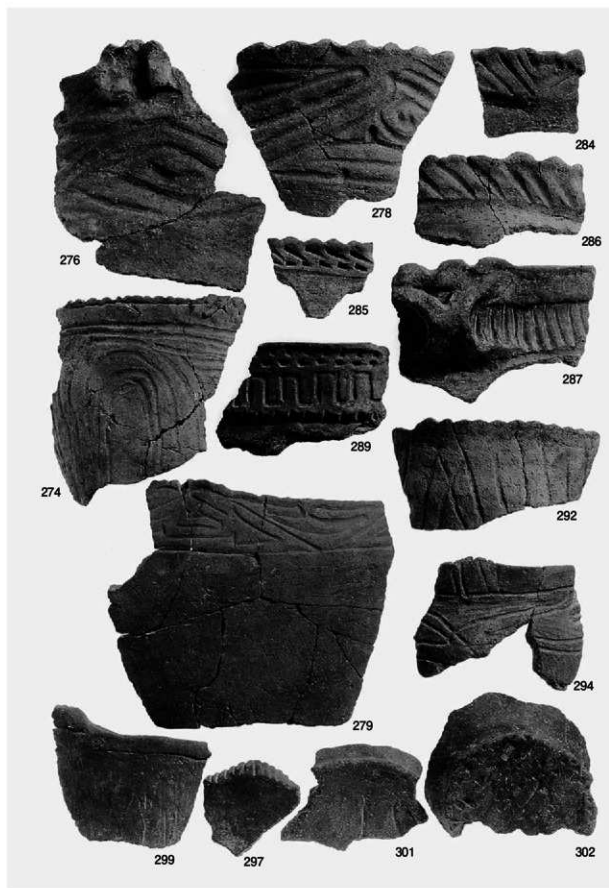
落ち込み状遺構5号内出土遺物(2)



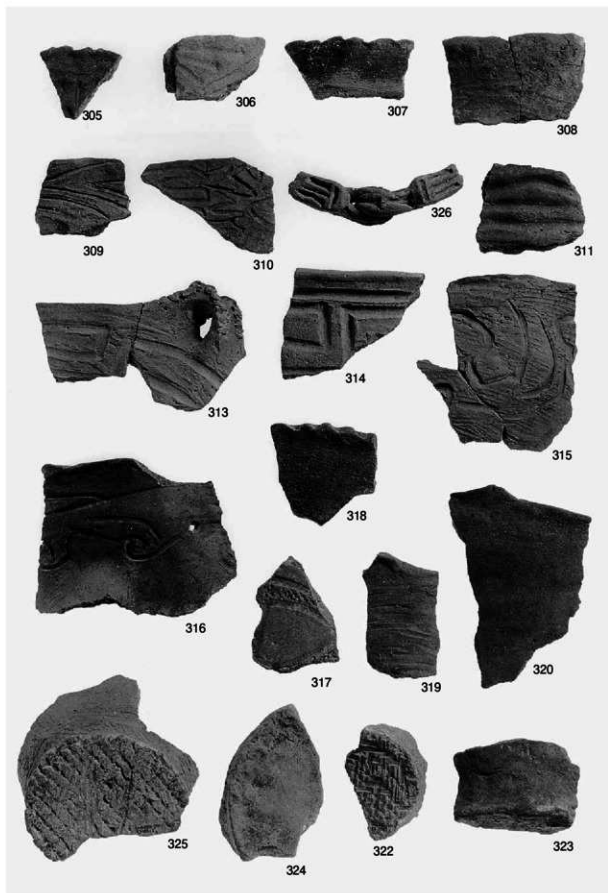
落ち込み状遺構5号内出土遺物（3）



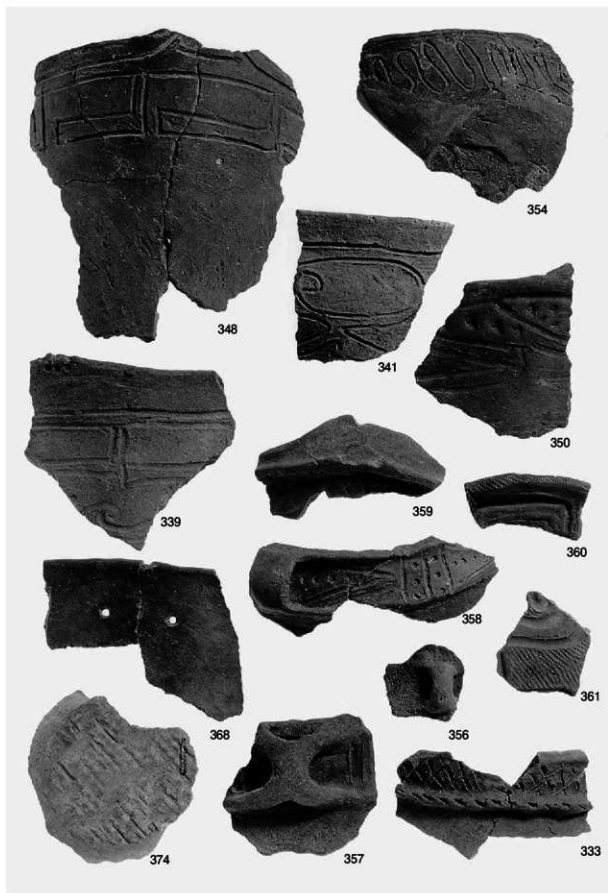
落ち込み状遺構5号内出土遺物(4)



落ち込み状遺構6号内出土遺物

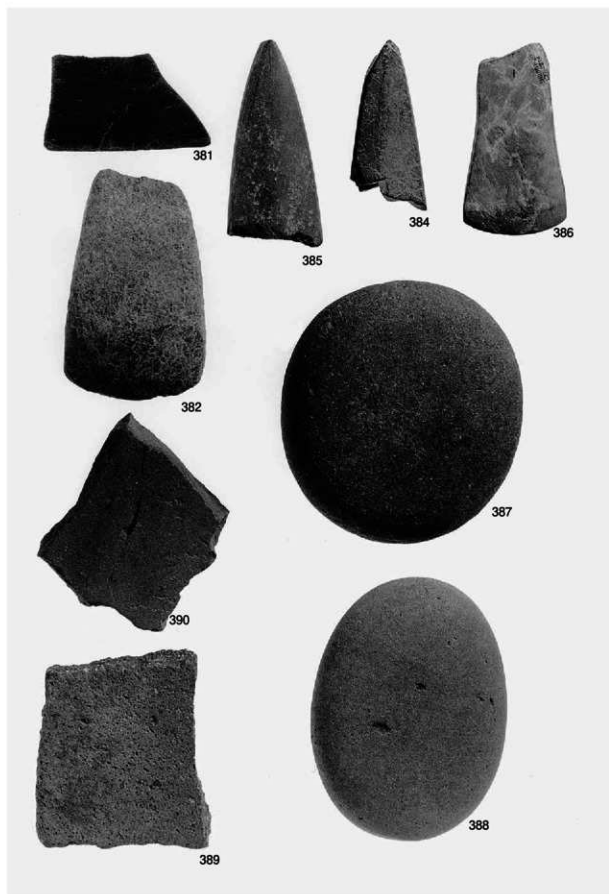


落ち込み状遺構7号・8号内出土遺物

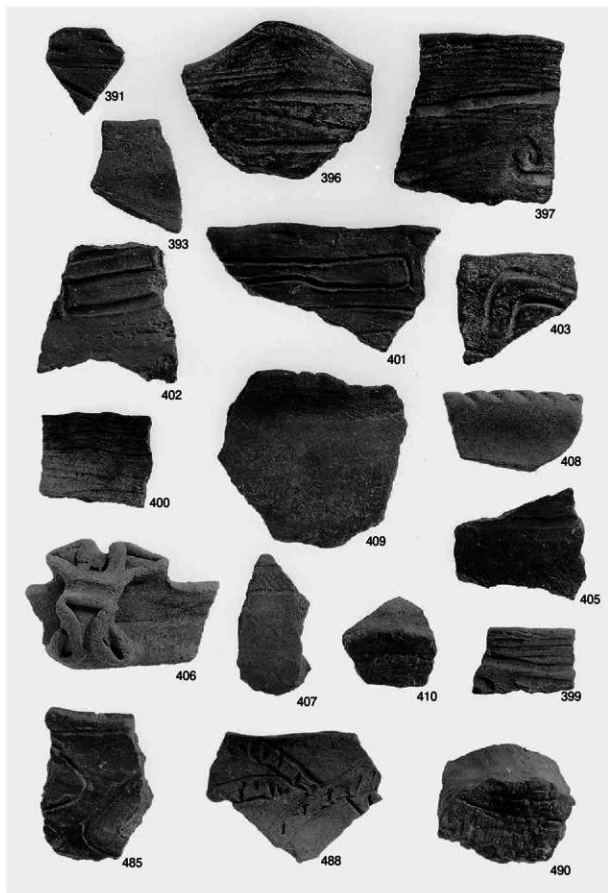


落ち込み状遺構9号内出土遺物 (1)

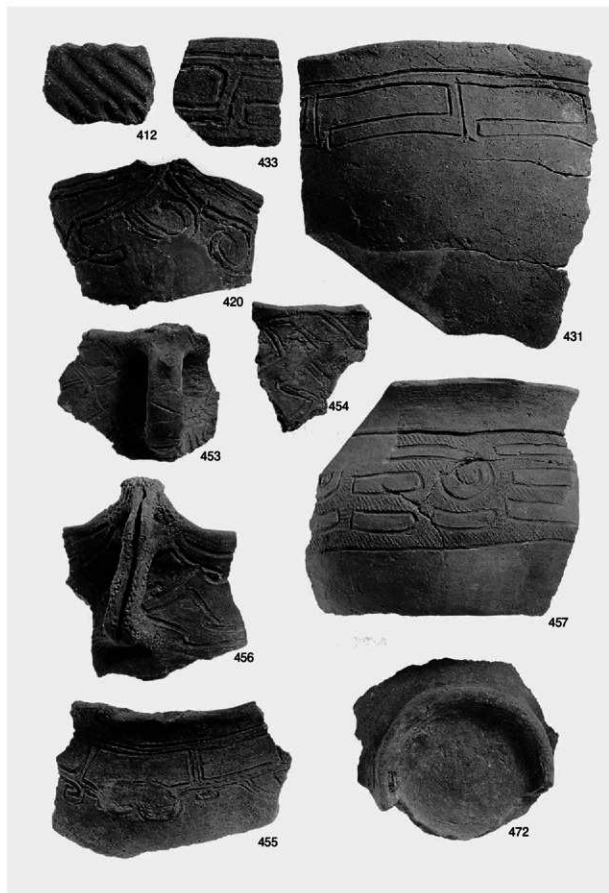




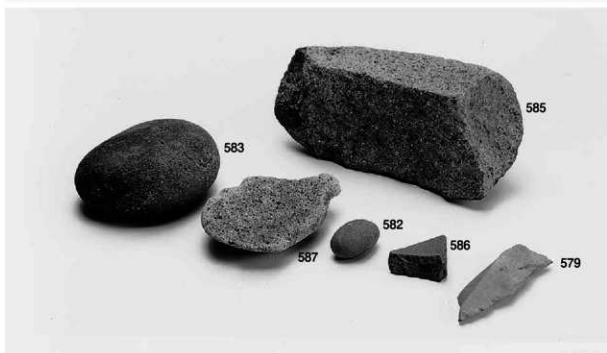
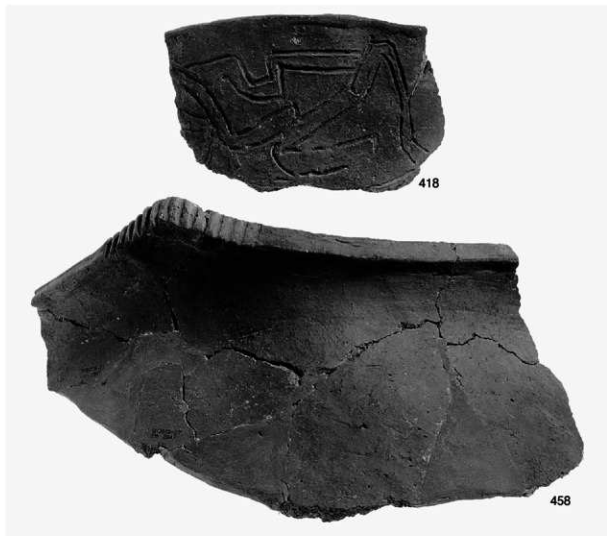
落ち込み状遺構9号内出土遺物(2)



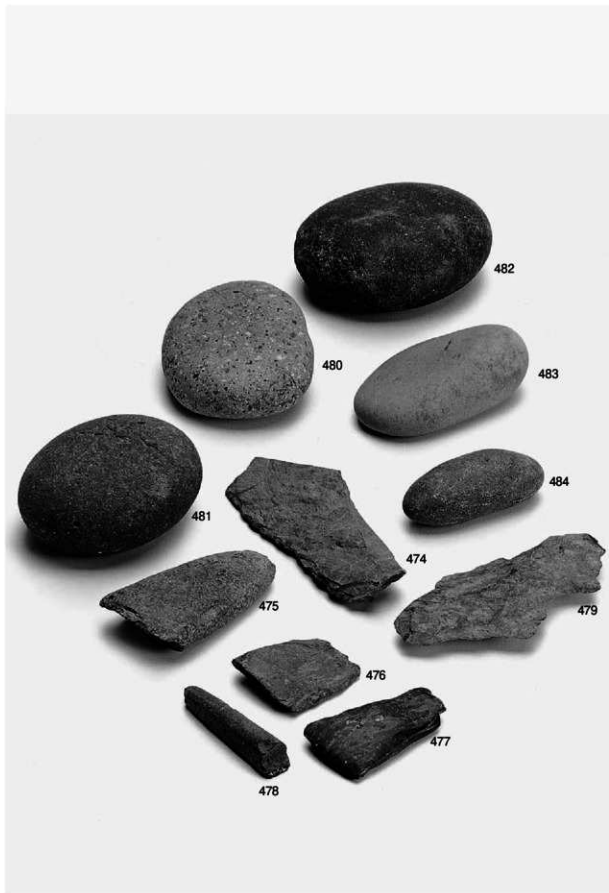
落ち込み状遺構10号・11号・13号内出土遺物



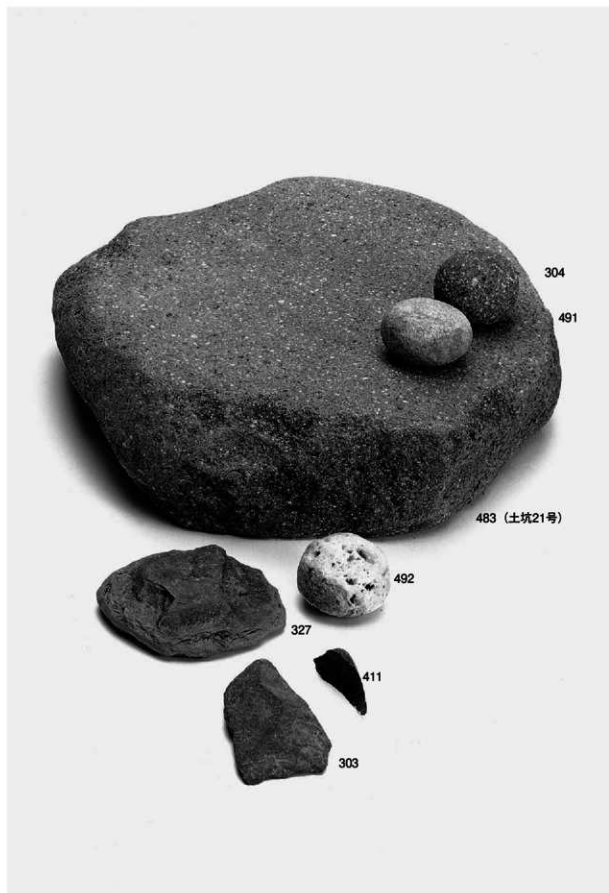
落ち込み状遺構12号内出土遺物（1）



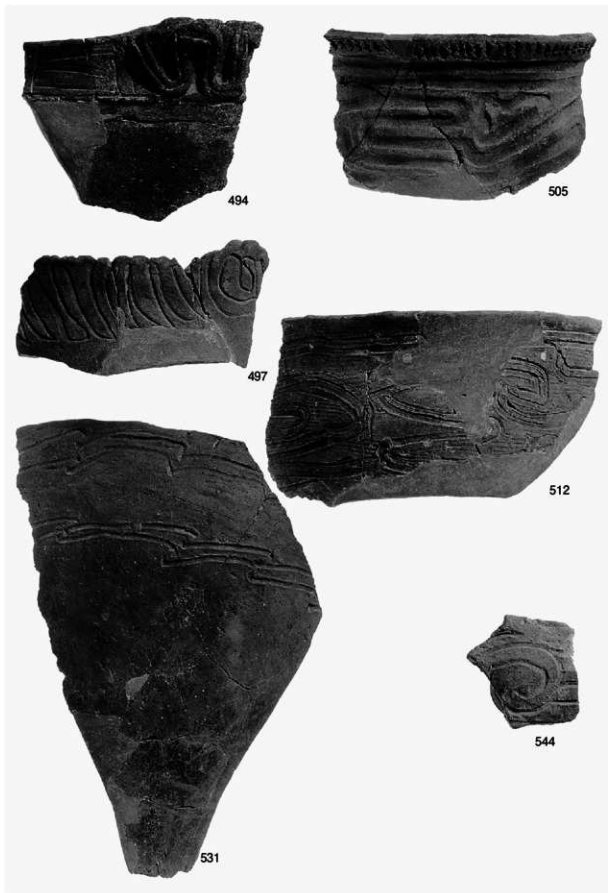
落ち込み状遺構12号内出土遺物（2）及び14号内出土遺物



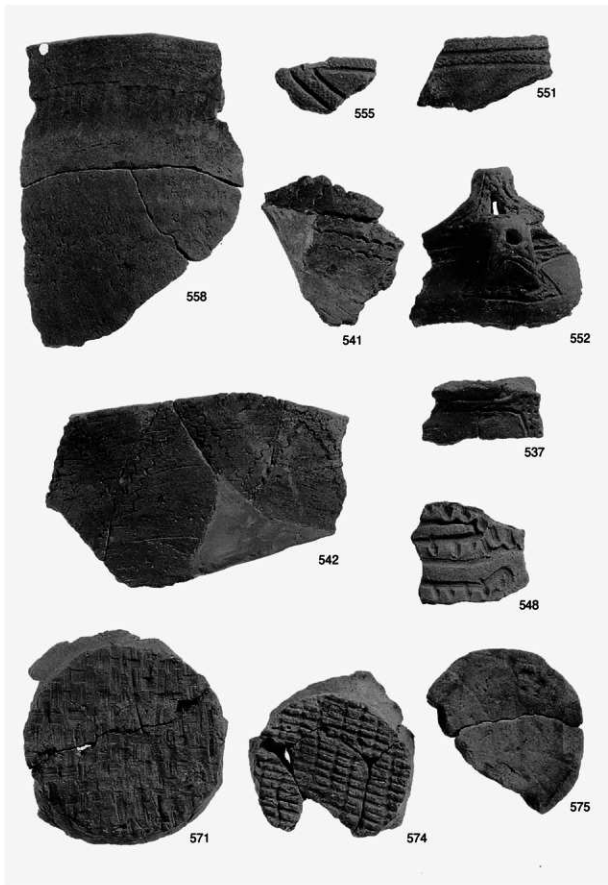
落ち込み状遺構12号内出土遺物（3）



土坑21号・落ち込み状遺構6号・8号・11号・13号内出土遺物

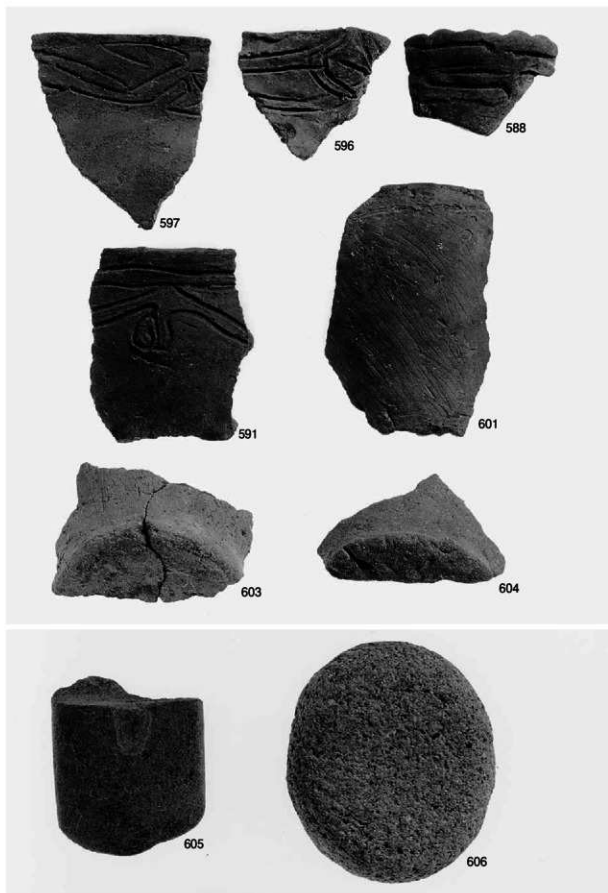


落ち込み状遺構14号内出土遺物(1)

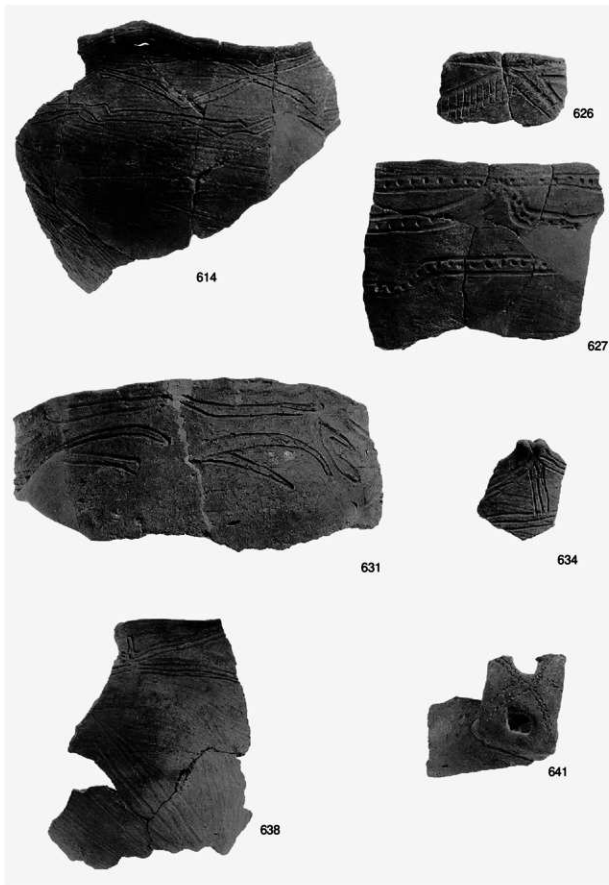


落ち込み状遺構14号内出土遺物(2)

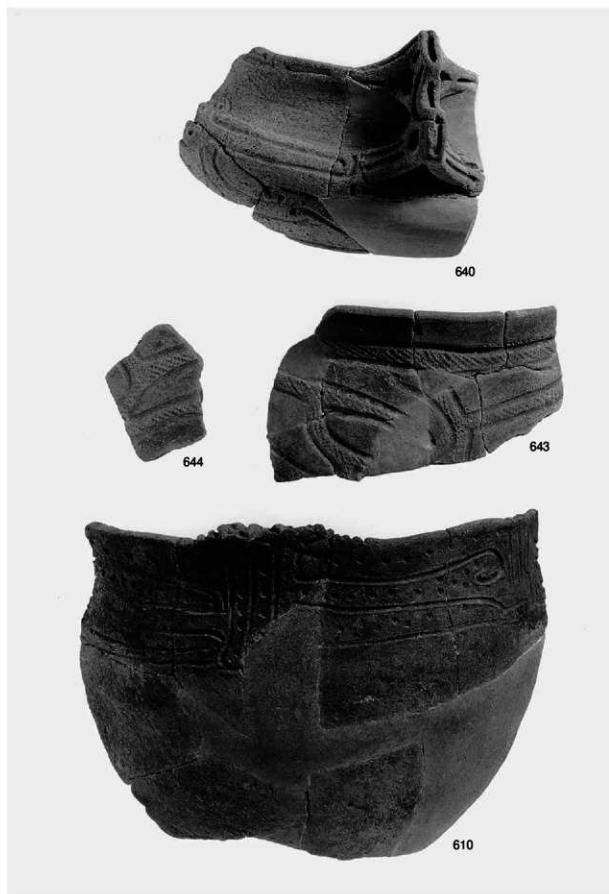




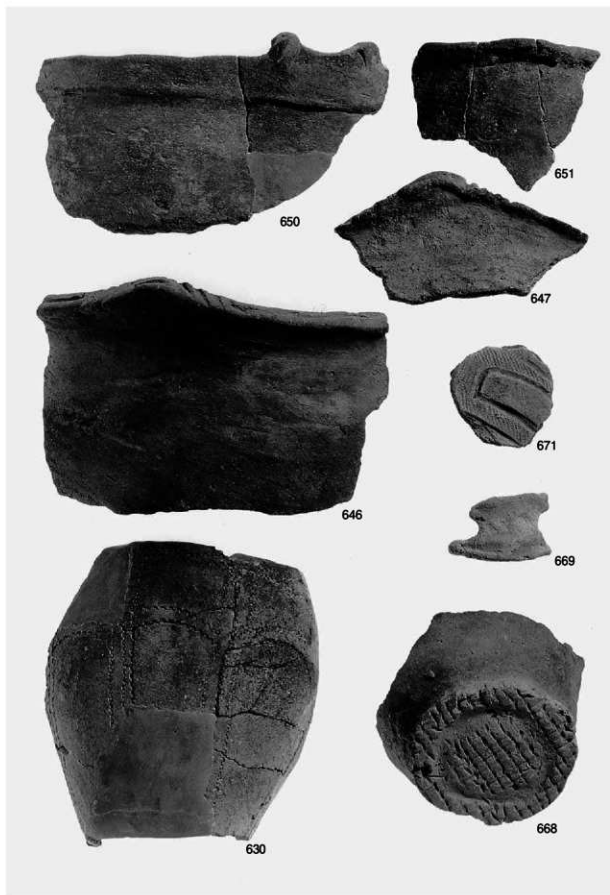
落ち込み状遺構15号内出土遺物



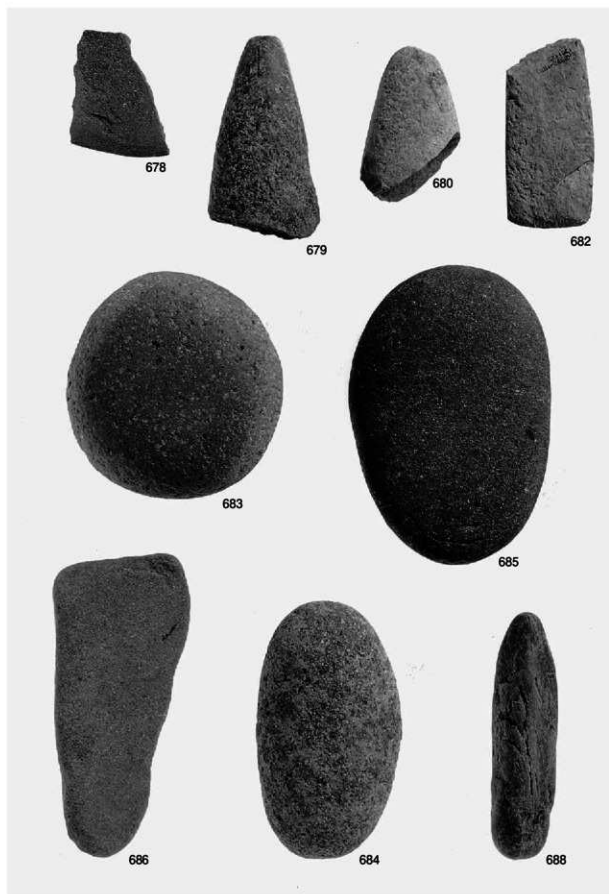
落ち込み状遺構16号内出土遺物（1）



落ち込み状遺構16号内出土遺物（2）



落ち込み状遺構16号内出土遺物（3）



落ち込み状遺構16号内出土遺物（4）

## あ と が き

芝原遺跡は、平成11年度の発掘調査開始から多くの方々の協力のもとに作業を進め、限られた期間の中でできる最大の努力を行い、ここによりやく第1分冊（縄文時代遺構編）を刊行するに至りました。整理作業を進めるほどに、芝原遺跡から出土した遺物量の多さと種類の豊富さを改めて認識しました。これからも継続して刊行にむけた作業が続きます。万之瀬川流域に生きた先人たちの歴史を少しでも後世に伝えていけるよう努力します。

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（149）

中小河川改修工事（万之瀬川）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書V

# 芝原遺跡 1

発行月 平成22年3月  
発 行 鹿児島県立埋蔵文化財センター  
〒899-4318  
鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号  
TEL (0995) 48-5811  
印刷所 ㈱ 光陽社  
〒890-0072  
鹿児島市新栄町23-38  
TEL (099) 258-6266

